

---

# ドラゴンクエスト? 勇者ではないアーベルの冒険

undervermillion

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？ 勇者ではないアーベルの冒険

### 【Nコード】

N0215Q

### 【作者名】

undervermillion

### 【あらすじ】

酒に酔った勢いで(?)、ドラクエ3の世界へ転生しました。

勇者より2歳年上の少年、アーベルとして転生しましたが、訳あって、魔王バラモスよりも先に、大魔王ゾーマを倒すことになりました。

勇者パーティとは別に旅立つ、アーベルの物語です。

毎週土曜日正午に更新します(それ以外に更新する場合は、前話の後書きで報告します)。

## 第1話 そして、転生へ・・・（前書き）

読者の皆様へ

このたびは「ドラゴンクエスト? 勇者ではないアーベルの冒険」をお読みくださいまして、ありがとうございます。

この小説は、原作と厨二病と勢いで構成されています。

原作はSFC版ドラゴンクエスト?及び公式ガイドブックを基にしています（小説等は読んでいません）が、作者にとって都合のいい展開を行うため、SFC版及び公式ガイドブックとは異なる内容もあります。

物語として、個人的には鬱展開は好きでないので、気楽に読める展開を目指したいと思っています。

あと、戦闘シーンはあっさりですので（筆力的に）、ご了承下さい。

2

最後になりますが、私にとって、この投稿は初めてであります。

至らない点につきましては、暖かい目で見てもらいましたら幸いです。ありがとうございます。

## 第1話 そして、転生へ・・・

～愛する母へ～

.....

「アーベル！」

「アーベル！」

ふと、目が覚めると、目の前に見知らぬ男女が、俺に声をかけている。

しかし、アーベルとは誰のことだ？

俺が目覚めたことに気付いた二人は、喜びの声を上げる。

「無事だったのね、アーベル」

「心配したぞ」

心配してくれるのはいいけど、誰だろうこのひとたち。

お礼をいうために、起きあがろうとするとめまいがした。飲み過ぎたせいかな？

頭をおさえる俺をいたわるように、二人は

「無理はしないで、ゆっくり休むの」

「まったく、おとうさんを迎えに行つて堀に落ちるとは、アーベルはうっかりものだな」

おとうさんだと・・・。

俺はあわてて、おとうさんと自称する男の方を向く。

昔の西洋風の服を着た男は、自分と同じぐらいの年齢、いや少し若

いか。なぜ俺はこの人を「おとうさん」と呼ばないといけないのか？と、自分の姿を見て驚く。

「！」

おかしい、手足が短い。

まるで子供ではないか。

「な、なんだこりゃー！！」

自分の姿の変化に驚き、あわてて体を起こそうとする。

「どうしたの。アーベル！」

「動くんじゃない。アーベル！」

二人の男女に体を押さえつけられ、子供の力しかない俺は、動くことができない。

俺がなおも手足をバタバタし、叫ぶ様子を見て、男は女に合図を送る。

様子を察した女は、俺の額に右手をあてる。

俺よりも若い（？）女性のやわらかい手が額にふれて、俺は思わずあたたかいなと手足を動かす力を弱めてしまった。

女性は、俺を優しくそうに見つめながら、一言つぶやく。

「ラリホー」

俺の頭に突然の睡魔が襲う。

ばたついた手足の動きが止まる。

どこかで、聞いた言葉だと思いながら、俺の力は抜けてゆき、安らかに眠っていく・・・

再び、目が覚めると、俺は周囲を見渡す。

6畳程度の木造の部屋。映画などで見た、昔の西洋風の部屋みたいだ。

部屋には、俺が寝ているベッドと、その隣に木でできた椅子で寝ている女性。そして、家具がある。

女性は見たことのない言葉で書かれた本を膝の上に置いている。

俺は今自分が居る場所を考える。

日本語は通じるようだが、ここが日本国内かと言われると少し怪しい。

俺は、少し落ち着きを取り戻したことを自覚しながら、これまでのことを思い出す。

第1話 そして、転生へ・・・（後書き）

第1話最後までお読みくださいますと、ありがとうございます。  
主人公の冒険開始まで、しばらく話数がかかりますがご容赦願いま  
す。

## 第2話 そして、回想へ・・・

「お先に失礼します」

「ああ、お疲れ。今日はがんばれよ」

「・・・。友人の家に行くのに、何をがんばれと？」

俺は、先輩の激励に質問で答えると、先輩は残念な声を出す。

「お前、今日が何の日かわかっていて、質問しているのか」

「わかっていますが、だからといって何をがんばればいいのですか？」

「あー、やだやだ。お前さっさと帰れ」

「そうします」

俺は、そういって市役所の庁舎を出る。

俺は、地方公務員だ。

だからといって、もてるわけでも無く、多くのカップルにとって重要イベントのひとつであるクリスマスも、俺には無縁のイベントではある。

無縁と言ったら語弊があるな。

俺がこれから行く先は、ある意味クリスマスと関係があるから。

と、道中に見知った後輩がいたので声をかける。

「お疲れさま」

「先輩、お疲れ様です」

10年後輩の女性は、俺の声に何故か嬉しそうな返事を返す。

10年後輩といっても、俺が高卒で彼女が大卒なので年齢の違いは6歳ではあるが。

それにしても、と俺は思う。

彼女もそういえば、独り身だったな。可愛いくて、性格もいいのに、もったいない。



5年前に彼女が採用されたとき、俺と同じ係に配属され、俺は1年間、後輩の指導をしていた。

後輩の指導といっても、担当業務は異なるので、主に役所独特の仕事のやり方についての説明ではあったが。

彼女の仕事の速さと正確さは、すぐに周囲に知るところとなり、敵を作らない性格も加わって、将来の幹部候補とささやかれるようになる。

俺は、翌年の異動で別の課に配属されたが、たまに会うと声を掛け合う程度の仲にはなっていた。

向かう方向は一緒なので、しばらく、世間話をしていると、

「先輩は、今日の予定はあるのですか？」

「残念ながらね。いつものことだが」

「・・・、ああ、あれですか」

彼女は、俺がこれから向かうイベントのことを知っていた。

「残念なら、行かなければいいのに」

「そうはいつでも、他に予定はないし」

俺は、そっちはどうなのだ。と彼女に余計な一言をいってしまう。

「せ、先輩には関係ないです」

突然彼女は、怒り出す。

俺は驚いて、彼女の顔を見る。顔がかなり赤くなっている。寒さのせいだけでは無いはずだ。かなり怒らせてしまったようだ。

「すまん。確かに関係ないな」

「・・・、いいです、もう」

どうやら、さらに彼女を怒らせたようだ。

ただ、俺にはその理由がわからない。

俺に姉妹がいなかったことと、随分昔に付き合っていた相手がい

が、それも短期間だったことから、あまり女性の気持ちが変わらないのが原因と思っているのだが、どうだろう。

彼女は俺が黙っていると、意を決したように声を出す。

「先輩、失礼します」

「お、おい」

俺の制止を聞かずに、彼女は急に走り出した。

「雪で滑るから、足下に気をつけるよ！」

一瞬彼女は俺の方を向いたが、今度は全速力で走り出した。

俺の声が聞こえなかったのだろうか。

ふと、周囲を見渡すと、多くの視線が俺の方に向けられていることに気付いた。

「・・・」

ああ、みんな誤解しているな。確実に。

俺は大きなため息をつくとき、目的地にむかって歩き出す。

第2話 そして、回想へ・・・（後書き）

回想部分は1話で終わりませんでした。

### 第3話 そして、クリスマスの中止の中止へ・・・

「クリスマス中止祝賀会」

俺がこれから向かうイベント名である。

敬虔なキリスト教徒が激怒しそうな名称ではあったが、俺は彼らを否定するつもりは毛頭ない。

ただ、キリストの誕生を祝わないクリスマスイベントは中止すべきだ。というのが、俺を含めた、創設者5人の趣旨である。

残念ながら（？）、結婚したり、彼女ができたりして、創設者メンバーのうち2人が脱落し、現在では3人の参加者となっている。まあ、賛同者を増やす活動はしていないので、いつかは自然消滅するだろうと考えているうちに、会場である友人の家に到着した。

「メリークリスマス！」

「メリークリスマス！」

俺はどうやら、会場を間違えたようだ。

「すまん、間違えたようだ。失礼する」

俺の声に反応して、友人二人の声が重なる。

「ちよつと待てー！！！」

俺は、部屋に置いている演題のタイトル名を指さす。

「クリスマス中止の中止祝賀会」

いつもより3文字多いタイトルは、去年までの活動を完全否定する内容だった。

「これには、理由があるのだ」

「まあ、ひとまず落ち着こう」

二人は強引に俺を部屋に招き入れ、座らせる。

俺も、しぶしぶソファに腰掛ける。

「まあ、話を聞いてくれ」

「仕方がない、聞くだけはきこう」

結論からいえば、二人に彼女が出来たのだ。

二次元の。

「ひがむなよ」

「来年には三次元になる。なにか問題でも？」

「・・・いや、問題ない」

二人の話を聞きながら考える。どうしてこうなった。

二人の彼女については、知っている。

ゲームに人生のほとんどを費やすことを決めた俺にとって、そのゲームは話題性も含めてよく知っている。

ジャンルとしては恋愛シミュレーションゲームのひとつだが、これまでとおおきく異なる点が二つある。

一つめは、彼女が出来てからがこのゲームの本番であること。

これまでは、彼女が出来るまでがゲームの目的であることが多かった。

しかし、このゲームは、当然彼女を作る部分もゲームとして作られているが、それは、「彼女と一緒に過ごすため」に必要な部分であり、あくまで序章なのである。

それまでの恋愛シミュレーションゲームは、あくまで彼女（彼氏）を作ることまでが目的であったから、革新的な要素ではある。

もう一つは、相互依存性を高めるゲームシステムである。

ゲームシステムと言えば身も蓋もないが、プレイヤーとして一方的な介入だけでは、いずれ飽きがきてしまう。このため、彼女もプレイヤーに対して、会話やスキップによる依存関係を求めることで、プレイヤーに対する責任感を植え付ける。

細かい部分を含めると話は尽きないので省略するが、結果として、恋愛シミュレーションゲームとしては多くの発売数と評価の高さを誇った。

ちなみに、この論評を匿名掲示板に掲載したら、大学生水準の論評という微妙な評価を受けた。

それはさておき、

「お前もやたら詳しいなあ、実は彼女が居るのじゃないの？」

「お前も昔、コアラの、いてっ！」

俺は、友人の一人にスナック菓子の袋を投げつけ、話を止めさせた。

「言うな。これくらいネットで調べればいくらでも情報が入る」

「興味があるのか、やってみるか」

「3人まで彼女ができるし」

セーブデータの単位が、彼女ですか。

俺は正直、このゲームに興味があったが、俺には向かないと思っている。

何故なら、強く束縛されるのが嫌だからだ。

昔の彼女とも、ゲームではないそれが理由で別れてしまった。

それはともかく、二人の好意を無視して、いつも以上に酒を飲み、ふらふらになりながら友人の家を出た。

「やばい、飲み過ぎたか」

俺は、友人宅を出てから駅に向かう途中、独り言をつぶやく。

家で普段酒を飲まないため、酒は強くない。

それでも、飲み会などでは、なるべく飲むようにしている。

職場や友人も俺のことを知っているので、普段は無理をさせることはなかったが、今日は友人二人が彼女の相手に夢中だったことから、一人無視された俺は、あまり話もせず酒だけを飲みつつづけ、今の結果にいたる。

俺は生活用水が流れる川沿いをガードレールに守られて歩いていると、3メートルくらい先の向こう岸から、俺を呼ぶ声が聞こえた。

「大丈夫ですかー」

「ああ、だいじょう」

と、俺は返事をするため声のする方に向かったところ、ガードレールにぶつかる。

それだけなら良かったが、雪で足下が滑り、ガードレールの上を越え、そのまま川の中に。

「ぶー」

普段は低い水位だが、溶け出した雪が水位を押し上げたことが災いし、俺は溺れた。

酔っていたこともあり、何も出来ず、次第に意識が薄れてゆく。

・・・見覚えのある顔を、みつめながら・・・

第3話　そして、クリスマスの中止の中止へ・・・（後書き）

どう見てもラブ　ラスです。

小説とは関係ないですが、このゲームが、今後どのような未来へと進むのか楽しみではありません。

私としては、視覚としての3D表示対応のヘッドマウントディスプレイと触覚としてのデバイスの並立が可能であれば、かんぺ・・・いえ、何でもありません。



#### 第4話 そして、決意へ・・・

俺の回想が終わる頃には、そばで寝ていた女性が俺に声をかける。

「アーベル、大丈夫」

「うん。ごめんなさい」

「わかったわ。だから、おかあさんの言うことを聞くのよ」

「うん。ごめんなさい」

「アーベル」

そういつて、女性は俺を抱きしめる。

「！」

最近、女性から抱きしめられた経験が無い俺は、顔が赤くなる。

「どうしたの？」

俺の様子の変化に気付いた女性は、俺の顔を心配そうに見つめる。

この女性はかなりの美人だ。そう思うと、顔から火が出るような感じになった。

「熱があるようね」

そう言うと、彼女は俺を再び寝かせつける。

「今日は、一日寝ていなさい」

「はい、おかあさん」

両親のいない俺は、言い慣れない呼び方で女性を呼ぶと、おとなしく寝ることにした。

寝れば、元の世界に戻れると、少し期待して。

残念ながら、元の世界に戻ることは出来なかったが、俺はこの世界がドラクエの世界ではないかと、予想した。

「ラリホーなら、ドラクエだよな」

とはいえ、確認する必要がある。

「アリアハンによっこそ」

「ああ、ドラクエ3か」

町の入り口で、旅人に挨拶をする女性の声を聞いて確信した。

一応ドラクエシリーズは、すべてクリアしているので理解出来るつもりだったが、マイナーな町の名前だったら、覚えていないという不安もあった。

ゲームなら、複数の作品に登場しているため、逆に特定に苦労しただろう。

一方で、アリアハンであることで安心した。

もしテドンの村だったら、確実に死亡フラグが立つ。

安心したところで、今後の人生を考える必要がある。

まずは、文字を覚える必要があるな。

「おかあさん、文字を教えて」

「熱心ねアーベル。いいわよ」

「ありがとう、おかあさん」

そういつて、文字を教えてもらう。

どうやら、日本語のひらがなと同じ要領で覚えればいいようだ。

若さのせいかな、記憶力も良くなったようだし。

ひとつきもすれば、簡単な本は読めるだろう。

「アーベル。どうしたの？」

文字を教えてもらう練習を毎日2週間続けている俺に、母親は違和感を抱いたようだ。

ちなみに、母親の名前はソフィアで、かつて魔法使いとして冒険をしていたが、アリアハンで王宮戦士見習いだった父ロイズに一目惚れし、結婚したそうだ。

母親の魔法使いとしての才能はすごいらしく、たまに王宮に顔を出しては、魔法の研究をしているらしい。

ちなみに、洞窟内で明かりを照らす魔法技術は彼女が開発した。

その技術のおかげで、松明や魔法を使わずに冒険をすることができるようになったそうだ。

魔法使いとしてのカンというよりは、母親のカンとして息子の違和感を言葉にしたソフィアは、溺れたときのことを指摘した。

「アーベル。溺れたときに、気をつけなさいといったけど、外に出て遊んでもいいのよ」

「でも、おかあさんに教えてもらいたいし」

「まあ、アーベルったら」

ソフィアはまんざらではない様子で返事をしたが、急にまじめな顔になって、しっかりと俺の前を向いて話し出す。

「無理をしなくてもいいのよ。アーベルはアーベルのままが良いのだから」

「!」

俺が転生したことを知っているのか。

それでも俺は、ソフィアの真剣なまなざしをそらすことをしなかった。

おれの頭の中で、考えが続く。

もし、俺がアーベルではないと知ったら、ソフィアはどう考えるのか。

目の前にいる息子だったアーベルは、アーベルではない別の魂を持

っている。

ソフィアは、それでも自分の息子として考えるだろうか？  
まず、無理だろう。

そして、親子両方にとっての悲劇になるだろう。

ソフィアには、絶対に知られてはならない。絶対に。

「どうしたの、アーベル？」

「今日は遊びに行ってくる」

俺は、立ち上がると玄関までかけだした。

「晩ご飯までに帰るのよ」

「気をつけてね」

「うん」

俺はそういって、ソフィアの顔を見ないまま外に出た。

俺は、誰もいないところで泣いた。

この日、俺はアーベルとして生きていくことを決意した。

この世界に来るまでの俺は、死んだのだ。

泣きながら俺は、かつてなきむしだったことを思い出していた。

#### 第4話 そして、決意へ・・・（後書き）

更新速度は、一週間ごとになると思います。

勇者の名前ですが、数学者の名前をつかいました。

アニメ版の勇者アベルからつかったわけではありません。（見たことありませんが）

ちなみに主題歌「夢を信じて」は私の好きな曲のひとつです。

## 第5話 そして、商人へ(違う)・・・(1)

転生してから、半年がすぎた。

俺の一日は、ほぼ決まっている。

朝食を食べたあと、お昼まで母親と一緒にすごし、主に勉強をしている。

お昼を食べてからは、夕方まで外で遊ぶ。

最初は母親と一緒にだったが、行き先が決まっていたので、今では玄関で「アーベル、気をつけてね」の一言で送り出す。

アリアハンの治安はいいので、子供がひとりで出かけても問題ない。

「ようアーベル。また来たか」

「こんにちは、おじさん」

「こんにちは、アーベル」

「こんにちは、テルル」

俺を出迎えてくれたのは、キセノン商会のキセノン親子だ。

キセノン商会の創設者であるキセノンは、どこかの武器屋のように恰幅がよく、威勢のいい声で、客の相手をしている。

母親のソフィアと一緒に冒険したこともあるそうだが、ソフィアよりも先に冒険者を辞めて、アリアハンに店を構えた。

商売が上手で、頭の回転も速く、一代にしてアリアハン大陸内で、多くの流通を担うようになる。

大商人となったあとも、最初に開店した店で、必ず客の相手をしている。

後から聞いた話だが、現場の感覚を忘れると、商売は上手くないかなくなるという、信念にしたがったためだそうだ。

一人娘のテルルは、俺と同じ6歳であり、家も近所ということと一緒に遊んでいた。

テルルは最初、俺の変化に気がついたようだが、しばらくすると、いつもどおりに遊んでいた。まあ、俺はこれまでのことは知らないのだが。

俺は、商人の勉強が必要だと考えていた。

勇者であるオルテガの息子（名前はわからない）は、俺より2歳年下だ。

将来、勇者が世界を平和にしたら、その後は商人の時代だ。準備をするなら、早いほうがいい。

この世界の経営学の水準がどの程度であるのかわからないが、前の世界ほどシビアではないだろう。

少なくともアッサラムの商人が生活できることを考えれば。

ただ俺は、前の世界で、普通科の高校を卒業後すぐに公務員になったため、複式簿記を始めとする経理や経営の知識は詳しくない。水道局や市立病院は、企業会計を使っていたので、これらの経営会計担当なら、経理経営の知識を習得する機会もあったかもしれないが、残念ながら異動したことはなかった。

キセノン俺が店に顔を出すことについて、始めはあまり良い顔をしなかった。

俺が遊びに来て一人娘のテルルの相手をする事自体は、問題ではなかったが、店は子どもの遊び場ではない。

俺もそのことは理解しているので、お客が来たらあいさつをする。

お客から聞かれなにかぎり、こちらから話しかけない。  
店の商品をさわらない。

テルルが騒ぐようなら、一緒に外に出て遊ぶ。

この四つを守った結果、今では、キセノンも俺が店に来ることを喜ぶようになった。

テルルも俺が来ることを喜んでいた。

母親は病気で亡くなったこと。一人娘であり、同じ年頃の遊び相手がないこともある。

また、俺が、テルルに商品のことをいろいろ質問し、テルルの説明を嬉しそうに聞く俺の態度におおきく満足するからだ。

テルルが知らない質問をすると、俺が帰った後に、店員に一生懸命質問していたようだ。

少し前のことだが、俺とテルルとキセノンがお茶を飲んでいると、キセノンが俺に質問した。

「アーベルは将来、商人になるつもりかい？」

キセノンは、おそらく、従業員として雇う考えだろう。

俺が答えるより先に、テルルが答えた。

「わたしも商人になる！」

そういつて俺の手をとって、

「アーベル、いっしょに働こうね」

俺は、あわててお茶を机のうえにおく。お茶は少しこぼれた。

テルルは、俺にかまわず話を続ける。

「わたし、アーベルのおよめさんになるの」

俺とキセノンはお茶を吹き出した。

それから数日の間、俺とキセノンの間に、きまらずい雰囲気があった。よかった。



俺がキセノンと二人だけのときに、「将来、僕は魔法使いになる」と答えるまでは、きまらずい雰囲気はおさまらなかった。

そのようなことを考えていると、

「いらつしゃい」

「また来たぜ」

顔なじみの冒険者が、子どもと一緒に顔をだす。

## 第6話 そして、商人へ（違う）・・・（2）

冒険者は、この世界では需要の多い職業のひとつだ。輸送の警備に欠かせないからである。

この世界に来たばかりのころは、輸送手段として、キメラの翼やルーラをつかえればよいのではと考えたものだ。

しかしながら、ルーラやキメラの翼（及びリミット）は、同時に移動できる人数が4人と制限されており、この世界のパーティ人数が4人までである理由も、このことが原因である。

また、ルーラやキメラの翼での移動先には、あらかじめ強力な結界を用意することと、移動先での登録が必要となっている。

このような、厳しい利用制限は、軍事利用の防止の観点から各国とも徹底されている。

同様に、商用利用についても厳しく制限されている。

なぜならば、大量に同じ場所に移動することで生じる混乱は、利便性を遙かに超えるからである。

このため国ごとに異なるが、極めて高い関税により、売買によるもろけが出ないようになっている。

一方、登録された冒険者が持ち込む荷物は、関税はかからないけれども、冒険者は商売許可の登録ができない。

このため、安い価格で商人に買ったたかれることから、ルーラ等による輸送での商売は出来ないようになっていく。

ということ、その地域ごとに冒険者は存在し、旅行者や輸送の護衛という役割を担うことになる。

ちなみに、俺の父親の仕事は、アリアハンにルーラやカメラの翼で来た人々を確認する仕事をしており、ソフィアがアリアハンにルーラで来た際に、対応した父親にひとめぼれしたらしい。

冒険者の多くは移動中に必要な薬草などの消耗品を購入する必要がある。

当然僧侶がいれば、購入する機会は減るのだが、僧侶の需要は非常に多く、なかなか仲間に加えることは難しいようだ。

キセノン商会では、顔なじみの冒険者に比較的安い価格で商品を販売している。その代わりに輸送時の護衛には率先して対応してもらうようにしているそうだ。

この循環は、良い循環をしており、輸送の安全性と質のよい冒険者の確保の両立を保っている。

「そろそろ、武器を新調しようと思ってね」

「かしこまりました。どうぞこちらへ」

「こんにちは、セレン」

俺は、冒険者の方にもわかってあいさつをする。正確に言えば、冒険者の子どもにもわかって。

「こんにちは、アーベル」

元気な声で返事を返したのは、俺と同じくらいの年齢の子どもだ。

水色に近い、長い髪の女の子で、最初は水色という髪の色に違和感を感じていたが、この世界になれるうちに、気にならなくなった。

「セレン。今日も旅の話聞かせて」

「うん」

そういつて、テルルと一緒に別室へ移動する。

俺は、率先して子ども相手をする。

子どもは特に好きでもなかったが、話を聞くことで、外の世界の情報を手に入れることができる。ゲームとして知っている世界とはいえ、ゲームでは表現されていない内容もある。情報をあなどってはいけない。

セレンは子どもなので、話の要領を得ないこともあるが、おもしろそうに聞く俺の表情を見ると、積極的に話に乗る。テルルも、俺と一緒に話を聞く。

「セレン。マリンスライムは食べちゃだめなのか？」

「毒はないけど、おいしくないって」

スライムだから、貝と同じようには食べられないのか。

「殻は何かに使えないのか？」

「わからない。でも、」

「装飾品の原材料になるよ。あまり高くは売れないけどね」

セレンの父親が、娘のかわりに俺の質問に答える。

「とうさん」

「待たせたな、セレン」

セレンは父親にすがりついた。

セレンは人見知りが激しいようで、あまり他の人になつかないけれども、テルルや俺は例外らしい。

店の奥から、キセノンが現れる。

「ありがとうございます」

「良い買い物だったよ。これで次の冒険は楽になる」

セレンの父親は、そういつて新しい剣の感触を確かめる。

「それから、ぼうず」

男は、俺に向かって話しかける。

「いつも娘の相手をありがとな」

「どういたしまして」

「それにしても、たいしたものだ。人見知りするセレンが、ここま  
でなつくとは」

男はセレンの頭をなでる。

「セレン。また遊びにくるか」

「うん」

キセノンはあまり良い顔をしなかった。

俺は、まずいことになったと考える。

店は子どもの遊び場ではない。

前の世界にあるショッピングセンターなら、子どもの遊び場があっ  
ても問題ないが、さすがにこの店は、それほどおおきくはない。

俺が大人なら、ショッピングセンターの設置と子どもの遊び場の設  
置を提案するかもしれないが、今の状態で提案するのは無理だ。

子どもだけが集まるようなら、俺は店を追い出されてしまう。

俺は、考えながらセレンに答えた。

「いいよ。そのときは一緒に外で遊ぼう」

「うん！」

「でも、セレンのお父さんと一緒のときは、おとなしく店で待とう  
ね」

「うん！」

セレンの嬉しそうな答えを聞いて、俺は少し困った顔をする。  
そして、キセノンとセレンの父親に向かって答える。

「……ごめんなさい。ぼくが決めたら、いけないよね」

それを聞いた二人の女の子は、それぞれ父親の方を向く。お願いの  
まなざしで。

「キセノン。かまわないだろ」

「……。そうですね」

父親二人は、かわいい娘の頼みを断ることはできなかった。

「よかったね。セレン。テルル」

「ありがとう。とうさん」

「おとうさん。ありがとう」

二人の娘は喜んでお礼をいい、セレンは店をでた。

俺がセレンについて店を出るときに、キセノンはつぶやいた。

「さすがソフィアの息子だ」

俺は、涙が出るくらい喜んだ。

第6話 そして、商人へ（違う）・・・（2）（後書き）

経済的にキメラの翼があんな安値で販売されているのであれば、現在の世界以上に流通が良くなるのではと思います。

国によって、販売されている武具の強さが違う設定を、ゲームデザイン以外の理由で考えてみました。

武器の輸出入の禁止等も考えましたが、下取り価格が一定なので輸出入が割に合わないという設定にしました（下取り品は、加工して、王宮兵士などのお得意様にだけ販売するという設定です）。

当然、公式設定ではありませんので、異論はあると思います。

次回は勇者（主人公にあらず）が登場します。

## 第7話 そして、勇者（予定）との出会いへ・・・（1）

俺が勇者を初めて見たのは、8歳のときだった。

勇者という職業は、誰でもなれる訳ではない。

天に選ばれた者だけが、その職業に就くことができる。

勇者の息子だから勇者になれるわけではない。

しかし、勇者の祖先をたどると、たいてい勇者がいたことから、誤解されることが多かった。

ちなみに、勇者になれるかどうかの判断は、アリアハン王家のみが持つ水晶玉で確認することができる。（俺はだめだったようだ。転生前の話なので覚えていないが）

また、勇者の素質を引き出すアイテム（これも水晶玉だ）もアリアハンしか存在しないため、勇者はアリアハンにしか存在しない。かつて、アリアハンが全世界を支配した名残のひとつだそうだ。

俺とセレンとテルルが外で遊んでいると、

3人の少年がひとりの子どもを囲んでいた。

少年たちは12、3歳くらいで、金髪の少年がリーダーのようだ。

「お前、勇者のわりに、弱そうだな」

「何か言えよ！」

「・・・」

勇者と呼ばれた子どもは、少年たちのほうを見つめる。

子どもは僕たちよりも小さく、たぶん5、6歳くらいか。

3人に囲まれているにもかかわらず、子どもの表情は怒るわけでもなく、恐れているわけでもない。



少年たちは子どもの視線に驚き、金髪の少年が服をつかむ。

「勇者のくせに、なまいきだぞ！」

「そつだ！」

「やっちまえ！」

少年たちは、子どもに襲いかかる。

子どもは、くるりとまわり、少年の腕をはなすと、両手で顔を守るような体勢をとった。

子どもは、俊敏な動作で少年たちの打撃をかわしつつづけていたが、金髪の少年のパンチが腹にあたると、体勢がくずれて、かがみこんでしまった。

それを見た二人の少年は、子どもを足で蹴り続けていた。

子どもは、依然として両腕で顔をまもるだけで、何も答えない。

「アーベル」

「アーベル、なんとかできない？」

セレンとテルルは声をかける。

「・・・、なんとかする」

そういつて、俺は少年たちとは反対の方向へ走り出す。

「ア、アーベル」

「どこに行くの、アーベル」

俺は、目の前の角に入ると、すぐにもどり大声で叫ぶ。

「へいしきーん！こつちですよ！はやく！」

少年たちはおどろいている。

「！」

「ずらかるぞ」

「今日はこのへんで、かんべんしてやる！」

少年たちは、逃げ出した。

衛兵など、最初からいなかった。

「すごいよ、アーベル」

「さすが、アーベル」

ふたりの少女は喜んでいたが、そんなことより、勇者と呼ばれた子どもの状態確認が先だ。

俺は、子どものところへ向かう。

## 第8話 そして、勇者（予定）との出会いへ・・・（2）

「大丈夫か？」

俺は勇者と呼ばれた子どもに声をかける。

子どもは少し疲れた様子を見せたが、俺の方を向いて起きあがると何度も元氣よく頷いた。

「どうやら、無事だったようだな」

俺は安心したが、遅れてついてきた少女たちの意見は違つようだった。

「なによ」

「助けてもらったのに、お礼もいえないの？」

俺は、無事ならそれで十分と思っていたので気にはしなかったが、子どものようすの変化に驚いた。

さっきまで喜んでいた子どもは、急に寂しそうな表情をすると、ゆつくりと頭をさげた。

俺は子どもの表情の変化にしばらく考えたが、思いを口にする。

「・・・。ひょっとして、君はしゃべれないの？」

子どもは、突然びっくりすると、おおきく何度も頷いた。

「・・・そうだったの。ごめんなさい」

「ごめんなさい」

セレンとテルルは素直に謝った。二人のこういったところは、誉めるべきところだ。

子どもは、あわてて両手を前に出し、首をぶるぶると振って、気にしていないという態度を示した。

しゃべることができない勇者か。

だが、いじめられる理由などない。ひどい話だ。

「さっきの少年たちを知ってるの？」

テルルは子どもに話しかける。

子どもは少し考えてからうなずく。

「アーベルのお父さんは、兵士さんだから教えてくれたら叱ってくれるよ」

子どもは、テルルのほうと俺の方と両方をみてから、首を横に振る。なぜだ。

こんどはセレンが質問する。

「仕返しがこわいの？」

子どもは首を横に振る。

違うのか、なぜだ。

俺はその子どもを見ながら質問する。

「本当にけがはないのか？」

子どもは、平気な顔をする。

そして、自分が身につけていた服を恥ずかしそうに少し脱ぐ。

「傷がない」

三人とも驚いた。

蹴られた部分の服は汚れていたが、蹴られた体の部分はあざひとつ

ついていない。

どういうことだ？

俺は少し考えて、知っている知識をおもいだす。

「みかわしの服か」

子どもは驚いたようすでうなずいた。

「そういうことか」

「どういうこと。アーベル？」

テルルは俺に質問した。

みかわしの服とは、羽のように軽い糸で作られている服で、敵の攻撃から身をかわす確率が高くなっている。また、防御力は、くさびかたびらよりも高い。

冒険者でもないかぎり、素手ではほとんどダメージを与えられないだろう。

だから頭を中心に守っていたのか。

「すごい。さすが勇者というべきか」

俺は感嘆の声をあげる。

「お父さんなら知っているとおもうけど。さすがアーベルね」  
テルルは、アーベルの方を誉めている。

俺は、テルルの声を無視して子どもにも問いかける。

「なぜだ。なぜ、攻撃しなかった？」

けがをしないなら、少年たちを力で追い払うことができたはずだ。

子どもは、強い意志で首を横に振る。

俺はなおも考えて、その答えに驚愕する。

「まさか、あいつらを相手にするのは無意味だと」

子どもは答えない。

「いや、勇者だから、少年たちにけがをさせてはいけない。ということか」

少年は俺の答えに対して、満足した表情でうなずいた。

「……。帰ろう。セレン、テルル」

「うん」

「じゃあね」

急に帰ろうとする俺に、少女たちはついていった。

俺は勇者と呼ばれた子どものほうを振り返ることはなかった。いや、できなかった。

俺は恐ろしくなった。

わずか6歳で、勇者としての生き方に従うこの子どもに。

第8話 そして、勇者（予定）との出会いへ・・・（2）（後書き）

「勇者、恐ろしい子」状態です。

勇者については、一応モデルが存在します。

今後明らかになるでしょう。

アーベルの冒険といいながら、まだ始まりません。

もうしわけありませんが、もうしばらくお待ち下さい。

## 第9話 そして、魔法使いへ・・・(1)

「とおさん、かあさん行つてきます」

「いつてらっしゃい、アーベル」

「俺も、そろそろ出かけるか」

「いつてらっしゃい、ロイズ」

14歳になり、冒険者になるため、王立の冒険者養成所に通う日も3年目を迎える。

冒険者になるだけであれば、16歳以上という年齢制限及び他の職業に就いている場合をのぞき、ルイーダの店などの登録所に届け出れば、誰にでもなれる。

ただ、将来のことを考えるのであれば、事前にもっちり養成所に通うことが望ましい。

理由の一つめは、成長に関することである。

事前に養成所で勉強していれば、あとは、戦闘経験を積むだけで、職業に見合った、技能やステータスを成長させることができる。そうでなければ、技能を身につけるために、一定期間、訓練所に通う必要が生じる。

パーティを離れて、一人で訓練を積むと、他の冒険者の冒険に支障が生じるため、声がかかりにくくなる。

あらかじめ1年間養成所に通うことで、技能習得をすることができる。大きな国であれば学費はともかく、誰でも学ぶことができる。ちなみに、母親であるソフィアは、出身であるロマリアで魔法使いの技能を学んでいた。

二つめは転職についてである。



転職はダーマ神殿で行うことができるが、事前に養成所で学んでいれば、これまでの職業と同様に戦闘技能を積むだけで、これまでの職業と同様に成長していくが、養成所で学んでいない場合は、約一年間事前に転職のための講習を受ける必要がある。一年間、仕事ができないのは、冒険者としては、非常に高いリスクを負うことになる。

ちなみに転職に向けての養成期間は3年かかるが、転職後のリスクを最小限に抑えることができることから、転職を視野にいれている人にとって、養成所の3年間は必須ともいえる。

ちなみに、この養成所があるのは、アリアハンとダーマだけである。養成所入所時に、希望職種を選ぶことになっているが、俺は魔法使いで、テルルは商人、セレンは僧侶を選んでいた。

俺の場合は、商人になることも選択肢のひとつにはあったが、テルルが商人を選んだことから、一緒にパーティを組む場合、バランスが悪くなる。

また、俺自身が魔法を使うことに興味があつたからだ。

「やっぱり、火の玉をバシーと飛ばしたいでしょ、バシー!と」  
そういわれると頷くしかない。誰かからいわれたわけでもないが。

それはともかく、魔法には未来があると考えている。

現在の冒険者が使用する魔法は戦闘を中心としたもので構成されている。

しかし、平和利用としても十分発展性があると考えている。

具体的な例を挙げると、土木工事や工業分野への応用である。

物語やゲームであれば、世界が平和になればそこで終わることがで

きる。

しかし、我々は引き続き生きる必要がある。当然、「その後」を考える必要がある。

世界が平和になり、モンスターが出なくなれば当然、人間の活動領域は広がり、人口が増加する。

ただ、人口増加に食料や工業、経済が追いつかなくなれば、やがて人間同士の争いが始まる。

「人間同士の争いを無くす」という甘い考えなど持ったことはないが、それでも争う理由など少ない方がいい。

一方、セレンが僧侶になることを聞いたとき、俺は素直に喜んだ

「セレンは僧侶になるのか？」

「うん」

「俺がけがをしたら、回復してくれよ」

「うん」

セレンは最近、俺にあまり話をしなくなった。

内気に戻ったわけでもない。セレンとテルルが話をするときは、普通に会話をしている。

かといって、俺のことをさけている様子もない。

「まあ、思春期特有の症状か」

俺は、テルルにぼやいたことがある。

テルルはあきれた顔で

「アーベル、あんた本当に「きれもの」？」

「テルル、意味がわからない」

養成所での訓練所から、成績表としてステータスの書かれた用紙を

もらう。

そのなかには、能力値だけではなく、性格も知ることができる。前の世界でもらった、通知票のノリだな。

ちなみに、テルルは「ぬけめがない」、セレンは「ふつう」だった。

「まあ、性格の評価なんてそんなものさ」

俺は肩をすくめて答える。

テルルは、俺に対して、何かあきらめたような表情をみせていた。

テルルから自分が商人になると聞いたのは、キセノン商会の一室であつた。

「テルルは、商人になるのか。やっぱり家業を継ぐのか」

「あんたが、商人にならないからね」

一緒に話を聞いていたキセノンは、驚いて娘の顔を見る。

俺は、キセノンを無視し、すまして答える。

「テルルの下で働いたら、しぼりとられそうだし」

「ばれたか。楽しんで暮らそうとおもったのに」

「テルルの考えなど、お見通しだ」

キセノンは黙ったまま、俺たちの会話を聞いている。

キセノンは、あきらかにひきつった顔をしている。

どうやら、勘違いをしているようだ。

直接的に言うのも気が引けるので、間接的に否定する。

「じゃあ、テルルが店に出たら、最初の客になるよ」

「ありがとう、アーベル。はじめてだから、やさしくしてね」

そういつてテルルは、俺の手を取ってお願いのまなざしを向ける。

俺は、商品を高く売りつけるつもりだなと苦笑しようとしたとき、キセノンの殺気を込めた視線に気がついて、あわててテルルの手を

離れた。

テルルが残念そうな表情を見せたが、気にしてはいけなない。  
キセノン商会は、アリアハン内での政治的な力もつけ始めている。  
キセノン商会を敵にまわすなど、愚行にもほどがある。

そんなことを思い出しながら、養成所にたどり着く。

「おはよう、セレン、テルル」

「おはよう、アーベル」

「うん、おはよう」

冒険のことを考えながら、今日の訓練を始めた。

第9話 そして、魔法使いへ・・・(1) (後書き)

## 第10話 そして、魔法使いへ・・・(2)

「今日もつかれたね」

「ああ、そうだな、テルル」

「ごめんなさい」

「セレン。謝ることはないよ」

「うん」

「そうよ、セレン。冒険で死ぬことに比べたら」

「ありがとう、テルル」

セレンの父親は、冒険者を引退して、冒険者養成所で剣技指導を行っている。

素人目にみても、迫力ある攻撃には隙がなく、まだまだ現役で活躍できると俺はおもっている。

実際、俺とセレン、テルルが冒険すると、戦士系の職業がひとり欲しいと思っていた。

テルルは一応戦士系ともいえるが、あまり力がなく、良い武器が見つかるまでは、どうしても見劣りしてしまう。

とはいえ、自分たちが勇者と一緒に行動することで、問題は解決するのだが。

勇者は、2歳年下だが、俺たちが養成所に入所したときは、既に勇者としての修行を始めていた。

勇者は、他の冒険者とはことなる養成方法をとっている。

礼儀作法や、国家情勢、歴史の勉強などである。

勇者は普通の冒険者と違って、他国にとっては国賓待遇を求められる。

つまり、国の代表という立場での行動を求められるのだ。アリアハンの勇者が無様な様子を見せれば、国際問題にまで発展するのだ。

一方で、勇者がしゃべれないことについては、問題にはならなかった。

人の話は理解できるし、筆談も可能だ。

いざとなれば、勇者ご一行の誰かが代わりに話をすればいい。ということ、その役割が俺たちに回ってきたのだ。

画策したのは、テルルの親父であるキセノンであるが。

キセノンは、テルルを勇者様ご一行に加えることで、他国との貿易をキセノン商会が担うよう働きかけることを考えていた。

キセノンの力は、国の勇者派遣戦略に影響を与えるほど、強いものになっていた。

まあ、同年代の冒険者候補で、俺やセレン、テルル以上のものはいなかったこともある。

戦士系の能力では、商人候補のテルルは他の戦士候補よりも下回るが、勇者が物理攻撃役としてサポートすること、性格が「らんぼうもの」「いのちしらず」「わがまま」の戦士を勇者に加えることはまずいため、だれも反対されなかった。

ちなみに、「らんぼうもの」「いのちしらず」「わがまま」の戦士候補三人は、かつて子どもだった勇者をいじめようとしていた連中の性格である。

自業自得か。因果応報か。

俺は最初、冒険の開始時期が2年ほど遅れることを懸念したのだが、どうせアリアハンを出てロマリアにいけるのは勇者が出発してから

になる。

ちなみに俺が魔法使いになった後に33万もの経験値をためれば、アバカムという鍵開けの呪文を習得し、国外に出ることが可能となるはずだ。

だが、アリアハン国内のみで経験値33万を稼ぐつもりなど無い。おそらく二年では間に合わないだろう。

それならば、後学のために魔法や商売の勉強をしたほうがよいだろう。

俺は、王宮の仕事に完全復帰したソフィアと一緒に魔法の研究をする許可は、既にもらっている。

勇者様ご一行になることで、行動の制限を受けるのは仕方ないが、勇者様ご一行の称号は今後の生活を考えると十分うまみがある。

そう思い、三人で一緒に勇者に従うことにした。

勇者は、俺たちと一緒に旅に出ることに反対しなかった。

まあ、「らんぼうもの」の戦士たちと一緒に行くことを考えれば、他に選択肢はないだろう。

ちなみに勇者のステータスは、限られたものしか知ることができない。

まあ、他国に情報が流されても困る。

仮に勇者の性格が「むってりスケベ」であることが明るみに出れば、他国が勇者をどのような扱いで味方に引き込むか自明のことである（勇者の名誉のために、性格が「むつつりスケベ」でないことを記載しておく）。

一緒に冒険をすれば、教えてもらえることになる。

さすがに生死の方が大事ということだ。



「アーベル。何を考えているの？」

「魔法についてだが」

「もしかして、レムオルの悪用法とか」

テルルはからかうような目つきで、俺をみる。

セレンは、レムオルがどのような魔法であるか思いだし、真っ赤な顔で俺の方をみる。

ちなみにレムオルは、透明になる魔法だ。

確かに悪用方法はいろいろあるだろう。

「違っつて」

「じゃあ、何を考えていたのか、言ってみなさいよ」

テルルは、俺がぼろを出すことを期待しているようだ。

あいにく、俺には抜きなどない。

「飛行魔法の活用法さ」

「飛行魔法？」

「テルル、トベルーラのことよ、そうでしょう。アーベル」

よくわからないといった表情をするテルルに、セレンが助け船を出す。

養成所では教わらない魔法の一つである。

一人でしか使用できない上に、魔力（MP）をかなり消費する。

冒険には向かないということ、養成所の講義内容からはずされていない。

俺が長々と解説しようとするのを見抜いたテルルは、降参という表情をして俺の話をとめさようとする。

「はいはい、アーベル、話はそこまで」

「……、まだ何も話をしていないのだが」

「もう家に着くから、今日はここまでね」

「じゃあな、セレン、テルル」

「じゃあね、アーベル、セレン」

「それじゃあ」

四つ角で、3人は別れた。

俺は、転生してからずっと、この世界でどう生きるのか考えていた。俺は、ある時から転生について考え方を改めていた。

俺は、前の世界から転生したのではなく、この世界で5歳のときに、前の世界に転生し、30を過ぎてから、この世界に戻って来たのだと。

都合の良い考え方ではあるが、この世界でアーベルとして生涯を終えるのであれば一番良い生き方になる。

それならば、他人に気付かれないように前の世界の知識を活用しよう、心に決めた。

前の世界の知識を活用した結果、この世界での人生設計が出来たので、安心していた。

だが家に帰るまで、それが油断であることに気がつくことはなかった。

第10話 そして、魔法使いへ・・・(2) (後書き)

トベルーラは「ダイの大冒険」で使用された呪文から流用しました。この世界では、呪文としては存在しているが、利便性の問題から冒険者には普及していないという設定です。

SFC版以外で他から借りた設定については、後書き欄で記載するつもりです(さすがに、メドローアとかは出さない予定ですが)。

## 第11話 そして、凶報へ・・・

「ただいま、かあさん」

「おかえり、アーベル」

家にかえると、ソフィアが夕飯の準備をしていた。

基本的に、ソフィアは宮廷魔術師（非常勤）として、働いており、俺や父親より先に家に帰っている。

たまに、研究で帰りが遅くなることあるが、そのときは俺が夕食をつくることもある。

とはいえ、俺が持っている過去の料理知識は役にたたないので、あまり上手く作れないのだが。

「今日はなんか豪華そうだね。いいことでもあったの」

「そうよ。でも、ロイズが帰ってくるまでは秘密よ」

「じゃあ、出来るまで勉強しているよ」

そういつて、俺は部屋に入る。

両親の書斎だが、俺の勉強部屋も兼用している。

俺は何があつたか予想してみた。

父親であるロイズが昇進したのだろうか。

父親の才能は普通だが、真面目なため、上司の評価は高い。かといつて、杓子定規でもないの、周囲から嫌われることもない。

まあ、昇進したかどうかは、実際に聞いてみればわかるはずだ。

考えすぎて、話を聞いたときに「予想どおり」みたいな顔をしないように気をつけなければ。

俺は、ソフィアが研究している魔法の資料を手にとって読み始める。この世界で冒険者が使用している魔法は、完成された魔法である。

完成された魔法というのは、誰が使っても効果が変わらないということだ。

効果が変わらないということは、安定した力を出すことが出来るという意味では便利である。

容易に戦術に組み込むことが出来るからだ。

使用を制限されているのは、習得できる職業とレベルだけ。この制限は、使用者の危険を防ぐためでもある。

メガンテやパルプンテのどこが安全かと言われるかもしれないが、死んだ場合でも、教会などで確実に復活できるという意味においては、安全である。

魔法が暴発し、もともにもどるべき体が無くなれば復活すらできない。

この世界の魔法は、安定して使用できるという意味で便利だが、変更ができないという意味では不便である。

ヒヤドの0.8倍の威力が必要な時や、ベギラマの効果範囲を1.47倍にしたいと言われても変更することが出来ないのである。

完成されているので、消費MPを増減して威力を加減するという使い方もできないのだ。

そのような使い方をするためには、魔法の基礎理論を一から勉強する必要がある。

例えるなら、自動車の運転に必要な知識や技能があれば、自動車を運転できるが、自動車を改造するには、自動車の原理を知る必要があるという具合に。

普通の冒険者では、そのような勉強をする時間などないのだ。

母親は、そのような勉強が出来る、限られた職業「宮廷魔術師」になっっている（ダーマ神殿で転職したわけではない）。

俺は、暇な時間さえあれば母親から資料を借りて、基礎理論を学んでいる。

しかし、実際に理論をものにするには、最低でも十年は必要だろう。何らかの業績をあげれば、母親のように「宮廷魔術師」として、生活できる職業に就くこともできるが簡単なことではない。だから、しばらくは冒険者として生活できるようにならないといけないのだ。

俺が魔法使いになることについて、ソフィアは喜んでいて。

ロイズも喜んではいしたが、本心は別かもしれない。

ロイズはたまに、セレンの父親と剣の稽古をしているが、息子と稽古ができないことを残念そうに思っているからだ。

「ただいま」

「おかえりなさい、ロイズ」

父親が帰ってきたようだ。

書類を元の位置にもどして、食卓にむかった。

「昇進おめでとう、ロイズ」

「おめでとう。とうさん」

「ありがとう。ソフィア。アーベル」

予想どおり、父親は出世した。

近衛兵として、王の警備にあたることになった。

政情が安定しており、直接戦闘に出ることもないため、死の危険もすくない。

冒険から帰っても、一緒に暮らすことができるだろう。

そういえば、勇者と一緒に冒険するので、バラモスを倒せば歓迎式典で父親が出迎えてくれるのか。少し恥ずかしいかもしれない。

「アーベル。そのときは堂々としているよ」

「かあさんも、顔を出すからね」

俺は話を聞きながら、何か違和感を覚えた。なんだろうか。

「！」

俺は、気付いてしまった。

「どうした、アーベル？」

「どうしたのアーベル。顔色が悪いけど？」

両親は、心配そうに俺を見つめる。

「……。ごめん。体調がわるくなった。休む」

そういつて、俺は寝室へと向かった。

最悪だ。

俺は、何を浮かれていたのだ。

父親が殺されることを忘れているなんて。

第11話 そして、凶報へ・・・ (後書き)

ようやく話が動きます。



## 第12話　そして、交渉へ・・・

さて、最初はキセノンの説得しなければ。  
あのおじさんは苦手だ。

とはいえ、計画のためだ。覚悟を決めよう。

俺は、キセノン商会に入ると、創業者に声をかける。

「おじさん。こんにちは」

「こんにちは、アーベル」

「実は、お願いがあります」

「アーベル。娘はやれんぞ！」

「違います」

「すぐに否定するとは、テルルが悲しむぞ。テルルを悲しませる奴は、俺が許さない」

「違うと言ったのは、テルルの話ではないという意味です。重要な話です」

「この俺にとって、娘の話以上に重要な話などない。帰ってくれ」

「あなたにとっては、そうですね。僕が言ったのは、キセノン商会にとって重要な話だという意味です」

「・・・。そうか、アーベル、ついてこい」

キセノンは俺を奥の来賓室に案内する。

とりあえず、最初の関門は突破した。

俺は、来賓室でキセノンと話をしている。

一代で財を成したとはいえ、来賓室は派手ではない。室内は洗練された上品さが感じられる。

「つまり、勇者一行とは別に行動すると」

「そうですね。いや、勇者より先に旅を始めるのです」

「それでは、勇者様ご一行の称号がもらえないぞ？」

「もらえませんが、それ以上のものが手に入ります」

「何が手に入るのだ？」

「時間です」

「そうか、時間か」

キセノンは考えている。

当初の計画は、勇者と一緒に冒険してバラモスを倒す。その名前でキセノン商会の権益を拡大するというものだった。しかし、それ以上の利益が手にはいるのであれば、考え直してもいい。

俺は、キセノンの考えをそのように読んでいた。

「手に入れた2年の間に、何をするつもりだ？」

「商船を手に入れます」

「ほう。どうやって？」

「ポルトガと交渉します」

「確かにポルトガは、船を造ることができる。商船が手に入れば、交易ルートが拡大できる」

キセノンは質問を続ける。

「だが、ポルトガは他国に船は売らないぞ」

「代わりに、勇者を派遣します」

「なるほど。勇者はアリアハンからしか生まれない」

俺はうなずく。

勇者は天に選ばれた存在だ。

勇者が王を支持すると言っただけで、国内の支持率は上昇する。

「たしかに、ポルトガにとって勇者の派遣はいい条件かもしれない。だが」

キセノンは追求の手をゆるめない。

「ロマリアはどうする。ロマリアが許さなければ、ポルトガへは行けないぞ」  
通過するには、ロマリア王の許可がいるだろう。  
ただの冒険者が、ロマリアからポルトガに訪ねるのは許されないだろう。

「ロマリアは、仲介役として船と勇者派遣の両方を手に入れさせます」

「気前が良いすぎるだろう。ポルトガが認めるとは思わない」

「お任せください。だめなら、2年後に勇者一行として普通に参加すれば済むことです。僕を外せばいいのです」

「交渉責任者であるアーベルを切り捨てれば、テルルとキセノン商会はダメージを受けないということか」

「そうです」

キセノンは質問を続ける。

「なぜ、アーベルは旅を急ぐのだ？」

「早く世界を平和にしたい。では納得できませんか」

「できないね。魔王を倒すことができるのは、勇者だけだ」

勇者でなければ魔王は倒せない。

勇者の一行でなければ、開けることが出来ない宝箱があるという。

その中には、オーブなど魔王討伐に必要なアイテムが存在するのだ。

「魔王が倒されたら、魔物が消えると伝えられています」

俺は、お茶を口に入れ話を続ける。

「そうならば、冒険者は廃業します。それまでに少しでも金を稼いで、魔法研究の資金に投入するつもりです」

「俺が、資金を提供すると言っても、考えは変えないのか」

何気ないキセノンの言葉だが、普通の人なら、畏怖を覚えるだろう。キセノン商会を敵に回せる人間など、この大陸にはいないはずだ。

「必ずしも、キセノン商会の利益にかなう研究を行うとは限りませんから」

「そうか。おまえの計画を認めよう」

キセノンはうなずくと、急ににこやかになった。

### 第13話 そして、フラグ回避へ・・・

「そうか。おまえの計画を認めよう」  
キセノンはずなずくと、急ににこやかになった。

「アーベル。お前はたいした奴だ」  
「？」

「ソフィア以外で、俺と本気で相手にできる奴はいなかった」  
そうなのか。ソフィアが話すときは、優しい言葉しか聞いたことがない。

「結婚するまで。いや、ロイズと出会うまでは、お前以上の「きれもの」だったぞ」

「きれもの」だった。ということだ。

「この世には性格を変えてしまう本がある」  
まさか。

「しゅくじょへのみち？」

「知っているのか、アーベル」

「家にあるので、読んだことがあります」  
男なので効果がなかったが。

とりあえず、計画の第一段階は成功した。

しかし、知らない方がよかった秘密を知ってしまったようだ。

「ところで、アーベル」

「なんですか」

「キセノン商會を継ぐ気はないか？」

「は？」

俺は思わず身構える。

「おまけで、テルルを嫁にやってもいい」  
「最初の話と、違うようですが」  
俺は急に汗をかき始めた。  
「あれは冗談だ」  
「冗談ですか」  
「テルル入ってこい」

キセノンが叫ぶと、すかさずテルルが室内に入る。

「はい、お父様」

「アーベルがお前との結婚を断るそうだ」

「！」

テルルはキセノンと俺とを交互ににらみつける。

「そんなことは、いつていません」

「そうか、結婚してくれるのか。よかつたな、テルル」

「よくありません！！」

テルルは大声で叫ぶ。

「あれ、勘違いか。子どもころは「アーベルのおよめさんになる」といつも……」

「子どもどもの話です」

「今はどうなのだ」

テルルは急にもじもじする。

「……。結婚するには、まだ早すぎます。お父様」  
キセノンはおおきく笑った。

「さすが、我が娘だ。結婚は冒険が終わってからということか」  
「知りません！」

テルルは叫んで、部屋をでていった。

「まったく、テルルは失礼な娘だ。幼なじみとはいえ、客人を相手

に逃げ出すとは」

「・・・娘に嫌われても知りませんよ」

「これが唯一の生き甲斐なのでな。あきらめているよ」  
急にキセノンは真剣な顔をする。

「アーベルよ。冒険中に娘の身になにかあつたら、許さない」

「わかっています」

そういつて俺はキセノン商会を後にした。

計画の第一段階は成功した。

しかし、父親を死なせない計画が成功するためには、まだまだ多くの準備が必要なのだ。

魔王バラモスを倒すことで、父親のロイズはゾーマに殺される。

ロイズの死亡フラグが立った日の夜、俺は布団の中で回避するための方法を考えていた。

最初に考えたのは、ロイズが復活可能かどうかである。

死者の復活可能な世界では、死亡フラグだけでは恐れる必要はない。しかし、遊んでいたゲームの中では、ロイズが復活した様子が見られないことを知っている。

SFC版の勇者の母親の言葉のとおり、この世界では肉体がある程度残っていないければ復活出来ないことから、ロイズの復活はまず無理と考えた。

次に考えたのは、ロイズを異動させることである。

現場にいなければ、殺されることもない。

しかし、考えたがこれも無理だった。

近衛兵は一度決まれば、引退するまで基本的に近衛兵である。

王を守るという性質上、ころころ人を変えることなどできないのだ。かといって、ロイズはまだ若い。

引退させることも不可能だ。

であれば、勇者の邪魔をする方法を考えてみた。だが、勇者はひとりだけではない。

魔王バラモスを倒すことが出来なければ、次代の勇者が倒せばいい。現在アリアハンには、12歳の勇者候補の他に、6歳の勇者候補者がいる。

勇者を邪魔しつつつけた結果、バラモスがアリアハンを滅ぼしたら、意味が無い。

残された方法は、勇者がバラモスを倒す前に、ゾーマを倒すことである。

勇者と一緒に先にゾーマを倒すことも考えたが、勇者の使命はあくまでバラモスを倒すことである。

別の世界の誰も知らない魔王など、攻撃されない限り、相手にする必要は無いのだ。

下手に手を出されても困る。そういつて、無視されるだろう。

だから、キセノンに頼んで2年早く冒険に出ることにしたのだ。

だが、これは始まりにすぎないことを知っている。

既に、先にゾーマを倒すまでの計画は考えている。

ただ、実際に上手くいくかどうかは、冒険しなければわからないのだ。



第13話 そして、フラグ回避へ・・・（後書き）

キセノン最後の登場（嘘）なので、前話につづいて好き勝手させた結果がこれです。

反省しております。

ようやく次回、旅立ちの日を迎えます。

## 第14話 そして、旅立ちへ・・・(1)

「アーベルさんと、テルルさんと、セレンさんですね」

「はい」

「説明は養成所で聞いているとおもっているので、再説明は不要ですか？」

「はい」

俺とセレンとテルルはルイータの店の2階で冒険者登録の説明を受けていた。

とはいえ、既に養成所で登録内容については、承知しているが。

俺たちは、登録をすませると、パーティを組み、王宮へと向かう。

セレンは、説明した男から「あなたは、なかなかふつうですね」と言われたことに、かなり腹を立てていた。

結局、パーティは3人で組むことにした。

俺は本来、4人でパーティを編成することを考えていた。

編成人数は大事である。

実は長い旅を続けるうえで、男女混合の3人パーティは危険なのである。

冒険者養成所の統計データによると、長期間男女でパーティを組むと恋愛関係に発展する可能性が高い。

恋愛関係自体は問題ないが、残されたメンバーが問題になる。

冒険者養成所の統計データによると、残された1人は結局パーティから外れてしまうのだ。

俺はパーティ編成についての講義を、前の世界での男女混合の音楽ユニットを思い出しながら聴いていたが、自分がその立場に置かれるとなれば、複雑な心境だ。

相手から、恋愛関係を迫られることはないと思うが、俺も男だ。欲求が高まれば何をしてくすかわからない。そんなことで、パーティが崩れると当初の目的が果たせなくなる。

とはいえ、適当に新たな人を入れることもできない。

自分たちと同時期に冒険者養成所を修了した冒険者は、既にパーティを組んでいる。

若干残っている冒険者は、「らんぼうもの」の戦士のように、パーティに入れることのほうが、3人であることよりも問題が生じてしまうようなものばかりだった。

既に活動している冒険者を加える手もあるが、行動の主導権を握られることになる。

結局、当面は3人で行動し、時折アリアハンに顔を出し、良さそうな冒険者がいれば仲間に加えることにした。

王宮へ向かう途中、勇者候補生にあった。

この勇者候補生はあと2年すれば、旅に出ることができると。

父オルテガにも負けない素質があると噂されているが、国家機密であり、本当のことはわからない。

ただ、俺が見る限り、彼以上の勇者はいないと考えている。

わずか6歳のときに見せた覚悟は、今日にいたるまで変わっていないのだ。

俺はセレンとテルルを待たせると、勇者候補生に話しかける。

「久しぶりだな」

勇者候補生はうなずく。

俺は、最初の頃こそ勇者候補生を恐れ、さけていたが、こちらが敵対しないかぎり問題ないと理解してからは、積極的に話をしている。

俺は、前の世界の名前を捨て、アーベルとして生きている。彼は、勇者として生きている。ある意味、似たもの同士だからかもしれない。

いまでは、表情だけで勇者候補生の答えをほぼ読み取れる。

「一足先に、旅に出るよ」

勇者候補生の顔は少し心配そうな顔をする。

「大丈夫だよ。無理はしないさ」

俺の言葉でも、心配そうな様子は消えない。

「本当に大丈夫だよ。バラモスは残しておくから」

勇者候補生は、驚いた顔をしたが、すぐに笑顔になった。

俺はバラモスを倒さない。

その代わりゾーマは俺が倒すけどな。

「俺は勇者じゃなくて、魔法使いだから」

勇者候補生はうなずく。

「魔法使いといっても、童貞ではないけどな」

勇者候補生は驚く。

しまった。前の世界の冗談を使ってしまった。

確かに、前の世界では童貞ではないが、前の世界の話自体、禁句だった。

この勇者候補生は、このような冗談を他人に話すことはないが、それでも用心しなければならない。誰が聞き耳を立てているかわからない。

「すまん。今のは忘れてくれ」

勇者候補生は、うなずいた。

「帰った時は、みやげものでも買ってきてやるよ」

勇者候補生は、嬉しそうにうなずいた。

「そつだ、もし旅にでたら頼みたいことがある」  
俺は勇者候補生にひとつ頼み事をした。

勇者候補生と別れて、セレンとテルルのところに戻ったが2人の様子がおかしい。

「どうしたんだ、2人とも」

「・・・」

「知りません！」

セレンは無言のままだし。

テルルは怒っているようだ。

待たせすぎたのだろうか。それとも、勇者候補生と一緒に話をしたかったのか。

「セレン、テルル。すまなかった」

「え、え？」

「べ、別に謝ってもらっても・・・」

「王宮に行くまでに、あいつとした話しをしようか」

急に2人は、顔を赤くする。

「・・・」

「こんなところで話さないでよ！」

勇者候補生とは、たいした話はしていないが、聴きたくない話を持ち出すこともない。

俺たちは、無言のまま城内にたどり着いた。

## 第15話 そして、旅立ちへ・・・(2)

「冒険者アーベルよ」

「はっ」

俺は、王の前で片膝をついた姿勢で答える。

「そちに、アリアハンの使者を命じる」

「謹んでお受けします」

「ロマリアとポルトガに行き、船を手に入れるのだ」

「はっ」

「では、身分証と書状を受け取るがいい」

「はっ」

アリアハンの王から、身分証と書状とを受け取ると、俺は再び王の前に膝をつき礼をする。

「では行け、アーベルよ」

俺は、後ろを振り返り出口を目指す。

途中、父ロイズを見かけたがお互いに無視をする。

俺は、1階で待っている、セレンとテルルのもとへと向かった。

俺は、1人で王と対応した。

別に3人でもかまわなかったが、万一俺が交渉に失敗しても、責任を取るのは俺1人で十分だ。

逆に成功したら、3人で王に報告すればいい。

セレンとテルルもその事は知っているので、文句は言わない。

3人そろった俺たちは、そのまま街の外へと向かった。

既に冒険の準備は出来ている。

一日も無駄にはしたくない。

俺は原作知識を使って、少しチート気味なことをしている。

装備面の改善である。

キセノン商会の協力を得て、出世払いということで、アリアハンで用意できる最高の武器を用意してくれた。  
防具についてはさらに優遇してある。

キセノンは、ランシールから「みかわしの服」を3人分調達してくれたのだ。

「おじさん。ありがとうございます。金はお返しますので」

「別にお金はいいよ。娘の持参金代わりということだ」

「必ず、お返しします」

「アーベルよ、即答するのか。ひどいやつだ」

「文句は、テルルの意見を聞いてからにしてください」

このようなやりとりを経て、初期資金1000Gと一緒に出世払いになったのだ。

町はずれでは、母ソフィアが俺を待っていた。

俺はセレンとソフィアの顔を見たが、2人とも親子の別れに気を遣って、2人きりにしてくれた。

「母さん。行ってくるよ」

「気をつけてね、アーベル」

「大丈夫だよ。母さんの息子だから、簡単には死なないよ」

「アーベルったら」

「ロマリアに着いたら、一度戻るよ」

キセノン商会で買ったキメラの翼を見せる。

「待っているわ、アーベル」

「ああ、いつてくる」  
「その前に、アーベル」  
「なんだい、母さん」  
「アーベルはどっちと結婚するの？」  
「えっ」  
「どっちもかわいいから、困っているの？」  
「母さん」

確かに2人ともかわいい事は否定しないが、今ここで聞くことが。  
「冒険が終わるまでには、決めなさいよ。私みたいに一目惚れする  
のもいいけど」  
母親はいたずらっぽく笑った。  
「そのときは2人が納得するような娘を見つけなさいよ」  
「それは、厳しいかも」  
「そうね」

母親は俺を抱きしめる。  
「気をつけてね」  
「うん」

俺は母親と約束した。



第15話　そして、旅立ちへ……(2)（後書き）

お待たせしました。  
旅に出ます。

とりあえず第1章終了となりますが、第1章のタイトルで悩んでいます。

私が好きなのは「地獄校長編」とか「ビクトリー球団編」とかですが、意味不明なタイトルで読者を混乱させるわけにはいきません。

追伸：タイトルを決めました。

話数のタイトルのように、各章のタイトルは統一性に欠けますがご容赦下さい。

## 第1章までのあらすじ（前書き）

これまでのあらすじを追加しました。  
（7月12日）  
飛ばしてもらって結構です。

## 第1章までのあらすじ

2010年12月。

俺は、酒に酔った勢いで、ドラクエ3の世界に転生した。

自分でも何を言っているのかわからないが、残念ながら現実である。パフパフとか黄金の爪の呪いだとか、そんなちやちな・・・。

アーベル（当時5歳）に転生した俺は、父ロイズと母ソフィアにかわいがられて、順調に育っていった。

俺は、冒険者になるために、訓練場に通っていた。

いつか、母親に負けない魔法使いになることを目指していた。

ある日のこと、俺は父親がアリアハンの近衛兵に抜擢されたことを知る。

父親は大魔王ゾーマに殺されるフラグが立ったことになる。

俺は、父親の死亡フラグを回避するため、勇者が出発する2年前に旅立ち、勇者が魔王バラモスを倒す前に、ゾーマを倒すことを決意する。

幼なじみである、商人テルルと僧侶セレンと一緒に冒険の旅が始まった。

「ねえ、アーベル。誰と話をしているの？」

「セレンか。なんでもない、いくぞ」

「はい」

「・・・」

第16話 そして、ナジミの培へ・・・(1) (前書き)

第2章がはじまります。

## 第16話 そして、ナジミの塔へ・・・(1)

「た、ただいま。母さん」

「お、おかえりなさい。アーベル」

「おかえり。アーベル」

「ただいま。父さん」

冒険の初日は、アリアハン周辺で活動していた。

みかわしの服のおかげで、体力のない俺ですらほとんどダメージを受けない。

そのままレーベに行くことも考えたが、あわてることはない。

まずは、体力をつけなければ。

ということ、夕方までがんばって3人ともレベル3まで上昇した。その代わりに、俺と母さんとの間に気まずい雰囲気があるが、仕方あるまい。

書き置きに「旅に出ます。探さないでください。夕食までには帰ります」と書いたようなものだ。

たぶん、セレンやテルルの家でも同様の雰囲気が漂っているはずだ。

次の日は、アリアハンの北にあるレーベの村にむかった。

パーティの様子がおかしい。

セレンは、普段とあまり変わらない様子であったが、テルルの様子が明らかにおかしい。

俺の方をにらむような目つきをするが、俺がテルルの方を向くと、あわてて視線をそらす。

時折、意を決したように、俺にむけて何かを話しかけようとするが、

首をふりあきらめ、逆に俺が話しかけようとする、すぐに俺のそばを離れてしまう。

そうするうちに、やがてレーベの村にたどり着く。

この村は、ルーラの行き先に登録可能であり、早速俺たちは、登録作業をおこなった。

この村の目的は、魔法の玉の入手である。

アリアハンに船がない現在、東部のいざないの洞窟にある旅の扉を使わなければ、外国に行くことが出来ない。

だが、いざないの洞窟の入り口が壁により封印されており、封印を解かない限り前に進むことはできない。

封印を解くためには、壁を壊すしか方法がないのだが、物理的な手段だけでは壁を壊すことができない。

文献によると、魔法の玉と呼ばれるものであれば壁を壊すことが出来る、と書かれていた。

このため、5年前にアリアハンの王は、レーベの村に住む老人に対して魔法の玉を作るように命じた。

この老人は、かつてアリアハンで宮廷魔術師として活躍していたが、俺の母であるソフィアを後任にすると、ふるさとのレーベに戻り、余生を好きな研究に打ち込んでいた。

老人は王の頼みであればと、快く引き受け、勇者が冒険に旅立つまでに完成するよう、日夜研究を続けていた。

ところが、俺がロマリアに行くということで、計画が2年早くなった。

老人は、完成したら王へ使いをよこすと話していたが、未だに連絡は来ていなかった。

しかし、俺は完成しているとらんでいる。

俺は、この老人の性格をソフィアから聞いているからだ。

「入れないか」

「入れませんか」

「誰かいませんか？」

返事がない。いるすのようだ。

俺たちは、老人の研究所を訪ねたが、研究所に侵入することが出来なかった。

やはり原作どおり「とうぞくの鍵」が必要なようだ。

俺は「とうぞくの鍵」が必要な事自体を否定するつもりはない。

なぜなら、「魔法の玉」という危険物に関する情報が盗まれたら、それこそ問題である。

逆に「とうぞくの鍵」程度で進入できるほうが問題ではある。

「とうぞくの鍵」を作ったのが、バコタのような、お金にしか興味のない盗賊で助かったともいえるだろう。

盗賊バコタは既に魔法使いに捕まって投獄されている。

捕まえた魔法使いは、ナジミの塔の最上階で生活している。

俺たちは当初の予定どおり、レーベの村を南下して、ナジミの塔へと繋がる洞窟へ向かう。

洞窟を歩きながら、俺はナジミの塔について、考えていた。

ナジミの塔は、アリアハン大陸の中央に浮かぶ島に立てられた塔である。

かつては灯台の役割を果たしていたが、船が無くなると最低限の人員のみを置いて、塔から撤退した。

その後、モンスターが住みつき今にいたる。

世界が平和になれば、ナジミの塔を中心とした交易都市を造ることを考えていた。

アリアハンと違って港から近いこと。

地下の洞窟を再整備すれば、アリアハンやレーベに荷物を運送できること。

これらのことから、平和になり人口が拡大すれば、必ずこの街は成長する。

キセノン商会にこの話を売り込めば、あとは勝手に開発を進めるに違いない。

キセノンへの手みやげ話を考えながら、ナジミの塔へ続く階段を登っていった。

「いくら倒してもきりがないね」

「本当ね」

「でも、この服のおかげで問題ないね」

セレンの言葉に、俺とテルルはうなずいた。

塔の2階へと続く階段を登ろうとしたとたん、魔物の群れに襲われた。

倒しても、倒しても、次から次へと現れる。

一瞬魔物に隙が生じたので、俺が2人に目配せをして逃げようとしたのだが、テルルの反応が遅れたため、まわりこまれてしまい、そのままずるずると戦っている。

それでも、夕方までには、モンスターはいなくなり、ようやく一息つくことができた。

おかげで、全員レベル6まで上昇したが。

塔の探索は明日に順延することにして、レーベの村で休もうかと3



人で相談していたところで、不意に背後から男が現れた。

## 第17話 そして、ナジミの塔へ・・・(2)

「いらつしゃいませ」

振り返ると、40すぎの男が目の前にいた。

「見知らぬ声でしたもので、声をかけさせていただきました」

人と話ができるのがよほどうれしいのか、テンションが妙に高い。

「この塔の地下で宿屋を営んでおります」

「・・・」

「おおつと。地下といいますが、住環境に一切問題がありません。地下水道も整備されており、清潔な環境が保たれています」

「・・・」

「魔法の結界により、モンスターからの襲撃から守られておりますので、安心してお休みいただけます。冒険者でもないわたしが、平気であることがなによりの証拠です」

「・・・」

「まずは、お部屋をご覧ください」

俺たちの返事を待たずに、下り階段へと進んでゆく。

俺たちは肩をすくめて、男の後をついて行く。

「ほう」

「結構きれいね」

「すごい。きれいな水が流れているよ」

男の話に、間違いはなかった。

案内された部屋は、質素だが、清潔感が保たれており、アリアハンの宿屋の水準を上回っている。前にいつ客が来たのかわからないが、毎日きちんとベッドメイキングされているのが一目でわかった。

これなら、安心して休めそうだと、俺たちは1泊することにした。  
一番の理由は、男の話に聞き疲れたことであったが。

男は、「おお、久しぶりのお客さんだ。うれしいなあ」などと言って大喜びで夕食の支度を始める。

となれば、まずは食事だ。

かなり運動したので、おなかが減っている。

出された食事もうまかった。

毎週、アリアハンから定期的に届けられるそうだ。

さすがに生ものは無かったが、水道を使った冷蔵庫に保管してある野菜は新鮮であった。また、食材の輸送にかかる経費は王宮が負担しているため、アリアハンの宿屋と同じ料金を保っている。

王は、再び船を手に入れた時、この塔がすぐに使用できるように考えているのだ。

夕食をすますと、俺はテルルに話しかける。

「テルル。話があるのだが？」

「え、何のこと」

「これからの事を相談したいのだ」

俺は、拳動不審な様子を見せるテルルの腕を引っ張って、寢室に連れ込む。

「アーベル。離して！」

「ああ」

俺はそう言って、つかんだ腕を放した。

テルルは、部屋に置いてある椅子に座ると、おびえるような様子で俺に声をかける。

「アーベル。わたし、まだ心の準備が」

「……。何を勘違いしているか知らないが、話をするだけだ」

「最初はそういって、結局・・・」

「だから、落ち着けテルル」

俺はため息をつくと、心配した顔でテルルに尋ねる。

「お前、朝から変だぞ。いったい何があった？」

「・・・」

「俺たちはパーティだ。だから、なんでも話せとは言わないが、それでもお互いに命を預けあっている」

俺は真剣なまなざしでテルルをみつめる。

「今日の戦闘は装備で助かっているが、そうでなければ全滅していた。テルルもわかっているだろう？」

「・・・」

「俺に聞きたいことがあるのだろう。おそらく、キセノンのおじさんから頼まれたのだろう」

「！」

凶星だったらしい。

昨日は問題なかったのに、実家に帰ってから様子がおかしかった。

だから、予想はついたのだが。

テルルはあきらめたのか、ぼそっとつぶやいた。

「アーベルにはつきあっている相手がいるの？」

テルルの質問は俺の予想を超えていた。

第17話 そして、ナジミの塔へ・・・(2) (後書き)

とりあえず、第2章がはじまりました。

よろしければ、評価をして頂ければ幸いです。

第18話　そして、ナジミの塔へ・・・(3)

「アーベルにはつきあっている相手がいるの？」

俺の予想を超えたテルルからの質問に驚いたが、動揺を顔にしてはいけない。

今の機会を逃したら、パーティの再編成を含めて検討する必要があるからだ。

「どうしてそんな質問をするのか教えて欲しい。いや、キセノンとどのような話をしたのか教えてくれないか」

俺は、質問の意図がわからなかったので、テルルに質問した。

テルルは俺が答えなかったのが不満なのか黙ったままだ。

「俺は、つきあっている相手はいないよ」

「・・・そう」

俺が、答えを返したことに安心したのか、テルルは昨日の事を話し始めた。

「テルルよアーベルは、大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃないの。「きれもの」なのだし」

現にアーベルの事前準備のおかげで、安心して冒険に取り組むことができた。

特に、みかわしの服の威力は絶大で、アーベルが8歳のときにキセノンに「しゅっせばらいでおねがい」と進言していなければ、船がない今、入手することはできなかった。

「そうではない。アーベルは誘惑に弱いかどうかだ」

「誘惑？」

「そうだ、テルル。確かにアーベルは「きれもの」だ。わしの話にあそこまで対抗できるのは、あいつのほかには母親のソフィアしかおらん」

「だから普通なら、交渉もうまくいくはずだ。ただ」

キセノンのは、グラスを置くと話が続ける。

「ひとは誘惑に弱い生き物だ。特に若い男などは、女性からの誘惑に弱いだろう。交渉時に他国から仕掛けられれば、足下をすくわれかねない。心配なのはそこなのだ」

たしかに、そうだろう。

養成所に通っていた男たちの話や女性への視線を考えると頷くことができた。

「大丈夫よお父さん」

「なぜだ。テルル？」

テルルは、キセノンからの視線を外して話を続けた。

「アーベルはつきあっている相手がいるから」

「本当か？」

「本人が言っていたから」

「そうか」

キセノンはため息をつく。

「それならば、テルルを嫁にやるといっても反応が無い理由が納得できる。相手はセレンか」

セレンは最近、体が成長したため、訓練所での人気は高くなっていた。セレンの父親が訓練所の剣術指導をしていたので、誰もセレンに手を出す相手はいなかったが。

「違うわ。でも、誰だかわからない」

「そうか、俺も調べてみるか。お前もアーベルにそれとなく聞いてくれ」

ということだった。

もう少し続きがあるみたいだったが、テルルは話すつもりはないようだ。

「で、どうして、俺につきあっている相手がいることになるのだ」

「違うの、アーベル？」

テルルは本当に驚いているようだ。

「違う」

俺は、再度質問を否定し、なぜ、そのような考えにいたったのか、尋ねる前に理解した。

「昨日の勇者候補生との話をきいたのか」

テルルは顔を赤くして頷く。

どうやら、俺が童貞ではないといった部分が聞こえたらしい。

「まったく。あれは冗談だと続けたのに。そこは聞こえなかったと？」

テルルは頷く。

「なんとという、都合のいい耳だ」

俺は肩をすくめた。

俺は少し考えて、テルルに向き合った。

「いいかい。キセノンのおじさんにはこのように答えてくれ」

「俺は早く結婚したいが、冒険が終わる前にテルルに手を出せば、キセノンのおじさんに殺される（経済的な意味で）。だから、今はおとなしくしていると。俺は結婚するために素早く冒険を終わらせ



ることを考えていると。でも、キセノンのおじさんにそのことを知られると弱みを握られるので、キセノンには黙っていて欲しいと「テルルは、顔を真っ赤にしていたが、満足そうに頷いた。

俺自身は、生活が安定するまで誰かと結婚するつもりはないが、あでも言わないとキセノンを納得させることは無理だろう。

これで、テルルも安心してパーティの戦力となってくれるだろう。

俺はパーティ問題から解放されたと思ったそのときに、次の問題が発生したことに気がついて、思わずため息がでた。

「セレン。入ってきて」

テルルが驚いて部屋の入り口をながめると、そこには、鎖鎌を手にしたセレンがいた。

おそらく、俺がテルルに襲いかかると考えて、部屋の前で準備をしていたのだろう。

「セレン」

「セレン、俺の話はどこから聞いていた」

「・・・。「俺はテルルと結婚したい」あたりから」

「・・・」

「・・・」

俺は頭をかかえ、セレンは顔を赤くして俯いていた。

「さて、どこから話をすればいいのか」

俺は、セレンとテルルの説得を始めたが、両方が納得したのは、深夜に入ってからであった。

第18話 そして、ナジミの塔へ・・・(3) (後書き)

次でナジミの塔編は終わります

## 第19話 そして、ナジミの塔へ・・・(4)

「おはようございます。お気をつけて」

そういって、宿屋の主人は俺たちを見送った。

出来た男だ。

「昨日はお楽しみでしたね」などと言うような店主であれば、問答無用で殴りかかる予定であった。

昨日の殲滅戦の成果か、2階にあがっても魔物の気配が感じられない。

たまに、柱の陰に隠れている魔物がいたが、こちらから急襲して始末する。

防御力が上がっているとはいえ、先手必勝である。

毒を与えたり、マヌーサと呼ばれる呪文を使ったりする相手を優先的に倒してゆく。

なんとか最上階にたどり着くと、部屋の中で1人の老人が眠っていた。

「起きてください」

「起きて〜」

セレンとテルルの2人がかりで老人をおこそうとする。

が、目を覚まそうとしない。

だが、俺は見抜いていた。

老人の顔つきがだらしなくなりはじめていた。

若い娘2人にかまわれるのが嬉しいとみえる。

「セレン、テルル離れて」

俺は必要もないのに、杖を構えると、呪文を唱えようとする。

「どうするの、アーベル？」

テルルは俺の考えを見抜いたのか、少しわざとらしい声で尋ねる。わざとらしい話し方が無ければ、テルルも「きれもの」になれるかもしれない。

「昨日覚えたばかりの、ヒヤドを唱えようかなと。ちょうどいい機会が出来て助かったよ。本当はMPがもったいないけど、起きないから仕方ないよね」

テルルはうなずく。

「いくよ」

「待ってくれ、呪文を打たないでくれ！」

老人は飛び起きて答える。

「まったく、老人を永眠させるつもりか」

「お望みであれば」

「望んでおらんわ！」

俺は老人に対して、とうぞくの鍵を貸して欲しい事を伝えた。

「いやじゃ」

「嫌ですか」

「ワシは勇者にこの鍵を渡す夢をみたのじゃ。他の相手には渡せない」

「私に渡すと、勇者に渡せないから、駄目だと？」

「そうじゃ」

原作どおりということか。

「後で渡せばいいじゃないですか」

「なに？」

「私たちは別に鍵をくれとは言っておりません。用が済んだら返します」

「本当か？」

「はい」

「それなら仕方ない」

俺たちは喜んだ。

「じゃが、1人置いてゆけ」

「は？」

「鍵を悪用されては困る。娘のどちらかを置いてゆけ。なんなら、両方でもかまわんぞ」

そういつて老人は、セレンとテルルの方を見る。

どうやら老人は、2人のことが気に入ったらしい。

「困りましたね」

俺はそういつて、王の命令書を示す。

「王からは、私の冒険を助けるようにという命令書をいただいているのですが。仲間を置いて行けと言うことは、私の冒険を阻害するということになりますね」

俺の言葉に老人は沈黙する。

「そういうことであれば、仕方ありません」

俺は残念そうな顔を作る。

「王に報告しなければなりません」

「なんだと」

「それでは、いったん失礼します」

俺たちは、あきらめて帰ろうとする。

「待ってくれ」

「すぐに戻ってきます。兵士も一緒に連れてきますので」

俺は老人に対して、にこやかに手を振った。

「悪かった。鍵を貸すから。ほれ」

老人は俺に鍵を投げつけた。

「ありがとうございます。すぐにお返ししますので」

俺たちは礼を言って部屋を出ると、キメラの翼を使用した。

「ねえ、アーベル」

テルルはナジミの塔を後にした俺に質問する。

「どうして、あのおじいさんに最初から命令書突きつけなかったの」

「練習だよ」

「練習？」

俺は、テルルの質問に答える。

「今後ロマリアやポルトガとの交渉に備えて、交渉術を磨かないとね」

「これ以上上手くなるつもりなの？うちのお父さんに負けないだけでもすごいのに」

「キセノンとは顔なじみだから、相手がしやすいだけさ」

俺はまじめにこたえる。

「これからの交渉相手は誰になるのかわからない。事前に交渉相手の情報は入手するつもりだが、それでも相手がどんな交渉術を駆使するかわからない。だから実践を磨く必要がある」

「そうなの」

「そんなものさ。テルルもキセノン商会を継ぐのなら、しっかりと勉強することだ」

「わかってるわよ、そんなこと」

テルルは頬をふくらめせながら答える。

第19話　そして、ナジミの塔へ・・・(4) (後書き)

ナジミの塔は、西にある岬の洞窟からも進入出来ますが、こちらからはあまり入ったことはありません。

## 第20話　そして、量産化へ・・・

俺が冒険に出る前、母親から前任の宮廷魔術師の事を聞いていた。母ソフィアは、前任の宮廷魔術師の事を抜け目がないと言っていた。

老人は引退した後も、顧問という職につき、王宮から給金をもらっていたし、王から魔法の玉の作成を命じられた時も、施設研究所の支援と5年間の研究予算を獲得していた。

俺は、レーベの村にすむ前宮廷魔術師に対して交渉を挑む前に、キセノン商会の親父としっかり事前準備を行っていた。

「アーベル、本当に大丈夫？」

「それ試作品とか、言っていたけど・・・」

「問題ない。これは完成品だから」

セレンとテルルの心配をよそに、俺は、壁の前で作業をしていた。俺が作業をしている目の前に大きな壁が立っていた。

壁が作られてからかなりの年月が経過しており、よほど丹念に調べなければ、この壁が周囲の壁の後に作られた事は、わからないだろう。

「よし、準備完了！」

俺はそういって、みんなを後ろに下がらせる。

俺はメラを唱えると、魔法の玉にぶつける。

「！」



轟音から身を守るため、全員が手で耳をふさぎ、壁が破壊されるのを見守っていた。

「ん？なんじゃお前さんたちは」

研究所にいた老人は俺たちに気がつくつと、椅子から立ち上がり、俺たちに話しかけた。

「わしの研究所には鍵をかけておつたはずじゃが、どうやってはいつてきた？」

老人は特に驚いた様子もなく、つぶやくように質問した。

「はい、この鍵を使いました」

俺はとうぞくの鍵を見せながら答える。

「なんと！それはとうぞくの鍵！するとお前さんは、ソフィアの……」

老人は興味深そうに、俺を観察する。

「ええ、ソフィアの息子アーベルです」

俺は、少し恥ずかしい表情で頷く。

「そうじゃったか……」

老人はしばらく考えている様子だったが、椅子に座って話しかける。

「であれば、お前さんに魔法の玉を渡さなければなるまい」

セレンは嬉しそうに答える。

「すごい！魔法の玉が出来たのね」

「いや、まだ完成はしとらん」

老人は悲しそうな様子で否定する。

「なかなか、上手くいかんので。やっぱり、後2年は必要じゃ」

「すいません。無理なお願いをして」

セレンは残念な様子でうなだれる。

テルルは心配そうな様子で俺を見つめる。

「あと2年どうするの？」と顔に書いてある。

「そうですか、残念ですね」

俺は、微笑しながら答える。

老人は、残念そうな様子を見せない俺に驚いている。

「残念といったのは、私ではなくあなたにとってのことです」  
「？」

セレンとテルルと老人の3人が不思議そうな顔で俺を見つめる。

「なんじゃと？」

「せっかくの儲け話が無くなりますからね」

俺は老人に対して同情するような顔を見せる。

「どういうことじゃ？」

「失礼しました」

俺は老人にあやまる。

「いえ、魔法の玉が出来ていないなら、関係ない話でしたな。忘れてください」

「頼む、聞かせてくれ」

老人はせかすような表情で質問する。

「まあ、聞かれて困ることはありませんが」

俺はそう前置きして、話し始めた。

俺は、キセノン商会に事前に頼まれて、老人に魔法の玉の量産化を依頼するつもりだったと。

その場合、国よりも多く研究資金を出資すること。魔法の玉の売り上げにつき一定額を老人に支払うこと。その契約書を俺が持っている事を話した。

俺は、契約書を老人に見せつける。

老人は食い入るように契約書の内容を眺めた。

「ただし、条件がありました」

俺は、老人に対して申し訳なさそうに説明する。

「私がこの目で、魔法の玉の効果を確認してからでなければ、契約することができませんから」

そういつて、俺は契約書を袋にしまい込もうとした。

「待ってくれ」

「いえ、研究のお邪魔をするわけにはいきませんから」

俺は、セレンとテルルに帰るよう促した。

老人は決意して答える。

「・・・実は、出来ておる」

「えっ」

「でもさつきは、まだだと？」

テルルは老人に質問する。

「それは、それは、・・・」

「試作品が出来たということですね？」

俺は、老人の言葉に続けて解説する。

「ただ、まだ十分な試験が終わっていないから、王に献上するわけにはいかないと」

老人はうなづく。

「そうじゃ、そうなのじゃ。魔法の玉は失敗すると危険だから、安全が確認できるまで渡せなかつたのじゃ」

そういつて老人は奥の部屋に入り、しばらくするとボーリング玉ほどの大きさの玉を机の上に置く。

「これが、魔法の玉ですか」

「そうじゃ」

テルルの質問に老人がうなづく。

「すごいです」

セレンは尊敬のまなざしで老人を見つめる。

「わかりました。これから、いざないの洞窟で試してみます」

「おぬし……」

「上手くいったら、契約しましょう。いいですね」

「……頼む」

そういつて老人は俺に魔法の玉を手渡す。

「かしこまりました」

俺は使用方法を確認してから、老人に礼をいうと、研究所を立ち去った。

「アーベル。いったいどういう事なの？」

「あの老人は「ぬけめがない」ってことさ」

「ぬけめがない？」

テルルは自分の性格のことを思いだし、複雑な表情を見せる。

俺は、自分の考えを披露した。

キセノン商会に老人の事を調べてもらったところ、王が魔法の玉の研究を始めてから、2年間は大きな爆発音がしていたが、ここ最近、音がしなくなったこと。研究を急ぐよう王の命令が届いてからも、爆発音がしなかったことから、すでに完成していると読んでいた。

「ではどうして、王に完成の報告をしなかったの？」

セレンは俺に質問する。

「完成したと、王に報告したら、研究費はどうなるのかな？」

「そうか、後2年研究費をもらうことを考えていたわけね」

「そのとおり」

「じゃあ、どうしてあらかじめ王に研究費の増額や報奨金の支払いとかの話をしなかったの？」

「それは」

俺は、テルルの方を見ながら話を続ける。

「キセノンが商売を独占したいと言い出してね」

「言わせたのは、アーベルでしょ！」

「どういうこと、テルル？」

「「平和な世の中になったら、土木工事で魔法の玉が役にたつだろう」って、お父さんに吹き込んだのよ、アーベルは」

テルルは俺をにらみつけて言い放つ。

セレンは感心したようすで俺の方を向く。

俺は、気にしないふりをして2人に声をかける。

「おしゃべりはここまです。魔物たちがお出迎えだ」

そういって、魔物の群れにキラを放った。

第20話 そして、量産化へ・・・（後書き）

ちなみに「魔法の玉」量産化のあかつきには、勇者によるラーミアを使用したバラモス城空爆計画が実施されます（嘘です）。

しかし、前回から交渉話ばかりになりました。

そろそろタイトルを「交渉魔道師アーベル」にかえなくてはいいけません（嘘）。

## 第21話 そして、ロマリアへ・・・(1)

「ねえ、アーベル？」

「なんだい、テルル」

旅の扉を目の前にして、テルルは俺に質問した。

「どうして、宝箱を開けないの？」

俺たちは、このいざないの洞窟を始め、あらゆるところの宝箱を開けていない。

「まあ、宝箱には罠があるからな」

「たしかにそうだけど」

テルルは不満そうだ。

確かに俺が勇者であれば、ためらうことなく開けていただろう。

だが勇者は2年後に冒険する。

そのときに、すべて俺たちが開けていました。では、勇者は残念がるだろう。

「それに、俺たちではこれらの宝箱は開かないし」

基本的に、勇者と盗賊しか宝箱を開けることができない。

例外はモンスターを倒したときに入手する宝箱ぐらいだ。

俺が前の世界で遊んでいたゲームと逆だなどと、養成所での講義中に考えていたものだ。

「まあ、2年後にまた会いましょうということぞ」

「仕方ないわね」

そういつて、テルルは旅の扉に入る。

俺とセレンも後に続いた。

「やはり、酔うな」

「大丈夫、アーベル？」

「大丈夫だと思うが、念のため少し休む」

俺はセレンに答えると、木を背にして少しやすんだ。

前の世界でも酔いやすかったことを思い出していた。

自動車を運転していたので、左右の揺れに対しては耐性があったが、エレベーターなどの上下の揺れには弱かった。

旅の扉による転移は上下左右の揺れがあるため、エレベーターよりもひどかった。

さすがに嘔吐感はないが、上下左右に動く違和感が残っていた。

普通の行動であれば問題ないが、この状態で戦闘をすることは自重すべきだろう。

船を入手したら、本気で揺れに慣れないといけないと思いながら起きあがった。

「にぎやかだねえ」

俺は、ロマリアに入ると感想を述べた。

前の世界の事を考えると、それほどでもないが、アリアハンに比べるとかなりにぎわっている。やはり、他国との交流があると違うということがある。

「アーベル、これから、どうするの？」

「そうだね。数日ここで戦闘して、大丈夫ならカザーブを目指すよ」

「えっ？」

「アーベル、交渉はどうするの？」

セレンとテルルは疑問を口にする。

「最近交渉ばかりして、疲れたので後にする」

「えっ！」



「冗談だが」

「ふざけないで、アーベル！」

「疲れたというのは冗談だが、交渉自体は後にする」  
そういつて俺は、自説を展開する。

俺が交渉を後回しにする理由は2つある。

ひとつめは、このまま交渉してポルトガに行くのは、戦力的に問題があるからだ。

最初から、みかわしの服を着ているとはいえ、俺のレベルはまだ8でしかない。

HPが少ないため、いきなりポルトガにいくと死亡する確率が高くなる。

二つめの理由は、ロマリア王のことだ。

ロマリア王は、2年後に勇者が冒険したときはお調子者の王様であるのだが、今のロマリア王は一つ前の王であり、その王はかなりのしっかりものらしい。

その証拠に、王の性格が「ぬけめがない」のか「きれもの」なのか「ずのうめいせき」なのか、外部のものに知られていないことからもうかがい知れる。

この王様の情報を事前に多く集めなければ、交渉を成功させることは難しい。

俺の説明にセレンとテルルは納得したので、会議を打ち切り、近くの酒場でロマリア到着記念パーティを開くことにした。

## 第22話 そして、ロマリアへ・・・(2)

「へえ。そうなのですか」

「あそのすごろく場の景品には、はがねのつるぎが用意されているのだよ」

「そうなのですか。よくご存じですね」

「知り合いと一緒に挑戦したときに、店の人から聞いたんだ」

「すごいですね。お二人で旅に出るなんて」

「まあな。さまようようにさえ気をつけたら、あとは余裕だな！」

「モンスターのことも詳しいなんて、すてきです」

「いやあ、てれるなあ」

セレンはカウンターで旅の戦士らしい男と話をしている。

セレンは人の話を聞くのが上手で、合いの手を入れるのも上手い。

戦士らしい男は、にやつきながら、セレンの顔と胸の部分を交互に眺めていた。

俺は、テルルとテーブルで食事しながら、セレンに情報収集を任せても問題ないといった。

「甘いわね、アーベル」

「どうということ?」

「みていなさい。すぐにわかるわ」

「なかなか、いい子だな」

「そんなことはないですよ」

「どうだい、嬢ちゃん。俺と一緒に・・・」

セレンは顔を近づけてくる男の言葉をさえぎり、俺たちの方を見る。

「私は、あの2人と旅していますから」

「いいじゃないか、1日ぐらい。あっちも、2人きりのほうが邪魔がはいらなくてよさそうだし」

「セレン。そろそろ帰るわよ」

セレンは、テルルの腕をくみ、つれて帰ろうとする。

「おい、待てよ！」

戦士はセレンの手を取ろうとするが、テルルが素早くかわす。

どうやらみかわしの服に加えて、ピオリムをとんでいたようだ。

俺は、支払いを済ませると、2人をつれて帰った。

戦士は残念な様子を見せたが、別な話し相手を見つけたのか、女性の武闘家に話しかけていた。

宿屋に戻ると、テルルはセレンの行動を指摘する。

「セレンはすぐ、「すてきです」とか言うからね」

テルルは、セレンのまねをする。

「でも、すごいのは本当ですから」

「はあ。天然なだけに対応が難しいわね」

テルルは、ため息をついた。

俺にもセレンの何がまずいのか、よく理解できた。

セレンは誰の話でも、素直に聞いて、よく驚き、感心し、敬意を示めす。

そのこと自体は問題ないのだが、感情を隠さないことと、セレンの魅力的な笑顔に問題がある。

耐性のない男が聞けば、ひよっとして自分に気があるのかと勘違いするのだろう。

俺も前の世界で、痛い目にあったことがある。

さらに言えば、セレン自身に自覚が無いというのも問題である。

それにしても、と俺は考える。

今日はやけに、前の世界の事を思い出すなど。

両親から離れての冒険で、寂しさが募ったのかと自問する。そうかもしれない。でも、目の前に冒険の仲間がいる。俺は少なくともひとりではない。

「どうしたの、アーベル？」

セレンは心配そうに尋ねる。

「もしかして、さっきの男にヤキモチでもやいたのかな？」

「違う」

俺はテルルのからかいを否定する。

「つまんないね」

「俺は、テルルの楽しみのために生きているわけではない」

「じゃあ、セレンのためならいいの？」

「まあ、テルルのためよりはいいかもな」

「えっ！」

「アーベル、ひどいよ〜」

テルルは大きさに悲しそうな顔をする。

「ひどいのはそっちだろ。俺が否定しているのに、無視して話を進めるから」

「それぐらいで怒るなんて、どうかと思う」

テルルは頬を膨らませて抗議する。

「怒ってないから」

ため息をついてから俺は、2人に話しかける。

「もう夜も遅い。早く寝よう」

セレンは顔を赤くして頷いている。

ひよっとして、酒でも飲んだのか。

一応この世界では、16歳になれば酒を飲んでも問題ない。ちなみに俺は、あの日から酒は飲まないことにしている。

「はいはい、おやすみ」

テルルは、心配そうにセレンを見つめる俺に、  
適当な相づちをうつ  
とそのままベッドに潜り込んだ。

### 第23話 そして、ロマリアへ・・・(3)

「やはり、そうでしたか」

「ソフィアお嬢様には、くれぐれもよろしくお伝え下さい」

「かしこまりました」

俺は、老婆に礼をいうと家を出た。

母ソフィアはロマリア出身だった。

ソフィアは父ロイズのところへ嫁いでから、実家に帰ることがなかった。祖父のことを気にしていながらも連絡が取れなかった。

そのため、俺は祖父のところを訪ねたが、屋敷は人手に渡ったというので、祖父の消息を調べたところ、母が子どもの頃の世話をしていたという老婆が見つかり、話を聞いていた。

予想通り、祖父は5年前に病気で死んでおり、ソフィア以外に親族がいないため、屋敷が国のものとなり、競売されたのだ。

俺も母ソフィアもアリアハンの国籍なので、いまさら所有権を主張するわけにもいかない。

母は、結婚するときにあきらめていたので、気にしてないとは言っていた。

俺は、セレンと一緒に宿に向かっていた。

昨日一日戦ってみて、このあたりのモンスターは、さまようよろい以外は俺たちの相手ではないことがわかった。

そのため、今日は休んで、明日北に向かうことを決めていた。

休みとなった今日、テルルは、商品を見に行くため、1人で商店街へ向かっていた。

セレンはすることがないといって、俺の祖父捜しに付き合ってくれていた。

「すてきな、お屋敷でしたね」

セレンは、祖父の家を思い出して話をしていた。

「そうだったな」

家の中に入ることは出来なかったが、それでも優雅な外観を見ただけで、かつての持ち主が、いかに資産を持っていたか一目でわかる。だが、俺には関係ない。

もちろん、祖父の資産が使えたら、冒険はもう少し楽になっていたかもしれない。

だが、それだけのことだ。

「アーベルに聞きたいことがあるの」

「なんだい」

「・・・、「ふつう」の性格って、どう思う？」

セレンは、意を決したように質問する。

セレンは自分の性格が、普通の性格と評価されたことを気にしていた。た。

俺は、そのことを知っていたが、思い詰めるほどの事だとは思っていなかった。

やっかいな問題だと俺は考えた。

ほかの性格であれば、その性格の良い部分を誉めて自信を持たせることができるだろう。

「らんぼうもの」であれば、そもそも悩むこともないだろう。

仮に悩んでいて、今の性格を変えたいと望んでいるようであれば、

装備品を持たせればいい話だ。

だが「ふつう」となれば話は別だ。  
まず、他の性格のように良い部分を誉めるという手段が使えない。  
他の性格のものが、「普通が一番」といっても慰めにはならない。

だからといって、他の性格を簡単に勧めるわけにもいかない。  
他の性格と違い、ある意味これまでの生き方を全否定することになるからだ。

「きれもの」や「ぬけめがない」などという評価は、所詮人が持つ性格の一部分でしかない。

他の性格に変わったとしても、全人格を否定することにはならない  
が、「ふつう」と思われていた人が変わるとなれば、全否定にとられかねない。

だから、別の観点からセレンを納得させる必要がある。

「セレン。ステータスシートに記載されている性格だが、本当は何のためにあるか、知っているかい？」

「たしか、能力の成長に関係するとか」

セレンは養成所の講義内容を思い出していた。

「そう。能力の成長率を数字ではなく言葉で示したものだ」  
「！」

セレンは、俺の説明に目を見張った。

「レベルアップしたときに、どの能力がどの程度上昇するかという研究は、養成所でも研究されてきた。

分類すれば、だいたい45種類くらいに分かれるという事が、明らかになった。

もともとは、数字による区分が用いられたが、成長タイプごとにあ



る程度性格が反映しているのではという俗説により、成長タイプと性格が同一視されたのだ」

俺はたたみかけるように解説する。

前の世界のたとえを使えば、血液型と性格との関係性みたいなものか。

「それじゃあ！」

「成長タイプが平均的な人が「ふつう」と記載されるだけだ」

「ほんとうなの、アーベル！」

「だいたい、職業欄の下に書いてあるだけで、どこにも性格欄とは記載されていないぞ」

「でも、アーベルだって性格と言っていたし」

「俺は、みんながそれで理解できるから、使っているだけだ。「成長タイプ欄」とみんなが言えば、俺も成長タイプ欄と言っさ」

俺は、肩をすくめて答える。

「だいたい、「おおぐらい」は性格か？」

「そうよね」

セレンは、なにか吹っ切れた感じに見えた。

俺は何とか上手くいったと思ったとき、その油断が命取りになることをすっかり忘れていた。

「ねえ、アーベル？」

セレンの真剣なまなざしに俺は、緊張感を取り戻す。

「なんだい、セレン」

「わたしのこと、どう思っているの？」

いつか、聞かれると思っていた質問だ。

普通というのが成長タイプであれば、自分はどどういう性格なのか知りたいはずだ。

きちんと答えることが出来なければ、今までの説明はすべて無駄である。

俺はまず、無難な答えを返す。

「セレンは、セレンだ」

「答えになってないよ」

まあ、これでは納得しないよな。

「セクシーギャルという性格があるのだが」

「セクシーギャル！」

セレンは顔が赤くなる。

自分自身の胸を思わず隠すしぐさをする。

「セレンはどちらかといえば、「かわいい」ということになるか」

「えっ？」

俺は、セレンの頭をなでる。

セレンは、うつむいておとなしくなっていた。

「いくぞ、テルルが待ちくたびれている頃だ」

「・・・、まって」

そういつてセレンは俺の後に付いてくる。

完璧だ、俺は思っていた。

テルルが、俺たちの後ろでニヤニヤと笑っていることに気がつくまでは。

第23話　そして、ロマリアへ・・・(3) (後書き)

今回はセレン特集にしました。

僧侶(女)という、本来であれば序盤から癒し系(魔法的な)のアイドルともいえる存在となるはずなのに、みかわしの服の存在により、影が薄いです。

## 第24話 そして、民間療法（嘘）へ・・・

「さすがに、ダメージは厳しいか」

「はい、ホイミ」

「ありがとう。セレン」

「どういたしまして」

カザーブへむかう俺たちは、少し苦戦していた。

ロマリアまでは、ほとんどダメージを受けなかった戦闘でも、北上していくうちにモンスターたちも手強くなっていた。

セレンは、戦闘が終わることにホイミをかけてくれる。

俺のHPが少ないからだ。

一応、薬草も持っているし、いざとなればキメラの翼で、ロマリアに逃げ帰ることが出来る。

俺たちは、なるべく死なないよう慎重に行動している。

教会で生き返るとはいえ、わざわざ死ぬつもりはない。

それに、全滅した場合、面倒なことになる。

冒険者の登録をしていれば、全滅した場合に、全滅情報がリーダーの酒場に知らされる。

その情報は、各街の掲示板に張り出され、腕のある冒険者が回収に向かうのだ。

回収に成功した冒険者は、全滅したパーティの所持金の半分と、冒険者のお金を預かるゴールド銀行が運用した利益の一部を受け取ることが出来る。

冒険者は、この利益とパーティを救ったという実績を得るために、専属で活動するものもいる。

ところが、いつ回収されるかが不明なのだ。  
気がついたら、勇者がバラモスを倒していました。では、意味がない。  
それに、魔物に骨までしゃぶられていたら復活出来ない可能性がある。  
る。

テルルは、俺とセレンの様子を見て不満そうだ。

「わたしも、呪文がつかえたらなあ」

「「おおごえ」が使えるようになれば、十分だよ」

この呪文があれば、どこでも商人を呼ぶことが出来る予定だ。  
完成すれば、安心して冒険が出来るのだ。

キセノン商会と俺の母ソフィアが開発中の呪文であり、習得予定レ  
ベルに達したとしても、

試作段階のため、テルルしか使用できないし、呼べる商人も、キセ  
ノン商会に所属する商人に限られているが。

だが、テルルは俺の慰めにも納得できない様子であった。

確かに、今使えるわけでもないし、セレンよりもMPが多い現状は  
もったいないともいえる。

「キラービーか」

俺はすかさずヒヤドを唱える。

キラービーは凍りつき、地面に墜ちる。

キラービーは麻痺攻撃を持っているため、素早く倒す必要がある。

麻痺すると、戦闘中は自然回復しないため、戦闘に参加できないば  
かりか、全員が麻痺すると全滅してしまう。

特に、3人パーティだと、危険性が高くなる。

「！」  
残っていた、キラビーが俺に攻撃し、しっぽについている針が俺の腕に突き刺さる。

ダメージは、それほどでもなかったが、体の動きが鈍くなる。俺の異変に気付いた2人は、素早く残ったキラビーを片づけると、心配そうに俺に駆けつける。

「麻痺のようね」

「・・・」

しゃべれないし、うなずけなかったが、俺の様子でセレンは理解してくれた。

「それじゃあ、これを」

セレンは「まんげつそう」と呼ばれる草を手にして、俺に飲ませようとする。

「セレン。ちょっとまって」

テルルは、セレンを押しとどめる。

「その前に、試したいことがあったのよ」

テルルは、休んでいる俺の目の前に立つ。

「本当に動かないのかしら？」

テルルは俺を馬乗りにして、にこやかに話しかける。

やばい、身の危険を感じる。

しかし、体は全く動かない。

セレンは心配そうに俺を見つめるが、助ける様子は見せない。

「確かめてあげる」

テルルは、両手を俺の脇腹に当てて、くすぐりを開始する。

「！」

俺は強いこそばゆさを感じて体を動かそうとするが、動かない。

かといって、抗議の声を上げることすらできない。

出来ることと言えば、抗議と怒りの思いを、気配で示すことだけだ。

「テルル、やめて！」

セレンは、俺の発する気が、殺意に変化する前にテルルに指摘する。

「ごめんね、アーベル」

そういつてテルルは起きあがると、俺に謝る。

「大丈夫、アーベル？」

セレンは俺に、まんげつそつを食べさせながら心配そつに声をかける。

「・・・ああ、たすかったよ、セレン」

俺は礼を言つと、テルルをにらみつける。

今の俺なら、呪文を使わなくても、視線だけでテルルを氷づけに出来そうだ。

「ごめんね、アーベル。確かめたかったの。民間療法として、くすぐると回復すると書かれていたから」

「伝承は、嘘だったわけだが」

「だから、ごめんつて」

テルルはあやまったが、あまり反省の色はないようだ。

民間伝承という話も本当かどうか怪しいが、確かめるすべもない。

「・・・まあ、それならば仕方ないですね」

俺は、努めて冷静に答える。

テルルとセレンは、ほつとする。

カザーブへの旅を再開する。

「・・・」

「実は、俺も民間療法を知っているんだ」  
俺は、麻痺しているテルルの前で嬉しそうに話しかける。  
テルルの表情に変化がないが、おそらく麻痺だけでなく恐怖と後悔  
が全身を駆けめぐっているだろう。

さすがに、事前告知なしの民間療法による治療法を行うほど、俺は  
鬼畜ではないので、まんげつそうでテルルを回復した。  
また、カザーブの村が見えるところでテルルのまねをすれば、犯罪  
者として衛兵に捕まることも、理解していた。



第24話 そして、民間療法（嘘）へ・・・（後書き）

安易な民間療法は危険ですね。

私知っているのは、確実にしゃっくりを止める方法ですが、あまり人前で見せる方法ではありません。

## 第25話　そして、この世界での通貨及び経済の考察へ・・・

「これでよし」

俺のヒヤドで「ぐんたいガニ」と呼ばれるカニ状のモンスターが倒れる。

俺たちは、カザーブ周辺で経験値稼ぎをしている。

目標は、俺が全体攻撃魔法「イオ」の習得LVであるLV11まで稼ぐつもりだ。

モンスターは倒されると、小さな金色の金属製の物体を落とす。

この物体は、モンスターを生成するために必要な触媒と考えられており、魔王の邪悪な力によって生命が与えられたと考えられている。

だが、一度モンスターが死ぬと、モンスターによる「ザオリク（僧侶が使う同名呪文とは異なる）」を使用しない限り、その場で復活することができない。

しかも、一度人の手に触れると、直接魔王が触れないかぎり、二度とモンスターには戻れない。

やがてこの物体の性質と希少性から、通貨「ゴールド」として流通するようになる。

ゴールドを回収しながら、俺は世界が平和になったら、現行の経済がどうなるのか考えていた。

基本的にモンスターがいるかぎり、ゴールドの流通量が増加する。

流通量が増加することで、相対的にゴールドの価値が下がる。

単純に考えれば、インフレ状態になるだろう。

現に、ゴールドの流通量が少ないアリアハンの宿屋より、ゴールドの流通量が多いカザールの宿屋のほうが2倍ゴールドが必要になる。世界が平和になり、モンスターがいなくなればどうだろうか。

平和になることで、人口が増え消費が増大することで必要となる通貨量が増える。

一方で、モンスターがいなくなり、通貨の全体量が変化しないため、相対的にゴールドの価値があがる。その結果、デフレ状態になるだろう。

デフレ状態により、資産価値が下がると、・・・

「アーベル！」

テルルが思いつきり背中をたたく。

「いてっ！」

俺はテルルをにらみつける。

「また、考えごと？」

テルルはあきれたように答える。

「何度も呼んだのに反応がないから、たたいたのよ。こんなところで死にたくないでしょ」

思わず考えすぎたようだ。

「すまん。気をつけるよ」

「わかればいいのよ。わかれば」

テルルはため息をついた。

俺たちは、次の獲物を探していた。

イオを覚えた日の夜、俺たちはカザールの宿屋で話をしていた。

「ところで、これからどうするの？」

「アッサラームに向かうつもりだ」

「そう、アッサラームね。って、どこ？」

テルルは問いかける。

「ロマリアの東がわにある町だ」

「そうなの」

「しらなかつた」

テルルもセレンも知らないようだ。

そう。アッサラームの町の情報は、カザーブの北にあるノアニールで聞くことができる。

俺は、前の世界での知識をもとにして話しているのだ。

「どんな町なの」

「たしか」

俺は、あの町にいる商人達のことを思い出し、にやりと笑みを浮かべる。

「楽しそうな町のようにね？」

「そうなの。早く行きたいな」

やばい。勘違いされた。

「べ、別にベリーダンスのことを考えたわけじゃないぞ」

俺はあわてて否定する。

「ベリーダンス？」

「なんのこと？」

セレンとテルルは質問してくる。

失敗した。墓穴をほつたらしい。

「いや、俺もくわしくは知らないが、聞いた話ではおもしろいらしい。ただ、俺は興味がないが、説明するときの男のおおがおもしろ

「かったので、つい」

「そうなの」

「なにか、あやし〜」

セレンは素直に納得してくれたが、テルルは怪しんでいる。

カンが鋭すぎるぞ、テルル。

「まあ、東方は手強いモンスターがいるらしいから、気をつけないとね」

「そうね」

「じゃあ、今日はこのあたりで寝ますか」

俺たちは、明日に備えて寝ることにした。

布団のなかで、数日前に考えたデフレについて頭の中で考えをまとめていた。

通貨の不足によるデフレは、通貨をさらに貯める事につながり、デフレを加速することになる。

この結果、消費が冷え込み、売上げが伸び悩み、価格競争が始まる。

価格競争により犠牲になるのは、賃金がほとんどであることから、さらなる消費の落ち込みによるデフレスパイラルが発生することになる。

解決するための手段として、紙幣の発行を考えるか？

平和になり、人口が増加し消費が拡大することになることを前提にして、国が保証する紙幣を発行すればいい。

キセノン商会も、将来のことを考えれば納得するだろう。

逆に、キセノン商会に金融部門を創設させれば、キセノン商会も盤石になるだろう。

もしくは、俺が金融部門を設立してもいい。

そうなれば、ゴールド銀行の経営を調べる必要があるな。  
今後、忙しくなるだろう。

「なに、ぶつくさ言ってるの。眠れないわよ」

「ああ、ごめん」

そういって、俺は目を閉じた。

第25話　そして、この世界での通貨及び経済の考察へ・・・（後書き）

私は経済学も詳しくありませんので、間違っただけでも、あたたかい目で見守ってください。

次回は、アツサラームの予定です。

アツサラームと言えば、あのイベントですね。

当然、入れる予定にしております。

とはいえ、R - 18やR - 15にならないよう、気をつけますが。

とはいえ、FC版世代ならすでに、30代こ・・・。

すみません、なんでもありません。

第26話 そして、アッサラームへ・・・(前書き)

これなら、PG-12にも引つかからないとおもいます。



## 第26話　そして、アツサラームへ・・・

「くらく、くらく」

俺はアツサラームの宿にある共同浴場で旅の疲れを癒していた。

俺はひとりで湯船につかりながら、今日一日の旅程を思い出す。

全体攻撃魔法イオを覚えた俺は、予定通り、ロマリアまでキメラの翼で飛んでから、ロマリアの東方にある、アツサラームの町を目指した。

モンスターに襲われないよう慎重に歩みを進めていたのが幸いし、強敵と出会うことなくアツサラームに到着した。

アツサラームの町は、多くの商売人であふれていた。だが、あこぎな商人も多く、法外な値段で武器を売りつける奴らに、テルルはうんざりしていた。

「おお！わたしのともだち！お待ちしておりました。売っているものをみますか？」

商人にとって、定価の1.6倍で買ってくれる客は、ぜひ友達になってほしい相手だ。

セレンは、ためらいがちにホーリーランスの値段を尋ねる。

「おお、お目が高い！36,800ゴールドですがお買いになりますよね」

それだけの金があれば、勇者が装備できる最強の剣が買える。

「おお、お客さんとても面白い物上手。わたし、まいってしまいます」  
そういつて、商人は18,400ゴールドにまけるといいだす。  
確かに、アツサラームの宿代7年分をまけさせること自体は、面白い物上手かもしれない。

「おお、これ以上まけるとわたし大損します！でも、あなたともだち」

今度は9,200ゴールドにするといいだす。  
最初の提示価格で売れることを考えたら確かに大損だ。だが、定価の4倍の金額で買う人間がいるのか？

「おお、あなたひどいひと！私に首をつれといいますか？」

商人は最後には4,600ゴールドとまで言い出す。  
定価の倍で売らなければ死んでしまうという商売なら、商売の方法について本当に一度、見直したほうがいいだろう。  
商人でない俺でも、それぐらいのことは考える。

とはいえ、冒険者のように、他の町に行き来をして比較できるのであればわかる事実だが、普通の街の人に、それがわかるとは限らない。

だから、知らずに買う人もいるかもしれない。  
だが、俺たちは他の街からきた冒険者だ。

俺も最初の頃はテルルと同様、うんざりしていたが、途中から「これはネタだ」などと考えることにすると、下らなすぎるネタとして、逆におもしろく感じてしまった。

そんな俺の様子をみた、セレンは思わず吹き出し、テルルはやれや

れといった表情で俺と商人を一瞥する。

俺たちは帰ろうとすると、商人から声をかけられる。

「そうですね、ざんねんです。きつとまた来てくださいね」

ネタが聞きたくなつた時に寄るようにしよう。だから、新しいネタを考えておいてくれ。

結局、俺たちは夜中だけ開いているという、別の店で鉄の斧を購入した（もちろん定価で）。

買い物に疲れた俺は、先に休むと言って宿に戻ろうとしたが、セレンとテルルは別のところに行きたいらしい。

「ベリーダンスを見に行くの」

「ああ、そうか」

「アーベルは見にいかないの？」

「別に行くつもりはない」

「本当？」

「たしか、行きたいと目を輝かせていつてなかった？」

セレンは俺の答えに疑問符をつけ、テルルなどは事実をねつ造している。

「そんなことはいつていない。楽しみにしていたのは、ここの商人の話し方だ」

「はいはい、わかりました。わかりました」

俺の正直な感想に対して、テルルはニヤニヤしながら答える。

商売相手には、絶対してはいけない対応だ。

俺はテルルの商売相手で無いことを残念に思う。

結局、セレンとテルルはベリーダンスを見にいつて、俺はゆっくりと共同浴場で湯船につかることとなった。

浴場があつて本当にたすかった。

この世界では、毎日の入浴は一般的ではない。アリアハンも基本的に、水を含ませた布で体を拭くことが一般的だった。

俺の母ソフィアはきれい好きだったことと、宮廷魔術師の収入の多さからキチンとした浴室を作つて俺と毎日入つていた。

父ロイズはそれほどきれい好きではなかったので、簡単に体を拭き、汚れを洗い流すだけだった。

俺は転生したてのころ、母親と一緒に入るのに抵抗をした。

だが、俺がまだ5歳であること。

そして、川に溺れて死にかけたこと（川と風呂は別だという俺の抗議は無視された）から俺は無理やりに、母親と一緒に入ることになった。

「おかあさんと一緒に入るのはいや？」

ソフィアは、視線をあわせない俺に質問する。

「ちがうよ」

「じゃあ、こつちを向いて」

ソフィアは俺の両肩を捕まえて、正面に向けさせる。

自然とソフィアの体に向き合うことになる。

ソフィアは美人であり、転生前の俺よりも年は若い。

俺の心はかなり動揺しているが、体は5歳なので何も反応していない。

俺は体が反応しない幸運に感謝しながら、仕方がないとあきらめた。

結局ソフィアと一緒に風呂に入ったのは、11歳のときまでだった。

「さて、いい湯だったな」

俺は、頭に乗せていたタオルを手に取り、湯船を出た。

「ここのお風呂、男女混浴だって。いやーね」

「まあ、身につけるものがあるから、って」

2人の少女と視線が合う。

「イヤー!!!」

「キヤー!!!」

少女達が声を上げる。

よくみると、セレンとテルルだ。

「混浴だろう。そこまで、騒ぐことはないだろう」

「服を着なさい。服を!」

テルルは赤くなりながら、全裸の俺に指摘する。

テルルやセレンは、フィットネスインナーのようなものを身につけている。

俺は、テルルの指示に従い、服を着る。

「まったく、何も着ないなんて、何を考えているの」

「家の風呂ではこんなかんじだぞ」

「家と浴場は違うでしょう!」

俺は日本の浴場のことを考えて反論しようとしたがやめた。

「次からは気をつけるよ」

「次があると思っっているの!」

テルルは語気を強める。

「おい、湯船につからないなんて、不衛生にもほどがあるぞ」

「家にもどればいいじゃない」

「遠足じゃないんだから、毎日家に帰るといっ話とは違うだろう」。

それに毎日カメラの翼やルーラをつかうのは、贅沢すぎる「俺はテルルをなんとかだめ、毎日実家に帰るといふ罰ゲームから逃れることが出来た。」

第26話　そして、アツサラームへ・・・（後書き）

入浴時の服装はドラクエ9を準用しました。

えっ、「ぱふぱふ」？

それは、火力発電のことですか？（ちがうよ）

## 第27話 そして、修行へ・・・

「よし、北に行こう」

俺は、セレンとテルルに提案した。

俺たちは、ロマリアの北にあるカザーブの村にある酒場にいた。俺が、移動魔法であるルーラを覚えた事で、テルルはせっかくだから使ってみようということになった。

テルルはアツサラームの宿屋にはあまり泊まりたくはないようだった。宿屋としては快適だと俺は思うのだが。

俺は、次の目的地を考えて、カザーブの村に飛んでいた。

「ノアニールの村ね」

「まあ、村に行くというよりは、修行のためなのだが」

俺は、テルルの質問に答える。

「修行？」

「そう、北には修行に最適な場所がある」

「どんなところ？」

セレンが興味深そうに尋ねる。

「まあ、いってみてのおたのしみということだ」

「いじわる〜」

テルルは頬を膨らませた。

テルルの表情は、かなり、かわいかったが、テルルの期待には応えない。

「話すと長くなるのでね。明日は長旅だ。ゆっくり休もう」

「はい」



「わかったわよ」  
セレンとテルルは返事をして宿に帰ることにした。  
酒場には、酔いつぶれた男の魔法使いと、それをたたき起こそうとする女の武闘家がいた。

俺たちは、カザーブを北上して、しばらくするとノアニールと呼ばれる村に到着した。  
全体攻撃魔法イオを覚えた俺は問題なく到着できた。

村はルーラを登録できる場所があったが、周囲に人はいなかった。  
「ルーラの登録は各自で行うこと」との掲示板の説明に従い、俺たちは登録をすませた。

登録をすませると、俺は言った。

「よし、西にいこう」

「え、街に入らないの？」

驚いたテルルは、思わず問いたです。

「なぜ？」

「アーベル。情報収集はしないの？」

「なぜ？」

「「なぜ？」じゃないでしょう！冒険の基本よ」

テルルは、怒りながら問いたです。

「情報収集をせずに、どうやって旅をつづけるの!」  
「あれを見て、どうやって情報収集をするというのだ」  
俺は、街の入り口に立つ若者を指し示す。

「普通にはなしかければ・・・、えっ」  
反論しかけたテルルは違和感に気がついて驚きの声をあげる。

俺が指さした若者は、立ったまま動かない。そして、耳を澄ますと、いびきが聞こえる。

「どういうこと、アーベル」

セレンは俺に質問する。

「わからないが」

俺は村人達が寝ている理由は知っているが、どのような魔法を使ったのかはわからない。

俺は嘘は言っていないが、確実に誤解をされる説明をする。

「下手にかかわって、同じようになるのは嫌だね」

「たしかに」

「そうね」

セレンとテルルは頷く。

「そういうことだ、目的地に行こう」

俺は西を指し、あるきはじめた。

俺は、どうして村人が寝ているのか知っている。

解決方法もわかっている。

しかし、解決するためには洞窟で宝箱を開ける必要がある。

勇者や盗賊でない俺たちでも、宝箱を開けることができるかもしれないが、自分がする必要もない。

村が戻れば、店での買物が出るが、必ず必要なものでもない。

俺は、時間の無駄と判断して、旅を続けることにした。

「ようやくみつけた」

俺は、喜びの声をあげる。

俺たちはノアニールの西にある洞窟の地下2階にいた。

目の前にある床は、洞窟の中の状況として、明らかに異質であった。4本の柱の中央に、円形の魔法陣が描かれている。円の外周から真上に光の柱が天井まで伸びていた。

「これはなに？」

「入ってみてのおたのしみ」

俺は、テルルの質問に答えると、魔法陣の中に進入する。すると俺は光に包まれた。

「！」

俺は、一瞬違和感を覚えたが、何も感覚はなくいつの間にか体の状態が回復した。

「大丈夫、アーベル？」

セレンは心配そうに見つめる。

「大丈夫さ。やっぱり全快したな」

俺は、ステータスシートを眺めながらセレンの質問に答える。

「本当だ」

「すごい」

テルルとセレンはこわごわと、魔法陣に入ったが全快した体を見て納得した。

「さあ、修行の開始だ」

「うん」

「わかったわ」

俺たちは、回復魔法ホイミの上位魔法ベホイミと炎の魔法ギラの上位魔法ベギラマを覚えるまで、魔法陣の周辺を拠点として、修行を開始した。

「ねえ、起きて。アーベル」

「起きてよ、アーベル」

夜更かしのしすぎでうたた寝でもしたのか。

俺はそう思っただけ、目を覚ます。

「！」

体全体に激痛が走る。

「ベホイミ」

セレンが呪文を唱えると、みるみる体の痛みが取れた。

「大丈夫？」

「ああ、なんとかな」

俺は起きあがり、セレンに礼を言う。

「ありがとう、セレン」

「いいのよ、私の仕事だから」

セレンは照れながら答える。

照れるところか、と俺は疑問に思ったが答えは得られないだろう。

テルルがセレンに苦言をいう。

「セレン。すぐ近くに、全快出来る場所があるのに、アーベルに呪文を使わなくてもいいじゃないの？」

「でも、瀕死だったし」

「それに、アーベルはHPが低いからホイミで十分でしょホイミで」

「いや、HPが50超えたので、ホイミじゃ無理だろ」

俺は、セレンをかばうように答える。

「それに、敵に眠らされて怪我をした俺が悪い」

俺は、眠らされた相手である、きのこ型のモンスターを思い出した。

「いいわねえ、セレン。アーベルがやさしくて」

セレンは顔を赤くする。

「ぼやくな、テルル」

「ぼやいてないわよ！」

「前衛として、俺をいつも守っているテルルにも感謝しているよ」

「なによ、急に」

急にテルルの顔も赤くなる。

「回復するわよ、セレン、アーベル」

テルルは、近くにある魔法陣へと向かいだした。

第27話　そして、修行へ……（後書き）

ノアニールの村は飛ばします。

ノアニールが復興すると、「はがねの剣」「魔道士の杖」「みかわしの服」が購入できますが、

「はがねの剣」は3人も持てませんし、

「魔道士の杖」を装備したアーベルの攻撃力は期待できませんし、

「みかわしの服」はすでに装備しています。

展開を急いだ訳ではありません。

## 第28話　そして、一時帰郷へ・・・

修行を終えた俺たちは、久しぶりに、アリアハンに戻った。  
明日、再出発ということでパーティを解散し一日ゆっくり過ごすこ  
とにした。

俺は自宅に帰ると、今後の方針を考えることにした。  
ちなみに俺たちのステータスシートはこんな状況だ。

テルル

商人

ぬけめがない

せいべつ：おんな

LV：15

ちから：32

すばやさ：31

たいりよく：45

かしこさ：28

うんのよさ：21

最大HP：89

最大MP：57

攻撃力：58

防御力：61

EX：8 / 853

チェーンクロス、みかわしの服、うるこの盾、毛皮のフード

セレン

僧侶

ふつう

せいべつ：おんな

LV : 14

ちから : 32

すばやさ : 26

たいりよく : 41

かしこさ : 30

うんのよさ : 43

最大HP : 80

最大MP : 59

攻撃力 : 58

防御力 : 50

EX : 8, 853

鉄の槍、みかわしの服、うろこの盾、皮の帽子

アーベル

魔法使い

きれもの

せいべつ : おとこ

LV : 14

ちから : 14

すばやさ : 26

たいりよく : 26

かしこさ : 54

うんのよさ : 46

最大HP : 51

最大MP : 108

攻撃力 : 22

防御力 : 40

EX : 8, 853

ブロンズナイフ、みかわしの服、おなべのフタ、皮の帽子



ちなみにテルルの武器はグループ攻撃用の装備であり、1匹を相手にする場合は鉄の斧を使用する。

「やはり、4人目が必要か」  
俺はひとりつぶやく。

このパーティは物理攻撃役、回復役、攻撃魔法役がそろっている。バランスとしては問題ないこのパーティが抱えている弱点は、俺のHPの少なさにある。

俺は、敵からの連続攻撃を受ければ、すぐに死んでしまう。  
そして、全体攻撃を持たないパーティは全滅するだろう。

たとえ、俺抜きでモンスターを倒せたとしても、洞窟の中で俺が死亡していたら、迷宮脱出呪文リミットが使えないため、全滅する可能性が高くなる。

回避するための手段は、単純に強くなることや、集中攻撃を無くすようにすることぐらいしかない。

俺が強くなるために、経験を稼ぐのは問題ないが、時間をかけすぎるわけにはいかない。

俺たちが旅立った表向き理由はロマリア、ポルトガとの交渉だ。  
遅くとも、勇者の出発までには解決する必要がある。

集中攻撃を回避するための手段として、4人目の仲間を加える方法がある。

こちらの問題点として、誰を加えるかという問題点がある。  
正直、新たな仲間は盾役程度しか期待はしていないので、HPの高い戦士がいればいい。

しかし、アリアハンには必要な人材もいなかった。

すでに、王国の兵士として就職しているか、他の仲間と組んで冒険

を始めているのだ。  
結局いままでどおり3人で旅をして、よい人材がいればスカウトしよう。

いろいろと考え事をしているうちに、両親が城から帰ってきた。

我が家での夕食での会話はいつも、ソフィアが俺に質問する形で行われていた。

俺が冒険に出発してからは、ソフィアの最初の質問はいつも、パーティの所持金や装備品の価格についてのことだった。  
父親のロイズは黙々と食事を続けていた。

「ロマリアはどうだったの？」

「おじいさんは、亡くなっていたよ」

「そう」

俺の答えを予想していたのか、ソフィアは自分の父親の訃報にも表情を変えることはなかった。

「毎年のように、冒険者を通じて手紙が来ていたけど、5年前からいつさい送ってこなかったからね。覚悟はしていたわ」

それでも、昔の事を思い出したのかどこか遠くを見るような目をしていた。

俺は話題を変えるため、勇者の事を質問する。

「呪文の効果はどうだった」

「ばっちりよ」

「それはよかった」

俺はソフィアにある呪文の作成を依頼していた。

「おもいだす」に「おおごえ」の呪文を組み合わせた内容である。

とりあえず「しゃべりだす」という呪文名（仮称）を俺と母親はつけていた。

これにより、勇者が深く心に刻んだ言葉をしゃべる事ができるようになった。

厳密に言えば、再生機のスピーカーのようなものだが。

これにより、「勇者はしゃべれない」ことを隠すことが可能となった。

当然、しゃべれる言葉の数は限られてしまつが、効果的に使うことができるだろう。

「アーベルにお願いがあるの」

「なに？」

「勇者があなたの声を使いたいそうよ」

「・・・、わかつた」

今後、俺も交渉の場に出る予定だったのでどうかと思つたが、兄弟などは声が似ていることもある。

問題ないと判断し、勇者の出発までに何を覚えさせるか考えることにした。

「しゃべりだす」の呪文で覚える言葉は、なるべく少ない方がいいだろう。

32個まで覚えることができるが、父親であるオルテガの言葉を忘れさせる訳にはいかないだろう。

翌日、ルイーダの酒場で3人が集まつた。

魔法の玉の量産化についてのキセノンへの話は、キセノンの娘であるテルルに任せている。

俺が直接キセノンにあっていたら、いろいろと頼まれごとをされそうで困ると判断したからだ。

借りていた10,000G（装備代を含む）を返すまでは、頼まれごとを断りにくい状況もあるからだ。もともと俺は小心者なので、借りた金を返さないままというのは情的によくないのだ。

俺たちはキメラの翼で、アッサラームへ移動する。

アッサラームの西にあるイシスの城下町を目指して。

第28話　そして、一時帰郷へ・・・（後書き）

需要があるかどうかわかりませんが、現時点でのステータスを表示しました。

冒険開始時のステータスがでないのは、ただのうっかりミスではないはずです。

ないはずです。

## 第29話 そして、イシスへ・・・

「あつい」

「あついですね」

「・・・」

何回目のやりとりだろうか。

無限ループの恐ろしさを少し味わった気分だ。

俺たちは、砂漠を歩いている。

目指す場所はイシス。

砂漠の中にある城下町だ。

この町で装備を整え、もう少し経験値をためてから、ロマリアとポルトガとの交渉を行う予定であった。

それにしてもとおもう。

「みかわしの服で正解だったな」

「そうね、アーベル。見直したわ」

「ありがとう、テルル」

俺は見直したという言葉に対して、評価を落とした覚えがない事を指摘しようと思ったが、やめた。

相手が俺のことをどう思っているかわからない。

まあ、今は素直に喜ぼう。

鉄の鎧やくさりかたびらなどを身につけた日には、ゆであがることだろう。

ゲームでは関係なかった要素が、現実の世界では十分に影響を及ぼすのだ。

「焼いたら食べられるかな？」

「父さんは、うまくないと言っていたけど」

「そうか、残念だ」

地獄のハサミと呼ばれるカニのモンスターをベギラマで倒した俺は、セレンに質問していた。

セレンは父親からもらった本を読みながら確認している。

ちなみにセレンの父親は、元冒険者で、いろいろなモンスターを倒しては食べられるかどうかを自分の舌で確かめていた。

セレンの父親は「モンスターを食す」という著書を書き記し、冒険者ギルドの刊行物としては異例のロングセラーとなっていた。

セレンの家族は印税収入だけでもある程度裕福な暮らしができたが、セレンの父親は冒険者を引退してから、剣術の講師として後進の指導にあたっていた。

ちなみに、セレンが持っている「モンスターを食す」を読んでも「おおぐらい」にはならないようだ。

セレンが残念がったことは秘密だ。

前の世界での俺はカニが大好物であったが、セレンの言葉を聞いて食べるのをあきらめることにする。

前の世界の常識が、すべて通用するとは思っていなかった。

カニ料理はあきらめて旅を続けることにする。

最短距離を進めば、日が暮れる前にイシスに到着するはずである。方向を間違えないように、気をつけながら俺たちは砂漠を越えていった。

「うっ、冷たい！」

「おいしいですね」  
「・・・」

イシスの井戸水を飲んだ俺たちの感想である。

「ごくりは感想ではないでしょう！」  
テルルの指摘に反論する。

「そうかもしれない。でも、ちがうかもしれない」  
「なに、ソクラスみたいなことをいつているの」

ソクラスとは、この町にすむ哲学者のことだ。

彼とは一度、ソリテスパラドックスについて質問をしたかった。  
しかし、下手に質問すると半日ぐらい彼と議論しなければならぬ  
という、大変親切な町の人の忠告により実行されていない。

「この冒険が終わったら、」  
「な、なにを言っているの、アーベル」  
俺は声にだすつもりなどなかったのだが、テルルの強い指摘に我に  
かえる。

「いや、ただのひとりごとなのだが、まずかったのか」  
俺はテルルに質問する。

「ば、ばか。ひとがいるところで、恥ずかしいことを言わないの！」  
「何を怒っているのだテルル。それに、ソクラスと話をすることが  
そんなに恥ずかしいことなのか」  
「え！ちがうの？」  
テルルは何か勘違いをしたらしい。

なにを勘違いしたのかテルルに問いたただそうとおもったが、テルル  
の真つ赤な表情から答えは返ってこないと確信してあきらめた。  
「いまのは、アーベルが悪いです」



セレンはアーベルに指摘した。

「え？俺のせい」

「そうです」

セレンは珍しく断言すると、防具屋に向けて歩き出した。  
俺とテルルはセレンの後をついていった。

第29話　そして、イシスへ・・・（後書き）

見知らぬ草木やモンスターは、決して食べないようにしましょう。

第30話　そして、精算へ・・・（前書き）

少し長いですが、この話で第2章が終了するのでまとめて投稿しました。

### 第30話 そして、精算へ・・・

俺たちは再びノアニールの西にある洞窟にいた。

防具を強化した俺たちは、集中攻撃にさえ注意すれば、ここで全滅することはないだろう。

俺が唱える炎の呪文「ベギラマ」は強力であり、決まればほとんどのモンスターは倒される。

一部効かないモンスターは、テルルとセレンの打撃攻撃でしとめられる。

俺たちの魔力が尽きれば、魔法陣に戻ればすむ。

魔法陣の力で、俺たちのHP、MPが瞬時に完全回復するからだ。

いまのところ、魔法陣の力は尽きることがない。

俺が、火の呪文「メラミ」を覚えるまで訓練をつづける。

そこまで訓練すれば、もう一つの目的を果たすことができるだろう。借りた金を返すことだ。

俺はキセノン商会から10,000Gの大金を借り、装備を整えた。俺たちが快適な旅を送ることが出来た原因でもあるが、借りた金は返す必要がある。

ちなみに、利息は最初の1ヶ月までは無利息で、1ヶ月ごとに1割の利息が加算される。

複利計算ではないとはいえ、前の世界の金利に比べれば高いと思われるかもしれないが、俺には担保がないのだ。

戦力として、体で返すことしかできない。

このような相手に10,000Gを貸すこと自体大きなリスクがあるのだ。

当然リスクに伴うリターンも過大になるというものだ。

「さて」

俺は、テルルとセレンに声をかける。

目標がすでに達したことを報告し、帰還呪文「リレミト」を唱える。  
俺たちは、すでに親しみを覚えたこの場所から離れることにした。

「さて、どうしようか」

「どうするの」

「いただきます」

「ちよつとまで」

俺は、テルルがテーブルに置いてある種をつかもつとする手を、つかんで止めた。

俺たちは、アリアハンにあるルイーダの酒場で話をしていた。

ここで話しているのは、獲得した種の分配についてであった。

洞窟の中でモンスターが落とした種がある。

かしこさの種が1個と、ラックの種が3個だ。

戦ったモンスターの数と落とした種の個数、そして、種を落とす確率を考えると、俺たちのリアルラックは、ふつうかもしれない。

さて、この4個の種、食べるとその名称のステータスが上昇する貴重なアイテムである。

どのように使用するか、慎重に決める必要がある。

冗談であるとはいえ、お酒のおつまみの感覚で食べるものではないのだ。

分配方法にはいろいろな考え方があある。

恐らくパーティの数ほどあるだろう。

均等に分ける方法。パーティの弱点の強化を補う方法。リーダー1

人に集中投入する方法。などなど。

今回は、パーティの戦力強化の観点から種を使用することで、3人の意見は一致した。

まずは、かしこさの種であるが、僧侶のセレンが使用することになった。

俺のMPは120を越えており、セレンのMPに比べると50ほど違いがある。かしこさの値はMPの値に影響を及ぼすのでセレンのMP増加のために使用することにした。

ちなみに、ステータスの「かしこさ」と、頭の良さとは関係がないらしい。

「わたしも欲しいな」

「普段、使わないだろう」

テルルがMPを消費して使う呪文は1つしかない。

しかも、用途が限定されている。

「残念、結構おいしそうだったのに」

味で選ぶな、味で。

「食べ物価値は、味で決まるでしょ！味で」

「残りは、ラックの種だが」

ラックの種は、運の良さがあがる。

このドラクエ3の世界での運の良さがどのような効果をもたらすのかは、あまりはつきりしていない。

現在のところ明らかになっているのは、アイテムドロップ率には影響をしないこと、闘技場の的中率には関係しないこと、敵からの攻撃補助呪文等からの回避率に影響すること程度だ。

「かなりわかっているじゃない」

「いや、攻撃の回避率や、会心の一撃の発生確率、逃走成功確率、デートの成功率、すごろく場における落とし穴の発生確率・・・」

「はいはい、アーベル。わかりました。わかりました」

俺が解説モードに移行したのを確認したのか、テルルはあわてて止めるに入る。

俺も、話を先に進めるために、ラックの種の分配提案をおこなった。

「わたしに、全部なの？」

「ああ、そうだ。遠慮することはない」

「なんか、ふくぎつな気分」

テルルは正直な気持ちを示した。

俺は、ラックの種の分配方法は、弱点を補強する意味合いで分配した。

集中して分配されるということは、運の良さが低いということだ。

事実、俺とセレンの運の良さは50代であり、テルルの20代と比べると差が大きいのだ。

「わかつてはいたけれど」

テルルは、しかたがないという表情をしながら、ラックの種を食べ始めた。

「ひさしぶりだな、アーベル」

「・・・、久しぶりです」

俺は、キセノン商会の来賓室にいた。

キセノンに金を返すためだ。

普通であれば、お金を渡せば済むのだが、キセノンは俺を来賓室に招いた。

なにか俺に、依頼をするつもりなのか。

「まさか、利息を受けることなく全額返すとは思わなかったぞ」

「順調にいきましたから」

俺自身驚いていた。俺も、最初の1回分ぐらいは利息を払うつもり

でいた。

「本音をいえば、毎月利子を受けたかったがな」

「そうでしょうね」

1年かからずに、元手が帰ってくるならこれほどよい商売はないだろう。

「まあ、金貸しは本業ではないのでね」

キセノン商会は、金融部門を持っていない。

テルルから聞いた話では、商人達との短期の掛け売りを除き、現金での商売にしか手をつけないことを基本にしているという。

「では、どうして」

俺に金を貸したのか。

「なあに、俺は身内に甘いだけだ」

キセノンは簡潔に答える。

俺は、キセノンの言葉に違和感を覚えた。

キセノンはあからさまな冗談を除いて嘘は言わない。

「嘘をついた商売人は信用を落とす」は、この世界でも絶対のルールだ。

特に、国家に影響力を持つ商人となれば、信用を落とすことは致命傷になる。

だが、「真実を話さない」ことや、「自分の言葉を、相手が勝手な思いこみで誤って解釈する」ことは、「嘘をつく」ことにはならない。

キセノンの「身内に甘い」という言葉も嘘ではないが、すべてを語っている訳ではない。

俺に与えられた情報は少ないが、自分なりに推測してキセノンに質問する。



「この契約は口外しないと約束しているが、この契約について質問した人はいますか」

「直接はないな。テルルなら気がついていいるかもしれないが」

キセノン は言葉を選ぶように慎重に答える。

俺はさらに質問する。

「そうですね。俺の母ソフィアとあなたとで、俺たちのような契約をしていましたか？」

キセノンは苦笑した。

そして、キセノンからの答えはなかった。

恐らく、事実だろう。

俺とキセノンとの契約と同様に、この契約の事を口外しない約束があるのだろう。

だから、沈黙を続けたのだ。

それでも、キセノンは話はじめた。

「ソフィアは、お前が冒険にでてからすぐに、俺のところに来て、みかわしの服の事を聞いた」

ソフィアは俺の服をみて、みかわしの服と確信したのだろう。

だから、キセノン商会に行つて確認したのだろう。

キセノンも「冒険者が何を買ったかは商売上の秘密でいえないのはご存じでしょう」などと言って答えて、契約の事を口外しないよう努力はしたはずだ。

それでも、ソフィアは俺がみかわしの服を入手した経過を理解したはずだ。

そのうえで、ソフィアが俺とキセノンとの契約と同様の契約をキセノンと結ぶよう提案したのだ。

ソフィアがキセノンに対して、俺が借りたお金と同じ金額のお金を貸すことで、実質俺を支援していたのだと。

金額などは、俺たちのパーティ装備と所持金を俺に質問することで把握していたはずだ。

俺は自分の失敗を確信した。

ソフィアに隠し事はできないことを。

キセノンは追い打ちをかける。

「俺もソフィアも、親ばかなのだよ」

キセノンは、ソフィアにこの契約が知られることを確信していたようだ。

それでも、俺には一言も言わずに契約を結んだのだ。

「かないませんね、おふたりには」

俺はため息をつく。

「がっかりするな、アーベル。これは経験の違いだ」

「それなら、一生追いつけないですね」

「そんなことはない。俺がお前ぐらいのときは、お前ほどしっかりはしていなかった」

「ようするに努力ですね。精進します」

「がんばれよ、アーベル」

キセノンは俺の肩を叩きながら答える。

どこか嬉しそうな顔で。

そして、俺は思ったことを口にする。

「俺の母は、昔からこんなかんじですか」

「最初に出会った頃からだ」

「とすれば、10歳のときから」

「ああ」

キセノンもため息をついた。キセノンはおそらく、一度もソフィア

に勝ったことはないのだろう。

「・・・、そうですか」

俺もおもわずため息をつく。

願わくは、今後のロマリアやポルトガの交渉相手が、ソフィアほど手強くないことを祈りながら。

**第30話　そして、精算へ・・・（後書き）**

第2章終了です。

第3章は交渉が中心となる予定ですが、一応冒険はします。  
今のところ第8章で完結の予定です。予定です。

一区切りしましたので、評価をして頂けたら幸いです。

## 第2章までのあらすじ（前書き）

これまでのあらすじを追加しました（7月12日）  
特に飛ばしても問題ありません。

## 第2章までのあらすじ

俺は、幼なじみである商人のテルルと僧侶セレンと一緒に大魔王ゾーマを倒すために旅立った。

旅立ちの日の晩に実家に帰ったとき、すごく気まずい雰囲気になったのは、一生忘れる事はないだろう。

俺は、快適な冒険の旅をするために、テルルの父親キセノンから、「みかわしの服」という装備品を調達してもらった。

防御力の高い装備品のおかげで、僧侶であるセレンの活躍の場を奪うことを除いて、順調に旅はすすんだ。

・・・マヒを受けたときのテルルの仕打ちについては、まあ、忘れてやってもいいだろう。

当然、冒険を始めたばかりの俺には「みかわしの服」を買うだけの金などないので、キセノンから10,000Gの借金をした。

担保を持たない俺は、「1ヶ月で1割」という高利で金を借りた訳だが、予想以上に冒険が進んだことから、1ヶ月経過する前に借入れた金を全額返済することができた。

まあ、本当は金の心配はしていない。

最終的には、魔法の玉を量産したあかつきには、いくらでも手数料収益を生み出すのでね。

「どうしたの、アーベル？」

「にやついていたわよ。アッサラムのことでも考えていたとか？」

「ちがうよ、テルル。将来設計を考えていただけなのだが」

「なごころ」

第31話 そして、新たな仲間(?)との旅立ちへ・・・(1)(前書き)

第3章の始まりです。

第3章のタイトルは、勢いでつけました。反省しています。



第31話 そして、新たな仲間(?)との旅立ちへ・・・(1)

「久しぶりの冒険は、たのしいなあ」

「まだ、ロマリア城から出ていないでしょう」

「何をいつてますか、テルルさん。王様に報告するまでが冒険なのです。ならば当然、王様に命令を受けた段階から冒険は始まっているのです。気をつけないといけません」

さわやかな笑顔をした若者が、商人の娘に声をかける。

「大丈夫なの、このひと？」

テルルと呼ばれた娘は、あきれた様子で俺に声をかける。

「このひとは失礼な。ジンクといった立派な名前があります。さつき紹介したばかりなのですが、もう忘れたのですか、テルルさん」  
ジンクと名乗った若者は、テルルに話しかける。にこやかな笑顔を忘れずに。

「忘れる訳がないでしょ！」

テルルはあきれた顔でジンクをにらむ。

テルルとジンクとの話を聞きながら俺は、ロマリア城での会見のことを思い出していた。

「アーベルよ」

ロマリア王は、俺から受け取った書状を読み終わると俺に声をかける。

そして、目の前にいる重臣達に、アリアハン王の提案内容を聞かせる。

重臣達は提案内容を聞いたが、特に意見を言うことはなかった。

そして、ロマリア王は自分の結論を述べる。

「アリアハン王からの提案については承知した」  
「はっ。わが王に代わって感謝を申し上げます」

俺は提案が通ったこと自体は、それほど喜んではいなかった。  
ロマリアにとって、アリアハン王からの提案は断る理由のないもの  
だったからだ。

俺たちをポルトガへの関所を通過させるだけで、勇者の派遣要請を  
受けることができるのだ。

ましてや、アリアハンとポルトガの交渉が成功すれば、ロマリアに  
も船が手に入ることから、断らないほうがおかしかった。

「とはいえアーベルよ、関所を通し、ポルトガへの使者として派遣  
するには、そなた達だけではこころもとない」

俺たちの戦力のことを心配しているのか、たしかに冒険を初めて1  
ヶ月の若者であれば心配するのも当然かもしれない。

俺たちが、ロマリアに到着してすぐに交渉したのであれば、ポルト  
ガへの道中で全滅する可能性もある。

しかし、俺たちは準備した。  
ポルトガでの戦闘も問題ないはずだ。

俺の考えを読み取ったのかロマリア王は答えた。

「そなた達の腕については、心配はしておらん。3人とはいえ、パ  
ーティのバランスがとれているのは十分わかっている。心配してい  
るのは我が国からポルトガへの使者をつれる必要があることなのだ。  
もちろん、そなた達がロマリアを出し抜くつもりがないことも、わ  
かっているが」

ロマリア王は、俺にむかってというよりも、周囲のロマリアの重臣  
にむかって説明していた。

ポルトガとの交渉自体は、俺1人でも十分だろう。

だが、今回の交渉はアリアハンとポルトガとロマリアとの3カ国交渉になる。

ロマリアにとって、ロマリア王の書状だけでは、こころもとない。正式な使者を派遣しなければ、示しが見つからないというのだ。

ロマリア王の言葉に、重臣達は理解した。

問題はロマリアの代表として誰を派遣するかである。

俺たちと同様に、冒険者一行が旅をするのだろうか。

でなければ、一緒にポルトガへの関所を通過することができないからだ。

「ジンクよ」

「はっ」

ジンクと呼ばれた若者は、重臣達の末席から姿を現し、俺の横まで歩くと、俺と同様に頭を下げる。

ロマリアの重臣達は驚いた様子で周囲とひそひそ話をする。

「ジンクよ、そちをロマリアの使者としてポルトガに派遣する。ア

ーベル達と行動を共にして、交渉を成功させるのだ」

「りょうかいです」

ジンクは大げさに礼をする。

「それでは以上で、会見を終わる」

「おまちください」

重臣の1人が声をあげる。

「なにかな」

「おそれながらもうしあげます。ジンクなどというものを我が国の使者としてつかわすなど、・・・」

ロマリア王は、重臣の声をさえぎる。

「そちは、我が息子とおなじ性格のものに、使者はつとまらないと」

「めつそうもない。ですが」

「それでは、お前達のなかで彼らとともに行動できるものがあるのか？」

ロマリア王は重臣たちを見渡す。

重臣達は貴族を中心とした文官が中心となっており、あまり戦闘経験は積んでいない。

ロマリア王国の貴族は、アリアハンからロマリア王国が独立した時の重臣達に与えられた地位だが、モンスターの襲撃により領土が減つてからは、ほんの一部を除き、文官であつた貴族だけが生き残つていた。

残つた貴族達は既成権益を守るため、重臣としての地位を守るための技能は磨いたが、戦闘経験を積むことはなかった。

そして、一部の貴族は戦闘能力を持つていたが、近衛兵を束ねる役職に就いており、外国に出ることが出来ない状態だ。

俺は、この情報をロマリアの酒場などで入手していた。

「我々は、政に携わるのが役割であれば、冒険者のようなことはできかねます」

「それに、ジंकも冒険者とはいえ、もともと遊び人であれば別の重臣が助け船をだす。

「あやつは、今賢者ではないか、問題はないだろう」

ロマリア王は重臣たちの発言を切り捨てると、席を立ち上がる。

「会見は終わりだ、そなたらの好きな会議があるのでな、失礼する」  
ロマリア王は、重臣達に皮肉を込めて話をする俺に向かって会釈をした。

俺は、再度礼をして王が退席するのを待っていた。

俺が控え室に戻ると、セレンとテルルが心配そうな顔で出迎えた。

「大丈夫でした？」

「上手くいったの？」

「問題ない」

俺は、2人に先ほどの話を説明しようとした。

「問題ないとは、さすがですねアーベルさん」

「これは、賢者のジंकクさん」

「呼び捨てでかまわないよ」

「では、こちらでもアーベルと呼んでください」

ジंकクと呼ばれた若者は、俺たちに近づいて話しかけてきた。

「この人は誰？」

「ああ、これからポルトガまで一緒に行く人だ」

「はじめまして、私はジंकクです。こちらの可憐なおじょうさん達は」

「テルルよ」

「・・・、セレンです」

テルルとセレンは挨拶をする。

「なるほど、セレンさんですね。あなたがロマリアに訪れるたび、町の男達があなたの事を噂して、「死ぬのなら、あの子のザキで死にたい」とまで言われている」

「そ、そんな」

セレンは、頬を赤くして俯いた。

「セレンはそんなことしないわよ！」

テルルはセレンとジंकクの間にはいり、文句を言う。

「なんで、あんたと一緒に冒険するの？」

「そうですね、テルルさん。私はしょせんお邪魔虫です。ですが、さすがにあなたとアーベルとの仲を邪魔するつもりはございません」「そうじゃなくて！」

テルルは真っ赤になって怒り出した。

俺はジンクの考えに納得する。

たしかに、パーティの連携が悪くなれば、効率的な戦闘ができなくなり、全滅する可能性が高くなる。

「アーベル、そこで頷かないの！勘違いするでしょ！」

「テルル。パーティの連携を邪魔しないのは、当然だと思うのだが」「そうじゃなくて」

「さすが、アーベル「きれもの」の特性ですかな」

ジンクはにこやかに俺を誉める。

「俺は自分のことを、普通の魔法使いだと思っているのだがね。賢者にはかなわないさ」

「ご謙遜を。私などただのお調子者ですよ」

「いいのか、王子の性格をばらしても」「問題ないですよ。この国に住むものはみな、王子様の性格など知っていますから」

ジンクの言葉は事実だ。

俺たちもロマリアに来た初日に、酒場で聞かされた話だ。しかも何度も。

「それに、賢者といってもレベル1です。出来ることはあなた達の影にいて、自分の身を守ることだけです」

「それでも、俺の盾にはなるだろう。十分役に立つ」

「こちらこそ、身を守るだけでレベルが上がるのは助かります」

「それではいくぞ、セレン、テルル」

「・・・」

「・・・、違うのに、違うのに・・・」

セレンは真っ赤に俯いたまま反応せず、テルルはぶつぶつとひとりごとを繰り返していた。

第31話 そして、新たな仲間(?)との旅立ちへ・・・(1)(後書き)

新キャラ登場です。

名前にひねりがないですね。

まあ、名前にひねりが必要かと言われたら、そうでもないと言いつはしておきます。

### 第32話　そして、新たな仲間(?)との旅立ちへ・・・(2)

「新たな仲間ジンクにカンパイ！」

「自分で言うか？」

「正確には同行者だが」

「細かいことは、気にしない」

テルルと俺の指摘を切り返すと、ジンクは酒を一気に飲み干した。

俺たちは、ロマリアの酒場で話をしていた。

冒険の打ち合わせについてだ。

俺はジンクが俺たちのパーティに加わると思っていたのだが、パーティは組まないで一緒に行動すると言っていた。

俺が詳しく問いただそうとしたのだが、ジンクが「せっかくだから、酒場で歓迎会をしよう！」と提案し今にいたる。

ジンクの提案に対して、セレンは俺の後ろに隠れながら俺の袖を引っ張り恥ずかしそうに頷いていた。

「セレンさん。そのしぐさだけで、多くの野郎どもがもたえ死ぬことでしょう！」とジンクは目を輝かせて何度も頷いていた。

ジンク、お前は死なないのか？

まあ、人のことは言えないが。

テルルは酒場で話をするというジンクの提案に対して、「なに勝手なことをいつているのよ」と反論した。

俺がもうすぐ夕方になることと、話をするなら一緒のほうがよいだろうと意見をいうと、

テルルは「しかたないわねえ、アーベルが賛成したからついていくわよ」と機嫌悪そうに承諾した。



しかし、ジンクが「さすがアーベル、テルルさんを説得させるとは」と納得した顔で頷くと、テルルはぶつくさ文句を言っていた。

「私のステータスは、たいしたものではありません。レベル20のあそびにんから転職しただけですから」

「それでも、隠す必要があるのはロマリア王から使者としての命を受けたからです」

確かにジンクの言うとおりだろう。

「それに、アリアハンとロマリアの使者が一緒に行動しながら、ロマリアの使者がアリアハンの使者に従うのは問題があります」  
俺は黙って頷いた。

俺自身は見栄や立場を気にしたことはなかったが、国の外交レベルの問題は個人の認識の問題とは別なのだ。

「それでも、戦闘には一緒に参加しますから、最低限の情報はお伝えします」

ジンクは俺にステータスシートを手渡した。

次のように記載されていた。

ジンク

賢者

おちょうしもの

LV:1

HP:94

MP:80

攻撃力:55

防御力:58

「……、今の俺より上だな」

「すぐに追い抜きますよ」

「そうだといいけどな」

俺はため息をついた。

あそびにんだろうがなんだろうが、転職前のレベルは20であった。転職でステータスが半減したからといって、貧弱な魔法使いに比べたら体力はあるだろう。

この4人のなかで3番目に入るだろう。

成長すれば、このパーティのなかで2番手も任せられるはずだ。

まあ、一時的なものであるが。

「よう、イオナズンのジंकではないか」

見知らぬ男が、ジंकに絡んできた。

「今日は王子様と一緒にではないのか」

「見てのとおりだ」

ジंकは微笑を浮かべて男に答える。

「腰巾着なら、王子様のそばにいないとねえ。それとも、王子様に

飽きられたのか」

「好きに想像すればいい」

ジंकは適当に答えていた。

男は、俺にも声をかける。

「よう、あんた。イオナズンのジंकを知っているか？」

「今日初めて会った。ところで、「イオナズンのジंक」とはなんだ？」

「あんた、知らないのか、他の町のものだな。俺が教えてやるよ」  
男はかなり酔っぱらっていた。

俺は男の話す内容は予想していたが、念のため聞いてみた。

王宮の採用試験での話だ。

ロマリアの王子の話し相手を募集していたのだが、転職したばかりのジंकも参加していた。

面接官はジंकに話しかける。

「特技はイオナズンとありますが？」

「はい、イオナズンです」

「イオナズンとは何のことですか」

面接官はイオナズンを知っている。しかし、ジंकが提出した略歴「最初はあそびにん」「あそびにんから賢者になりました」を見る限り、目の前の人物が使用できる呪文ではない。

「はい、呪文です。敵全体に大ダメージを与えます」

ジंकは、面接官が呪文の効果を知らないと判断して呪文の効果の説明する。

「・・・で、イオナズンは王宮で勤めるにあたって、どのようなメリットがありますか」

「はい、敵が襲ってきてても守れます」

ジंकは自信満々に答える。

普通の相手であれば一撃だろう。

面接官はあわてて質問を続ける。

「王宮内に敵はいません。それに王宮内での攻撃呪文の使用は禁止されています」

「でも、衛兵にも勝てますよ」

ジंकはさらりと危険なことを口にする。

「いや、勝てるとかそういう問題ではなくてですね」

面接官は論点がずれていると思いつながら話を続ける。

「敵全体に100以上与えるのですよ、ちなみに・・・」

「聞いていません。帰ってください」

面接官はジंकへの説得をあきらめ、帰るように促す。

「あれあれ。実演しなくていいのですか？なんならここで使ってもいいですよ、イオナズンを？」

ジंकは胸をはって、自信満々に詠唱準備を始めようとする。

「いいですよ。使ってください、イオナズンとやらを。つかったら帰ってください」

面接官は疲れた様子で、ジंकにおざなりの対応をする。

ジंकはイオナズンを唱えた。

何も起こらなかった。

「MPが不足していたようだ。運がよかったな」

ジंकは肩をすくめて、両手を前に出した。

「帰れ」

面接官はため息をついた。

「MPが回復したら、また来るよ」

結果として、ジंकは採用された。

面接官が、採用結果の報告を王子にしたときに、ジंकの話を読まげにする様子を見て、王子は一言「決めた」と言ったのだ。

「父上にかけあってくる」

「お待ち下さい、王子様」

面接官の呼びかけを無視して、王子は父親であるロマリア王に直訴し、ジंकの採用が決まったのだ。

面接官はこの日の事を「悪夢のはじまり」といって一生悔やんだという。

「な、おもしろい話だろ」

「……、実際に本人の目の前でこの話を聞くととは思わなかった」

俺は前の世界で、似たようなネタ話を聞いたことがあったが、この世界で実際に行く奴がいたことに驚いていた。

「なんだお前、知っていたのか？」

「事実なのか、ジンク」

「面接官の気持ちは知らないけど、だいたいそんなかんじだったよ」  
当事者であるジンクは、酒を飲みながら平気な顔で答える。

「おい、ジンクよ」

「なんだい」

「つかつてみせるよ、イオナズンを。今日はMP足りているよな」  
酔っぱらいの男は、ジンクを挑発する。

「わかった」

ジンクは立ち上がると、呪文を唱えようとする。  
酒場全体が静まりかえる。

「おい、ジンク。この場所で攻撃呪文をつかったら」

「わかっているよ、アーベル」

ジンクはかなり酒を飲んでいたにもかかわらず、キチンと姿勢をのばして詠唱を始めた。

「これは」

俺の知っているイオナズンの詠唱ではない。

しかもこの詠唱は魔法使いとして覚える呪文には含まれていない。  
一番近い呪文といえば、効果不明呪文パールプンテに近いか？あと、  
「おおごえ」の呪文も組み込んであるようだ。

「イオナズン！」

ジンクはイオナズンの呪文を唱えた。

「イオナズン、イオナズン、イオナズン」

ジンクのこえは山彦となつて、あたりに響き渡った！

「・・・そうくるか、・・・」

俺は思わずつぶやいた。

酒場全体は静まりかえったが、やがて誰かが笑い声をあげる。

「最高だ！さすがジンクだ！」

その声の持ち主に気付いて、多くのものは驚愕したが、やがてみんなが笑い出した。

「・・・おもしろかったぜ、ジンク」

さっきまでからんでいた男もあきれながら一声かけると、もとの席に戻っていた。

「すごいです」

「すごくないわよ、セレン。まったく、ばかばかしい呪文ね」

感嘆の声を上げるセレンと、それを否定するテルル。

それでも、3人の親睦は深まったようだ。

調子に乗ったジンクの話にセレンとテルルが身を乗り出して聞いている。

内容としては、先ほどのイオナズンは師匠に教えてもらったとか、師匠はイオナズンを百八式まで使えるとか、自分はまだ5種類しか使えないとか、どうでもいい話だった。

「それにしても、お前は何者だ」

「さすが、アーベル「きれもの」ですね。ただ、みてのとおりしか、答えようがないですが」

「まあ、そうだろうな」

俺はため息をつく。

隣のベッドで寝ようとしている、ジンクに話しかけていた。

これまでは、俺たちは3人部屋で寝ていたが、さすがに今日からは

2人部屋を2部屋借りて寝ることにした。

俺は問題なさそうにも思えたが、権限は女性陣たちにある。

俺や母親のソフィア以外で独自呪文を開発した事に驚愕した。

そして、ただのあそびにんでは絶対にできないことを確信していた。

だから、俺は俺のパーティーに加われない理由のひとつとして、ステータスの一部非公開に解決の鍵があると考えていた。

そして、俺はジnkのすべてのステータスを知ることができないことも理解していた。

第32話　そして、新たな仲間(?)との旅立ちへ・・・(2)(後書き)

「面　でイオナズン」ネタです。

ドラクエ世界で行うとどうなるかやってみました。

ちなみにジnkの正しい(?)二つ名は

「イオナズン(笑)のジnk」となります。



### 第33話 そして、ポルトガへ・・・

さまようよろいがあらわれた。

ジंकは呪文の詠唱を始める。

「終焉の刻を知るものたちよ。その叡智は真理を力に変え、その力は闇を食い尽くし、食い尽くした闇で生み出す光で刻みし歴史は、栄光を紡ぐものなり！」

セレンとテルルは武器を構え、さまようよろいに向かって突き進む。ちなみに俺は後ろで、他のモンスターが現れるかどうか、周囲を見渡している。

「古より伝わる破壊の力を、浅学な我が身で持つて顕すために、今一度、紡がれた栄光の欠片を我が眼前に示したまえ！」

セレンとテルルの攻撃で、さまようよろいは動かなくなった。

俺は、引き続き周囲の警戒を続ける。

「我に仇なす全ての者どものために、さらなる栄光を世界に刻むために、終焉の刻を知らしめるために！」

「ジंक終わったぞ」

俺は、旅の続きを促すため、ジंकに声をかける。

「そして害悪を無に帰し、平穏の世界へ！イオナ・・・」

「はい、そこまで」

俺は、詠唱を終えようとするジंकの肩にふれる。

「終わりましたか。さすがはアーベル」

「・・・、俺は何もしていないが」

「いえいえ、イオナズン1回分のMP消失を防ぐことが出来たのは、

あなたの力です」

ジnkの詠唱は俺の知る限り、イオナズンは決して発動しないはずだ。

「……、ああそうかい」

俺はため息をついて、旅を続けた。

俺たちがポルトガへの関所にたどり着くまで、他にモンスターは出現しなかった。

そのため、ジnkのLVは1のままだ。

「見よ！我がロマリア王国に伝わる華麗なる鍵開け術を！」

「ジnkさん、すごいです！」

「だから、セレン感心しないの！」

「まあ、ある意味すごいな」

ジnkは華麗なる舞を踊りながら、ポルトガへの国境に繋がる扉を開こうとしていた。

ジnkはやがて、右手に持つ鍵束の中から無造作に一つを選ぶと、鍵穴に差し込む。

そして、ジnkは取っ手を持ちながら、1回転し、扉を開けた。

「いかがですか」

「ジnkさん、やっぱりすごいです！」

「……もう少し、早く鍵を開けて欲しいものだ」

セレンは相も変わらず、ジnkの行動に賞賛の声をあげ、俺はジnkの鍵開け術に改善を求めた。

「アーベル。鍵開けは優雅に行くことが肝心なのです」

「いやいや、時間をかけずに行くことが重要ではないのか？」

「効率化だけを求めても、意味がありません」

ジंकは俺の質問に反論する。

「確かに、動作の最適化による恩恵を否定はしません。

しかし、動作の中に生じる余白や無駄は、新たな可能性を生みます」

「新たな可能性？」

「そうです、先日酒場で使ったイオナズンのように」

確かに、新呪文を開発するには通常の詠唱を覚えるだけでは決して  
できることではない。

「だからといって、命がかかった戦闘中に行うのはどうかとおも  
うぞ」

「だいじょうぶですよ、アーベル」

ジंकは俺ににこやかなほほえみを向ける。

「ここらへんのモンスターはあなた達にとって、敵ではないのでし  
ょう」

俺は頷く。

「であれば、このような機会を逃すのはもったいないです」

「ああ、あまり認めたくはないが、ジंकの言うことは正しいのだ  
ろう。だが、鍵開け術は時間の無駄だ」

俺はジंकに指摘して、ポルトガへ向かっていった。

「わかりましたよ、アーベル。成果もありましたし」

ジंकはひとり納得したような顔で鍵束を袋にいれると俺のあとを  
ついてゆく。

鍵束にある鍵の形状は、俺が前の世界でイラストを見て知っている、  
この扉をあけることのできる魔法の鍵と形状が異なっていたが、こ  
の扉専用の鍵だろうと納得していた。

「骨折り損ではないのだが、・・・」

「しかたないですよ、アーベル」

「まあ、慎重にいくことは悪くないわ」

俺のため息に、ジंकとテルルは慰めの声をかける。

俺たちは無事、ポルトガに到着したのだが、ロマリア国境からここ  
まで、モンスターに一度も会うことはなかった。

「無駄ではないですよ」

セレンも俺を慰める。

「ありがとう、セレン。旅はこれで終わりでは無いから、強くなる  
ことは無駄ではないよな」

「そうですね、アーベル。いざとなれば、私のイオナズンで、・・・

」

「しつこい!」

俺とテルルはジंकにつっこみを入れた。

第33話　そして、ポルトガへ・・・（後書き）

せつかくなので、イオナズン（偽）の詠唱文を考えてみました。

本来であれば、もっと厨二病的な詠唱文にしたかったのですが、この程度が私の限界のようです。

### 第34話 そして、餌付けへ・・・(1)

俺たちは、ポルトガで一泊していた。

王宮の衛兵に使者として、ポルトガ王との会談を要請し、翌日の面談となった。

ポルトガ王の家臣からは、すぐにでも会談は可能な旨を伝えられたが、急ぐ話ではないとして、俺は翌日でもかまわないと答えていた。テルルとセレンは、商店街を見て回っていた。

「断る」

俺の提案を聞き終えたポルトガ王は、断言する。

「まあ、そうですね」

ジंकは頷く。

ジंकはロマリアの交渉責任者として俺のとなりにいるが、俺の友人でも部下でもない。

「確かに、勇者の派遣は魅力的ですが、ポルトガが独占している船を与えるほどではないですね」

ジंकはお調子者だが、ロマリアの代表という立場をわきまえたのか、真面目な様子で話を続ける。

「さらに、アリアハンとロマリアを仲介しただけの我が国にも船を与えるなど、バランスはとれないでしょうね」

「そうですね」

俺は人ごとのようにいう。

「今日のところは、これくらいで失礼します」

「待つがいい」

「なんでしょうか、ポルトガ王」

「今宵はうたげの準備をしておる。そちたちをもてなさねば」

「感謝いたします」

「後が怖いですが、お受けします」

俺の言葉にポルトガ王が反応する。

「後が怖いとは？」

「失礼しました。我が国からの使者は、自分だけですが、共に旅をするものがあり、自分1人が宴を楽しむと知れば、後で何をされるかと考えたしだいです」

宴での外交交渉が怖いという意味ではないことをほのめかす。

「それならば、そのものを宴に招こうか」

「お気遣い感謝します。しかしながら、旅のものも自らの立場をわきまえており、ポルトガ王に余計な気を遣わせたと知れば、返って後が怖くなります」

俺は、交渉が失敗した場合に、テルルとセレンに被害が及ばないようにする必要から、2人を呼ばなかった。

「そうか」

ポルトガ王は納得し、席を立とうとした。

「ああ、そうでした」

「どうしたのだ、アーベルよ」

「今日は、王に献上品がございました。今宵の宴にお使いいただければと」

「ほう、どんなものだ」

「「こしょうでございます」

「「こしょうとな？」

「なかなか変わった味じゃのう」

「左様でございますな」  
ポルトガ王とその家臣は、俺たちが献上した香辛料を使った料理を  
味わっていた。

「お気に召しましたでしょうか」

「そうだな、まずくはないが、なかなか、変わった味だのう」

「左様でございますな」

俺は2年後のポルトガ王とは異なる評価に少し疑念を抱いたが、俺  
は計画通りに話を続ける。

「まあ、こししょうの真価は味よりも、効能にありますからね」

「効能とは？」

「一言で言えば、食料の保存に役立ちますね」

「保存だと」

「船旅は、時として長期にわたります。

不案内な陸地では、食料を確保することも難しいでしょう。

肉も塩漬けで多少の保存もできますが、水分を多く取る必要が出て  
きます。

その点、こししょうは香りも味も楽しめるだけではなく、防腐剤とし  
ての役割に優れています」

俺は立て続けに、こししょうの効能を話した。

誰もが黙って聞いていた。

俺が話し終わっても、静かなままなので、言い訳めいた形で一言付  
け加えた。

「まあ、王宮での料理ではあまり関係ありませんが」

「・・・、まあそうだな」

そのまま宴は続いていた。



「これでよし」

「アーベル、あの対応で大丈夫ですか」

深夜、宿屋に戻る途中、ジंकは俺に疑問を示す。

俺は、ジंकがバハラタにいった経験があることを利用して、こし  
よの買い付けを頼んだ。

ジंकにキメラの翼と1,000Gを持たせたが、100Gで購入  
できたようだ。

こしよはイベントで入手していたので、金額がわからなかったが、  
ジंकから聞いていた情報どおりの値段で助かった。

こしよの情報や入手に関して、キセノン商会を通すことも考えた  
が、今後予想されるキセノン商会による買い占めをさけるため、取  
りやめたのだ。

「まあ、10日以内に結果がでるさ。こしよに興味を持つはずだ」  
「私は保存食の話に興味を持ちましたが、彼らはあまり感心を示さ  
なかったようですが」

「保存食の話は、理由づけのためだよ」

「理由づけ？」

「後でわかるよ。それよりも」

俺は、宿屋の前にいる2人の女性に視線を移す。

「ああ」

「セレンとテルルの対応だな、問題なのは」

「そのようですね」

どうやら、2人は俺たちの帰りを待っていたらしい。

### 第35話 そして、餌付けへ・・・(2)

俺たちが、ポルトガ王に再び呼ばれたのは、8日後のことである。

「アーベルよ」

「なんでしようか」

「このまえの、こじょうのことだが」

「なんでしようか」

「手に入れることができないか」

「私たちの国でとれるものでありません」

俺とジंकは否定する。

「そして、私たちは商人ではありません」

冒険者が商売品を持ち込みとうとして没収された品々は、冒険者ギルドが全て回収し、基本的に原産地に返還される。そこには各国の国家権力ですら介入出来ないようになっていて、

各国の商人達が、王が直接冒険者に貿易まがいの行為をさせないようにするための措置だ。

「そうか。あれをもう一度・・・」

「王様！」

家臣から制止の言葉が入る。

王は思い出したように、話を続ける。

「・・・、そうだった。あれを使って、兵達の保存食にしたいのだ」

「であれば、ロマリアからの使者と話をすればよろしいかと」

俺はジंकに視線を移す。

「どづいことじゃ？」

話を振られたジंकはよどむことなく話を続ける。

「こじょうは東方の国でとれます」

「商人が通行するのであれば、ロマリアの許可が必要であると」  
「そういうことです」

ポルトガ王はしばらく考えてから、ジंकクに向けて問いかける。

「・・・ロマリアは、船が必要であると」

「そうですね。象徴として一隻あれば十分です」

ジंकクは正直に答える。

ロマリアの支配地域は限定されている。

広い海に出ようとすれば、ポルトガを通過しなければならない。

また海軍のないロマリアは、海では海洋王国であるポルトガに逆らうことはできない。

「そして、アリアハンも必要であると」

「勇者の冒険には、1隻あれば十分でしょう。オルテガの時と同様に」

「そうだな」

現在のアリアハンにも、海軍は存在しない。

勇者の冒険用に一隻あれば十分だ。

ちなみに、オルテガが使用した船はもともとアリアハンが所有していた最後の一隻であり、

モンスターの襲撃を受け沈んだ。

「とはいえ、船が完成するのは1年かかるぞ」

「ロマリアは待つことは構いません。友好の為であれば」

ジंकクは正直にいった。

約束までの期間が長ければ、それだけの間友好が保証できるともいえる。

約束が守られる限り。

「我が国は既に完成している船で構いませんよ」

俺も希望を伝える。

「……。装備を変更するのに1月はかかるだろう」

ポルトガ王は、そばにいる重臣からの説明を受けてから答えた。

「かまいません」

「それでは交渉成立だな。細かい内容は、彼らと話を詰めてくれ」  
ポルトガ王は、そばに控える重臣に視線を移した。

「ありがとうございます」

俺とジंकはポルトガ王に一礼した。

「アーベル、どうして上手くいったのですか？」

「味ですよ、味」

「でも、この前の食事のときは、あまり旨そうに食べてなかったようですが」

「そうですね。ただあれは、中毒性が高いですから」

前の世界でのポルトガ王は、いつもこしょうを食べていた。

そのため、俺はすぐに食いつくだろうと思っていたのだ。

「それにしても、アーベルはすごいですね」

「おせじを言っても、なにも出ないぞ」

「いえいえ。ただ、」

「どうした、ジंक？」

「なぜ、今回はキセノン商会を使わなかったのですか」

「どうやら、ジंकは俺とキセノン商会との関係を知っているようだ。  
本当に元あそびにんか？」

「キセノン商会に任せっぱなしだと、富の集中が起きるからな。将来を考えると、富の独占は世界の為にならないから、あまりおもし

ろくない」

「そうですね。やはり、あなたはただの冒険者ではないですね」

「かいかぶりすぎだよ。ただ俺は、平和になった後のことを、少し考えているだけだ」

俺は、ポルトガの宿屋に向かっていった。

第35話 そして、餌付け入・・・(2) (後書き)

第3章はもつちよっとだけつづきます。

### 第36話　そして、いつか通れなくなる道へ・・・

俺とセレンとテルルとジंकクの四人はアッサラームの東にある洞窟にいた。

ポルトガ王からの依頼に応えるためである。

この世界において、船を造るために必要な鉱石が不足したため、アッサラームの東にある洞窟に住むホビットから、鉱石の買い付けを行うためである。

ポルトガ王が用意した親書を俺たちが預かっていた。

「どうして、わたしたちが行くのを、アーベル」

テルルの俺に対する質問は、依頼ごとへの不満と言うよりも、ポルトガ王の真意を問いただすものだった。

アリアハンとポルトガとの当初の交渉内容は、ポルトガがアリアハンに船を提供する替わりに、アリアハンが勇者をポルトガに派遣することであった。

変更後の合意内容は、俺たちが鉱石の買い付けを行うことで、アリアハンに船を提供する内容に変わっていた。

「まあ、本当の目的はこの先にあるだろう。ここはついでみたいなものさ」

「ついで？」

「この洞窟の先にある町周辺でとれるものが必要みたいだね」

「なんですか、それ？」

テルルは質問する。

「防腐剤のようなものだ。店では引き取ってもらえないようだが」

「あ、そう」

テルルは売れないことがわかると、とたんに興味をなくしたようだ。ジンクに確認したところこの世界では、ゲームと同様にこしように売れないことがわかった。

こしよの効能が分かれば、売れるようになるかもしれないが、現時点ではポルトガ王だけが、この調味料の価値を知っている。

だから、現時点ではルーラで移動しても、没収されることはないだろう。

ただし、テルルに知られば、父親であるキセノン商会に知られることになり、キセノン商会による独占が進められる危険性ははらんでいた。

このため、こしよの秘密はテルルにも話していない。

当然、交渉の同意書でさえも、こしよの内容は一切記されることはなかった。

アリアハンもロマリアもこしよの価値を知るものは、俺とジンクしかいなかった。

俺と、ジンクはいざというときの切り札として、こしよのカードを持つことを合意したのだ。

「なんだ、お前達は」

俺は目の前のホビットに声をかけると、不機嫌な声が返ってきた。たしか、このホビットは人間を嫌っていたはずだ。ただ1人を除いて。

「私たちは」

「私たちは」

俺とジンクとの声がかぶってしまった。



「ポルトガ王から、書状を預かっております」

「ポルトガ王から、書状を預かっております」

「船の建造に必要な鉾石を送って欲しいとの要請書です」

「船の建造に必要な」

声がかぶったからといって、途中でやめるのもどつかとおもつぞジ  
ンク。

「そうか、あいつからの使いか」

ホビットは頷くと、俺が持つ要請書を受け取った。

「たしかにあいつらしいな」

ホビットは一通り読み終わると、なつかしい表情をした。俺たちと  
最初にあつた表情からすれば、完全に別人のようにみえる。

「話はわかった、すぐに届けると伝えてくれ」

「わかりました」

これで、ここでの仕事は終わった。

あとは、洞窟を抜けてバハラタへ向かえばいい。

ちなみに、この洞窟は現在、ふさがれていない。

恐らく、2年以内に落盤が発生して道をふさぐのだろう。

その後は、ノルドだけが知る抜け道しか通行できなくなるだろう。

「そつえば」

俺は、昔から思つた疑問を口にする。

「ポルトガ王とは、どのように知り合つたのだ？」

ホビットとポルトガ王。

通常なら、口を合わせる機会など無いはずだ。

「あいつは、ここまで来たのだ」

俺たちは驚いた。

ポルトガ王は、戦闘技能はないはずだ。

たとえ、護衛を率いたとしても、死の危険がある。

「あいつは、採掘の様子がどうしてもみたいといって、ここまで来たのだ」

「聞いたことがあります。ロマリア王は最初に話をきいたとき、冗談だとおもったそうです」

ジンクが補足する。

確かにロマリア王なら、信じないだろう。

ポルトガ王は、本当に純粹なのだろう。

だから、気むずかしいホビットが心をひらいたのだ。

ただ、ポルトガ王の側近達にとっては、心配の種となるだろう。

「ありがとう、ノルド」

俺はホビットに礼をいった。

「ふん」

ホビットは俺たちに背を向けると自分の仕事にとりかかった。

第36話　そして、いつか通れなくなる道へ・・・（後書き）

ゲームでは、ポルトガ王とホビットのノルドが知り合いであるという設定です。

2人が知り合ったきっかけを自分なりに考えてみました。

第37話 そして、「おちょうしもの」への道へ……(1)

「ベギラマやメラミが効かないか」

俺はため息をついて、ヒヤドを連発する。

ハンターフライとよばれる蜂型のモンスターは凍り付き、動きを止め倒れてゆく。

「消費MPが少ないのは助かるのだが」

ヒヤドは単体呪文であるとともに、モンスターに与えるダメージが少ないため、どうしても戦闘が長引いてしまう。

自分の身を守っていたジंकは提案する。

「イオナズンを使いましょうか？」

「結構です」

別のハンターフライをしとめたテルルが、言葉を返す。

セレンは、傷ついた俺たちを回復している。

「そうですね、ヒヤダインのほうが効果的ですよね」

ジंकは、テルルの言葉を適切な呪文を使うことを提案したのだと受け取ったようだ。

確かにヒヤダインは、イオナズンよりも敵に与えるダメージは少ないが、イオナズンと同様に敵全体にダメージを与えることができる冷気系の呪文である。

確かに効果的ではあるが、呪文を覚えるためには魔法使いか賢者のレベルが26必要である。

魔法使いの俺のレベルは17であり、賢者のジंकにいたっては、レベル3でしかない。

「あなたは、おとなしく身を守っていなさい！」

「はい、テルルさん」  
ジंकは、俺たちの邪魔にならない程度に敵を引きつけながら、パーティーの盾になっていた。

バハラタについた俺たちは、さっそくお目当ての商品を購入した。

「これで、安心だ」

「そうですね」

「よかったね、セレン、アーベル」

俺とセレンは、魔法の盾を購入していた。

魔法の盾は、非力な魔法使いでも装備可能な盾であり、かなり高い防御力を誇る。

さらに、敵からの攻撃呪文を軽減する効果もあり、魔法使いにとって最高の盾である。

ちなみに、商人であるテルルも装備可能ではあるが、テルルの装備している鉄の盾と防御力に差が少ないことと、所持金の関係とを総合的に判断し、今回は購入を見送った。

「おそろいですが、いいですね」

ジंकは俺とセレンに声をかける。

「はい」

セレンは俯きながら小さく返事をする。

顔が少し赤いようだ。

セレンは冒険をして人見知りが直ったのかと思ったのだが、すぐに直るものでもないらしい。

「すまない、ジंक。どうやら、セレンはまだ人見知りするらしい」

「なに言っているのよ、アーベル」

セレンではなくテルルが否定する。

「違うのかテルル」

「鈍いわね、アーベルは」

「なにが鈍いのだ？」

「テルルさんは、魔法の盾を買ってもらえないことを残念がっているのですよ」

今度はジンクが答える。

「何言っているの！ジンク」

テルルはムキになって否定する。

「変なことを言うな、ジンク。俺たち3人で決めたことだ」

俺はジンクに反論する。

ジンクが賢者とはいえ、俺たちパーティの判断が間違っているとは思わない。

「そうでしたね、失礼しました。ただ、失礼を承知であえていいですが、早めにテルルさんにも買ってあげてください」

ジンクは素直に詫びた。

「わかっているさ、そのくらい」

防御力の差は少ないとはいえ、攻撃呪文の威力を軽減するという特殊能力は大事なものだ。

お金が貯まれば、テルルにも買うつもりだ。

欲を言えば、俺は冒険開始前からの3人の装備として、みかわしの服と一緒にそろえたかった。

ランシールで入手できないと知ったため、あきらめたが。

「アーベルの考えは私の考えと違うようですが」

ジンクはどこかあきらめた様子で俺に笑いかけると、

「結果が一緒ならばかまいません」

ジンクはテルルに視線を移した。

テルルはぶいとジンクに顔を背けていた。

俺は明日、バハラタ周辺でモンスターを倒して金を稼ぐことを決意した。

### 第38話　そして、「おちょうしもの」への道へ・・・(2)

俺たちは、ロマリア王の依頼を果たすため、こししょうを販売する商人のもとを訪れた。

商人は原作で登場していたグプタではなく、グプタの恋人タニアの父親である老人だった。

ちなみにグプタは冒険者の商人として、アッサラムやダーマへの通商の護衛を手伝っていた。

恋人がさらわれたとき、1人で助けに行くことができた理由がわかった。

俺たちは、商人に契約を提案すると、商人は喜んで引き受けてくれた。

提案内容は次のとおりだ。

- 1．毎月、グプタがこししょうをアッサラムまで持ってくる。
- 2．グプタがアッサラムに待機しているロマリアの商人に、こししょうを手渡す。
- 3．ロマリアの商人がロマリアまでこししょうを運ぶ。
- 4．ジンクがロマリア商人からこししょうを買い上げる。
- 5．ポルトガ王がジンクからこししょうを買い上げる。

俺たちは、老人に定価の倍で買い上げる事を話している。

そして、俺とジンクは定価の10倍の利益を毎月得ることになっている。

俺たちもアッサラムの商人顔負けの、あこぎな商売を始めたのだ。ロマリア商人もこししょうの価値が分からないようにしてある。

ポルトガ王しか購入しないからこそ、できる手法だ。



原作どおりなら少なくとも、勇者が船を入手するまでは、俺たちが独占販売できる。

俺は、世界が平和になれば、この売り上げを元手に商売を始めるつもりだ。

とはいえ、商売を始めるのは先の話なので、それまでは武具の購入資金にするつもりだ。

武具を買った後で、売却すると資産が25%目減りするが、全滅して半減することに比べたらましだろう。

「俺って最近、自分の真面目すぎる性格に嫌気がさしてきてさあ」

「うんうん」

「あんたのうしろのひとはいいよな、おちょうしもので」

「そうですね〜」

「調子にのらないの、ジंकウ！」

情報収集をしていた相手の男の一言に、ジंकウは反応し、テルルに注意されていた。

さて、原作にこんなせりふあったかな。

俺は、昔の事を思い出していると、ジंकウは自分の袋から一冊の本をとりだす。

本の帯には次のことが書かれていた。

笑う門には福来たる！傑作ユーモア100選！

テルルは思わず「おもしろそう」とつぶやいていた。

「まさか、ユーモアの本？」

「よくご存じで」

男はこの本を知っていた。

確かこの本を読めば、おちょうしものになれるはずだ。

「ゆずってくれるのか」

男は、ジンクにすぎるような目つきをする。

ジンクは、ほほえみながら本を袋にしまう。

「やはり、だめだよな」

男は、うなだれる。

性格を変える本はその効果のため、禁書扱いされており、新たな本の作成は困難だ。

商人達はそれを知っているため、冒険者から買い取るときは二束三文で買いたたく。

商人から購入することができないため、さらに入手困難になっている。

ジンクは袋のなかから、別のものを取り出す。

「それは、いつたい？」

「モヒカンの毛だよ」

ジンクはほほえみながら、説明を始める。

モヒカンの毛は、装飾アイテムで、装備しているあいだ、おちょうしものになるというものだ。

ユーモアの本の力を使えば、たしかにおちょうしものになれる。

だが、他の本のちからが無い限り、一生おちょうしものままだ。後悔する前に、モヒカンの毛を使うことで様子を見てはどうか。

ジンクはそう提案したのだ。

「貸してくれるのか？」

「ああ」

「ありがとう！」

男はジンクから、モヒカンの毛を受け取った。

俺は、宿でジンクと2人のときに質問した。

性格に関する質問のため、セレンがいないときをねらった。

「なあ、ジンクよ?」

「なんですか、アーベル」

「お前も、あの本を読んだのか?」

「ええ、読みましたよ」

ジンクは嬉しそうに話す。

「良かったら感想を聞かせてくれないか」

「そうですね」

ジンクは遠い目をしながら語り出す。

こんな世界だからこそ、いかにユーモアが大切か自分は気付いた。自分は肩の力を抜いて生きてゆくことにした。

「……。そうか、ありがとう」

「どういたしまして」

「ところで、ジンク。本を読む前の性格を聞いてもいいか?」

「いいですよ。といっても、今の性格と一緒にですが」

「え?」

「そうですね。おちょうしものですよ」

「どうして、本を読んだ?」

確か、性格が変わらなくても、本の効果は失われるはずだ。

「しゅくじょへのみち」や「おてんばじてん」を男が読むときだけは例外だが。

「おもしろそうだったからです。いけませんか?」

ジンクは俺に問いたです。

「……。そうだな、普通はそうだよな。すまない、ジンク」

おもしろそうだから本を読む。

当たり前のことを否定するとは。

俺は自分が原作を知っているために、現実世界の常識を忘れていたことを思い知らされた。

「かまいませんよ、私はおちょうしものですから」  
ジンは笑いながら答えた。

第38話　そして、「おちょうしもの」への道へ……(2) (後書き)

内容を確認するために、テストプレイをしています。

プレイで確認するたびに感じるのは、原作のテキストの秀逸さです。

この作品をおもしろいと感じて頂けるのであれば、原作のテキストが秀逸であることが大きな原因であると思います。

逆に、あまりおもしろいと感じないようであれば、私が原作を生かし切れていないことによると思います。

Wiiで25周年記念版ドラクエ1〜3が発売されるようです。

買われた場合は、いろいろとテキストを確認すると新たな発見があるかもしれません。

### 第39話 そして、ロマリア王位へ……(1)

「どうして、こうなった」

俺は頭上の装備品に手を触れる。

金の冠と呼ばれ、これまで使用していた皮の帽子の3倍という防御力を誇る。

男の魔法使いにとって数少ない装備可能な頭部部分の防具のひとつでもある。

「良くお似合いです、アーベル王」

「ジंकク、うるさいぞ」

「御意」

ジंकクは俺に臣下の礼をする。

「……、頼むからやめてくれ」

俺はため息をつきながら、前日の事を考えていた。

俺とジंकクはそれぞれアリアハンとロマリアに戻り、交渉の成功を報告した。

その後、俺とテルルとセレンの3人はルイーダの酒場で今後の計画について、相談していた。

「とりあえず、俺がイオラを覚えるまで、訓練をしたいのだが」

「仕方ないわね」

俺の提案にテルルは頷く。

俺たちはバハラタで戦闘を行ったが、モンスターの出現率の関係で、どうしても経験値稼ぎの点で効率が悪い。

それならば、経験値は低いが、出現率の高いノアニールの西にある洞窟で効率よく経験値を稼いだほうがよい。

防御力が上がった今ならば、より安全に経験値を稼ぐことが出来る。

「どれくらいかかりそうなの？」

「2ヶ月あれば、十分かと」

俺は余裕を持った計画案を示す。

「洞窟からモンスターが消滅しそうね」

「それはいいかも」

セレンは頷く。

「魔の力が失われれば、そうなるのだが」

俺は疑問を口にする。

原作では、魔王が倒されない限り、決してモンスターが消滅することとはなかった。

だが、この世界ではどうなのだろうか。

「というわけで、じめじめした洞窟遠征を前にカンパニー」

テルルは、はじけた様子でグラスを掲げる。

「乾杯」

「乾杯」

「カンパニー！」

俺とセレンは顔を見合わせながら、それでもテルルに調子を合わせる。

2人は酒で俺は相変わらず、ジューズだ。

「何故ここにいる？」

俺は、勝手に乾杯に加わった知り合いに注意する。

「いけませんか？」

知り合いは愚問とばかりに、俺たちと一緒にテーブルに座る。

「パーティ内の親睦に水を差すのはどうかと」

「一緒に冒険した仲間を忘れるなんて、水くさいではないですか」  
「やれやれだ」

俺は、ため息をついて、ジnkの着席を認める。

「何の用なの？ジnk」

テルルはジnkに問いつめる。

「用がなければいけませんか？」

「い、いえ」

ジnkの真剣なまなざしに、テルルは思わず身をそらす。

「テルルさんやセレンさんの、美しい姿を追い求めること以上に崇高な理由が、この世界にあるのでしょうか？」

「それは、・・・」

「あの」

「そんなもの、人それぞれだろうが。それに、常につきまとうのは犯罪だぞ」

俺は一般論でジnkに反論する。

とりあえず、俺には用がないようだし、安心してジューズが飲めるというものだ。

「アーベル！」

何故かテルルが俺の発言に怒り出す。

「あまり、身も蓋もない発言はどうかとおもいますよ、アーベル」  
ジnkはテルルの怒りの声に勢いづく。

なぜか、セレンも俺のほうを見て睨んでいるようだ。

俺が悪いのか。俺が？

「まあ、俺が邪魔なら失礼するが」

俺は、後は3人に任せたとして、席を外そうとする。

「あなたにも用がありますよ、アーベル」

ジnkはにこやかな顔で、俺に親書を手渡す。

「ロマリア王がぜひ、お礼をしたいと」



親書の内容は簡単なものである。  
先日の交渉が上手くいったので、お礼をしたい。  
ついては、ロマリア王宮に来てくれ。

「お礼は別にいらないが」

俺は困ったことになったと、ため息をついた。

「断る訳にもいかないな」

ロマリア王家からの招待を無下に断ることはできないだろう。  
だからといって、そのままのこのこと、礼を受け取るわけにもい  
かない。

勇者であれば、国賓待遇であるため、礼を受け取っても問題はない。  
だが、俺はただの冒険者。

そして、アリアハンの国民だ。

アリアハン王家に断り無く、別の王家から礼を受け取るのは国際問  
題となる。

特に、ロマリアとポルトガとの3カ国交渉を成功させた使者に、礼  
を与えるとなれば、ロマリアに便宜を図ったと言われかねない。

「心配しないでください」

ジンクはにこやかに説明する。

「すでに、アリアハン王には了解を取り付けています」

「・・・仕事が早いな、ジンク」

「そうでもないですよ」

ジンクは酒を飲みながら答える。

「もうすこしで、乾杯に間に合わなくなるところでした」

「遅れてもかまわないぞ」

「すてきなお嬢さんたちを独り占めですか、いけませんねえ」  
ジンは非難の目をこちらにむける。  
ふと、周囲のテーブルをみわたすと、「同感だ」という男達の声が  
聞こえる。

やっぱり、俺が悪いのか。俺が。

#### 第40話 そして、ロマリア王位へ・・・(2)

俺は、翌朝、念のためにアリアハン王の重臣達と協議していた。協議した結果は、「問題ない」とのことだった。

俺が最終的に結んだ交渉内容は、ロマリアにとっても有利な内容であった。

交渉は双方にとって有利もしくは不利だと思わなければ、まとめるのは難しい。

であれば、交渉内容に変更を要しない範囲の内容であれば、俺が個人的に何をもらっても問題ないということだった。念のため、後日報告することになったが。

俺は協議結果を受けた後すぐ、1人でロマリアに旅立った。

ジンクは、一足先にロマリアに帰ったし、セレンとテルルはアリアハンで一休みだ。

俺が戻れば、すぐに冒険が再開される。

ならば、実家にいた方が気楽だろう。

俺も1人であることを気にしなかった。

ルーラで移動するので、敵に会うこともない。

俺は、慣れ親しんだみかわしの服を脱ぎ、新調した旅人の服に着替えると、ロマリアへ移動した。

「アーベルよご苦労だった」

「はっ」

「表をあげよ」

俺は、ロマリア王の姿をみる。

ロマリア王はにこやかな顔で、俺を眺めると

「そなたのおかげで、交渉が成功した。我が望みの船も手に入れた」

「恐れ入ります」

「褒美を授けようとおもつてな」

ロマリア王は、玉座から立ち上がると俺に話しかける。

「そなたは、魔法使いだから、防具に苦勞していると聞く」

「おっしゃるとおりです」

近くにいた、ジンクに視線を移す。

どうやらジンクは、俺の言動を、王に報告したようだ。

「ではこれを受け取るがよい」

ロマリア王は召使いを呼び寄せると、盆の上に、何かが乗せてあり、その上に白い布をかぶせている。

大きさから言えば、頭にかぶるものだろう。

俺が装備できるものであれば、これは不思議な帽子なのだろう。

防御力が上がるだけでなく、消費MPを抑えることが出来る。

「ありがたくいただきます」

そういつて、布をめくると金色に輝くものがおいてある。

「・・・これは」

金のかんむりがそこにあった。

「金のかんむり・・・」

周囲の重臣達は騒然となった。

「さあ、早く身につけるがいい」

ロマリア王はにやりとした。

俺は呆然とした。

目の前のかんむりはロマリア王家の象徴。

俺に、ロマリア王位を受け取れと。

「アーベルよ、不満なのか」

ロマリア王が不思議そうに尋ねる。

「自分はロマリア国民ではありませんが？」

「王位につけば、自然にロマリア国民となる」

王はすまして答える。

確かに、王はロマリア国民に違いない。

「なぜ、俺にこれを？」

「うちの息子につがせるよりは、よかろうとおもってな」

俺は思わず、ロマリア王の息子を探すため周囲を見渡す。

「奴は今頃、カジノにいるだろう。安心して毎日入り浸りできると喜んでいた」

俺の視線に気づいたのか、ロマリア王は答えをくれた。

「……、そうですか」

息子が息子なら、親も親だ。

俺はため息をつく。

重臣達は我に返ったのか、意義を唱え出す。

「お待ち下さい、ロマリア王」

「なにとぞ、ご自重ください」

「おい、アーベル。呼ばれたぞ」

目の前のロマリア王は笑いながら俺に声をかける。

「はい？」

「王！」

「静まれ！」

ロマリア王は周囲を一喝する。

重臣達は静まりかえる。

「これを誰かに渡すことはできますか？」

俺は、最後の手段を提案する。

「1年後か、あるいは死ぬことで」

「そうですね」

前者の提案しか受け入れられない。

俺はため息をついて、冠に手を伸ばす。

「新たなロマリア王の誕生を祝して」

どこからともなく、近衛兵が登場し、ファンファーレを奏でる。

俺はいつの間にかロマリア王になっていた。

交渉だけで国を手に入れたとして、後日「交渉魔術王」と呼ばれることになる、ロマリア王アーベルの誕生の瞬間であった。

本人は、全力で否定したかったが。

## 第41話 そして、ロマリア王位へ……(3)

円卓のテーブルに4人が座っている。

俺とジンク、ロマリア王とその息子だ。

「さて、話を聞かせてもらおうか。どうしてこうなった？」

俺が知る限り、原作イベントでロマリア王になるのは、勇者だけだったはずだ。

しかも、目の前の王ではなく、その息子から一時的に王に勧められるという内容だったはずだ。

俺は、ロマリア王に答えを求めた。

「アーベル。将来の為ですよ」

ジンクが口を開く。

「将来のため？」

ロマリア王ではなく、ジンクが回答するのは予想外であったが、答えが分かれば誰でもかまわない。

俺は、話の続きをうながす。

「まずは、この国の現状を知ってもらわなければ、いけませんね」

「ご存じだと思いますが、この国には貴族がいます」

俺は頷く。

「昔、アリアハンから独立したときに、協力した者達に貴族の地位を与えました。

貴族達は、領地の管理や内政、軍事に当たる替わりに、国からの報酬と税の免除、そして多くの特権が与えられました」

ここまでは、知っている話だった。

ジンクが説明したのは、話を進めるための事前確認のためだ。

「しかしながら、モンスター達が世界を蹂躪するようになると、国土が減少していきます。」

当然、領地の管理や軍事に当たっていた貴族達は滅亡しましたが、それでも多くの貴族達は生き残りました。

やがて、貴族達を養う報酬が無くなりそうになると、貴族達は増税を提案しました」

増税の話は聞いたことがない。

「前の王は反対しました。しかし、前の王は急な病で倒れるとすぐに息を引き取りました。」

今の王は、無駄な歳出を押さえることで増税を回避しました」  
ジンクはため息をつくと話続ける。

「しかし、あと数年で限界がきます。」

そのとき、国は増税への道を進むしかありません。

しかし、安易な増税は国の国力を蝕みやがて、国自体が立ちゆかなくなりそうです」

「そうだな」

俺は相づちをうつ。

俺は、ジンクから手渡されていた資料を眺めていた。

この資料が正しければ、確実に財政破綻をきたすことを容易に確認できる。」

「国が減んでも、新たなロマリア王国が出来るかもしれません」

俺が、これまでの情報を元にすれば、同じ結論がでるだろう。

混乱した社会の中で、力のある貴族が新たなロマリア王国を築くかもしれない。

「しかし、新たな王国ができるまで、国民達はどれだけの血を流すのでしょうか」

急速な社会情勢の変化は、国民達には耐えることができるのだろうか



か。

安易に増税を求める貴族たちだ。

国民達との反発に対して、力で押さえつけることは間違いない。

とりあえず、この国の現状を把握した。

ロマリア王国の将来のことを考えれば何かをしなければならぬだろう。

そうになると、俺の中には次の質問が浮かぶ。

「私に何をさせるのだ」

俺はジンクに質問する。

ロマリア王は相変わらず黙ったままだ。

「貴族を滅ぼして欲しいのです」

ジンクは微笑みながら俺に答える。

これまでジンクが見せた顔ではなかった。  
表情に真剣味があった。

確かに貴族を滅ぼすことができれば、国家の歳出が減るだろう。

王国が抱える問題は解決するかもしれない。

少なくとも、渡された資料にはそのように記載されていた。

資料の内容を考えれば、何年も前から考えていた計画のはずだ。

俺は、だが、質問を止めない。

俺の将来の話だ、たとえ王国が相手でも、徹底的に追求する。

「何故、今の王では出来ない」

ジンクの答えは簡潔だった。

「逆に滅ぼされるでしょう」

「では、私がやっても一緒ではないのかね？」

俺はジンクをにらみつける。

計画が失敗し、ただの冒険者である俺が滅んでも、問題はないのだ

ろう。

ジンクは俺の視線をかわすことなく、話を続ける。  
おちょうしもの物の特性かどうかはわからない。

「いくつか、こちらで手段を用意します」

ジンクは手段の内容を説明することなく、俺の質問に答える。

「ただ、我々が表立って動く、すぐに貴族達の知るところになります」

計画の遂行は自分たちでやる。

ただし、今の王が行うわけにはいかない。

だから、別の王を立てる必要があると。

「私は飾りか」

「ただの飾りでは、意味がありません」

「なるほど、注目を集める程度には物事を進めると」

俺には俺なりの、王としての役割があるということか。

「おっしゃるとおりです」

「ジンクが王になればいいのではないか。ロマリア国民の気持ちを考えると、私が王になるより反発は少ないとおもっぞ」

俺はジンクに皮肉を込めていった。

俺を勝手に計画に加えるなど。

「残念ながら、私も貴族です」

ジンクは平然と答える。

「貴族がいることで国が滅びるといって他の貴族を滅ぼし、滅ぼした自分は王位に安住する。国民に許されることはありません」  
「国が滅んだあとには出来る言い訳も、滅びる前なら通用しないということか。」

## 第42話 そして、ロマリア王位へ……(4)

「どうして、私を選んだ」

あらかじめ、ジンクとロマリア王にこの計画があったことは理解した。

だが、王を俺にした理由がわからない。

「あなたが、この国に交渉を持ちかけた時に決めました」

「私の交渉術があれば、対応できると」

「それだけでは、ありません」

ジンクはテーブルに置いてある水を口に含むと、話しを切り出す。

「あなたは、やがて魔王が倒されて、世界が平和になると考えていますね」

「まあ、人間同士の争いが始まるだけかもれないが」

俺も、水を口に含んでから、話を続ける。

「それでも、しばらくは先の話だろう。こんなにも荒野が開けているのだ」

ロマリアはモンスター達の襲撃で国土が縮小した。

モンスターがいなくなれば、やがて国土が回復するだろう。

「あの、勇者オルテガですら成しえなかった魔王討伐が、達成されると本気で考えているのか」

ロマリア王が質問する。

「まあ、そうですね。今の勇者がオルテガより弱くても大丈夫でしょう。彼の敗因は1人で戦ったことにつきます」

ジンクが頷く。

「あなたがいうのであれば、間違いないでしょうね」

「だからこそ、あなたに世界が平和になった先を見据えた指針を作

ってほしいのです」

「誰も、世界が平和になった先のことを考えていないから？」

「多くの人は、その日の暮らしのことを考えるだけで精一杯です」

「しかし、おぬしはそうではないようだ」

ロマリア王は口をはさんだ。

「本来であれば、息子の役割なのだろう」

王の息子は、残念そうな顔をする。

「息子にはその才能がないのだ」

ロマリア王は俺に頭をさげる。

王の息子も俺に頭を下げた。

俺は、ジンクの考えを理解した。

暇であれば、計画に参加してもいいだろう。

元国王という称号は、いろいろと役に立つはずだ。

だが、俺には優先すべき事がある。

だから、この質問をする。

「私が断ったら、どうするのだ。裏切って貴族に取り入るかもしれないぞ」

「この国の将来が分かった以上、貴族に取り入っても意味が無いことぐらいわかりますよね」

「俺が替わりの王を見つけることくらい、簡単ではないのかい」

「そうすれば、アーベルの退位と同時にポルトガとの秘密交渉を公表します」

くるこしよつで利益を上げる計画のことか。

確かにあの交渉は国家権力を私的に使用したとも言われかねない。

ロマリアの法律上、少し法に抵触しそうなところがあることは知っ

ている。

もちろん罰せられるのは、ジンクだけであるが。

当然、アリアハンの法律では問題のないことは事前に確認している。

「自分の在位中に合法化し、讓位の条件にすればどうする」

それでも、自分を正当化できる方法を持ち出して、ジンクの反応を確かめる。

「アーベルの冒険はそこで終わりですね」

「終わるとは？」

「私の特技をご存じですか」

俺は、ジンクと最初にあつた日のことを思い出す。

「イオナズンだったが、まさか・・・」

俺は思わず声をあげる。

「本当は、メラゾーマの方が得意なのですがね。インパクトが違うのでイオナズンと言っています」

ジンクは呪文を唱えると、俺と同じ姿にかわる。

ジンクは変身呪文モシヤスを使ったのだ。

モシヤスはイオナズンよりも低いレベルで習得可能な呪文だが、火の最強呪文メラゾーマよりも高いレベルが必要だ。

今の俺では、メラゾーマの一撃で死ぬだろう。

俺はため息をついてから、確認する。

「お前は、2回も遊び人を経験したのか」

「都合がいいですからね、このようなときは」

ジンクは平然と答える。

俺の姿のままに答えるのは違和感があるが、ここは我慢するところなのだろう。

俺は黙って話を聞く。

ジンクは、俺の姿のまま説明する。

「さすがに賢者のレベルがあがりましたが、私が話す経歴だけでは見抜く人はいないでしょう」

俺も気づくことはなかった。

「最初に遊び人で次に僧侶です。とはいえレベル20で転職しましたが」

ジンクにかかっていた、モシヤスの効果が切れたようだ。

元の姿にもどったことに、俺はなぜか安心する。

ジンクは、俺の反応を無視して話を続ける。

「その次に魔法使いをレベル38まで経験して、再び遊び人になり現在の賢者にいたりします。

まあ、今ならあなたにステータスをお見せしても問題ないでしょう」俺は、ジンクから初めて完全なステータスシートを見せられた。

習得呪文を見る限り、ジンクの話に嘘はなかった。

俺からの最後の質問だ。

「どうして、ジンクは協力するのだ？」

「おちようしものだからですよ」

ジンクはようやく、いつもの顔に戻った。

「世界が平和になっても、自分の国が滅んでは意味がありません。

そして平和になったとき、一緒に笑える仲間がいなければ、おちようしものとして生きてきた意味がありません」

俺の計画に見直しが必要だということを思い知らされた。

仕方がない。

俺は、少しでも早期に問題を解決する事を考えていた。



第42話 そして、ロマリア王位へ……(4) (後書き)

第3章の完結です。

一区切りということ、評価をしていただければ幸いです。

第4章は旅にでません。ひきこもりではありませんが。



### 第3章終了時点でのステータス（前書き）

アーベル達のステータスです。

テストプレイ時の状況です。

見なくても話とは直接関係ありませんので、無視してもらってもかまいません。

### 第3章終了時点でのステータス

#### 第3章終了時点のステータス

テルル

商人

ぬけめがない

LV：18

ちから：38

すばやさ：38

たいりよく：52

かしこさ：36

うんのよさ：32

最大HP：106

最大MP：70

攻撃力：76

防御力：77

EX：22004

鉄の斧、みかわしの服、魔法の盾、毛皮のフード

セレン

僧侶

ふつう

LV：17

ちから：38

すばやさ：33

たいりよく：49

かしこさ：42

うんのよさ：54

最大HP：100  
最大MP：78  
攻撃力：73  
防御力：80  
EX：22004  
ホーリーランス、みかわしの服、魔法の盾、鉄かぶと

アーベル  
きれもの

LV：17  
ちから：17  
すばやさ：35  
たぐいよく：34  
かしこさ：68  
うんのよさ：52  
最大HP：69  
最大MP：136  
攻撃力：25  
防御力：67  
EX：22004  
ブロンズナイフ、みかわしの服、魔法の盾、皮の帽子

ジंक

けんじゃ

おちょうしもの

LV：8

ちから：30

すばやさ：50

たぐいよく：57

かしこさ：44

うんのよさ：100

最大HP：116

最大MP：86

攻撃力：68

防御力：61

EX：1708

ホーリーランス、くさりかたびら、鉄兜

### 第3章終了時点でのステータス（後書き）

とりあえずおまけとして各章の終わりに公開する予定です。

### 第3章までのあらすじ（前書き）

これまでのあらすじを追加しました（7月12日）。  
飛ばしてもらってもかまいません。

### 第3章までのあらすじ

どうして、こうなった。

俺は、大魔王ゾーマを倒すために旅をしていたはずなのだ。  
なのに、どうしてロマリア王として、仕事をせねばならんのだ。

やはり、派手に活動したのが裏目に出たようだ。

しかし、仕方なかったのだ。

俺たちが冒険を続けるためには、ポルトガ王国が所有する船が必要  
なのだから。

原作の知識をフルに活用した俺を目の当たりにした、ロマリアの使  
者である賢者ジンクに目をつけられて、前のロマリア王から王位を  
譲られてしまったのだ。

ロマリア王の巧みな誘導によって。

しかも、俺が王を辞めるには、死ぬか1年経過するしか手がないの  
だ。

俺はまだ死にたくない。

となれば、一年間は王としてがんばるしか残された道はなかった。

頭が痛い。

おい、その君、俺の代わりに・・・

「どうしましたか、王様？」

「・・・なんだ、ジンクか。服装が違うので別人だと思ったよ」

第43話 迷ったら 現場に戻れと 言われても 俺の現場は 何処にあるや

日頃より、ご愛読いただきましてありがとうございます。

第4章は国政モードのため、独自解釈部分がほとんどを占めます。

「こんなのドラクエ3じゃない！」

と思われるかもしれませんが、

「僕のかんがえたドラクエ3」ということで

暖かい目で見守ってください。

各話のタイトルも4章だけは、別にしました。

ネタが尽きた訳ではないはず。ないはず。ないはずです。



第43話 迷ったら 現場に戻れと 言われても 俺の現場は 何処にあるや

「さて、どうするか」

誰もいない寝室で、俺はため息をつく。

ジंकウとの話が終わり、与えられた寝室で寝ていた。

とはいえ、寝ることもせず、これからの事を考えていた。

まずは、基本に戻って、考える必要があるな。

前の世界での、職場の上司の言葉だ。

「迷ったら、まずは現場に戻れ」

ただ、上司の職場にとっての現場は庁舎内にしかなかった。

おそらく、上司の大好きな刑事ドラマから仕入れた話だろう。

ちなみに俺が好きな刑事ドラマは、ト……。

……、話を戻すか。

俺の旅の目的は、勇者がバラモスを倒す前に、ゾーマを倒すことだ。

そのため、勇者が旅立つ2年前に俺は旅に出た。

まず、移動手段である船を手に入れた。

今後の予定を思い出す。

次に、経験値を稼いで、自分たちの戦力を強化する。

そして、地下世界への道を探す。

また、ゾーマを倒すために必要なアイテムを入手する。

最後にゾーマの城に侵入し、ゾーマを打ち倒すのだ。

このシナリオの中に、ロマリア王になるという必要性は皆無である。

だから、頼まれても断ればいい。  
SFC版なら断ることが出来たはずだ。  
さらに言えば、ゲームでは王様になれるのは勇者だけのはず。  
どうしてこうなった。

「いや、済んだことはしかたない」  
俺は首を振る。

まだ、計画は失敗したわけではない。  
であれば、今後の事を考えるのだ。

王の在位は最低1年。

法律を変えれば、短くなるかもしれないが、出来ない可能性のほうが高いだろう。

出来るのであれば、あの場で重臣達が俺に進言したはずだ。  
俺が王位についても、利があるとは思えないからだ。

また、王位から逃げ出すこともできない。

既に、各国の王に俺がロマリア王に就任したことが知らされているはずだ。

今から俺が逃亡すれば、国際指名手配されるだろう。

逃げ出した場合、確実にロマリア王国の探索の手が伸びる。

ジंकが探索隊を率いるだろう。

そして、ジंकに襲われたらひとたまりもないのは、確実だ。

であれば、俺がロマリア王として一年間で何ができるのか考える必要がある。

まずは、ジंकからの依頼の解決だろう。

それが解決出来ない限り、俺は王位を誰かに譲ることができない。協力しないとわかったとたん、消されるかもしれない。

ひよっとして、殺された王は、貴族ではなくジンクや前の王に殺されたのか。

一瞬背筋が凍り付いたが、ぶるぶると体を振らしてその考えを消し去る。

依頼の解決を果たせば、ある程度行動の自由を得ることができらるろう。

ドラゴンクエストの別シナリオのように、王様のままで冒険を続けることが出来るのかもしれない。

早く行動の自由を取り戻すために、どうすれば問題が解決出来るのか。

ジンクの考えた提案内容を十分検討する必要があるだろう。だがその前に、俺が知らなければならぬことがある。

ジンクが排除すべきと提案した、貴族達のことだ。

貴族達の立場からの話をきちんと聞かない限り、動くのは危険だ。

3カ国交渉の時とは話が違う。

ジンク達の提案は、利害対立の調整ではなく、相手の完全な排除である。

今回失敗すれば、直接我が身の破滅となる。

俺は、中心となる大貴族達の話を書くことを決めた。

第43話 迷ったら 現場に戻れと 言われても 俺の現場は 何処にあるや

第44話 「話を聞くだけだ」と言われて、本当にそれだけだった話

ロマリアには現在、四大貴族が存在する。

ロマリア王国建国時に功績のあった者達を貴族に叙任したのだが、そのなかでも特に活躍した12人に大貴族の称号を与え、他の貴族達と別の扱いをした。

大貴族はモンスターの襲撃等によりその数を減らし、現在では四大貴族としてロマリア王国に君臨している。

今日は王として、初めて四大貴族達と話をする事になっていた。俺が四大貴族達を見たのは初めてではない。はじめて見たのは、最初にロマリア王に交渉を持ちかけたときだった。

だが、その場で話をする事もなかった。

俺たちは、円卓のテーブルに座っていた。

「さて王よ、話を伺おうか」

全身筋肉という感じの男が声を上げる。

この男が、近衛軍総統ヴァルゴ家の当主デキウスである。

年齢はすでに40を超えているが、その力は衰えず、ヴァルゴ家史上最強と言われている。

だが、自らの力を過信するあまり、他の貴族や俺を見下す姿勢が見られる。

俺のことなどは、「口先だけで王位に就いた」と公言してはばからない。

実際は「就いた」が「就かされた」の違いがあるが、訂正すればさらに恥ずかしい話になるので、俺は訂正はしないことを決めていた。

今回最初に話を切り出したのは、早く話を終わらせて、武術の鍛錬の時間に充てるつもりのようなのだ。

「自分はこの国で生まれた訳ではない」

別の世界から来たことは言えないな。

「この国のことは、冒険者で会ったときとアリアハンで知った知識しかない」

俺は前の王を含めて全員を見渡す。

「であれば、前の王を含めて重臣である皆さんと協力して、国を運営しなければならぬ。」

しばらくは、これまでどおりとして皆に任せることになるが、今の時点で自分に伝えるべき事があれば、話して欲しい」

デキウスが口火を切る。

「王よ、これまでどおりなら話すことはない」

「そうか」

「そうだ」

デキウスは挑むような目つきで、俺をにらみつける。

「わかった。よろしく頼む」

「ふん」

デキウスは、口先だけは立派だなど言いたげな様子だ。

「デキウスよ。鍛錬がしたいのであれば、帰って良いぞ」

デキウスは喜んで立ち上がる。

「さすが、口先で王になっただけのことはある。失礼する」

デキウスはそのまま部屋を出た。

他の貴族は驚いたが、デキウスの対応をみて苦笑する。

「デキウスらしいな、落ち着きの無い奴め」

白髪で長髪の老人が俺に声をかける。

財務大臣を務めるライブラ家の当主ガイウスだ。

ジンクからの話では、国家財政を担いながら、商業ギルドとの癒着で財を蓄えている強欲爺さん、と言うことだ。

「わしから、話すべき事は税率の引き上げだな」

他の重臣のうち若い者はうなずき、中年の男は険しい表情をする。

ちなみに、前王は座っているが話をしないよう、あらかじめ釘をさしている。

ジンクは重臣ではないので、部屋の入り口で待たせている。

「デキウスがいないから言うわけではないが前置きをしてガイウスが説明する。」

「兵士があまりにも多すぎる。」

兵を減らすか、給金を引き下げないと将来が問題だ」

若い重臣はうんうんとうなずき、中年は困ったような顔をする。

「他にもあるが、細かい話だ。今言うことはそれだけだ」

デキウスと異なり、ガイウスはそのまま話を聞くようだ。

普通はそうするものだが。

「さて、マニウス。君の話を聞くわけではないか」

「そ、そうですな」

ガイウスから話を振られた中年の男は、しどろもどろに話し始める。

内務大臣マニウス。スコルピオ家の当主だ。

見るからに小心者で、実際小心者だった。

「わたしの方からは、特に・・・」

「それなら、わしのほうから話しをしよう」

ガイウスが突然話を引き継いだ。

「今、財政が厳しいのだが、徴税員が不足しているのも原因である」

「あ、あの・・・」

「マニウスは、優秀な官僚集団をかかえているのだが、何人かを回してほしいのだ」

「そ、それは……」

マニウスは額に汗を流し、しどろもどろに返答する。

「マニウスは、国家財政が厳しい折、手伝うのを拒むつもりか？」

「い、いえ。そんな……」

「おまちください」

俺が口を出す。

「今、決めるという話ではありません」

「では、いつ決めるのだ。国が傾いてからでは遅いのだ」

「一月や、二月で傾くほど、徴税員が不足しているとは思えません  
が。違いますか？」

「……」

ガイウスは沈黙する。

「マニウスよ」

「は、はい、アーベル王さま」

「特になければ、話を進めてもかまわないかな」

「はい」

俺は、若い重臣に視線を移す。

彼の名はレグルス。外務大臣を務めるカプリコーン家の当主だ。

レグルスは挑発的な目を向ける。

若いと言っても、20代後半だ俺よりも10歳は年上なのだ。（見た目の年齢が）

「今後の交渉は、全て私にまかせて欲しいものですな」

レグルスは不満そうに口を開く。

レグルスの不満はもつともだ。



3カ国交渉の担当は外務大臣である自分のはずだった。

ところが、ジンクという元遊び人が担当になり、手柄をあげたのだ。

ジンク自身は、誉められただけで終わっただが、俺が王になってしまった。

自分が交渉役をしていれば、今頃自分が王になっていたと思うのも根拠のない話ではない。

まあ、前の王がそれを行うはずはないのだが。

「当面、外務大臣が必要な状況ではありませんが」

俺はレグルスに軽く会釈する。

「お任せします」

「わかった」

レグルスは一瞬意外な表情を見せたが、無然とした表情に戻って頷く。

「では、今日のところはこのへんで」

俺は四大貴族を下がらせた。

「さて、話があるのだが」

俺はジンクを席に座らせると話を切り出す。

「もう一度確認したい、この国をどうしたいのかを」

**第44話 「話を聞くだけだ」と言われて、本当にそれだけだった話（後書き）**

四大貴族を始め、12大貴族については独自の設定を考えておりません。

家名の付け方については、気付いた方もいるかもしれませんが、私が忘れっぽい性格なので、覚えやすくしました。

## 第45話 だからこそ、手段を選ばなければならない

「もう一度確認したい、この国をどうしたいのかを」  
俺は、2人に話しかける。

「あなたがたが、国を救うため俺を王にしました」  
ジンクと前王は頷く。

「俺が新しい体制を築く間、あなた達が貴族を滅ぼすと」  
「そうだ」

「あれから、一晩考えたのですが」

俺はため息をついて俺なりの回答をする。

「駄目ですね、今の計画は」

前王は俺を睨み付け、ジンクは冷静な表情で話を聞いていた。

「アーベルよ、何が駄目なのか教えてくれ」

「あなた達のやり方では、先がありません」

「先がないとは？」

「確かに今のままでは、財政がもたない。その通りでしょう。  
そして、今の貴族達には問題がある。そうかもしれませんが。  
だからといって、安易に貴族を排除すれば、将来のロマリア王国に  
とって問題になります」

「問題があると」

前王は質問する。

「問題を解決するためには手段は選ばない」

今のロマリアの状況を示す言葉かもしれない。

前王とジンクは頷く。

「俺が嫌いな言葉の一つです」

2人は目を見開く。

「・・・」

「俺のこれまでの人生は恵まれていたので、贅沢だと言えるのかも  
しませんが。本当に問題を解決するのであれば、絶対に手段は選  
ばなければなりません」

ジンクと前王は黙って聞いていた。

しばらくして、ジンクは確認するために口を開いた。

「アーベルは、貴族を滅ぼすのが手段として妥当ではないと？」

俺は頷く。

「財政問題を片づける手段としては問題がありませんが、ロマリア  
王国の事を考えると大問題です」

「どうということだ？」

「貴族を滅ぼしても、今の状態が続くだけで、やがて、叛乱が起こ  
るでしょう。これまで国を支えてきた人々を軽んじたとして」

ジンクは不満そうな表情をする。

「確かに、いまの大貴族が国を支えているかといわれれば、疑問符  
が付くかもしれませんが」

「だが、国民達はどうでしょう。昔話で、建国時からの支援者の子  
孫を簡単に滅ぼしたらどう考えるか」

どこの国でもそうだが、ロマリア王国の正当性を子孫に伝えるため、  
神が認めたとか、英雄達が国を作ったと伝説や昔話を広めている。

「その後、あなた達は新しい体制を築くはずですよ」

新しい体制は、貴族達の犠牲を基にして作られる。  
たとえ、貴族達の得た権益が過分だったとしても。

「そのとき、誰がついて行きますか？」

建国時に貢献した子孫達を切り捨てる。

当然、ジンク達は切り捨てるだけの「正当な理由」を用意するだろ  
う。

だが、新しい国を支える者たちからすれば、いつかは自分たちの番が来ると思うだろう。

そのような状況で、俺やジンク、そして前王に誰がついていくのだろうか。

ジンクと前王は沈黙したままだ。

「新たな体制に、さきほどの話に出ていた、マニウスの家臣達を使えばいいかもしれません。

ですが、マニウスを処分したあとで、彼らが従うでしょうか？

彼らは、自分たちの給与が国からではなくマニウスから出ています」  
彼らの忠誠心は何処を向くのだろうか、普通に考えればマニウスにつくだろう。

逆に簡単に忠誠心が動くようであれば、何かあれば、すぐに別のところに忠誠心は移動するだろう。

「デキウスはどうでしょうか」

近衛兵総統の事を指摘する。

「彼を見る限り、個人的な武勇のみあるようです。

しかし、彼自身は資産については、私欲が無く、周囲の兵からは敬意を受けています」

「その彼を処分できますか？」

「まあ、ガイウスは仕方ないかもしれませんが」

俺は、財務大臣の事を話す。

ジンクから受け取った資料をみれば、十分処分に値する罪が記載されていた。

「だが、彼らの子孫にまでその処分を求めるほどの内容でしょうか？」

ロマリア王国の法律からすれば、子孫まで処罰をあたえることが可能だ。

処罰を与えた当時は、国民も賛成するかもしれない。  
しかし、時間がたてば厳しすぎるとの声が出るはずだ。

「最後に外務大臣のレグルスです。

俺やジンクに不満を持っているのはあきらかです。

だが、それだけで処分をすれば国民はどう思うでしょうか？

そして、彼は就任してまだ間がありません。

機会を与えていない相手に、処分を与えるのは問題です」

俺はひとしきり話し終わると、水を口につけ、2人の反応を伺う。

「ではどうすればいいのかのう」

「ただ、あれもだめこれもだめでは、このまま国が滅びるぞ」

「この国の崩壊を防ぐのなら、攻めるしか無いでしょう」

俺は2人に切り出した。

#### 第46話 計画名「これから考える」（名称をという意味で）

「この国の崩壊を防ぐなら、攻めるしか無いでしょう」  
俺はジンクと前王に切り出した。

「攻めるとは？」

「モンスターに蹂躪された土地を奪回します」

「本気か？」

「本気です」

俺は即答する。

「土地を奪還するためには、かなりの軍勢が必要だ」  
前王の言葉にジンクは頷く。

「そして、多くの命を失いかねない」  
ジンクはこれまでの経過を説明する。

ロマリア王国でも、これまで何回か奪回計画を企てたこと。  
そのたびに周辺のモンスターが集まり、兵が全滅したこと。  
今では、近衛軍総統のデキウスですら出兵論を言わない。  
「アーベル。無謀だと思わないか」

俺は、ジンクの質問に答えず、袋からお金を取り出す。

「これは、モンスターを倒したときに入手できるアイテムです」  
ゴールドと呼ばれるアイテムは、モンスターを倒した後に出現する。  
「この物体は、モンスターを生成する場合の触媒と考えられており、  
魔王の邪悪な力でモンスターが生成されていること、一度人の手に  
触れると、直接魔王が触れない限り、二度とモンスターには戻らな  
いと言われています」

ジンクと前王は神妙な顔で頷く。  
俺の言った話は知っているが、俺がいったい何が言いたいのかわからないという顔だ。

「つねづね疑問に思うのですが、この話は本当なのでしょうが？」  
俺は、2人に質問する。

「……」  
ジンクも前王も答えない。

「普通は魔王に聞かない限り、確認出来ない話ですよね？」  
「！」

2人は驚愕する。

しかし、ジンクは俺の話に反論する。

「ロマリア王国に伝わる話では、魔王が現れてから、モンスターが出現したとあります。

きっかけは、ジンクの話のとおりかもしれませんが」

「しかし、反証をあげる事ができません」

俺は、説明を続ける。

「先日、ある洞窟でモンスターを倒し続けていました。

しかし、いくら倒しても、しばらくすると再出現します。これはどういう理由でしょうか？」

「……」

「いちいち魔王が触れるとは考えられません。

逆に、触れなくてもモンスターを生成することができるのであれば、逆に世界を滅ぼしているでしょう」

俺は、自分なりの結論を導き出す。

「魔王を倒しても、モンスターが消えない可能性があります」  
「……」

ジンクも前王も驚愕して声が出なかった。



モンスターが消えない可能性については、ノアニール西の洞窟での戦闘経験から推論していた。

それ以外の判断理由として、前世でのゲームの経験も考慮に入れていた。

当然、この世界の住人に話す内容ではないが。

俺は、前世でドラクエ3をクリアしている。

クリアした場合、モンスターは一切登場しなくなるが、それはこの世界ではなく、下の世界での話だ。

ゲームシステム上、この世界に戻ることができないため、確認することはできなかった。

そうになると、下の世界だけモンスターが登場しないシステムが反映されることも、可能性としては考えなければならない。

さらに言えば、クリア後の世界でもゲームシステムとして、モンスターが引き続き出現しているということも考慮に入れなくてはならない。

俺としては、ゾーマ討伐後、モンスターが引き続き出現するかどうかという、二つのシナリオを考慮に入れる必要があると思っている。

昔は、単純にゾーマを倒せばモンスターは消えると考えていた。

だが今の俺の予感では、引き続きモンスターは出現すると考えている。

俺の場合、悪い予感の方がよく当たる。

「だからこそ、魔王を倒す前に少しでも領土を回復する必要があるのです」

魔王を倒しても、モンスターはいる。

なにもしなければ、国民に絶望感を与える可能性が高いだろう。

「だが、考えはあるのか？」

「あります」

俺は、自分の計画を話しはじめた。

第46話 計画名「これから考える」（名称をという意味で）（後書き）

（2011年9月6日追記）

先日、SFC版ドラゴンクエスト?の取扱説明書を確認したところ、魔王バラモスの出現時期が「10数年前」と記載されていることに気付きました（6ページ）。

私が、記載の部分を誤って「数十年前」と勘違いしたために、本作「ドラゴンクエスト? 勇者ではないアーベルの冒険」の設定が原作と異なっていました。

当初は、原作の設定を生かして修正すべきと考えましたが、第4章の内容を大幅に修正することとなり、  
? 大幅な修正内容を再度読んでもらうほど、面白い変更にはならな  
いこと

? 変更に要する期間は更新ペースが確実に落ちること  
から、原作との相違点として、現在の設定をそのまま使用します。

## 第47話 ロマリア王の陰謀

俺は、かつて冒険者だった。

短い期間ではあったが、様々な国を回った。

しかし、自分が王になることは想像もつかなかった。

王になってから、10日が経過した。

いろいろなことがあった。

戴冠式は省略したので、国民は新しい王が誰かあまり知らない。

それでも、前の王の息子では無いことが知れ渡ると、国民からは半分の不安と半分の安心があったようだ。

前の王の息子が、何も遠慮をすることなく毎日闘技場に通い続けているからでもある。

この息子は、「これも壮大な計画の一環である」と俺に答えるが、彼の表情を見る限り、とても信じることはできない。

本当に計画の一部であれば、この男に喜んで王位を譲ってやるつもりだ。

計画の一部でなくても王位を譲るつもりだが。

ロマリア王は引退して、王宮の一室で生活を続けている。

王の政務を引き継ぐため、俺のところにはほとんど毎日通っている。

王の引き継ぎはしっかりしていて、誰にでも引き継ぎが出来るようになっていた。

まあ、当初は息子に引き継ぐことを想定していたからだろう。

そう考えた俺はにやりと笑い、前の王は苦笑した。

まあ、親バカなのだろう。

ジンクは、新王の即位を各国に知らせるために旅立った。キメラの翼を使うので、敵に出会うこと無かったようだ。魔法使いの経歴を隠すため、ルーラは使わないとのこと。俺よりも、しっかりしていると感心するが、

「おちようしものですから、役になりきるのは得意です」と、ジンクから納得できるような納得できないような返事を返されると、俺は苦笑するしかなかった。

ジンクは、アリアハン王に報告するとすぐに戻ってきた。一緒に冒険していた、セレンとテルル、そして母親であるソフィアを連れて。

「」即位、おめでとうございます」

「・・・息子への挨拶として、どうかとおもっが」

母ソフィアは、正装して王宮に登場し、俺の前に跪き挨拶をする。

「ここには、アリアハンの使者として参上しましたからソフィアは平然と答えた。

「」どうということなの、アーベル！」

テルルは机をたたきつけ、俺を問いつめる。

「・・・」

セレンは黙ったままだが、俺を強く睨んでいる。

セレンからここまで強く睨まれたのは初めてだ。

そして、母ソフィアが優しい口調で俺に問いかける。

「説明しなさい、アーベル」

母ソフィアの表情は、しかし有無をいわせない強い意志がしめされていた。

「……はい、かあさん」

即位後に俺とジンク、ロマリア王とその息子との4人で会話した円卓のテーブルが置いてある一室。

防諜機能が完備されていることから、ロマリア王が密談を行うために使用する部屋である。

俺は、再びこの席についていた。

他に席についているのは、母ソフィアとセレン、テルルである。

ジンクは部屋の入り口で護衛をしている。

ちなみに、ジンクと母ソフィアとは知り合いで、同じ師匠の下で修行をしていたらしい。

母親に対して「師匠から、イオナズンを何種類伝授されたのか」を質問したかったが、何かが終わりそうな気がして、恐ろしくて聞くことが出来なかった。

俺は、ロマリア王に招待されてからの出来事を話す。

前の王から急に譲位され、辞退する事が不可能だったこと。

1年間は王位に就かなければならないこと。

1年後には、前の王の息子に王位を譲ること。

それまでは、冒険を続けることが出来ないことを説明した。

「……すべては、ロマリア王の陰謀だったのだよ！」

俺は、最後にこういつて締めくくる。

「すごいですね。アーベル」

「そうだったの」

「わかったわ。アーベル」

とりあえず、3人は納得してくれたようだ。

部屋の入り口で、ジंकが「な、なんだってー！！」と叫んでいるが、俺たちはまったく気にしてはいなかった。  
母は一言、「師匠のまねかしら？」と首をかしげていた。

第47話 ロマリア王の陰謀（後書き）

次に続きます。



第48話 「結婚してくれ」と言われた。親からだった。

「私は構わないけど、2人はどうするのよ、アーベル？」

ソフィアはセレンとテルルに視線を移しながら俺に聞いた。だす。

「それは、聞いてみるしかないな」

俺もセレンとテルルに視線を移す。

「それは、・・・」

「急にいわれても」

「そうだよな。まあ、時間はあるのでゆっくり考えて欲しい」

俺にとつても、急な話だが、2人にとつても急な話だ。

だが俺と違って、計画をもって冒険をしていたわけでもない。

「1年したら退位するので、そのときは再び一緒に旅をして欲しい」

「はい」

「・・・、仕方ないわね。わかったわよ」

セレンは素直に頷き、テルルはすねた顔をしてうなずいた。

2人とも、少し顔を赤くしているが、それほど怒っていないようなので少し安心する。

「セレン、テルル。せっかくだから、この王宮で生活してみたら？」

ソフィアは急に2人に提案する。

「ですが、私たちアリアハンの国のものですが」

テルルが反論し、セレンが頷く。

「そうね。でも、アーベルと結婚すれば王妃になれるから問題ないわよ」

確かに俺も即位したから、ロマリア国民になった。

その理屈からすれば問題ない。

いや、大問題だ。

俺たち3人は反論する。

「・・・、急にそんな」

「け、結婚なんて!」

「母さん。2人同時に結婚をすすめるのはおかしいでしょう」

「あら、そうかしら。側室という手もあるわよ」

ソフィアはにこにこしながら、俺の反論に新しい爆弾発言を投げつけた。

「側室ですか、・・・」

「アーベル!何考えているの!」

「おい、テルル。提案したのは母さんだ。俺じゃない」

セレンは何か真剣に考えている様子だし、テルルは逆に、俺に文句を言い出す。

俺は悪くない。

悪いのは、変な提案をした母さんだ。

「変な提案とは失礼ね。ロマリアの法律ではちゃんと認められているわよ」

「ああ、そうですか、そうですか」

俺の王としての仕事の一つ増えたようだ。

俺が王位にいる間は、側室制度を廃止しよう。

「とりあえず、話がややこしくなるから、俺が王位にいる間は結婚しないよ」

「あらそう、残念」

ソフィアは心底残念がった。

「結婚すればいいのに。国王の結婚式ならさぞかし、盛大だったでしょうに」

ソフィアは昔のことを思い出したのか、ため息をつく。

ソフィアにつられて、セレンとテルルも想像して顔が赤くなる。

セレンもテルルもまだ16歳だ。

面会したときに会った前王妃の姿を見れば、結婚式に心をときめかすのも無理はない。

「それに、費用は全部ロマリア王家の財産から捻出されるので、我が家の家計は痛まないし」

ソフィアは、急に現実的な話を振ってくる。

「いや、そんなことで王家の財産を浪費するつもりはないよ」

俺は、ため息をついて母に反論する。

ロマリア王国の財政の危機に、余計な支出は避けるべきなのだ。結婚特需で、一時的な税収の増加も期待できるかもしれないが、優先すべき問題が別にある。

「アーベル！結婚式を「そんなこと」とか「浪費」とか言うなんて失礼よ」

「えっ」

「アーベル。2人に謝りなさい」

ソフィアは笑顔で俺をにらみつける。

「……ごめんなさい」

論点がずれているとおもいながらも、俺は素直に謝った。

ソフィアのことだ。絶対にわざと論点をずらしているはずだ。

だったら、下手に逆らっても無意味だ。

「ですが、2人が望むかどうかは別問題です」

「2人とも結婚したいでしょう」

セレンとテルルは思わず俯く。

俺は2人を援護する。

「結婚はしたいでしょう。でも、俺と結婚したいはかぎりませんよ」

「そうかしら？」  
ソフィアは俺に疑問を呈する。

「それに、結婚してもそこが終わりではないのです。あたらしい、始まりなのです。そこまで考えないと、不幸になりますよ」「結婚が、終わりの始まりとか言われたら悲しいではないか。

今の両親をみれば問題はないが、前世の事を思い出すと、無計画なのは問題があるだろう。

まあ、俺もまだ16歳だ。年齢的にも結婚はまだ先になっても問題ないはずだ。

こんな事を真面目に言えば、夢も希望もない子どもにしか見えないだろうが。

「アーベル。すごいです」

「セレン。そこは感心しなくていいところよ」

「アーベル。そんなことを言ったら一生結婚できないわよ。勢いよ、勢い」

ソフィアは一目惚れで結婚した。

そして、幸せに暮らしている。

俺がいくら説明しても、経験者の一言にはかなわない。

残念ながら、俺はこの世界での離婚率のデータを持ち合わせていなかったし。

「とにかく、冒険が終わるまで結婚はしません。ちなみに、この状態は冒険が終わったわけではありませんから」

ソフィアに反論されないよう、あらかじめ釘をさす。

「それは残念。せつかく可愛い娘ができると思ったのに」

どうやら、ソフィアの目的は俺が結婚することよりも、可愛い娘が欲しかったようだ。

「まあ、たまには顔を出してくれ」

俺は、2人をお願いした。

公務は忙しくなると思うが、用事が済めば、冒険者として旅をつづけるのだ。

たまには顔をあわせて、今後の計画を相談する必要があるだろう。

「はい」

「わかったわ」

「私も久しぶりに旅にでようかしら」

「・・・母さんは、自重してください」

ソフィアはアリアハンの宮廷魔術師だ。

しかも、歴代で最強の。

冒険者に戻るといわれると、アリアハン王国が全力で引き留めにかかるとは。か。

なんとか、ソフィアを納得させることはできた。

とはいえ、別の旅を提案したことになるのだが。

第48話 「結婚してくれ」と言われた。親からだった。（後書き）

久しぶりにソフィアの登場です。

本作とは関係ありませんが、久しぶりに「まえがき」斑鳩茂市作品集（まえがき部分のみ収録）を追加掲載しました。

一話完結もので、どこからでも読むことが出来ます。  
作風は全く違いますが、お暇でしたらごらんいただけたら、幸いです。

## 第49話 事前説明という名の根回し

俺がいつも使用する、王宮の会議室。

円卓の机には俺と前王、近衛兵総統デキウス、そしてこの国の冒険者ギルドの長がいた。

デキウスはあいもかわらず、おもしろくなさそうな顔をしている。早く終わって、訓練に励みたいようだ。

ならば、黙って聞いていて欲しい。

そして、冒険者ギルドの長は値踏みをするような目つきで俺を眺めている。

当然彼は、俺の能力を知っている。

「血縁でもないのに、なんでこんな奴が王様に」  
恐らく、そんなことでもかんがえているのだろう。

まあ、口には出さないのが本当のところはわからないが。

口を開いたのは、デキウスだった。

「今日はいつたい、なんの話だ」

予想通り早く話を終わらせろという口調だった。

俺は、デキウスの希望に応えることにした。

「これから行く、領土解放計画についてです」

「領土解放？」

「！」

デキウスは「何のことだ？」という顔をして、ギルドの長は驚愕を隠せないでいる。

それもそのはず、これまでモンスターの侵攻を食い止めたという話はある、領土を復活させたという話は聞いたことがない。

訓練やモンスター退治に明け暮れるデキウスですら「それは無理」

と考え、提案すらしたことがなかったのだ。それを、他国から来たばかりの口先だけの王様が、言い出すことは信じられない。

それが、疑問符や驚愕の答えになったのだ。

「口先だけなら、何でも言えるということか」

デキウスは殺気を込めて俺を睨む。

俺は内心ひるみそうになったが、耐えることができた。

復活可能とはいえ、この世界で命のやりとりをした経験が、生きている。

俺は、冷静に答える。

「そうですね、あなたがたの力を借りなければ口先だけになるでしょう」

「近衛兵の力があれば、可能だと？」

デキウスは俺を見下すような顔をする。

「解放計画は建国以来、何度も行われてきた。だが誰も成功していない」

「どうしてでしょうね」

俺はデキウスに問いかける。

「決まったことだ、モンスターどもが集団で襲ってくるからだ！」

デキウスは机を叩きながら答える。

俺は無視して質問を続ける。

「どの程度の数で、モンスターは集まりますか？」

前王が口を挟む。

「四代前の王の時が最後だったが、二千以上と聞いている」

デキウスは補足する。

「さらに、同時にロマリアも同じ規模で襲ってきたのだ！」

「モンスターはどの程度の強さですか」



「ここらへんにいる奴らと同じだ」

「だが、数が違いすぎる」

デキウスは指摘する。

「同数であれば対応可能だが、そこまでの戦力はこちらにはない」

ロマリアが持つ兵力は約三千。

確かに現在の兵力では、城と開放する地区の両方は守りきれないだろう。

だが、俺には計画があった。

「兵士の、個々の能力を引き上げます」

「それは俺が既にやっている」

デキウスは反論する。

「近衛兵としての能力は高いかもしれませんが」

「俺が目指すのは、二千以上のモンスターを殲滅するだけの力を与えることです」

俺は断言する。

「兵を三ヶ月預けてください。ここら辺のモンスターを雑魚扱いさせます」

俺の計画を話す。

兵士を特訓させ、個々の能力を底上げする。

その上で、モンスターを呼び寄せ殲滅する。

最後に、指定した領土を回復させる。

デキウスは懐疑的に話を聞いていたが、最後にはこういった。

「確かに、口先は上手いようだな」

「兵を預けてもらえたら、口先だけではないとお見せできますが」

「わかった、後はまかせた」

デキウスは立ち上がると、準備のため部屋を出て行った。

俺は、ギルド長に話しかける。

「そして、あなたの力をお借りしたい」

俺は、ギルド長に依頼をする。

「私にできることであれば」

ギルド長は、少し身構えて話を聞いていた。

いまだ俺の話を信用していないようだ。

まあ、俺の依頼は、信用とは無関係の話だが。

「あそびに人を傭兵として雇いたいのですが」

ギルド長は俺の言葉に不信感を抱く。

「……あそびにんですか？」

「そうです」

この国には、闘技場がある。

そのため、多くの遊び人がこの国に集まっている。

当然、その中には金に困っている奴らも多いだろう。

そんな奴らに、ぴったりの仕事がある。

「いかがですか」

「……わかった」

ギルド長は、最終的には了承した。

## 第49話 事前説明という名の根回し（後書き）

事前説明は大事だと思います。

と言っわけで、次回予告。

アーベルは四大貴族の前に解放計画を提案する。

だが、それぞれ異なる思惑をもつ貴族達は乗り気ではなかった。それを予想していたアーベルには、状況を改善するため一つの提案をおこなう。

今回は、ロマリア王立大学での最多履修者数を誇る名講義（嘘）

「これからのロマリアの話しよう（1）」及び「これからのロマリアの話しよう（2）」の2本立てです。

## 第50話 これからのロマリアの話をしよう(1)

夜になって、俺は、王宮のバルコニーにいた。  
これから使用する魔法の訓練の為だ。

国王に就任してから、1ヶ月が過ぎようとしていた。

俺は、昼間は政務をこなし、夜は魔法の研究と訓練に明け暮れていた。

冒険に出ないので、MPを消費することがない。

もったいないので、寝る前に魔法の実験に使おうということで、俺の日課になっていた。

俺が実験、訓練しているのは、トベルーラと呼ばれる飛行呪文である。

俺はこの呪文を、都市奪回計画の切り札の一つとして訓練していた。MPの消費効率が悪いので、最初は十分程度しか飛行出来なかったが、詠唱方法の改良により、今では一時間程度飛べるようになった。

「まあ、今日はこの辺にしておくか」

明日は大事な会議がある。

早めに切り上げて休むことにした。

今日は1ヶ月ぶりに四大貴族がそろつ会議だ。

参加する貴族達の様子は、前回の会議とは異なっている。

近衛兵総統のデキウスは、前回とは異なり、やる気に充ち満ちていた。

彼は今日の議題を知っており、早く実現することを願っているのだ。

前回の会議のあと、複数の参謀と協議を重ね「実現可能な計画」とわかった日から、毎日  
のように「いつから始めるのだ」と俺に催促してきた。

この会議で確認しないと駄目だと言ったら、「俺にまかせろ」と言  
い出す始末。

だが、こいつに任せるわけにはいかない。  
他の準備もあるからと、なだめすかすのに苦労した。

財務大臣のガイウスは冷ややかな様子で俺を見つめていた。  
前回提案した、兵の削減案と徴税員の強化にどれだけ手を打つこ  
とができるのか、試すような目つきだ。

もちろん、自分の意見に反対するようであれば、別の手段をとるよ  
う算段している様子も見える。

内務大臣のマニウスは、落ち着きのない様子だ。  
自分が手塩にかけた部下達がガイウスに奪われないか心配している  
のだ。

最後に外務大臣のレグルスは、つまらなそうな様子で俺を見ていた。  
今日の議題は、自分には関係ないと思っっているのだろう。

あとは、前王が顧問役として顔を出している。

ジンクは入り口で護衛だ。

とジンクを眺めると、お茶を運び終わった侍女と、たわいもない話  
をしていた。

「また、新しいイオナズンを覚えたよ」

「まあ、そうですね」

侍女は楽しそうな様子でジンクの話につきあっている。

「こんど、私の部屋と一緒に試してみないか」

「まあ」

侍女は真っ赤な顔で俯きながらかすかに頷いた。  
まんざらでも無い様子だ。

この国では、イオナズン（室内用？）の使い手がもてるのか？

俺がイオナズンを使えるようになったら・・・。

・・・、どうでもいい話だな。

「さて、そろつたようだな」

俺は会議の始まりを宣言する。

俺は、さつそく解放計画を提案する。

「俺は1ヶ月政務に携わつた。

そして、皆の指摘のとおり、この国の財政は危うい状況にあることを知つた」

皆が頷く。

いや、デキウスは早く話を進めるとせかしている。

「そこでだ、俺はモンスターに蹂躪された都市を奪回する計画を立案した」

俺が合図をすると、俺の直属の秘書官が計画案を皆に手渡した。

俺の字は汚いので、代筆は全て秘書官に任せている。

「都市を開放することで、人口や生産性が向上し、税収が増加するだろう」

「何を考えている！」

財務大臣であるガイウスは声を荒だてる。

「財務が逼迫しているおりに、軍事行動だと。ばかばかしい！」  
手にした資料を叩きつける。

一瞬で会議室は静まりかえったが、俺が口を開く。

「確かに、普通はそうでしょうね」

俺は、ガイウスをみながら言った。

「だが今回は皆さんの、特に財務大臣の協力をいただけますから」

「認めないぞ、そんなことは」

「そうですか、残念ですね」

俺は、平然と答えた。

第50話 これからのロマリアの話をしよう(1) (後書き)

ちなみに、ジंकが新たに覚えたイオナズンは、イオナズン(観賞用)です。

どうでもいい話ですが。



## 第51話 これからのロマリアの話をしよう(2)

財務大臣が今回の解放計画を認めなかった。

そして、俺が「そうですか、残念ですね」と答えた。

周囲はその様子を見て、計画は失敗したと思われた。

計画に賛成していた、近衛兵総統のデキウスは「話が違う」という様子で俺を睨んでいる。

財務大臣のガイウスは「しよせん、どこの馬の骨ともわからん小僧が」と侮蔑している。

このまま、会議の主導権を握り、兵の削減や、税の増額などを提案するつもりだろう。

内務大臣のマニウスは、疲れた様子だ。

ひととおり資料を見て、計画の概要自体は納得したようだが、協力は得られない計画は無理だと考えているようだ。

「できるだけ早く、会議が終わって欲しい」

そう思っているのだろう。

外務大臣のレグルスは、ニヤニヤしながら俺を眺める。

まるで「いい気味だ」とでも言わんばかりに。

「財務大臣がご協力頂けないのであれば、計画に必要な資金はまかなうことができません。

本当に残念です」

俺は悲しそうなまなざしで、財務大臣ガイウスを見つめる。

「計画が中止となれば、俺は暇になります」

ガイウスは、俺を睨む。

知ったことではないといったげだ。

「暇な間に俺は、裁判の勉強を始めようと思っています」

「だから、どうした」

ガイウスは耐えきれずに俺に意見した。

「ちょうど目の前に、ちょうどいい学習材料がありましたね」

俺は、別の資料をガイウスに手渡す。

ガイウスは訝しみながらも、資料を手にすると、すぐに驚愕の表情に変化する。

「勉強の途中ですが、これだけの材料があれば死罪及び財産の没収は免れないと思っています」

俺は澄まして答える。

「それは、それは・・・」

俺は困惑するガイウスを助けるように話しかける。

「計画が承認されれば、忙しくて裁判どころではなかったのですが、ちょうどいい機会です。徹底的に勉強しようと思っています」

俺がガイウスに手渡した資料は、ガイウスが手を染めた癒着資料と王国の乗っ取り計画案の写しだ。

ガイウスも秘密が漏れないよう、厳重に保管していたのだろうが、ジंकは鍵開け呪文と姿が透明になる呪文を持っている。秘密を隠すことなど出来はしない。

もともと、この資料は前王がジंकに依頼したものだ。

本来は四大貴族を滅ぼすために集められた資料だ。

ガイウスの様子が変わったあたりから、デキウス以外の貴族達も俺が何をしたのか理解したようだ。

皆、恐怖で顔をゆがめている。

ただ、デキウスは1人だけ、「計画が失敗したなら、早く会議終わらないかな」とぼやいている。

ガイウスは絞るような声で俺に話しかける。

「なにが望みだ」

「今回の計画が実行されれば、裁判どころでは無くなりますね」

「・・・、わかった。認めよう」

「近衛兵総帥デキウス」

俺に呼ばれた、デキウスは姿勢を正す。

「なんででしょうか」

「そなたは、計画に賛成か」

「当然、賛成です」

早く会議を終わらせて、行動したいようだ。  
やれやれだ。

「内務大臣マニウスよ」

「わ、私も賛成します」

マニウスは、何も言わずに賛成してくれた。

彼だけは、しっかり資料を読んでおり、貴族への課税に対して反対するかと思っていたのだ。

おそらく、マニウスの家臣団を正式に国費で賄うことが認められたため、結果的にはスコルピオ家の財政的には良くなることを計算して、賛成したのだろう。

彼の声にはどこことなく安堵の声があった。

当然デキウスにも課税などの話はしている。

「そんなことより、都市奪還で得られる名誉の方が大事だ」

と一言で切り捨て、家の者達が驚愕したのだが。

こうなれば、最後の1人だ。

「外務大臣レグルスよ」

「・・・」

レグルスは黙ったままだ。

俺の計画を他の全員が賛成するとは思われなかったようだ。

レグルスは、計画に対して特に意見は持っていなかった。

計画の内容よりも、自分よりも年下の意見に耳をかさないという思いが沈黙に繋がっているようだ。

「今回の計画は、他の国との連携が欠かせない。外交の切り札としての活躍を期待している。頼んだぞ」

俺は頭を下げ、レグルスに依頼した。

レグルスは、プライドを刺激された様子で

「まかせろ」

と安請け合いました。

ようやくこれで、計画が承認された。

忙しくなりそうだ。

## 第52話 おやつなんて、必要ない(あそびにんを除く)

「いやあ、引率は大変だったよ」

ジंकはお茶を飲みながら俺に話しかける。

「やっぱり、あそびにんと一緒だと疲れるよ」

「もとあそびにんのお前が言うな」

俺は、いつものように指摘したあと、ジंकから経過報告を受けていた。

ジंकはロマリアの冒険者ギルドを通じて集めたあそびにんを率いて、ロマリアの北にあるノアニールの村まで引率していた。

あそびにんの育成のためである。

つれてこられたあそびにんは、いずれもレベル10前後であった。

もうすこし成長すれば、必要な呪文を覚える事ができるとあって、

慎重に戦闘を繰り返しながらレベル13を目指していた。

あそびにんの戦闘力は不安があるため、基本的に防御に徹しさせている。

衣服については、俺たちが身につけていたみかわしの服を貸与している。

闘技場の軍資金にさせないため、毎回町に入る前に返却させているが。

「いやあ、危うく旅人の服を受け取りそうになりましたよ」

あそびにんの中に、ジंकをだまそうとした奴がいたらしい。

みかわしの服を受け取ったときに、みかわしの服に似せた旅人の服を代わりに着込んで、そのまま戦闘し、町に入る前にそのまま手渡

そうとしたらしい。

「そいつは、あそびにんよりも悪徳商人の方が向いてそうだな」

とはいえ、そいつを商人にさせるわけにはいかない。

おとなしく賢者になってほしいものだ。

いや、賢者になったら、さらに手がつけられなくなるかもしれない。

当然、ジंकウ1人だとマヒ等で対処できない可能性を考慮し、近衛兵による1パーティを随行させていた。

今のところ問題は無かったが。

ノアニールの村で、近衛兵達と一緒にルーラの登録を行う。

ここが拠点基地となるのだ。

目指すところは、ノアニール西の洞窟。

俺たちがかつて経験値を稼いでいたところだ。

ここで、短期間に近衛兵の能力を底上げする。

「近衛兵の編成には疲れましたよ」

「お前ではなく、司令部が疲れたのだろうか」

パーティの編成に当たっては、100人、25パーティを1部隊として編成した。

6パーティを1小部隊として行動させ、残った4人1組を作戦司令部として全体の指揮を執らせる。

今後の解放計画に合わせて、指揮を容易にするための部隊構成である。

近衛兵総統のデキウスは当初、「勝手に編成を変えるな！」と激怒したが、俺が

「この方法でしたら、総統閣下も心おきなく前線で戦闘に参加できますよ」

と一言いったら、

「よし、あとは任せた」

と言い放ち、そそくさと訓練の準備に出かけていった。

俺と残された参謀達はため息をついたが。

細かい編成作業については、参謀達と、顧問として内務大臣マニウスの部下3人を登用して一緒に協力してやらせている。

参謀達は、マニウスの元部下達の加入に渋っていたが、効率的な運用方法の提案を受け入れているうちに、彼らに敬意を払うようになっていった。

編成を終えた部隊から、順次ノアニール西の洞窟へ移動させる。

絞ったとはいえ、25パーティが行軍しながら移動するのだ。

通常の魔物は逃げ出してゆく。

当初、兵力の集中によりモンスターが集団で部隊を襲撃する可能性を想定していたが、発生することなく洞窟にたどり着いた。

「予想どおりで助かりましたね」

「ああ」

俺はジnkの発言に頷いた。

奪還計画の際に配慮した点の一つが、軍隊の移動によりモンスター襲撃フラグが起きることだった。

過去の奪還計画の記録を見ると、モンスターの襲撃は都市の浄化開始と同時に始まるようだ。

モンスター襲撃フラグの発生条件は一つとは限らない。

であれば、大魔王や魔王を刺激するわけにはいかない。

ちなみに都市の浄化とは、結界によりモンスターの発生を押さえ、襲撃から身を守る結界のことだ。

ロマリアの都市は城壁により守られているが、農地は城壁の外に広がっている。

物理的な防御が不可能であれば、魔法的な要素で守る必要がある。

効果は絶大であり、魔王クラスの能力者か、千体以上のモンスターの集団か、逆に一時的に能力を無力化したモンスターでなければ、まともに進入することはできない。

俺はジンクに話の続きを促したが、ジンクはしばらく黙ったままだった。

しばらくして、ようやく重い口を開いた。

「洞窟に到着してからが、本当の地獄の始まりだったぜ」



第52話 おやつなんて、必要ない(あそびにんを除く)(後書き)

困ったときのノアニール西の洞窟のみです(話の展開という意味で)。

とはいえ、ゲーム世界での日付を変えることなく、序盤で安全に経験値を稼ぐ方法としては最適なのですが。

### 第53話 地獄のはじまり（モンスター視点で）

ジルクはようやく重い口を開いた。

「洞窟に到着してからが、本当の地獄の始まりだったぜ」

「モンスター視点ですか？」

ジルクは喜んで頷いた。

俺はため息をついた。

洞窟内は狭く、パーティの展開は基本的に1列となるが、1戦闘ごとに最前列が入れ替わるため、兵士達の疲労は皆無である。そのまま、目的地である地下2階に進む。

俺が訓練に使用した回復の魔法陣が目の前にあつた。

ひとまず全員が魔法陣に入ることと体力と魔力を完全回復する。

その後、進入したパーティが、魔法陣を背にしながら周囲を取り囲み、モンスターの襲来に備える。

魔法陣のすぐそばにいる、司令部に配属された指揮官が号令をかける。

号令に従って、遊び人がくちぶえをふいた。

モンスターが口笛に反応して出現し、魔法陣に向かって向かってくる。

が、警戒していたパーティにより殲滅される。

傷ついた兵士がいれば、司令部に配属された僧侶によりすぐさま回復される。

体力が回復した段階で、再び指揮官が号令を下し、モンスターを呼び寄せる。

半日が経過した段階で、戦闘に慣れてきたのを指揮官が確認し、作戦を変更する。僧侶による回復を行いながら、連続してモンスターを呼び寄せるのだ。

たまに、包囲を抜け出して進入するモンスターもいたが、指揮官が一刀のもとに切り捨てる。

1日が経過することには、司令部を除きレベル18に近い力を身につけた。

周囲にはモンスターの屍の山ができていた。

「つかれたなあ」

ジंकはぼやきながら、ゴールドとアイテムの回収を始める。

兵士達も全員で回収作業に励む。

これらの金は、軍の維持費や給与に回される。

大貴族を始めとした税制の改革で収入が増えるとはいえ、急激な課税は強い反発を生む。

徐々に税率を上げる必要がある。

それに貴族への課税自体初めてのため、準備作業等で時間がかかるのだ。

直ちに税収の増加には繋がらない。

また、解放計画が成功したら、復興するために莫大な金が必要だ。金があつて困ることなどないのだ。

地道ではあるが、こういった収入の確保は大事なことである。

回収作業が終わった段階で、洞窟の入り口まで引き返す。

兵士達は一撃でモンスターを倒せるとはいえ、気を抜くことはなかった。

「休む時間がなかったのは残念だよ」

「モンスターの屍の山を前にして休むのも、どうかとおもっが」

「なれば気にならないけどね」

ジंकは澄まして答えた。

洞窟を抜けた部隊は全員がいることを確認し、キメラの翼で、ロマリアへ帰還する。

「すごい、行列だったねえ」

「行列はすぐ終わっただろ」

俺はジंकに指摘する。

ロマリアのルーラ到着場所には、到着者を確認するための詰め所があった。

だが、今回の作戦のため、通常の来訪者とは別に専用の詰め所を設置し、部隊指揮者の確認の元で、効率よく確認作業が進められ、すぐに入場を許された。

「これも、軍事行動だと解釈できるのだけどねえ」

「まあ、そのためにレグルスに交渉を任せただけどね」

俺は、外務大臣の名前を出した。

ルーラによる軍事行動を制限するため、呪文やキメラの翼の効果自体は「1度に4人まで」と決まっている。

だが、同時に数百パーティが移動したら、軍隊の奇襲と同様の効果がある。

当然、到着先にも工夫がされており、同時に5パーティまでしか到着できないこと。

到着先は魔法が使用できないこと。

などにより、他国からの奇襲攻撃が制限されているのだが。

それでも、今回の作戦はインチキくさい手段と指摘されかねないので、「この手段による軍隊の移動は自国の都市に制限する」というルールを追加することをポルトガとアリアハンに合意をさせたのだ。都市解放計画の作戦内容の公表と併せて。

「他国に計画を教えるなんて、気前がいいねえ」

「どうせ、計画を実行して成功すれば他国もまねをする。だったら、交渉材料として使えばいい」

ジンクは頷いた。

「せっかくなら、同時に解放計画を実行すればモンスターの襲撃数を減らすことが出来るかもしれない」

俺は解放計画の成功率を上げるため、他国と時期を合わせた計画の実行を考えたのだ。

モンスターの襲撃に魔王の力が関与するのならば、効果が期待できる。

「まあ、過度の期待は禁物だが」

「そうですね」

「ところでジンク、依頼したものは用意できたか」

「高かったよ、なにしろ定価の2倍だったからね」

「そうだな」

俺はため息をついて、ジンクから品物を受け取る。

まどうしの杖と呼ばれる武器である。

この武器には特殊な効果があり、MPを消費することなく火炎呪文メラを使うことができるのだ。

ただ、問題なのが、入手できるところが現時点でアッサラムの悪徳商人からしか購入できないので、定価の倍もかかったのだ。

「アーベル。こんな杖が役に立つのか？」

ジンクの質問ももつともだ。

俺はメラの上位呪文であるメラミを使用できるし、ロマリアの敵はメラの一撃で死ぬ訳ではないのだ。

俺はジンクに調子を合わせて答える。

「役に立たない方がいいと思うのだが、念のためだよ」

俺は、ジンクに礼を言った。

俺は計画に問題が生じた場合の切り札を考えていた。

あとは、キセノン商会に依頼したものが手に入れば切り札が完成する。

本当は世界が平和になるまで使用するつもりはなかったのだが、計画が失敗して兵士を失うわけにはいかないのだ。

## 第54話 前夜

「いよいよ、明日ね」

「ああ、そうだな」

「がんばってね、アーベル」

「ありがとう、セレン」

「母さんも応援しているわ」

「・・・、母さんはアリアハンでの作戦に参加しないと」

俺は、久しぶりにテルルとセレン、そして母ソフィアと会話していた。

俺は、ポルトガからアリアハンへ譲渡された船を受け取ると、テルル達3人にアリアハンまでの運搬を依頼した。

母ソフィアが「久しぶりに冒険がしたい」と言ったのが原因である。

「女性だけの旅は楽しかったわ」

「そうですか」

「アーベルの事も、いろいろ聞いたし」

ソフィアは俺に微笑んだ。

一方で、セレンとテルルは顔を赤くして俯いている。

俺は、何か恥ずかしいことでもしでかしたのか。

過去を振り帰ってみるが記憶にない。

あとで、2人に確認するか。

「アーベル。おみやげよ」

「ああ、ありがとう母さん」

俺は礼を言っ、母さんから大きな袋を受け取った。

袋の中のものは、明日の為に事前に用意してもらったものだ。

出来れば、使わずにすませたいのだが。

「お金はいくらかかったの？」

「おみやげだからいいわよ」

金を払おうとする俺に、ソフィアはかぶりを振って断った。

「キセノンから吹っかけられなかったか？」

心配して俺は尋ねた。

「そんなことはないわ。就任祝いにこれくらいでも不足だと言っていたわ」

賄賂か。

だが、俺はロマリア王としてキセノン商会に便宜を図るつもりはないが。

俺の考えを見抜いたのか、ソフィアは笑ってこたえる。

「心配しなくてもいいわよ。アリアハン王からの友好のしるしだから」

キセノン商会がアリアハン国王に献上して、アリアハン国王が一部をロマリアに献上したとのことだ。

それならば、安心して受け取れるな。

俺は頷いた。

「かわいい息子の仕事ぶりが見られないのは残念だけど、そろそろ帰らなくちゃね」

ソフィアは席を立った。

ロマリア王国の解放計画に合わせて、アリアハンでもナジミの塔の奪還計画も同時進行する予定なのだ。

「じゃあ、テルルとセレンはあとで活躍を報告してね」

どうやら、テルルとセレンを残すつもりらしい。

「またね」



「ああ、また」

「それと、アーベル」

ソフィアが帰る前にひとこと言った。

「この戦いが終わったら、・・・」

「・・・、言いたいことはわかるから、続きを言うのはやめてくれ」  
死亡フラグを立てないで欲しい。

死ぬとしたら、能力的に俺が死ぬ。

「そうか」

俺は2人から船旅の様子を聞いていた。

予想していたとおり、海上では地上ほどモンスターの出現率は高くないようだ。

実は、この世界ではポルトガしか作ることが出来ないというのは事実ではない。

造船技術だけなら、他の国も持っている。

では、ポルトガが作る船と他国が造る船との違いは何かといえば、船体使用する金属の違いである。

他国が船を造っても、海上に浮くことは出来るが、モンスターからの襲撃に対抗出来ない。

モンスターから船体にぶつかったりするなどの攻撃を受ければ、すぐに船が沈むのだ。

一方で、ポルトガが船体使用する金属は、水に触れると魔物を追い払う力がある。

そのため、ポルトガ製の船は、モンスターが船体にダメージを与えることは無いのだ。

この金属はホビットのノルドが済んでいる洞窟でのみ採掘されてお

り、彼が金属を提供するのはポルトガ王だけであるのが、ポルトガ製の船だけがモンスターに襲われない理由であり、彼が住む洞窟にモンスターが出現しない理由でもある。

「……、という感じだよ」

「そうか」

船旅では、ソフィアがほとんど一人でモンスターを倒していたようだ。

ソフィアは呪文をほとんど使わずに、鞭でモンスターを全滅させたらしい。

確か魔法使いが装備できる鞭は一種類しかないはずだ。

あまり攻撃力が高い武器ではなかったはずだが。

俺は深く考えることをやめ、席を立つと2人に提案する。

「今夜、俺と付き合わないか？」

## 第55話 最後の戦い(1)

「昨夜はお楽しみでしたね」

「誤解を招くような事は言わないでくれ」

俺とジंकは、天幕の中で打ち合わせをしていた。

「あなたの方こそ、誤解を招くような発言は控えた方がよろしいかと」

「誤解、なんのことだ」

「お二人から聞きましたよ。私がわざと外したように、あなたも「訓練」という言葉を外したではありませんか？」

「・・・わざとでは、ないのだが」

俺は指摘されたことの意味にようやく気がついて、頭をかいた。

こんなときに、王冠は邪魔だな。

とはいえ、防御力に心許ない俺にとってこの装備は必須だ。

昨夜は、自分の訓練のため、セレンとテルルを訓練場に招いた。切り札を使うための練習である。

練習内容は空を飛びながら、砂袋を落とし、落ちる砂袋めがけて、まどうしの杖で放たれたメラをぶつけるというものだ。

俺は当初、飛びながら魔法を使用することを考えていたのだが、同時には使用できていない。

俺には同時魔法使用の才能は無いのかもしれない。

かわりに、杖を使用することで解決を図った。

一方で、高度を一定に保つことと、目標に魔法を命中させることを練習していた。

高度については、訓練場の端にある櫓から、高度が維持されているか確認を行ってもらっている。

高度の確認が必要なのは、モンスターから呪文攻撃を受けないためだ。

当然だが、呪文にも効果範囲がある。

命中の訓練だが、通常の呪文攻撃であれば相手を選んだ時点で、ほぼ確実に命中する。

だが、標的が自由落下により効果範囲から外れると命中しなくなるのだ。

今回の切り札を使用するためには呪文の命中が必要なので、落下する少し前に呪文を命中させる訓練を繰り返していた。

「訓練の成果はどうでした？」

「とりあえず、実戦で使用できるとおもうが」

標的に確実に命中するほど、精度は上がっている。

問題は、実戦で使用できるかどうかだ。

一応計画では、半分の力ができれば十分と考えているが、やってみなければわからない。

俺と、ジंकは机の上に広げられた図面を確認していた。

「とりあえず、順調だな」

「ああ」

既に作戦は開始されており、北方部隊1,500人、東部、西部、南部部隊各1000人、そして首都ロマリアに防衛部隊1,200人が展開している。

作戦の基本は、兵の半分を首都の防衛にあて、残りの兵力で北部の都市を開放する。

あとは陽動のため、東部、西部、南部にも小隊を派遣する。  
これまでのモンスターの出現法則が正しければ、分散が余儀なくされ殲滅が可能だろう。

当然、陽動部隊はモンスターを引きつけられるだけ、引きつけた後、キメラの翼でロマリアに帰還する。

あらかじめ、冒険者ギルド及び各国に伝達しており、緊急を除きルーラ及びキメラの翼でのロマリア移動について自粛要請をしている。ここらへんの要請については、外務大臣レグルスに任せている。

俺とジンクと一部の参謀は北部都市ウエイイにいる。

ロマリアの指揮は、内政大臣マニウスに依頼している。

本来は、近衛兵総統のデキウスが行うはずだったが、「攻略に参加せずに、なにが総統だ！」

と反対し、ウエイイ攻略のモンスター遊撃部隊を率いている。

モンスターの出現は、防御結界の作成と想定されている。

俺が号令をかければ、伝達部隊が、一斉に行動を移す。

「それでは、予定通り作戦を実行する」  
俺は宣言した。

「南部部隊、撤退しました」

「わかったお疲れさん」

俺は、伝達役をねぎらう。

状況は予想通りの展開となっている。

ロマリアには約2,000のモンスターが出現している。

出現したモンスターの構成が、ロマリア周辺で出現したモンスター

と同じ事を確認して、迎撃体制に移行している。

防衛部隊から800人を選出し、包囲殲滅を開始している。

まず、回復役であるホイミスライムや、ホイミスライムを呼び寄せ、さまざまよろいを優先的に倒し、早期の無力化を果たしている。

北部も1、800体ほどのモンスターが出現しているが、ロマリア周辺に出現するモンスター構成と同様であるため、こちらも予定通り殲滅戦に移行している。

北部の司令官近衛兵総統のデキウスの出撃で、部隊の士気は非常に高い。

結界が完成する前に、殲滅が終了するだろう。

東部、西部、南部にもだいたい1、500〜1、800体程度モンスターが出現したようだが、少し足止めたあと、ロマリアへの撤退を完了している。

「2都市同時攻略も可能だったのではないか？」

「経済的に無理だろう」

「そうだな」

ロマリアの兵の精度からすれば、モンスターの殲滅は難しいことではない。

だが、戦闘の勝利だけが目的ではない。

都市を奪回し、国力を発展しなければならぬのだ。

まずは、一都市。

失敗は許されないのだ。

「ロマリア遊撃部隊から、連絡です！」

伝達の男が、息を切らして天幕に入る。

「要注意モンスター、Bの出現を確認しました」

「Bだと！」

俺たちは、素早く立ち上がる。

「自ら、登場ですか・・・」

「派手にやりすぎたということか」

俺たちは目を合わせる。

「緊急プランBに移行する」

俺は参謀達にプランの変更を宣言する。

「あとは任せた」

俺たちは、カメラの翼でロマリアに帰還した。

## 第56話 最後の戦い(2)

「アーベル王」

「出現場所を報告しろ！」

「こちらです。」

到着場所の近くにある、天幕に入る。

そこには、テルルとセレンがいた。

俺は2人を無視して、出現場所を確認する。

要注意モンスターBはロマリアの南西に出現したらしい。

「例のものは何処だ！」

「ここよ！」

俺は、テルルから大きな袋を受け取った。

あとは、セレンとジンクに指示を出す。

「魔法の支援を頼む」

「はい」

「ほい」

セレンは俺に、加速魔法のピオリムをかける。

次にジンクは俺に、守備力強化魔法スカラと魔法反射魔法のマホカ  
ンタをかける。

「あとは、まかせた」

「アーベル！」

「・・・、気をつけて」

テルルとセレンの声が聞こえる。

だが俺は振り向かず、飛行魔法トベルーラを唱えて、外に出た。

飛んですぐに、目的のモンスターがいた。

「魔王バラモスか？」



俺はため息をついて、モンスターを眺める。

魔王バラモスは、ロマリアを攻め込むモンスターたちとは別のところにいた。

率いているモンスターは、ロマリアで出現するモンスターばかりだが、バラモス一体で他のモンスター全てを凌駕する。

それに、魔王がモンスターをキチンと指揮すれば、強大な戦力になる。

魔王自らの襲撃なら、簡単にロマリアの結界も解除され、モンスターの進入を許すだろう。

「まあ、ゾーマでなくて良かったが」

俺は作戦をたてるにあたって、いろいろとシミュレートしていた。

その中には、大魔王ゾーマや魔王バラモスの出現も計算していた。

万一、大魔王ゾーマが出現したら、計画は失敗。

全員撤退の指示を厳命している。

もちろん、大魔王ゾーマのことを知っているのは俺だけなので、要注意モンスターAとして情報提供し、俺が目視してからの撤退となる。

そして、要注意モンスターB魔王バラモス。

俺は、バラモスなら撃退可能と考え、昨日まで計画の準備をしていた。

そして、そのための切り札を持っている。

俺は、上空からバラモスに接近する。

バラモスは俺に気づいて、魔法の準備をしていた。

「イオナズンか」

俺はわざとイオナズンの効果範囲まで近づく。

魔王バラモスはイオナズンを唱えた。

「そついえば、本物のイオナズンは初めてみたな」  
どうでもいいことを思い出す。

まだ、気持ちに余裕があるようだ。

放たれた魔法は、俺に当たることなく、反射してバラモスに命中する。

「まずひとつめ」

俺は、バラモスが次の攻撃に切り替える前に、袋の中から切り札を取りだした。

球状の物体をバラモスの頭上から落とした。

「杖は不要か」

俺は、すぐに上昇した。

バラモスは、俺に向かって炎を吐こうとした。  
どうやらこの距離からでも攻撃が届くらしい。

「ギャー！！！」

炎が物体に届いた瞬間、その物体は爆発し、バラモスと周囲のモンスターが爆発に巻き込まれた。

「さあ、爆撃の始まりだ」

俺が切り札として用意したのは、量産化した魔法の玉だ。

迷宮の壁を破壊する力がある。

効果は抜群だ。

バラモスの上空から、魔法の玉を落とし、まどうしの杖で炎を飛ばし、魔法の玉を爆発させる。

とりあえず、連続で8発たたき込む。

「地形が変わったか・・・」

バラモスがいた場所は爆破の衝撃を受けて、大きな穴が開いている。

「・・・」

気がつけばバラモスも、周辺のモンスターもいなくなっていた。

「やりすぎたか」

俺は、ため息をついた。

だが、戦いはまだ終わっていないのだ。

「本陣にもどるか」

俺は、袋からキメラの翼を取り出すと、ロマリアへと帰還した。

## 第56話 最後の戦い(2) (後書き)

「予想どおり」の人もいるかもしれませんが、やってしまった。バラモス城襲撃計画はネタでしたが、いつの間にか戦術として完成していた。

後悔はしています。

さすがに、大魔王ゾーマには同じ戦術は使えない設定です。

特殊攻撃である、ここえる吹雪で魔法の玉を凍らせることができると考えています。

## 第57話 凱旋式

「王様。ちゃんと、笑ってくださいよ」

「わかつているさ」

俺は馬車に乗っていた。

凱旋式の先頭にたち、両脇に群がる国民からの祝福を受けていた。

後ろには戦闘に参加した近衛兵達が、四列縦隊で延々と続いている。

隣に座る、近衛兵総統デキウスから指摘され、俺は笑顔をふりまく。

周囲から歓声が聞こえる。

「ロマリア王万歳！」

「勇者アーベル王万歳！」

「……。俺、魔法使いなのだ」

「皆は、英雄を勇者としてたたえているのです。さあ、応えてください」

俺は、右手をふる。

国民たちは、さらに歓声をあげる。

「ばんざーい！」

「ばんざーい！」

凱旋式。

戦いで、大きな戦果を果たしたものだけが得られる榮譽。

ロマリア王国の男なら、誰もがあこがれる。

俺は、この戦いでロマリアへのモンスターの進入を阻止したこと。

そして奪回計画を指揮し、成功させた成果で凱旋式に参加している。

俺はあまり祭りごとは好きではなかったが、凱旋式をやめるという選択肢は存在しない。

今回の成果を、国民の前で形にしなければ、改革の意味がない。国民が成功を祝い、将来に希望をもたせなければ、先には進めないのだ。

隣に座るデキウスは、ウエイイ奪回にあたり、獅子奮迅の活躍をしたとして参加している。

「まあ、後ろで指揮するのが嫌なだけだろうがな」

近衛兵総統は、本来であれば、軍の指揮官として戦局をみる立場だ。しかし、デキウスは戦闘が好きなので、最前線で暴れただけだ。

とはいえ、この男は兵士達から愛されている。

兵士達が怯えることなく戦えるのは、この男の力に違いなかった。

「いろいろあつたなあ」

俺は国民の歓声に応えながら、魔王を倒したあとの事を思い出していた。

戦いが終わり、テルルやセレンが待機していた天幕に近づくと、テルルとセレンが抱きついてきた。

「アーベルのバカ！」

テルルは俺の体を叩き始める。

「・・・、置いていかないで」

セレンは一言つぶやくと、そのまま泣き出していた。

「いたいです、テルル」

「バカ、バカ！」

テルルはますます力を込めて、俺の体を叩いている。体力が減っているかもしれない。

この怪我は、戦闘による公傷として認められるのか？

「じめん」

「ゆるさないから、ゆるさないから……」

テルルは叩くことをやめたが、今度はすすり泣いていた。

後で、近くにいたジンクに話しかける。

「どうして、助けてくれなかった？」

「私に、どうやって助けると？」

ジンクはにこやかに質問する。

「見てのとおり、俺は無傷だっただろう」

俺は身につけていた、みかわしの服を指し示す。

服には、少しも傷がついていない。

「私の説明で、止められると思いますか？」

ジンクは真剣な目で俺をみつめた。

「期待のしすぎか」

俺はあきらめた表情で、ジンクを見返す。

「期待のしすぎです。魔王相手なら、心配するのも当然でしょう」

俺はうなだれた。

「まさか、モンスターの情報を教えたのか？」

ジンクはうなずく。

「2人に殺されたくありませんから」

「……わかったよ」

俺はため息をついていた。

魔王バラモスの姿形は、ロマリアではある程度知れ渡っていた。

大昔に、バラモスの襲撃を受けたことがあるからだ。

ただ、魔王が出現ことが兵達に知れ渡ると、兵の士気が落ちる可能性があった。

このため、参謀や幹部達を除き、「要注意モンスターB」が魔王で

あることを伏せていた。

俺は、どうやら魔王を倒したようだ。

魔王を倒したあと、LVが17から一気に25まで上がっていた。

「あんな方法で倒したら、反則だよな」

自分のステータスシートを眺めながらつぶやく。

先ほどの戦いでジंकクに唱えてもらった、魔法反射魔法マホカクタも覚えてしまっている。

「でも、まだ父さんの死亡フラグは出ないようだ」

魔王を倒したようだが、モンスターの気配は収まっていない。

魔王の姿が消えたとき、思わず血の気が引いてしまったが、引き続き戦闘が続いていたので思わず安心してしまった。

「本気になる前のバラモスとか」

俺は自分なりに考えた。

とあるボスモンスターののように、一度倒されても、もう一度戦う必要があるモンスターがいる。

おそらく、魔王バラモスは生きているのだろう。

今頃おとなしく城内で回復でもしているのだろうか。

「まあ、魔王退治は勇者にまかせるさ」

1年半後に旅立つ勇者候補生の顔を思い出す。

アリアハンとポルトガの状況についても報告を受けている。

アリアハンはかねてから計画していた、なじみの塔奪回計画が成功したようだ。

詳細については、後日母ソフィアから報告を受ける予定である。

ポルトガについては、今回は開放計画を見送っていた。



現在ポルトガでは、艦隊を増設することに追われていたからだ。このため、ポルトガ陸軍は、開放計画を行うことはなかったが、ロマリアに近い事を懸念して、ウエイイ開放計画に合わせてポルトガ周辺の防衛をおこなっていた。結果として、ポルトガへの襲撃は発生しなかった。この結果を受けて、今後ポルトガは何を考えるだろうか・・・

「王よ、考え事はあとにしろ」

「そうですね」

俺はデキウスの指摘で我にかえると、気持ちを凱旋式に切り替えていた。

「覚悟しておけ」

「はい」

俺は、デキウスの指摘に思わず身構える。

凱旋式も終盤近くにさしかかり、とある角を曲がるうとしていた。

「甲斐性なしの王様よ、早く后を迎えろよ！」

「ロマリアにも、いい女はたくさんいるぞ！」

俺は、思わず頭を抱えそうになった。

この国の凱旋式のしきたりで、ある場所だけは凱旋者を批難することになっていた。

聞いたところでは、凱旋者が調子に乗りすぎると、神様が嫉妬して天罰を与えないように、わざと批難の声をあげるとのことだ。

俺の考えでは、ここで住民や同僚からのやつかみをぶつけることで、妬みを減らすことに繋がると考えていた。

「伝統とはいえ、これはひどい」

「まあ、我慢するのだな」  
デキウスに慰められていた。

「總統の嫁さんは、訓練だ！」

「金よりも、戦い大好き、司令官！」

「おまえら、うるさい！」

デキウスは周囲を怒鳴り散らす。

それでも顔は笑っている。

この男は子どもの頃から、凱旋式にあこがれていたはずだ。  
望みがかなって、嬉しくないはずがない。

俺たちは、いつしか笑いあっていた。

俺たちは、小高い丘に向かっていた。

いつしか、にぎやかな声も収まり、俺たちも後に続く兵士達も、厳  
粛に歩みを進めていた。

向かっているのは、建国者たちが眠る神殿だ。

そこで、俺たちは祖先達に勝利の報告と感謝を伝えることになって  
いる。

神殿の最奥部は俺たちしか入れない。

そこには、なにもなかった。

だが、ここには多くの人々の希望や感謝がつまっているのだろう。

少しも、寂しくはなかった。

俺たちは何も無い場所で、頭をさげ、静かに祈りをささげた。

## 第57話 凱旋式（後書き）

ローマの凱旋式を参考にしました。

## 第58話 母への手紙

母さんへ

お元気でしょうか。

先日のなじみの塔でのご活躍を聞いておりますので、心配はしておりませんが。

逆に、一緒に戦った、父さんより前衛に立っていたことを聞いて、少し心配しております。

近衛兵の戦力についてですが。

先日、こちらでは、凱旋式が行われました。

壮麗で、身が引き締まる思いでした。

ぜひ母さんにも見てもらいたかったのですが、戦後処理に追われていたそうで残念です。

凱旋式が終わったあと、宴会が始まったのですが、大変でした。

どのくらい大変かというと

「おい、王様よ！酒を飲んでないのか」

「体が受け付けないので」

「おい、俺の酒が飲めないのか！」

「飲めません」

俺は、近衛兵総統のデキウスに断言した。

「……」

俺の固い決意に断念したのか黙っているよ、

「！」

「おら、おら」

強引に酒を飲ませようとする。

「離せ！」

俺は素早く立ち上がり、逃げてゆく。

「主賓が逃げるな！」

「お前がいれば十分だ！」

俺は、逃げながら叫んだ。

主賓は2人だ。

1人残れば十分だ。

「ふう」

俺はため息をつき、水を飲みながら別の席に座る。

堅苦しいのが苦手な俺は、無礼講にしたのだが、あそこまで無礼だと問題がある。

次からは、無理に酒を飲まずのを禁止項目に入れておこう。

「王様」

「どうした、マニウス？」

「ご成功、おめでとうございます」

「どうした、改まって」

俺は、マニウスに話を促す。

彼には、首都防衛司令官をしてもらったが、彼の手柄を奪ってしまった。

本来なら、彼にも凱旋式に参加する資格は十分だったが、彼は固辞した。

「こうして、国中あげて楽しい宴を開くことが出来たのも、王様のおかげです」

「俺だけではない。お前を始め、国民達の総力のおかげだ」  
俺は断言した

「だからこそ、みんなが本当に楽しく宴に参加しているのだ」

「・・・、王様」

マニウスの目から涙がこぼれる。

「前の王も、すばらしかったが、王様がいなければこの国は、この国は・・・」

どうやら、マニウスは酒を飲むと、なみだもろくなるようだ。

「そう思うのなら、明日からも頼むぞ」

「はい」

俺は、マニウスの肩を叩いて、テーブルを離れる。

俺の言葉に嘘はない。

彼の折衝能力と、彼のかつての部下達の才能は、今後の都市開発に欠かせない。

俺の都市計画案は、概要部分だけしか作っていなかった。

彼らの力で、計画に血肉がつき実を結ぼうとしていた。

俺だけの計画なら、厩気楼で終わっただけだ。

「よし、がんばって特盛りいっちゃうぞー」

「さすが、ジंकさん、すてきー」

「ねえ、私にもお願い」

「抜け駆けは、ずるい。次は私の番でしょう！」

ジंकの周囲は盛り上がり上がっているようだ。

何をやっているのかは、人垣ができていたので、こちらからはよく

わからない。

。。。

興味はないので別のところに向かう。

「勇者殿。待ってましたよ」

「俺は、勇者ではない」

「またまた、嘘ばかり。あなたが勇者でなければ、誰が勇者になるのですか」

外務大臣のレグルスは俺を見かけると、肩を捕まえ強引に椅子に座らせる。

「いやあ、実は僕、勇者にあこがれていましたね」

レグルスは酒を飲みながら、勇者について熱く語っている。

戦いが始まるまでは、俺の事を毛嫌いしていたのだが、戦いが終わると手のひらを返したようにこっちにすり寄ってきた。

ジंकクからの情報では、レグルスは勇者にあこがれており、アリアハンに行く機会を密かにねらっていたらしい。

俺が、3カ国交渉で、レグルスを使わなかったことから、俺に反発していた。

ところが、俺が魔王を倒したばかりに、俺が勇者であると勘違いするようになった。

「だから、俺のことを勇者と呼ぶな！」

「失礼しました、あなたが勇者であることは極秘でしたね」

「だから違う！」

「とぼけ方も上手いですね。見習います」

俺は隙を見て立ち上がると、逃げ出していった。

俺は酒を飲んでいないので、簡単に逃げ出すことができた。

「王様、この席あいていますか？」

「そのようだね」

「失礼します」

見知らぬ女性が、俺のそばにすわる。

薄い水色のパーティードレスを身につけている。

装飾品から判断するとどうやら、貴族の娘のようだ。

貴族達は、俺の政策に反対していた。

当然だ。

帰属権益を奪ったからだ。

だが、俺の作戦が成功したことで、俺に対する態度は大きく変わる。

沈んでゆく船の貴賓席にしがみつくよりは、普通席でも新しい船に乗った方がいい。

貴族達も俺についてゆけば、利益になると考えたのか、親しげな態度を示しはじめた。

まあ、だからといって、今後の方針を変えることはないが。

「さすが、王様ですわ」

「運がよかったただけだ」

「そういつて、自慢されないところがすてき」

娘は俺に腕を絡めてくる。

「！」

娘は、急にねむりはじめた。

「さっそく、マホカントの力を使うことになるとは」

俺は、ため息をつき、娘の腕をふりほどく。

娘は、ラリホーで俺を眠らせようとしたようだ。



俺の魔法の壁で反射され、自分が眠りについたようだ。

「いやあ、あぶない、あぶない」

「どうか、なさったのですか？」

こんどは、別の貴族の娘が声をかけてきた。

いや、1人ではない。後ろに4人いた。

「王様、ぜひとも武勇伝が聞きたいですわ」

「すごい怪物を倒したおはなしとか」

「わたくしは、将来のことをお聞きしたいですわ」

「将来のことって、ご結婚のことですか」

「お姉様、ぬけがけは、ずるいですわ」

「あら、まだ何も始まっていませんわ」

「そうですわね」

「王様、ご一緒がいますか？」

「……、ああ」

俺は、引きずられるように別室に連れ込まれた。

「……で、続きはどうなるの？」

「母さん。人が手紙を書いている途中に邪魔をしないでください」

俺はため息をついて、母ソフィアに注意する。

俺が書いた手紙は、9行目で止まっている。

「それに、ジंक」

俺はジंकに指摘する。

「勝手に、話を作るな」

「違うのですか。ならば説明してください」

俺はため息をついた。

「アーベル！」

「……ごまかさないでください」  
テルルとセレンが追求した。

悔しいことに、ジンクの話は事実だ。

ジンクの説明のとおり、別室に連れ込まれたが、そこで前王の息子とジンクが話をしていたので、普通に世間話をして俺は帰った。  
やましいことなど何も無い。

それよりもだ。

「ジンク、どうして詳細まで知っている」

「情報網の違いですよ」

俺はうなだれた。

ジンクは王宮内にある、侍女達のネットワークを完璧に把握している。  
る。

俺は密かに、ジンクに支配されることを恐れていた。

## 第58話 母への手紙（後書き）

一度試したかったネタです。

一度で十分ですが。

皆さんのご支援のおかげで、総合評価が900ptに到達しました。  
ありがとうございます。

引き続き、完結目指してがんばりますのでよろしくお願いします。

## 第59話 俺は、冒険を、あきらめない

「どうしても、反対なのかね」  
俺は、再度みんなに確認する。

俺たちは、円卓のテーブルに座っている。  
俺たちがいつも会議を行う場所である。  
そして、いつものメンバーが集まっていた。

俺が都市解放計画を成功させてから、メンバー達の俺への態度は完璧に変わっていた。

積極的に俺の考えに賛意を示すようになっていた。  
だが、俺の提案に対して反対した内容が2つある。

一つめは、解放した都市ウエイイの名前をそのままにする提案だ。  
外務大臣のレグルスが、王の功績をたたえてアーベリアに変更する  
と言い出したからだ。

「アーベリサンドリアのほうがよろしかったのですか？」

「いや、アーベルブルクのほうがいいだろう」

「やはり女性形のアーベリアではなく、そのままアーベルという名前が」

「ここは、アーベルバークで」  
「・・・」

結局都市名変更にかかるという理由で強引にウエイイの名前を残した。

やはり、由緒ある名前は大切にしなければ。  
ウエイイの由緒は知らないが。

もう一つは、今日も提案した内容である。

俺が王に就任してから、もうすぐ1年になる。

俺が、退位して前王の息子に王位を譲る提案だ。

俺は、冒険を再開する必要がある。

この提案もなんとしても、承認させるつもりだ。

「あらためて、みなを考えを聞きたい」

俺は、メンバー全員に問いかける。

俺の右隣にるのが、近衛兵総統デキウスだ。

いつものように、会議は退屈らしく、新しい技のことを考えているようだ。

会議ではおとなしくしているので、俺は文句を言わない。

文句があるとすれば、顔を合わせると、しきりに転職を進めることだ。

「おまえ、20を過ぎたんだろう、そろそろ」

「いやです」

ちなみに20というのは、年齢ではなくレベルのことだ。

20以上になれば転職ができる。

どうやら、俺を戦士に転職させたいらしい。

「俺の訓練に付き合っのが、怖いのか？」

「そう、うけとってもらって結構です」

こいつのレベルは40を超えている。

こいつは、ロマリアの近衛兵なので、半年前の訓練以外は国外に出たことがない。

「いったい、どんな訓練をつめばこんなところで、ここまでレベルがあがるのか。」

「つまらん奴だな」

「だったら、退位を認めてください」

「それとこれとは、話がちがう」

デキウスの隣に座っているのが、ライブラ家の新当主メテルスだ。ガイウスは引退し、ライブラ家の別荘で生活している。

ちなみに、別荘が俺の母親の生家だったり、ガイウスと母ソフィアとは知り合いだったりするのだが、どうでもいい話だったりする。

メテルスは財務大臣補佐官として、徴税員を率いている。

当然、これまでのような厳しい取り立てを厳禁しているので、「息子はやさしい」と国民からおもわれている。

俺たちは、メテルスも父親の悪事に荷担していることを知っているが、何も知らないふりをしている。

家を取りつぶさない事を決めた以上、いかに有効につかつかが問われている。

メテルスも自覚しているので、真面目に職務に励んでいる。

一方で徴税員たちも、過酷なノルマから解放されたことに喜び、メテルスに従っているようだ。

当然、俺が財務大臣を兼務している間は、問題を起こさせるつもりはない。

「王様。私は、口を挟むつもりはありません」

「そうか」

メテルスは、自分の立場を理解していて、積極的に発言はしない。

それでも、彼と話をすればまともな意見をもっていることがわかる。監視の目をゆるめるつもりはないが、今の働きぶりなら問題ない。

メテルスの隣にすわるのが、総務大臣兼都市開発担当大臣マニウスだ。

このメンバーのなかで、もっとも忙しい男だ。

都市開発のリーダーは俺なのだが、国王なのであまり城外にはでられない。

このため、マニウスに大臣の地位を与えて、マニウスの元部下に実質的な業務を任せていた。

しかし、くろくにんの性格と俺の激励に奮起したのか、寝る間も惜しみ働いている。

俺も、しつこく休めというのだが、素直に従わない。

「王をやめて、私にさらに苦勞を担わせるのですか？」

俺は黙るしかない。

しかし、俺は、マニウスの部下から1人を選んで、担当大臣に抜擢させる考えでいた。

俺が退位すれば、そいつに仕事を任せるつもりだ。

最後に外務大臣のレグルス。

当初、俺を嫌っていたが、俺が魔王を倒した事を知ると、態度が急に変わった。

どうやら、俺を勇者と勘違いしているようだ。

「レグルスは反対なのか」

「魔王を倒したのです。どうかこの地をお治め下さい」

「いや、まだバラモスは生きているのだが」

「問題ありません。もうすぐ新たな勇者が倒しに行きます」  
さすが外務大臣。

アリアハンの情報も、ばっちり入手している。

「わかった。今回の会議はこれで終了だ」  
俺は、みんなを帰らせた。

「どうしても、俺を辞めさせないつもりか」  
俺はため息をついた。

戦勝したことで、国内での支持率は高まっているようだ。  
そして、都市を奪回したことで、新しい時代の始まりを国民達が実感していた。

そのような時に、理由もなく王が退位すれば、国民から失望感が生じかねない。  
都市の復興に目処がつくまでは、王を努めるのが普通だろう。

だが、俺はこの国のことよりも冒険を続けることを優先するつもりだ。

そのためには、退位する理由を作らなければならない。  
俺は、最後の案を実行に移すことにした。

「これって、原作への伏線なのか？」



第59話 俺は、冒険を、あきらめない(後書き)

次で第4章がおわります。

## 第60話 新生ロマリア王国

俺はシャンパーニの塔にいた。

「俺を誘拐して、どうするつもりだ？」

俺は、目の前の盗賊たちに問いつめる。

「何を言っている？」

「勝手に侵入したくせに！」

どうやら、目の前の盗賊達は俺の言葉が理解できないようだ。

「意味がわからない。ロマリア王である俺が、なぜわざわざここに  
いる必要がある？」

「は？」

「なんだと！」

「そういえば、凱旋式でみたことあるぞ」

「本当か」

「確か、魔王を倒したとか」

ジंकクか、話を広めたのは。

「俺は、邪神を倒したと聞いたぞ」

「いや、倒したのは竜の王様だったはずだ」

「たしか、恋人を殺された・・・」

すげえ、いろいろと変な噂が混ざっている。

否定するのも面倒なので、話を続ける。

「目的はなんだ、身代金か？」

「だから、お前が勝手に侵入しただけだろう」

「だいいち、俺たちのほうがつかまっているし」

おかしい。

どうも、意志の疎通が図られていないようだ。

俺が、反抗したときに放った、爆発魔法イオラの影響か。

「仕方がない、もう一度魔法を使えば、いいのかな？」

「すいません」

「勘弁してください」

平和的に話が進めば、こちらも助かる。

とりあえず、夜が明けるまでには帰りたい。

「そうか、この王冠が目的なのだな？」

俺は頭に乗につけている装飾品を指し示す。

「えっ？」

「どういうことですか？」

「どうしたら、お話を聞いてくれるのかな？」

俺は、再び魔法を唱えようとする。

「そうです！」

「そのとおりです！」

盗賊達は、あわてて頷く。

前の世界で有名な、魔法少女の交渉術を参考にしたのだが、本当に効果があるようだ。

「じゃあ、俺の命と引き替えにこの冠はおいてゆく」

俺は冠を外し、地面に置くと、リミットを唱えて塔から脱出した。

「……。というわけで、卑劣な盗賊団にさらわれた俺は、王冠と引き替えに命からがら脱出しました」

「……」

俺は、いつもの会議室で誘拐事件の報告をした。

「偶然、塔にいたテルルとセレンのおかげでここまで帰ることが出来ました」

「・・・」

俺の隣にいるセレンとテルルを紹介する。

「俺の不注意で、こうなってしまった。責任をとりたい」

「まさか！」

「王を辞める」

「！」

「なんだと」

「ふざけるな！」

参加している四大幹部（今では4大貴族とは呼ばなくなっていた）たちは激怒した。

「ふざけてなどいない」

「この国の将来はどうするのだ」

「俺がいなくても十分だ」

本当のことだ。

すでに、政務の大部分を大臣達に任せている。

「しかし」

「王の権威を失った俺は、王の資格はない！」

俺は言い切った。

ここからが、勝負だ。

「王の権威を持つものは別にいる」

俺は、入り口にいたジンクに合図を送る。

ジンクは前王とその息子を会議室に招いた。

「前王！」

幹部達は起立し、挨拶する。

「俺は、彼に王位をゆずる」

俺は前王の息子に譲位を宣言した。

「しかし！」

「俺は、もう王位は継げない。かといって、王冠がない今、継承できるものは彼しかないのだ！」

幹部達はため息をついた。

俺が、計画的に退位すること。そして、拒むことが出来ないことを知ったのだ。

「許せ、みなのものよ」

俺は頭を下げる。

「この国には未来がある。そして、ロマリアの者で未来を切り開いてほしいのだ」

「・・・」

「お前達には、その責任がある。そして、能力もあるのだ。たのんだぞ」

俺は再び頭を下げる。

幹部達も俺に頭を下げていた。

「皆に感謝する」

俺は、会議室を後にした。

もうこの部屋に入ることもないだろう。

いろいろあつたが、楽しい一年だった。

だが、俺にはしなければならぬことがある。

部屋を出ると、そこにはテルルとセレンが待っていた。

「待たせたな」

「うん」

「本当に、待ちくたびれたわよ」

セレンとテルルは俺の手を握ると、そのまま城をあとにした。

交渉魔術王と呼ばれたアーベルの治世の最後であった。

## 第60話 新生ロマリア王国（後書き）

第4章が終了しました。

ようやく、冒険が再開します。

一区切りしましたので、評価をしてもらえたら幸いです。

#### 第4章終了時点でのステータス（前書き）

アーベル達がレベルアップを果たしたため、掲載します。  
参考程度にしてください。



## 第4章終了時点でのステータス

テルル

商人

ぬけめがない

LV：19

ちから：41

すばやさ：41

たいりよく：54

かしこさ：39

うんのよさ：32

最大HP：106

最大MP：77

攻撃力：79

防御力：78

EX：23885

鉄の斧、みかわしの服、魔法の盾、毛皮のフード

セレン

僧侶

ふつう

LV：17

ちから：38

すばやさ：33

たいりよく：49

かしこさ：42

うんのよさ：54

最大HP：100

最大MP：78

攻撃力：73

防御力：80

EX：23885

ホーリーランス、みかわしの服、魔法の盾、鉄かぶと

アーベル

きれもの

LV：25

ちから：26

すばやさ：63

たいりよく：52

かしこさ：106

うんのよさ：76

最大HP：105

最大MP：214

攻撃力：34

防御力：81

EX：87740

ブロンズナイフ、みかわしの服、魔法の盾、皮の帽子

## 第4章までのあらすじ

いやあ、すっきりした。

別に船酔いの話じゃないぞ。

残念ながら、船を入手したのに、俺は一度も船旅を経験していない。これも、ロマリア王に就任したことが原因だ。

本来なら、王になったままでも問題はなかった。

モンスターに襲撃された都市を開放することが出来たし、急遽出現した魔王バラモスを切り札を利用して撃退することもできた。

普通なら、美しい王妃を迎えてハッピーエンドだ。

だが俺には、大魔王ゾーマを倒すという目的があった。

勇者が旅立ち、魔王バラモスを倒すまえに、ゾーマを倒さなければ、俺の父ロイズはゾーマに殺されてしまうのだ。

ドラクエ5のように、王のままで冒険に出るのは、さすがに無責任とされているので、強引な方法であったが、さきほど退位した。

本来、一年で国のトップが変わるのは問題があるとは思っている。だが、反省はしていない。

俺をロマリア王位につけた悪辣な方法をやり返したただけだ。

まあ、退位に協力してもらった盗賊団には、あやまる必要があるかもしれない。

とはいえ、人さらいをするような集団に同情するつもりはない。

・・・ひょっとして、俺の悪辣なやり方をまねて、勇者を罠にかけたのか。

それなら、後であやまる必要があるな。

当然勇者に。

一年ぶりの冒険再開だ。  
これだから楽しみだ。

正直、残された時間はわずかだが、勇者と一緒に冒険できれば問題ないと思っている。

俺ならば、勇者を説得して直接大魔王ゾーマと戦うことができると思っっているからだ。

とりあえず、今日は冒険の再会を祝して宴会をしよう。  
実際の活動は明日から始めよう。

「アーベル」

「どうした、テルル」

「独り言を言っている間に、料理がきたわよ」

「……。それでは、乾杯をするか」

**第4章までのあらすじ（後書き）**

61話に続きます。

第61話 そして、冒険の再開へ・・・（前書き）

第5章が始まります。

各話のタイトルは、第3章までとあわせました。

第4章のフリーダムぶりは反省しています。

## 第61話 そして、冒険の再開へ・・・

「冒険の再開を祝して、乾杯」

「乾杯」

「乾杯」

俺たちは、バハラタで宴会をしていた。

明日から、3人での冒険が再開するのだ。

約1年間休止していたのだ。

俺たちは浮かれていた。

俺が冒険に出られない間、セレンとテルルは冒険をしなかった。

2人での冒険は、マヒ等での全滅の確率が高くなるからだ。

テルルは、父親が経営するキセノン商会で働いていた。

娘に事業を継がせる考えは変わっていないようだ。

キセノンは俺が王の間、一度も顔を見せなかった。

キセノンは前王とは直接面会したことはあったはずだ。

おそらく、俺がアリアハン出身であること、俺の治世が失敗したらキセノン商会の立場が悪くなることを懸念しての判断だろう。

俺が、キセノンの立場なら同じ判断をする。

「アーベルと面会すると、あいつが何を言い出すかわからないから顔を見せなかったと話していたわ」

テルルが自分の父親から聞いた話を俺に伝えた。

「俺も、キセノンに同じ事を言い返したい」

「あとで、顔を見せたらいいじゃない」

「あまり顔を合わせたくないな」

魔法の玉のこともある。

俺がバラモスを倒した時に使用したのだが、使用した事実を知っているのは、キセノンとテルルにセレン、そしてジンクだけだ。

他の者には、俺専用呪文として伝えている。

知られることで、アリアハンやキセノン商会が大量破壊兵器を所持している事実を露見したくないからだ。

俺がロマリアに残した資料には、「終焉の砲撃」という言葉と、俺が開発した呪文を「極秘資料・危険につき詠唱禁止」と記載して、厳重に管理させている。

当然秘密を解析しようと、ロマリア国内外から調査するものがいたが、成功するはずがない。

ちなみに、俺が開発した呪文は勇者専用の自己記憶消去呪文「わすれる」を誰にでも扱えるよう、改良したものであるはずだ。

あるはずだ、というのは人の記憶に作用する呪文など、怖くて実験できない。

資料にはきちんと「使用者の記憶に影響を与える可能性があります」と警告している。

誰も試さないだろう。

このことを説明したジンクからは

「あなたほど悪辣な人は、師匠しか知りません」

といわれてしまう。

そういえば、ジンクの師匠とはどんな人が、一度だけ聞いたことがある。

母ソフィアに質問したこともあるが、いつもはぐらかされていた。

ジンクの話によると、「巨乳の美女しか、弟子を取らない人」らし



い。

むつつりスケベか。

いや、ただのスケベかもしれない。

俺の母親が、師匠の話をしない理由がなんとなくわかった。

ちなみにジंकは弟子入りするために、モシヤスを唱えて変身したそうだ。

いろいろと突っ込むところはあるが、ジंकに対していったのは、

「ジंकよ、そこまでレベルを上げたのに、弟子入りする必要があるのか？」

だった。

・・・、話がずれたな。

テルルは、俺と打ち合わせをするときを除いて、旅に出ることはなかった。

当然移動にはキメラの翼を使用していたので、経験値を稼ぐ機会もなかった。

俺の母親との船旅を除けば。

セレンは、家で家事の勉強をしていた。

セレンは最初、アリアハンの教会で神父の手伝いをしていた。

手伝いを始めてからしばらくすると、急に教会へ参拝する男性信者が増えだした。

セレンは理由がわからず、信者が増えたことを純粹に喜んでいたが、教会の関係者はすぐに理由を理解した。

教会の関係者はいろいろと議論をしたようであるが、結局セレンの手伝いを断った。

テルルから聞いた話では、「これまでの信者に配慮して」というこ

とで結論をつけたらしい。

同時にテルルから聞いた話では、密かに「セレンの肖像画」とやらが高値で取引されているようだ。

……。アリアハンは平和だな。

俺も1枚持っているが、母親のソフィアが俺の誕生日プレゼントとして俺に送ったものだ。

決して、俺が欲しいといって頼んだわけではない。

セレンは教会の手伝いが出来なかった事を、非常に残念にしていた。だが、神父の一言で、家で熱心に家事の勉強をするようになったそうだ。

これもテルルから聞いた話だが、「料理の上手な女性は好かれるよ」と神父にいわれたらしい。

料理については、セレンの父親が指導していた。

セレンの父親は、「モンスターを食す」という本を出版し、ベストセラーとなるほど料理の造詣が深い。

モンスターを上手く食べる発想を得るためには、料理の基本が不可欠だ。

あまり機会はなかったが、セレンの家でよばれた料理は、すべて絶品だった。

セレンは、俺と打ち合わせをするときは、いつもお菓子を持ってきてくれた。

ちなみにこの世界では王様の食事といえども、毒味役は存在しない。ステータスシートで確認すれば済むからだ。

いざとなれば、教会で復活してもらえる。

ロマリアで俺がセレンのお菓子をおいしそうに食べるのを見ると、セレンは幸せそうな顔をしていた。

「アーベル。家に戻ったら、ごちそうするね」

「それは、楽しみだ」

何故か、一緒に話を聞いていたテルルは不満顔だ。

「テルル、心配しなくても食べるときは一緒だ」

「・・・」

何が不満なのか、俺は最後までわからなかった。

今日の宴会も、本当なら、俺の家と一緒に食べる計画も考えていたが、ひよっとしたら俺の実家にロマリヤの関係者が見張っている可能性を考慮し、延期することにした。

「まあ、いずれ見つかるかもしれないが」

俺はため息をつくど、知った顔が話しかけてきた。

「いやー、さがしましたよ」

「・・・。ジंकクか」

俺は再びため息をついた。

第61話 そして、冒険の再開へ……（後書き）

主人公が転生したのは、2010年12月24日の深夜です。

皆さんは「終焉の砲撃」って「ティ・ファイナール」のことかと考えられるかもしれませんが、主人公は知らないはず。偶然の一致でしょう。

すいません。作者の悪のりです。

反省はしていますが、後悔なんて、していません。

## 第62話 そして、転移酔いへ・・・

「いやー、さがしましたよ」

俺は、ジnkクの疲れた様子を見ながら反論する。

「お前が本気をだせば、すぐここだとわかったはずだが？」

「そうですね」

ジnkクは頷いた。

俺が退位したのはお昼だった。

どこかで宿を取る必要がある。

基本的に、俺たちの行動範囲はすべて、ジnkクが行ったことのあるところだ。

それに俺が王様であることは、ロマリアはもちろんのことアリアハ  
ンやポルトガ、イシスも知っている。

俺は、ほとぼりが冷めるまで近づけないだろう。

となれば、残された町で食事の旨いところしか残っていない。

アツサラームの食事もうまいが、セレンとテルルはアツサラームが  
あまり好きではない。

となると、消去法でここにたどり着く。

ちなみにこの町は、辛さの強い鳥肉料理が名物である。

俺としては、名物ではないが、カレーみたいな味のするスープが好  
きだった。

お米のようなものもあるが、この町では炊飯の慣習はないため、カ  
レーライスが食べられないのが残念でもあった。

「で、何のようだ。連れ戻しにきたのか？」

「それは出来ませんからね」

「そうだな」

俺は、退位した瞬間にアリアハンの国民に戻っているのだ。理由無く、他国の者を勝手に捕まえるわけにはいかない。さらに、俺が魔法反射呪文を覚えているため、魔法攻撃で俺を倒すことは出来ない。

「ならば、宴会に参加するためか？」

「したかったのですが」

ジルクは残念そうな顔をする。

「アーベルに渡すものがありますので」

「そうだったな」

俺は立ち上がると、セレンとテルルに声をかける。

「今日は楽しかった。またな」

「おやすみ」

「おやすみなさい」

俺たちは、宿屋にむかった。

「これまでの代金です」

「これはすごいな」

俺は驚きの声をあげていた。

俺がジルクから受け取ったのは、「くろこじょう」でもつけたお金だ。

これだけのお金があれば、アツサラームの強欲商人の言い値で武器を買うことができる。

絶対にそんな無駄遣いはしないが。

「まどうしの杖を買ったでしょう」

「あれは、定価の2倍だったはずだ。いやまさか」

ひょっとして、定価の16倍で購入したのか？

「さすがに、そこまでバカではないですよ」  
俺はほっとしていた。

念のため、出来るだけ値切れと指示をしたはずだ。

俺はジンクにお願いをした。

「ジンクよ。しばらく暇か？」

「あまり暇では、ありませんが」

「買い物につきあってほしい」

「買い物ですか」

「ふたりに、プレゼントしたいのでね。良い店を知っているのだ」

「そうですか。アーベルにしては良い心がけです」

ジンクは喜んで頷いた。

「でも、私がないほうが良いのでは？」

「ジンクも一緒じゃなければ駄目なのだ」

ジンクは笑って頷いた。

「そのような言葉は、おふたりに言ったほうがいいですよ」

「なぜ、ここにいますのです？」

ジンクは俺に質問する。

「いや、昨日話したとおりだが」

「買い物に付き合ってくれと、いわれたはずですが？」

ジンクは目の前の扉を前にして質問する。

ここは、ロマリアとポルトガとをつなぐ洞窟の中だった。

「どうみても、お店にはみえませんか？」

ジンクの言つとおり、決して店の前ではない。

「この先にある国に行きたいのだ」

「だから、私の力が必要だと」

ジンはため息をついた。

「どおりで、おかしいと思いましたよ」

「俺はおかしなことを言ったか」

「……。なんでもないです」

ジンは失望したようすで俺を見つめた。

「それから、ジン」

「わかっています。ここには私たちがいませんから」

ジンは解錠呪文アバカムを唱えると、すぐに中に入っていった。

「どうしたのかしら？」

「アーベル。ジンに何か変なこと言ったの？」

「それはないから」

俺は、セレンとテルルの質問に答えると、あわててジンに続いていった。

俺にとって、ここから先が試練になる。

目の前には旅の扉と呼ばれる転移装置があった。

「移動にもなう酔いが、きついからな」

「あきらめてください」

「ジン。いつもより言葉がきつくないか」

「いつもと同じですよ」

ジンは振り返ることなく旅の扉に入っていった。

どうやら俺はジンの機嫌を損ねたようだ。



第63話　そして、ひとりでお買い物へ・・・

モンスターの周囲に冷気の風が舞い、発生した無数の氷をモンスターにぶつける。

「どうですか、私の呪文は？」

ジंकが冷気呪文ヒヤダインを唱えると、自慢げに感想を求めてきた。

「綺麗ですね」

セレンがいつものように、感嘆の声をあげる。

「効果がないぞ」

俺がすかさずつつこんだ。

ゴリラに似たモンスターや、大きな面を身につけたモンスターは平気のようだ。

俺は、モンスター達に爆発系呪文イオラをぶつける。

「だめでしたか」

俺のイオラが効いたのを確認したジंकは、俺と同じく、イオラを唱えようとしていた。

俺たちは、アイテムを買うためにサマンオサ城へ向かっている。

俺が旅の扉の酔いからさますため、半日休んだのは内緒だ。

「アーベル、何やっているの。新手が来たわよ」

「了解」

俺は、空から飛んでくるモンスターを見ていた。

「ごくらくちようか」

確か、二回攻撃と回復魔法を覚えていた。

本来なら、やっかいな敵だ。

「普通ならばね」

俺は、再度イオラを唱えようとする。  
ごくらくちようは俺たちが攻撃する前に、仲間にはやく回復呪文を唱えるとそのまま逃げてしまった。  
残されたモンスターたちは、俺とジンクの魔法によって倒れた。

「残念でしたね」

珍しくセレンは不満そうな顔をする。

「ごくらくちようか」

「はい」

「まあ、気にするな」

「父から、あの肉は絶品と聞いていたので」

「そうか」

まあ、今後機会があるだろう。

セレンの料理の腕は確実に上昇している。  
非常に楽しみだ。

「そのときには、私も呼んでくださいね」

ジンクは、期待を込めてセレンにお願いした。

「いいですよ、初めてなので上手くいくかわかりませんが」

「ありがとう、セレン。とはいえ、簡単にはあえなくなりますね」  
ジンクは珍しくさみしそうな声をした。

俺は、少し気になったが、すぐにセレンにたのしそうに料理の話をしたのを見て、忘れてしまった。

俺は、サマンオサの商店で1人買い物をしていた。

旅の扉のところで、酔い覚ましをしていた俺は、セレンとテルルにアイテムをプレゼントすると口が滑った。

それならばと、俺が1人で買い物に行くことになったのだ。

俺は、一緒でも問題なかったが、皆を旅の扉のところまで待たせたのだ。  
多少のことは気にしない。  
買い物ですむと、セレンとテルルが待っている宿屋にむかった。

「はい、プレゼント！」

「……」

「……」

俺は、嬉しそうにプレゼントを手渡そうとしたが、セレンとテルルの顔は無表情だった。

「だから、言ったでしょう。アーベルに期待したら駄目だってジンクは変なことを口にする。」

「そうね」

「わかっていたわよ。でも、少しくらい期待してもいいじゃない！」  
セレンはジンクの言葉に納得し、テルルは反発する。

「なんで、怒っているのかな？」

「……」

「本気で言っているの」

俺が質問したばかりに、セレンとテルルの怒りの矛先がこちらに向かった。

「剣のデザインが気に入らないとか？」

俺は、おそろおそろ尋ねる。

俺が買ったゾンビキラーは店で購入できる武器のうち、商人や僧侶が装備できる最高の剣だ。

多少デザインが気に入らなくても、我慢して装備して欲しい。

「だから、言ったでしょう。アーベルに期待したら駄目だって」  
またジンクから同じ言葉を言われた。

「うん」

「わかった」

何が悪かったのだろう。

くやしいが、あとでジンクにでも聞いてみるか。

「すまない、ジンク」

「いえいえ、説明しなかった私が悪いのです」

俺は平身低頭して、ジンクに謝っていた。

宿で2人きりのときに聞いてみたのだが、ジンクはもうすぐ結婚するそうだ。

「忙しい時期に付き合わせて申し訳ない」

「気にしないでください。結婚したら、冒険も出来なくなりますし」

「そうだよな」

俺は、結婚相手を思い出すと、ため息をついた。

「まあ、お幸せに」

「ありがとう、アーベル」

ジンクは俺の手を握った。

「お世話になりました」

「お前らしくもないな」

「最後まで、失礼な人ですね」

ジンクは、少し泣いていた。

第63話　そして、ひとりでお買い物へ・・・（後書き）

急に、閲覧数が増えたので、びっくりしました。

日間ランキング入りしていたようです。

自己満足のためだけに書き始めましたが、ここまでこれたのも、皆様のご支援のおかげです。

ご支援に応えるには、きちんと完結させることと考えています。私にはそれくらいしかできませんが、引き続きご支援をお願いします。

## 第64話　そして、結婚へ・・・

俺たちは久しぶりに、ロマリアに来ていた。

来たら捕まるかもと思っていたが、今の王から許可をもらっている  
ので問題なかった。

ただし、俺は顔が知られている。

前王である俺が来たことが国民にばれると、何をされるかわからな  
い。

ごまかす必要があった。

一応、ジンクからの報告では俺の評価は落ちていないらしい。

今の王様が、

「前の王は、同郷の勇者と一緒に、魔王バラモスを倒す準備をして  
いるのだ」

と広報していたからだ。

国民からは、既に一度魔王を倒したと思われるため、それなら  
ば彼に任せようと俺を応援しているようだ。

まあ、あまり前王を否定すると、俺が考えた政策まで否定しなけれ  
ばならないので、問題があったのだろう。

今の王は、驚いたことに、国民に結構人気がある。

国民いわく、

「前の王より庶民的で、親しみがもてる」  
ということだ。

おかしい、絶対におかしい。

庶民の俺よりも庶民的などおかしいだろう。

ジンクの話聞いてみたら、今の王は、俺が王に就任してから毎日  
のように酒場や闘技場に入り浸ってみんなの話を分け隔て無く聞い

ていたそうだ。

「あいつ、考えがあるとは言っていたが、本当だったのか？」

「私にもわかりません」

ジंकは正直に話す。

それに、大臣を始め部下達にも人気があった。

仕事はほとんど部下に任せる代わりに、まったく口出ししないこと。成功した場合、部下をキチンと誉め、失敗しても責めずに「次はがんばれよ」と励ますからだ。

仕事を理解していないのに、いろいろ口を出す指導者が多い中、彼は自分の身をわきまえている。

任せて正解だったな。

「まあ、何かあればジंकがいるだろう」

俺はそう思っていた。

思考を今の自分の姿の事に移すと、思わずため息をつく。

「姿をごまかすためとはいえ、これはひどくないか？」

「かわいいわよ、アーベル」

「かわいいです」

テルルとセレンは高く評価してくれる。

だが、全然うれしくない。

俺が身につけているのは「ぬいぐるみ」というアイテムだ。着ぐるみとも言う。

母親に、ロマリアに行くことを相談したときに、借りてきたのだ。俺の全身が隠れているから、見た目は着ぐるみでしか評価をされない。

「まあ、すぐ噂になるな」

俺はため息をついた。

歩いていると、何人かの子ども達に抱きつかれたからだ。

城内に入るとき、近衛兵に検問を受けた。

当たり前だ。着ぐるみで歩くなど、怪しいにもほどがある。

幸いにも、近衛兵は知っている奴だった。

「お気をつけて」

奴の姿勢は完璧だったが、今にも吹き出そうな表情をしていた。

俺はこのときほど、王を退位したことを残念に思ったことはなかった。

城内に入れば、ぬいぐるみは不要だ。

すぐに脱いで、普段着に戻る。

「かわいかったのになあ」

「残念です」

「だったら、お前達が着ればいい」

セレンとテルルの攻撃をかわしながら、俺は今日の目的の人物に声をかけた。

「ひさしぶりだな、ジンク」

「あ、お久しぶりです。アーベルさん」

「よく似合っているよ、ジンク」

「お世辞でも嬉しいですよ」

「俺は、お世辞などいわない。本当に綺麗だよ」

ジンクは頬を染めた。

突然ジンクは俺のそばにより、耳元でささやく。

「こっかいした？」

急に話題を変えてきたな。



「いや、まだだ。これが終わったらのんびりと船旅に……」  
ジंकは俺の返事にあきれた顔を見せた。

俺は回答を誤ったのだろうか。

慌てて、別の話を振る。

「それよりも、早く子どもを産んでくれ」

「……。恥ずかしいことを言わないでください」

いや、今のロマリア王に何かあったら、前王である俺や、将来生まれる俺のこどもが王位継承争いに巻き込まれかねないのだ。

そんなことを考えながら、改めてジंकの衣装に目を移す。

うむ、やっぱり花嫁衣装は白いドレスがいいよね。

しかも、華美さが抑えられていて、ジंकが持つ清楚な感じが引き立てられる。

言動にさえ注意を払えば、立派に王妃はつとまるだろう。

言動とえば、以前の宴会で豊胸呪文「特盛り」を披露していたな。後から教えてもらったが、正直、目のやり場に困る危険な呪文だ。さすがに、今日は自重したようではっとしている。

それにしても、すてきな衣装だ。

セレンやテルルも花嫁衣装を身につけたら、こんな感じになるのかな。

「そう思うだろう。セレン、テルル？」

俺は、振り向いて2人に声をかけようとして驚く。

「……」

「……」

2人とも石になったように動かない。

「どうした。ふたりとも？」

ジnkの美しさに見とれたのか？

それとも、普段着との違いにとまどったのか。

「アーベルさん」

「お話があります」

「どうした、ふたりとも？あらたまった言葉遣いをして」

俺の質問には答えず、2人は俺の両腕をつかまえると、ずるずると近くの個室までひきづっていった。

「何をする！ジnkとの話は済んでないぞ！」

ジnkは微笑んで、俺に手を振っていた。

「アーベルさん！」

「なにから、話を聞こうかしら？」

俺は、個室で2人に迫られていた。

刑事ドラマにある、取調室で尋問を受けている感じだ。

テルルが尋問の担当らしい。

「あなたは、いつからジnkが女性だと知っていたの？」

「初めてあったときからだ」

王宮で初めて会ったときは、ドレスを纏い、きちんと化粧をしていたからすぐに気がついた。

その後は、ゆったりとしたマントを羽織い、ズボンをはいていたので誰も気付かなかったようだ。

「なら、どうしてジnkと一緒に部屋に泊まるのよ！」

「俺が望んだ訳じゃない。部屋割りの権限は男である俺にはない」

「！」

テルルとセレンは今日まで、ジnkが女性とは気付かなかっただけだ。

「どうして、教えてくれなかったのよ！」

「知っていると思ったからさ」

俺は本当に思っていたことを口にする。

「・・・」

だんだんと、テルルの追求の声が小さくなっていった。

「最後に確認したいの」

「なんだい」

俺は質問内容を予想していた。

「ジंकとは、何も無いよね？」

「当たり前だろ、将来の王様の后となる女性に手を出すわけがない」  
俺はため息をついて、部屋をでた。

「さあ、もうすぐ結婚式がはじまるぞ。見ないと後悔するぞ」

「まって」

「待ちなさい、アーベル」

セレンとテルルは俺のあとについてきた。

ロマリア王と王妃ジंकとの結婚式は、すばらしかった。

母ソフィアの勧めたとおり、自分が王位についたときに結婚式をしなかったことを、少しだけ後悔した。

第64話　そして、結婚へ……（後書き）

ジंकウとの冒険はこれで終わりです。

解説は不要だと思いますが、豊胸呪文「特盛り」はジंकウが開発した独自呪文です。

## 第65話 そして、スーの村へ・・・

「たしか、このあたりだったかな？」

俺達は、3人での冒険を再開していた。

船による移動にも大分なれてきた。

しかし、船の移動でも不便なことがある。

「ルーラやカメラの翼がつかえないのがねえ」

実際には、船の上だろうが、使うことはできる。

ただし、船はルーラやカメラの翼では移動しないのだ。

海上に残された船を再び使うためには、新しく別の船を用意する必要がある。

「ゲームでは簡単に移動できたのになあ」

「アーベル、何か言った」

「なんでもないよ」

ルーラの魔法を改良しようかと考えたが、移動場所の確保等問題が多いため、見合わせることにする。

「とりあえず、3人いればなんとかなるし」

現在の戦力であれば、海上のモンスターにまけることはまずない。

ただし問題なのは、追放呪文バシルーラでアリアハンにまで飛ばされることだ。

戦闘が終わっても、仲間は戻ってこないの、残されたもので残りの船旅をしなければならない。

ちなみに、この世界でのバシルーラは、術者以外の仲間にも使えるらしい。

確か、SFC版だと使えなかったはずだから、この仕様はFC版準

扱ということか。

・・・いや、FC版だと自分自身にも使えた気がする。  
自分で使うのなら、ルーラで十分か。

ジンクが餞別代わりに、俺に実演してくれた。

・・・どうでもいい話だと思う。

だが、ジンクからは、他にも「ふうじんの盾」をもらったので文句は言わない。

「ジンクはとても綺麗だったわねえ」

「・・・」

最近、ジンクの話を見ると、テルルは不満そうに俺に当たるようになった。

「あのドレスを着れば、誰だって綺麗になるさ」

「あら、そんなことジンクに言ってもいいの？」

「頼むから、勘弁してくれ」

今の俺は、ただのアリアハンの国民だ。

国際問題に巻き込まれるのは、もうご免だ。

「村がみえたわよ」

ようやく、目指す村がみつかったようだ。

「すてき」

「アーベル、ありがとう」

「どういたしまして」

俺達は、スーの村の道具屋にいた。

薬草などの道具類はまだたくさんあったのにと、訝しむ2人を俺は強引に連れて行った。

目的は、薬草ではない。

この村で作られている装飾品が目当てだ。

俺は、2人のために、銀の髪飾りを選ぶとそれぞれに手渡した。テルルには、後ろ髪を束ねる髪留めを、セレンにはカチューシャを選んだ。

銀の髪飾りとよばれているこれらの装飾品は、いろいろなデザインがあつたが、どれも防御力は同じで、しかも高い。

俺の装備品である皮の帽子と比較して、10倍の防御力である。

ああ、自分で言つて少し悲しくなつてきた。

セレンとテルルは俺の表情の変化に気付かず、二人して髪飾りをあてもない、こうでもないと位置決めをしていた。

「どう、似合うかしら？」

「うん、思つていた以上によく似合つているよ」

「そ、そう」

「ありがとう。アーベル」

2人とも、顔を真っ赤にして喜んでいる。

気に入ってもらつてよかったと、俺も喜んでいた。

あとで、ジンクにもお礼を言わないといけないな。

「女の子が、剣をもらつて喜ぶと思えますか？」

「攻撃力が高くなれば、早く戦闘が終わるから、けがが減つて喜ぶかと」

「……。重傷ですね、これは」

ジンクは大きなため息をついた。

俺とジンクは、サマンオサの宿屋で話をしていた。

俺は、僧侶と商人にとって最高クラスの武器をプレゼントしたにもかかわらず、セレンとテルルが喜ぶどころか、残念がった理由をジンクに質問していた。

どうやら、俺と女性陣との間では装備品に関して、意見の相違があったようだ。

「そうではありません。アーベル」

「何が違うのだ？」

「プレゼントの意味についての見解の相違ですよ」

「プレゼントの意味？」

俺は首をかしげる。

せつかくの大金を手に入れたのだ、パーティの戦力強化にお金をつぎ込むのは問題ないはずだ。

大金を持っていても、全滅しては意味がない。

所持金の半分を持って行かれるし。

「普通に生活する女の子が、プレゼントといわれて何を期待しますか」

「・・・。そういうことか、わかったよジンク」

「ようやくわかってくれましたか。これでもわからなければ、これを使うところでした」

そういつて、ジンクは杖をとりだす。

「理力の杖か」

「あなたには、魔法が通用しませんからね。物理攻撃で殴るしかありません」

俺はため息をついた。

一対一の戦いなら、回復魔法を使えない俺の方が圧倒的に不利だ。俺が話を理解したことにほっとして、ジンクは話を続ける。

「私が、よいお店を紹介しますので、3人で行ってみてください」

そういつて、注意事項とともにスーの村の道具屋を教えてもらった。



「どうしたの、アーベル？」

「なんでもないよ」

「ならいいけど」

俺は、テルルに返事をする、注意事項を思い出していた。

「ひとつめは、私が紹介したことを決して話さないこと」

俺はジンクに理由を聞こうと思ったが、何故か自分の命の危機を感じて取りやめた。

「ふたつめは、銀のかみかざりよりもとんがり帽子のほうが防御力が高いからといって、セレンさんにあげないという選択を選ばないことです」

ジンクは急に真剣な顔を見ると、俺の顔に近づいた。

「さもないと、セレンさんのザキの練習台になりますよ」

それだけは、勘弁して欲しい。

俺は、理由がわからないままコクコクと頷いていた。

「アーベル？」

「ど、どうした、セレン」

俺は、セレンから急に話しかけられて、驚いて反応する。大丈夫だ、ばれていないはずだ。

俺は、平静をよそおいながら、セレンに話を続けさせる。

「相談したいことがあります」

第65話　そして、スーの村へ……（後書き）

## 第66話 そして、人生相談へ・・・

「座りましようか」

「そうだな」

俺とセレンは、スーの村はずれにいた。

テルルは、武器屋を見てくるといって、1人で出て行った。  
スーの村はのどかだ。

1人で行動しても問題はないだろう。

俺とセレンは、柵の付近に腰掛けた。

セレンはさっそく、カチューシャを付けていた。

水色の髪の毛に、銀色の装飾品はなじまないかと危惧していたが、カチューシャのデザインが控えめなことから、落ち着いた感じのセレンには良く似合っていた。

「なんだい、改まって相談というのは？」

しばらく待つてから、俺は優しく声をかける。

俺はセレンがいて大変感謝をしている。

このパーティーで唯一の回復役。

そして、冒険者でもっとも重宝されながら、人数が少ないため、競争率の高い職業でもある。

俺が王になったことから、セレンは1年間活動を休止していた。  
その間に、多くの冒険者からパーティーへの参加を呼びかけられたという。

多くの冒険者達は、セレンに癒されたいとか、マスコット役としておいておきたいとか理解不能な理由で誘っていた。

特に僧侶男の3人パーティーから誘いがあったことを聞いたときは、

冒険者ギルドの幹部になってパーティ編成システムを変えてやる！  
と、思わず息巻いたものだ。  
実行に移すつもりはないが。

当然、純粹に戦力強化のため、誘われたこともあったそうだ。  
女性ばかりのパーティからも声がかかったことがあったらしい。  
本来なら、他のパーティに移ってもおかしくなかった。

だから俺は、なるべくセレンの期待に応えたいと考えていた。

「遠慮しないでいつてくれ」

「・・・、魔法を覚えない僧侶なんて、いらないですよね」

セレンは目に涙をためて、俺に訴えた。

「どついうことだ？」

俺は意味が理解できず、さらに問いかける。

「私、わたし、もう呪文を覚えないかもしれない」

目を大きくして、俺に向かってうるうると訴える姿は、非常に保護  
欲をかき立てられる。

だが、俺はあわてて周辺を見渡す。

あたりにはだれもいない。

俺は少し安心した。

誰かに今の俺達の姿を見られたら、俺は殺されるかもれない。

「セレンを救うために、俺を殺した」と言えば、無罪を勝ち取るこ  
とができるだろう。

残念ながら俺を保護してくれる存在は何処にもない。

・・・、いかん。冷静にならなくては。

俺は、努めて冷静にセレンの話を聞いていた。

セレンが泣きながら話す内容はこうだった。

自分はレベル18になったが、レベル18で習得出来る呪文「ルカナン」を覚えることができなかった。  
ひよっとしたら、自分に僧侶の才能がないのかもしれない。  
もしかしたら、もう呪文を覚えることが出来ないかもしれない。  
そうならば、使えない僧侶として捨てられるかもしれない。  
自分の替わりに、俺が、新しくかわいい僧侶（女）を加えて冒険をするかもしれない。

「ふう」

すごいよセレンさん。

よくもまあ、こんなにも突っ込みどころが満載の話をしてくるとは。責任は俺にあるか。

俺はこのパーティーのリーダーである。

一年ぶりに冒険を再開したのに、あまりセレンと突っ込んだ話をしなかった。

こうなったら、時間をかけて何度も話をする必要がある。  
信頼を取り戻すには時間は必要だ。

「セレン。まずは、ひとつづつ誤解を解こうか」

「誤解？」

「そうだ、あまり話をする機会が無かったことは、済まなかった」  
俺は、セレンに頭をさげる。

「・・・」

「まずは、呪文の習得についてだが」

俺は頭の中で考えを整理しながら話を始めた。

「セレンは講義の内容をおぼえているかい？」

セレンは頷いて話を始める。

「呪文は一定のレベルで覚える事ができると、習得には「かし

「こさ」が関係することだったかな」

セレンはようやく泣きやんで、落ち着いたようだった。

「そうだね、講義ではその程度しか話は無かったとおもっ」

「・・・」

「ここから先の話は、誰にも言わないと約束できるかい」

「はい」

これから先の話は、俺が前の世界でインターネットを使って調べた話だ。

現在、母ソフィアに、冒険者ギルドから統計データを入手してもらおうようお願いしているが、間違いはないだろう。

「呪文には、確実に覚えられる呪文とそうではない呪文がある。

そして、そうではない呪文については、ある程度のかしこさがあれば半分程度の確率で覚えることが出来る」

「だったら、ルカナンの習得も運しだいなの？」

セレンは安心して質問する。

「ルカナンは、必ず覚える呪文だよ」

「そ、そんなあ」

セレンは、再び涙ぐんでいた。

この涙は見たくなかった。

だが覚えている以上、嘘はつきたくなかった。

俺がこの世界に来て最も変わったことは、記憶力だった。

もともと、記憶力はあまり良くなかった俺だが、前世の知識のうちドラクエ3に関係ある知識だけは、かなりはつきり覚えている。

確かにこのゲームを何十回も遊んでいたが、他のゲームも遊びまくっていたのだ。

この世界に転生したと無関係ではないと思う。

「話は途中だ、セレン」

「えっ」

セレンは心配そうな顔をむける。

俺はセレンを思わず抱きしめて、頭をなでなでしたくなるほどかわいらしかったが、我慢して話を続ける。

「ルカナンは一定以上のレベルがあれば確実に覚えるよ」

「そうなの？」

「レベルが20になれば、確実に覚えるよ」

「本当？」

セレンは目を輝かせて期待している。

「俺が、セレンに嘘をいつたことがあるかい？」

「ごまかしたことはあるけど、嘘はないわね」

俺はごまかしたことなどなかったはずだが、追求されるとまずい気がして話を続ける。

これもごまかしたことになるのだろう。

「だから、セレン。安心して一緒に冒険をしよう」

「はい！」

セレンは元気よく頷く。

「それに、」

俺は、セレンの頭をなでなでしながら答える。

「こんなにかわいらしい僧侶を見捨てたら、世界中の冒険者に殺されるよ」

「私を、子ども扱いしないで」

言葉はともかく、セレンの表情は、全く不満を持っていなかった。

「さあ、そろそろ戻ろうか」

テルルが探しに来るかもしれない。

俺が周囲を見渡すと、セレンはいたずらっぽく微笑む。

「テルルは宿で待っているわ」

「そうなのか？」

「だから、お願い」

セレンは俺の腕を取ると、腕を組むようにして歩き始める。

「宿屋では、テルルの話も聞いてあげて」

「・・・。わかった」

俺は頭をかきながら、宿屋に向かった。

俺はリーダー失格かもしれないな。



第66話 そして、人生相談へ・・・（後書き）

セレンは、おとなしいので主人公から積極的に話しかけない限り、存在が薄くなります。

セレンのかわいらしさが少しでも伝わればいいのですが、伝わらないようでしたら「残念な描写あり」タグを追加しておきます。

最後に、設定の参考として攻略サイトの情報も参考にさせていただいております。

攻略サイトの管理人の皆様には、この場を借りて感謝を申し上げます。

## 第67話 そして、ダーマへ・・・

俺達はバハラタを出発して、北東にあるダーマへ向かっていた。途中に、いろいろとモンスターが出現したが、全力で呪文を唱える俺や、新調した武器で戦うセレンやテルルたちの敵ではなかった。ちなみに、俺もスーの村で新しく武器を新調した。毒針である。

どのモンスターにも確実に1ポイントのダメージをあたえること、そしてボスモンスター以外であれば急所をつけば一撃で倒すことができる。

防御力の極めて高いモンスターである、メタルスライムやぐれメタル対策に欠かせない一品である。

俺達がダーマを目指す理由は、テルルからの相談に関係している。

スーの村で、テルルから聞いた内容をまとめると、つぎのとおりだ。自分は、レベル20になったが、商人のままでもいいのだろうか。もっと、前衛に適した職業に転職した方がいいのではないだろうか。という内容であった。

単純に現在のパーティの戦力だけを考えるのであれば、俺は転職を勧めただろう。

だが、俺は別の考えがあった。

冒険者としての商人と、経営を営む商人とはべつのものである。だから、別の職業に転職しても問題はないはずだ。

だが、平和になれば冒険者の商人には別な役割が生まれると、俺は考えていた。

それは、商人系の呪文の開発である。

たとえば、相手の嘘を見抜く呪文や、アイテムの具体的な効果を調べる呪文、新しいアイテムを既存のアイテムを合成することで生成する呪文などである。

本当に新しい呪文が作れるかどうかは今後の研究の成果が待たれるが、ソフィア達の研究報告書を見る限り、かなり期待できるとのことだった。

当然、難しい呪文であれば、高いレベルが求められる。

そのため、俺はテルルに、本当に別の職業に就きたいと思わないかぎり、今のままで十分だと答えた。

「なら、どうしてダーマに向かうの？」

テルルは俺に質問する。

俺は、解説口調で答えた。

「理由はふたつある。一つめは、テルルにダーマ神殿でいろいろな人に話を聞いて欲しいためだ」

「話を聞く？」

「そうだ。あそこには転職を目指す人や、転職した人、そしてそれらの人の事を知っている人たちがいる。話を聞いてから転職するかどうかを決めればいい」

「なるほどね」

テルルはうなづく。

「もう一つの理由は、戦力の強化だ」

「戦力の強化？」

「これまでは、レベルを上げたり、武器を強化したりした。それでも、物理攻撃力が低下するのなら、新しい仲間を加えればいい」

「そうね」

テルルはうなずいた。

「ダーマ神殿に来ることが出来る冒険者たちだ。即戦力になるだろう」

性格については、今回はあまり考慮しないことにする。しばらくすれば、勇者を仲間に加えるからだ。

勇者がもうすぐ16歳になる。

短期間であれば、多少の性格の悪さは目をつむるつもりだ。

「わかったわ。でも約束して」

「何を約束すればいいのかな？」

「新しく仲間を決めるときは、3人が納得すること」

「当然のことだね」

「それと、性別は最初に確認すること」

「・・・。わかった」

俺は何故か冷や汗をかきながら頷いた。

ちなみに、勇者の性別は男だと母ソフィアから聞いている。

勇者についての情報はほとんど秘匿されているが、勇者の家庭などから性別の情報くらいは出回ってしまう。

この程度は仕方ないことだろう。

勇者がパーティに加入する際に、もめることはないだろう。

というか、もめたら俺達と一緒に冒険できなくなってしまう。

一度そのことを、テルルとソフィアに話さなければならぬだろう。

「中也広いね」

「そうだね」

俺とセレンは、ダーマ神殿の中にいた。

テルルは、さっそく周囲の人たちに聞き込みを始めていた。ちなみに俺は、今のところ転職をする予定はない。少なくとも俺は、魔法使いの呪文を全て覚えられるようになるまでは転職をする気にはならない。転職するとすれば、遊び人を経験してから賢者を目指すか、僧侶を経験してから盗賊を目指すつもりだ。

普通に呪文を極めるのであれば前者を選びたいし、力の種等のドーピングアイテムを収集して戦力を強化するのであれば、後者を選びたい。

理想を言えば、成長の早い魔法使いを続けて、新しい呪文の開発に励みたいところではあった。

ただし、大魔王を相手にする場合、HPの少なさは致命的な弱点となる。

まあ、弱点を補う方法はいくつか考えてはいるのだが。

「やっぱり、アーベルはすごいです」

「たいしたことではないのだが」

俺の将来の計画を話すと、セレンは賞賛してくれた。

いつものことだが、それでも誉められると、うれしいものである。

「あの魔法使い、にやけちゃって」

「かわいい彼女と一緒に。うらやましいかぎりだ」

「腕をくんだりして、神殿を何だとおもっているのか。けしからん耳に入ってくるひそひそ話を聞く限り、いろいろ、周囲に誤解を与えてしまったようだ。」

どうしようかと考えていると、後ろから声をかけられた。

「すいません。どうか助けてください」

振り向くと、目の前には疲れた表情の武闘家がいた。

第68話　そして、今度こそ新しい仲間（仮）との冒険へ・・・

「さて、話を聞きましょうか」

俺達は、神殿の2階にある宿屋の前にいた。

ここには、会話をするために用意された椅子とテーブルがあり、軽食を取りながら雑談をすることができる。

俺達は、目の前で食事をしている武闘家の男を観察していた。

男は、鶏肉のような食べ物をお代わりしていた。

「俺の名前は、アーベル」

「テルルよ」

「セレンです」

「タンタルだ」

男は食事に満足したらしく、俺達の質問に答えた。

「まずはお礼をいわせてもらおう。食事をありがとう」

「礼はいいから、話を聞かせてください」

俺は、タンタルと名乗った男に話を続けさせる。

俺は最初、俺のことを前のロマリア王であることを知っているのか  
と思った。

この神殿で俺のことをロマリア王だと知っているのは、セレンとテ  
ルルだけのようだった。

とはいえ、油断は禁物だ。

目の前の男は、知らない振りをしているだけかもしれない。

「俺は、昔ロマリアで戦士をしていた」

タンタルは、話を始めた。

「もう1人、友人である戦士と2人で、ロマリア周辺で経験を積ん

でいた。ところが、仲間だった友人は、ロマリアの近衛兵に就職したのだ」

就職したのは、俺が王になる前の話だ。

ひよっとしたら、知っている奴かもしれない。

「1人になった俺は、仲間を見つげるため、ロマリアの酒場で探していた。

そこで、悲劇がしまったのだ」

タンタルは頭を抱えた。

「俺は酒場にいた、武闘家の女に声をかけた」

「女は、俺の誘いを了解すると、すぐに酒場を出て行った。人気のないところへ連れて行かれた俺は、ラリホーで眠らされた」

眠らされたことに気付いたのは、相当後になってからだため息について話す。

「目を覚ますと、目の前に武闘家2人と、1人の盗賊が目の前にいた。

後で聞いたら、彼女達は3姉妹で、冒険の仲間を捜していたという。タンタルは3人の目的にまったく気付くことが出来なかったと、後悔した様子で話した。

「俺が目覚ますと、見知らぬ塔にいて、いつの間にか、周囲に見たことのないモンスターが現れた

彼女たちは悲鳴をあげるだけで、戦う意志が全くなかった。

俺は勇気を出して、1人だけで戦った」

彼女たちの行動は全て演技だったのだけどね、とタンタルはぼやいていた。

「敵のモンスターは強力で、油断していた俺はあっけなく殺された。このときは、俺達のパーティは全滅したと思っていた」

タンタルは頭を抱えた。

「本当の地獄のはじまりはこれからだった」

「彼女たちは、俺をザオリクで生き返らせると、再び戦いを見守っていた。

そのため、攻撃をするのは俺だけで、他の3人は防御か自分の回復しかなかった。

ようやくモンスターを倒したのは、7回死んだあとだった」

タンタルは絞り出すような声で話を続けた。

「俺は、死ぬことはあまり怖いとは思っていなかった。

だが、1回の戦闘でここまで死ぬと、精神が持たなくなった」

「・・・」

俺達は、彼女たちがタンタルを仲間に入れた理由をようやく理解した。

タンタルは自嘲していた。

「その後は、彼女たちのいいなりさ」

「レベルが20まで上がるたびに、ここにつれてこられて転職させられた」

最初は、魔法使いその次は僧侶そして、遊び人にもなったという。

ダーマ神殿で、冒険者の養成所に通った経験が裏目に出たと嘆いていた。

「遊び人から賢者に転職させられるとおもったが、何故か武闘家に転職させられた。

その後、彼女たちに俺のMPが無くなるまで呪文を使わされた」

嫌な予感はしていた。だが、なにも出来なかったとタンタルはいう。

「そして、再びラリホーで眠らされたあと、この場所にひとり残されたのだ」



「俺は装備もないまま、無一文で放り出された。ここでは誰も相手にされず、ロマリアまで帰る手段のない俺は、最後の望みであなた達にお願いしたのだ」  
「どうやら、ダーマでは昔、この手の寸借詐欺がはやっていたらしく、誰も相談に乗ってくれなかったそうだ。」  
「だから、頼む。俺を仲間に加えてくれ」  
「タンタルは土下座して頼み込んだ。」

「俺達を信用するのですか？」

「ただ飯をおごってくれただけでも、信頼に値する。」

俺の先祖から伝わる格言には、食事の恩は絶対に忘れるなというものがあ

る。タンタルは伏したまま話を続ける。

「それに、そこにいる、僧侶とは話をしたことがある」

「えっ、そうなの？」

「セレン。覚えている？」

「いいえ」

「忘れたのも無理はない。」

そのときは戦士だったし、あまり良い印象も持たれなかった」

「もしかして、酒場にいた人？」

「あのときはすまなかった」

タンタルは頭を下げたままだ。

「頼む。パーティーを組むのが嫌なら、キメラの翼を貸してもらったけでいい。」

ロマリアに戻ったら、必ず返すから」

「どうする、アーベル？」

テルルは俺に意見を求めた。

正直どうしたらいいのかわからない様子だ。

それは俺も同じだが。

「まずは、ステータスシートを見せてくれませんか」  
タンタルは、俺達にステータスシートを見せつけた。

「ステータスを確認する限り、話に嘘はないようだな」  
ちなみに、性格はくろろにんだった。

性別が男であることは、テルルとセレンが真っ先に確認していた。

「どうするの、アーベル？」

テルルは再び、俺に意見を求めた。

「まあ、セレンの意見を最初に聞くべきだろうね」

俺はセレンに話かける。

「どう思う、セレン。一緒に冒険しても問題ないか」

「……。アーベルが問題ないというのなら」

「そうか。テルルはどう思う？」

「そうね、2人が反対しなければ私も反対はしないわ」

「そうか。だったら、俺の意見をいわせてもらう」

俺以外の3人は緊張する。

「しばらくここで、一緒に冒険しましょう。」

問題なければ仲間に加えますし、問題があってもキメラの翼と最低限の装備はさしあげます。

セレンとテルルはそれでいいか？」

「いいわよ」

「はい」

「ありがとうございます。ありがとうございます」

タンタルは俺の足にすがりつくくと、泣いてお礼をいつている。

「お礼をいうなら、セレンに言ってください。セレンが嫌だったら、こんな提案はしませんでしたから」

「セレンさん。ありがとうございます」

タンタルは再びセレンに向かって土下座をしていた。

第68話　そして、今度こそ新しい仲間（仮）との冒険へ……（後書き）

武闘家2人と、盗賊1人の3姉妹パーティ。  
この物語のなかでは、最強のパーティです。

第69話 そして、タンタル視点での話へ・・・(1)

はあ、カウンセリングですか。

セレンさん、その言葉は初めて聞きました。

はあ、セレンさんですか。

俺みたいに、精神的なダメージを受けた場合、相談しやすい人に話をすることで、症状が改善されるということですか。

・・・なるほど、効果はあるかもしれませんが、あまり、あのときの話はしたくはありません。

そうですか、無理に昔の話はしなくてもよいのですか。

セレンさん、優しいですね。

えっ、アーベルさんの提案？

あの、魔法使いの人ですね。

妙に丁寧な話し方をされていましたね。

ええ、彼には助けられました。

ありがとうございます。

え、あの人がリーダーですか。

俺はてつきり、商人のお嬢さんの方がリーダーだと思っていました。抜け目がなさそうな感じにみえましたから。

へえ、アーベルさんが、「きれもの」ですか。

そうですね、ふつうの人に思いましたが。

あっ、すいません。すいません。

性格の話は、二度としませんから。

・・・では、どのような話をしたらいいのでしょうか。

そうですか、最近の話をすればいいですね。  
わかりました。

俺が、助けてもらった日の事は決して忘れません。

命以外のことであれば、何でも皆さんのお役に立ちたいと思っています。  
ます。

ええ、前衛に立つ人が欲しかったのですね。

それでしたら、お任せ下さい。

セレンさんの盾になりますよ。

それにしても、助けていただいた翌日に、各国をまわって武器を調達してもらったことは、感謝しています。

それにしても、あれだけの金を大盤振る舞いして大丈夫ですか。

ええ、承知していますよ、あの装備はあくまで借り物であることはそれにしても、これらの装備品の豪華さはどうですか。

サマンオサという初めていった町では、パワーナツクルにくるずきんを購入してもらいました。

さらには、ポルトガでは黒装束まで購入してもらいました。

全部あわせた金額は、10,000ゴールドを超えますよ。

出会って二日目のひとに、それだけの装備を貸しますか、普通。

それだけのお金があれば、俺のふるさとであるロマリアの宿屋に9年以上泊まれますよ。

それに、なんですかこの盾は。

ロマリア王家に伝わる、風神の盾ではないですか。

たしかに、武闘家が装備できる唯一の盾ですが（注1）、そんな大事な盾を何故持っているのですか。

えっ、アーベルさんが前の王様で、退位した記念に今の王様から譲ってもらった。

セレンさん、冗談ですよ。それ、・・・

・・・、すみません、セレンさん。

わかりましたので、ええ、よくわかりました。

魔王を倒したのも信じますから、本当に信じていますから。ですから、続きを話してもいいですか。

ええ、アーベルさんがすごい人であることは、よくわかりましたから。

たしかに、先ほどイシスの女王と、すぐに面会できた理由もそれならば納得できます。

イシスの女王ですか、確かに美しいと思いますよ。

でも、セレンさんと比べたら、たいしたことはないですよ。

本当に、このパーティと一緒にいられることは、幸運以外のなにものでもありません。

あの、3姉妹の仕打ちですらですら、感謝でき・・・、いや、あれだけは許せません！

・・・ああ、すみません。

どうも、熱く語ってしまったようです。

どうしたのですか、セレンさん。

顔が赤いようですが、大丈夫ですか。

はい、わかりました。

続きを話しますね。

しかし、先ほどアーベルさんにお礼を言ったとき、

「大丈夫、明日になれば元手は帰ってくるから」

と言われたのはびっくりしました。

そんな、上手い儲け話があるのでしょいか。

ええ、そうです。

アーベルさんからは、

「タンタル。お前の働きにかかっている」  
と言われました。

レベル1の俺に、そんな働きが出来るのでしょうか。

とても心配です。

すみません。

何か、変なことを言いましたか。

えっ、「私はそんなこと、一度も言われたことがない」ですか。

そんな、こんなにすてきな僧侶を頼らないなんておかしいですよ。

自分なら、自分で怪我をしても、セレンさんに回復をお願いしますよ。

……。いや、しませんけどね。

きつと、アーベルさんも口には出さなくても、心の中では思っているはずですよ。

ええ、心配いりませんよ、セレンさん。

ほかに、何を言われたかですか。

「安心していいよ。口を動かすだけの簡単なお仕事ですから」  
と言われました。

え、セレンさん、どうしたのですか。

アーベルさんに問いつめるって、なんですか。

は、今夜はこれで終わりですか。

はい、ありがとうございました。



第69話 そして、タンタル視点での話へ・・・(1) (後書き)

これまでは、主人公の一人称視点の物語でしたが、最後まで続ける  
とは限りません。

その2は、明日の正午に更新予定です。

## 第70話 そして、タンタル視点での話へ・・・(2)

セレンさん、今夜もよろしくお願いします。

昨夜は、慌てて部屋を出られましたが、大丈夫でしたか？  
勘違いで助かったですか。

まあ、問題なければいいのですが、顔色が非常に悪かったものから、とても心配していました。

「今後アーベルさんから、変なことを言われたら話をして欲しい」  
ですか。

ええ、かまいませんよ。

もっとも、昨日の言葉通り、今日は口だけ動かせばよかったですから。

どうしたのですか、そんなあきらめたような顔をして。

俺の何処が悪かったのでしょうか。

わかりました。

今日の事を、話しますね。

今日は、イシスの北にあるピラミッドに行きました。

昨日、イシスの女王と面会したのはこのためだったのですね。

たしかに、あそこは大昔のイシス王家の王様達が眠っているという、  
言い伝えがありますからね。

勝手に入ってはまずいでしょ。

アーベルさんの手際の良さには感心しました。

他にも、皆さんの準備にも感心しましたよ。

セレンさんが、普段と違ってみかわしの服を着られたので、どうし

たのかなと思っただのですが、砂漠を歩くため金属製の鎧を脱いだのですね。

俺は、黒装束でしたので、少し暑かったですが、死ぬことに比べたらたいしたことではありません。

ええ、よくお似合いですよ。

普段着のセレンさんを見ることができましたから。

ええ、恥ずかしがる必要はありませんよ。

自信を持ってください。

アーベルさんもきつと、・・・

えっ、えっ、セレンさん、泣かないでくださいよ。

大丈夫ですよ、大丈夫ですよ。

アーベルさんは、きつと恥ずかしくて口に出さないだけですから。

そうですよ、そうですよ。

だから、涙をふいてくださいよ。

ピラミッドに入っただけでしばらく進むと、急に涼しくなりましたね。

さすがに、このまま探索に入るのは無謀でしたので、しばらく休憩をとりましたね。

しかし、さすがセレンさん達です。

全滅する可能性を極力排除するやりかたは、他の冒険者の皆さんにも見習ってほしいものです。

ようやくここで、俺の今日の仕事を教えてもらいました。

というよりも、ようやく理解したと言っべきでしょうか。

俺は、遊び人のときの経験から、モンスターを呼び寄せる「くちぶえ」という呪文を覚えています。

あらかじめ、俺達が準備をして、モンスターを迎え撃つということでした。

一本道ですから、よほどのことがない限り先制攻撃を受けることはありませんね。

あまり、神経をすり減らすことがないのは助かります。

それに、俺への戦闘中の指示は、「おとなしく自分の身を守ってください」でした。

比べてはいけないと思いますが、3姉妹の仕打ちを受けた俺にとって、涙が出るほど嬉しかったです。

俺は最初から戦いたかったのですが、俺の涙が止まるまで攻撃はあたらな思っていました。

そのため、今の自分にできること、おとなしく自分の身を守っていました。

ようやく、涙がかれてきたこと、レベルも上がったことから、自分も攻撃に参加しようと思いました。

ですが、勝手に戦闘に参加することで連携が乱れることを恐れていました。

そのため、事前にアーベルさんに戦闘に参加したいと話をしました。

「・・・、そうか。タンタル、ステータスシートを確認したい」

俺は、アーベルさんにステータスシートを手渡すと、内容を確認するアーベルさんを眺めていた。

アーベルさんの表情は、満足した様子でした。

今から思えば、俺が事前に作戦の変更を提案したことを評価したからだと思っています。

でなければ、さきほど正式にパーティへの参加を認めなかったでしょうから。

はい、ありがとうございます。  
これからもがんばります。

ああ、すいません。  
話が飛びましたね。

アーベルさんからの新しい指示は、二つありました。

一つめは、パーティの先頭にたつこと

二つめは、戦闘中は魔法を使用しないこと  
でした。

一つめの理由は、俺にも理解できました。

レベルが上がリ、防御力も最大HPも高くなりましたので、パーティの壁役を任せても問題ないと判断したのだと思います。

二つめの理由については、俺には理解できませんでした。

黙ったまま、従うことも考えましたが、思い切ってアーベルさんに質問をしました。

アーベルさんは微笑みながら質問に答えてくれました。

そういえば、アーベルさんは17歳でしたね。

俺なんか、もうすぐ30になります。俺なんかよりしっかりして  
いて、時々俺よりも年上ではないかと思ったりします。

最初にロマリアで出会ったときは、既に結婚して子どももいると思  
っていましたよ。

いえいえ、冗談ですよ冗談。

テルルさんと結婚しているなんて、全く思っていないせんから。

本当です、本当です。

だから、ザキは勘弁してください。

え、冗談ですか。

そうですね、レベル20で転職した私だっただけ覚えていませんから。

セレンさん。

え、どうして、そんな悲しい顔をするのですか。

は、はい、俺もルカナンはレベル19で覚えましたから、安心してくださいよ。

話を戻しますね。

アーベルさんは、

「魔法と物理攻撃の併用は、パーティの連携がしっかりしてからの方が良いですから」

と答えてくれました。

もう少し説明して欲しいと、アーベルさんをお願いしたら

「失礼しました、タンタルさん。もともとの職業は戦士でしたね」と、きまりが悪い表情をしていました。

まあ、アーベルさんのほうが、10歳以上若いときづいたこともあったかもしれませんが。

大まかに説明しますと、攻撃魔法は物理攻撃より先に目標を設定するため、先に物理攻撃でモンスターを倒すと、攻撃相手のいないところに無駄打ちしてしまうということでした。

一緒に冒険されていたセレンさんでしたら、この話は、最初に……え、教えてもらっていいない。

そんなことは、な……

いえ、すいません。すいません。

そうですね、きつと、回復役に専念して欲しかったのでしょ。

ま、間違いありません。

セレンさんの回復呪文は、本当に癒されますから。

結局、私のレベルは11まで上がりました。  
ここまで安心して冒険したのは、はじめてです。  
出来たら、最後まで冒険したいですね。

え、勇者と一緒に冒険ですか。

セレンさん達でしたら、魔王なんか逃げ出してしまおうでしょう。

ああ、既に一度逃げ出したそうですね。  
となると、俺は不要になりますね。

いいですよ、気にしないでください。

セレンさんをはじめみなさんには、十分に助けてもらいましたから。

それ以上に驚いたのは、本当に1日で10、000ゴールド以上稼いだ事でした。

俺の「くちぶえ」が、こんなに役に立つとは思いませんでした。  
たしか、「わらいぶくろ」でしたか。

特にあのモンスターは、たくさんゴールドを持っていましたね。  
時々、テルルさんが多めに発見したのも要因のひとつですね。

それにしても、アーベルさんはすごいです。

ピラミッドに行くことを想定してお二人に、不死系モンスターに効果の高いゾンビキラーをあらかじめ用意するとか、「わらいぶくろ」が持っているスタミナの種を集める事も考えていたとか。

本当に、明日からの冒険が楽しみです。

セレンさん、これからもよろしくお願いします。

いえいえ、こちらこそ、セレンさんの役に立てることでしたら。  
はあ、アーベルさんの好みのタイプですか。

そういえば、今日は魔法を使われませんでしたね。

アーベルさんは

「呪文を封じられた時を想定して、今日は訓練する」と言われていましたから。

こんど、聞いてみますね。

イメージではヒヤド系が好きそうですが、・・・

え、そのタイプではない？

ああ、すいません勘違いしていました。

これから聞いてみますので。食べ物の好みですよね？

もう聞かなくてもいい？

はあ、わかりました。

では、今夜もありがとうございました。

(注：武闘家は「おなべのフタ」も装備可能です)

「・・・、さて、どこから突っ込みをいれようか」

俺は、カウンセリングの報告書を読み終わると、大きくため息をついた。

「アーベル。どこに、突っ込みを入れるのかしら？」

「・・・」

目の前には、テルルとセレンがいた。

「・・・。何もありません」

俺は質問に答えると、報告書を片づけた。



第70話　そして、タンタル視点での話へ・・・(2)　(後書き)

前回の後書きで、「主人公一人称視点での物語で最後まで続くとは限らないと」書きましたが、しばらくは主人公一人称視点が続けていく予定です。

## 第71話 そして、師匠と呼ばれる男へ・・・

世界最強の魔法使いは誰か？

この世界で、この質問をしても、多くの人は「わからない」と答えるだろう。

何故か？

多くの魔法使いは、呪文を覚えると、他の職業に転職してしまうからだ。

回復系呪文を極めるため、僧侶になる人。

戦闘力を高めるために、戦士や武闘家になる人。

汎用性の高い賢者や、盗賊を目指す人。

一方で、世界で最も有名な魔法使いといえば、俺の母親であるソフィアだったりする。

彼女が作成した解説書「魔法解析学」により、魔法の仕組みが解明され、新しい呪文が生まれるきっかけとなった。

とはいえ、これまでの呪文も汎用性が高いため、あまり革新的な開発が進んではないのであるが、土木工事等、今後の平和利用のための基礎理論は確立しつつある。

それだけ重要な「魔法解析学」であるが、実はソフィアの発見した内容ではない。

「魔法解析学」は、ソフィアとジंकクの師匠が体系化したものを、ソフィアが本にまとめたのである。

彼は、108種類のイオナズンを使いこなし、左右別々の呪文を放つことが出来るなど、その洗練した詠唱法を知る魔法使い達にとって、彼のもとで修行することを望まぬものはいなかった。

だが、彼の弟子になるための条件は非常に厳しかった。その条件とは「巨乳で美人」であった。

ソフィアの場合は、ソフィアが買物をしていたところ、師匠に呼び止められ、師匠が土下座をして弟子になってくれと頼んだという。

ジンクの場合は、モシャスで知り合いの女の子に変身してから、弟子入りを認めてもらったらしい。

師匠からはあとで、「お前が男だったら即座に殺していたぞ」と言われたそうだ。

今回俺は、師匠と呼ばれるひとに会いに行こうと考えていた。

俺は、別に弟子入りをするつもりで来たわけではない。

確認したいことがあるからだ。

ジンクに師匠の居場所を尋ねたら、ジンクはしばらく考えたあと、

「私からは、教えることはできません。ソフィアさんに尋ねてください」

と言われた。

「着ぐるみでここまで来るのは、恥ずかしかったのだぞ」

と文句を言っても、

「だったら、レムオルを覚えてから来てください」

と笑って答えるだけだった。

王妃自ら、透明になって侵入してこいと言うのは問題があるぞ。

王様からも、何か言ってくれ。

「アーベル、久しぶりに王様にならないか？」

と言われた。

「勘弁してくれ」

俺は、すぐに退散した。

「どうしたの、急に？」

「確認したいことがあってね」

「わかったわ、アーベル」

ソフィアは、簡単に許してくれた。

「ただし、セレンとは一緒に会いに行かないこと」

「……。わかったよ、かあさん」

テルルは大丈夫なのか。

テルルもそれなりに、……。

俺の考えを読み取ったのか、ソフィアは答えた。

「ふたりには、この話は内緒よ」

「……。わかったよ、かあさん」

俺は、とある家の前に立っていた。

ソフィアから聞いていた師匠の家である。

「こんな、離れたところにあるとは」

北方にある離れ小島に立っていた。

家の周りには、強力な結界が張り巡らされており、魔物は一切近づくことができないようだ。

「失礼します」

「どなたですか？」

ドアを叩くと、中から若い女性の声がある。

「ソフィアの息子の、アーベルといいます。母親がお世話になった、師匠にお話を聞きたくて会いに来ました」

「そうですね、しばらくお待ち下さい」

ドアが開くと、メイド服を身につけた女性が俺の前に現れた。

「はじめまして、アーベルさんですね？」

「はい、そうです」

この人は、師匠と呼ばれた人の弟子だろうか。

すくなくとも容姿は、ジंकクから聞いた弟子の条件に合致している。

「お呼びしますので、しばらくお待ち下さい」

「かしこまりました」

目の前に、少し小太りしたおじさんが現れた。

「またせたかの」

「いえ、こちらが勝手に尋ねたものですから」

30分ほど待たされたが、文句は言わない。

「電話でもあれば、事前に都合を確認することもできたのですが」

「でんわ？」

男は俺に問い返す。

「なんでもありません」

俺は平然と答えると、質問を始める。

「この世界について、教えていただけたらとおもいまして」

「この世界じゃと？」

「船をお持ちなら、ご存じだと思いますが」

俺は、持ってきた世界地図を広げる。

「東の端からそのまま進むと、西の端にでます。一方で、北の端からそのまま進むと、南の端にでます」

「・・・」

「ある人は、この世界が丸いからと言って、世界の果てに追放されたそうです」

「俺の考えでは、この世界は球形だとはおもいません」

「・・・」

「おそらく、このような形になるでしょう」

俺は、手に持った世界地図の表を上向きにしながら、右端と左端を

つなげて、円筒状にする。

これで、東の端から西の端につながった。

俺は次に、円筒状にした地図を折り曲げて、上端と下端とを合わせる。

紙の地図なので、しわができるが、イメージとしてはドーナツの形状となった。

「いかがですか？」

「……。理屈の上では正しそうだが、なんともいえん」

男は、一言だけつぶやいた。

「俺も、そう思いますよ。なにしろ、神が作った世界ですから」

「そうだな」

とりあえず、今日の目的は果たした。

「それでは、これで失礼します」

「そうか、ちょっと待ってくれ」

男は、奥の部屋にはいると、しばらくしてから再び姿を現した。

「ソフィアによく伝えてくれ」

「お伝えします」

「あとは、おぬしに忠告しておこう」

「なんですか」

「万一、おぬしの旅が失敗に終わったとしても、一つだけ手段がのこっている」

「？」

「ただのじじいのたわごとだと、おもってくれればいい」

男は、にやにやしながら答えた。

「ご忠告ありがとうございます」

俺は、家を出て行った。

「俺とは違うようだな」

どうやら予想は外れたようだ。

師匠と呼ばれた男は、ジंकクから伝え聞いた言動から、俺と同じく転生した人間だと思っていた。

俺は、そのことを確認するため、会話の中に「電話」「や」「この世界」と言う言葉を用いたが、男は一切反応しなかった。

少なくとも俺が前にいた世界の知識は持っていないようだった。

第71話　そして、師匠と呼ばれる男へ・・・（後書き）

師匠の言動が面白くないのは理由があります。

第107話で明らかになる予定です。



## 第72話 そして、ポカパマズの考察へ・・・

俺は師匠の家を出ると、南下して、ムオルの村に立ち寄っていた。到着したときは夜中だったが、宿屋に無理をいって泊めてもらい、昼に起きてからこの村の情報収集を行っていた。

「水鉄砲はなかったか」

「みずてっぽうって、なに？」

テルルは質問する。

「口で説明するより、作った方が早い。機会があれば、つくってみるよ」

この後、ジパングによる予定だ。

竹があれば、自作をしてもいいだろう。

しかし、水鉄砲がないということは、SFC版準拠であることになり、オルテガの兜がここにはあるということか。

勇者ではない俺にとっては、どうでもいいことだが。

「ところで、ポカパマズってなんでしようね？」

タンタルが俺に尋ねてきた。

この村に、冒険者がくるのは珍しいらしく、以前に尋ねてきたのは8年ほど前にポカパマズさんと呼ばれる戦士以来だという。

「さあ、なんでしようね」

「アリアハン出身といわれたけど、基本的にアリアハンの出身者は4文字以内だよ」

「名前が長いと、早死にするとという迷信のことですか？」

タンタルが俺に聞いてくる。

「まあ、迷信と言えばそうですが、冒険者に限っては、あながち間

「違いでもありません」

「と、いうと？」

「呼び名が長ければ、パーティ内での連携に時間を要します、程度の話ですが。愛称で呼び合えば問題ないです」

俺は適当に答える。

ふと、俺は、ポカパマズの由来を勝手に思いついたので、披露してみた。

「ポカパマズとは、大いなる厄災という意味だ」

「それにしても、村のひとのポカパマズという言葉への反応は好意的だったわよ」

「あれは、もう8年も前の話になる」

俺はテルルの指摘を無視して、話し始めた。

「かつて、この町を20年に一度襲う厄災があった。田畑は荒れ、娘はさらわれ、老人達は情け容赦なく殺されていった。

この町の人はこの厄災のことを、畏怖を込めて大いなる厄災「ポカパマズ」と呼び、忌み嫌っていた。

だが、1人の男によって新しい展開を迎えることになる。

世界を旅する戦士がいた。

この戦士は偶然、厄災の元凶となるモンスターを討伐した。

しかしながら、この戦士は全身傷だらけとなり、なんとかこの村にたどり着いた。

この戦士が村の前で倒れていたところ、1人の子どもに発見された。子どもは、その男を助けるため村人達に声をかけた。

しかし村人達は、今年が厄災の発生する年であることを思い出し、男が大いなる厄災「ポカパマズ」だと恐れ、とどめを刺そうと決意した。

しかし、それを救ったのは、ポカパマズを最初に発見した子どもであった。

その子どもは、男の手荷物から厄災の元凶であるモンスターの角を発見し、この男が厄災のモンスターを討伐したことを村人達に説明した。

最初は半信半疑だった村人たちも、村の長老達が、男が持っていたモンスターの角が間違いなく厄災の元凶であるモンスターのものだったことを確認したことから、その男を「ポカパマズ」さんと呼んで大切にもてなした。

怪我が癒えた男は、村人たちから、大いなる厄災の話を聞いた。

男は村に張り巡らされた結界を調べると、一部の力が弱くなっており、20年に一度弱くなった部分から結界に侵入することで、モンスター達が襲撃をしていたことが明らかになった。

男はモンスターの牙を利用して、結界を修復し、モンスターからの厄災を防ぐことに成功した。

町の人たちは感激し、ずっとこの村で暮らすことをすすめたのだが、男は魔王を倒し息子と一緒に平和な世界をつくるのだと言って、旅を続けたのだった。

という話があったとしたら、信じるかい？」

「はい、信じます」

「信じるかい、というの？」

「まさか、作り話なの」

セレン、タンタル、テルルがそれぞれ異なる感想を述べた。

「ああ、俺の思いつきだよ」

「すごいです」

「セレン。へんな事で感心したら駄目でしょう。すぐに調子になるから」

「だまされるところだった」

「だますなんて、人間が悪いですよ。最初から、思いつきだと・・・」

俺は、話を続けることが出来なくなった。

近くにいた男が、急に俺の胸ぐらをつかんできたからだ。

「あんた、どうしてその話を知っている!」

「はい?」

「本当なの、アーベル」

俺は男を睨みながら話した。

「離してください」

「・・・」

「これは俺の思いつきです。手を離してもらえないのなら、真実だと思われまますよ」

「・・・ああ、済まない」

ようやく男が俺から離れた。

「いえいえ、こちらこそ失礼しました。勝手に作った話を、大声で話したら気になりますよね」

「まあ、作り話だと思っているのなら、かまわないさ」

男は疲れた様子で、俺の元を離れていった。

男は、他の村人達のところへ行って、ひそひそ話をする。途中で、こちらの方に視線を向けてくる。

「さあ、出かけるか」

「はい」

「……そうだな」

「そ、そうね」

俺達はそそくさと村を出て行った。

第72話　そして、ポカパマズの考察へ・・・（後書き）

今回のポカパマズ大いなる厄災説は、SFC版のオープニングを基にして、勝手に作ってみました。

なので、公式設定ではありません。

本当のところは、どうなのでしょううか。

次回は明日、19日掲載予定です。

### 第73話 そして、ジパングへ・・・

「ようやく、ついたな」

「帰ってきましたね」

俺達は、アリアハンのルイードの酒場で話をしていた。

「あの、アーベルさん？」

「タンタルさん。どうしましたか」

「ジパングには行かないのですか？」

「もう、行きましたよ」

「ルーラの登録しかしていませんけど。用事はないのですか？」

「ああ、明日ルーラで行くつもりですから」

俺は、皆の前で話をした。

「今回は一度、船を置くためにアリアハンに戻った」

俺達は、基本的に船をアリアハンに置いている。

理由は、アリアハンがポルトガの造船技術を学ぶためである。

俺は、船体を守る特殊な金属の話をしたのだが、アリアハンは自前で船を造るのだといって、俺の助言を否定した。

せいぜい、がんばって欲しい。

それとは別に、俺はジパングでの探索で必要なものをここで入手する必要があった。

「明日は、いろいろと搜索をするつもりだから、早めに休むぞ」

「はい」

「残念ね」

「わかりました」

テルルだけは残念だったが、他の2人は俺の意見に賛成している。

セレンは、人によく話しかけられることを嫌っていたし、タンタルは3姉妹を恐れて常に周囲に気を配っているからだ。俺が、会計を済ませるとそれぞれ家で休んだ。タンタルは宿屋にとまった。

「どつやら、こちらへんが怪しいな」

俺は、地図を頼りに目的地に到着すると、みんなに話しかける。

「このあたりに、隠された地下への入り口があると思う」

「そうなの？」

「たぶんだが」

「怪しいわね」

「とにかく手伝ってくれ」

「はい」

「わかりました」

「探してみます」

しばらくすると、目的のものが見つかった。

「みんな、集まってくれ」

俺は、目の前にある岩の前にみんなを集めた。

「ここに、何があるの？」

「地下への入り口さ」

「地下ですか？」

正確には地下世界への入り口といったほうがいいのかもしれない。

俺は、岩の奥と地面と間にあるわずかな隙間を示した。

真っ暗で何もみえない。



「それでは、と」  
俺はジंकから教わったイオナズン（室内用改め、観賞用）を唱えた。  
俺はまだイオナズンを覚えていないため、イオラ（観賞用）になるが。

光が、隙間の先にある景色を指し示す。

「洞窟？」

「たぶん、そうだろうね」

俺は、頷いた。

ゲームではジパングの住人が、難を逃れるため、下の世界のマイラに住んでいた。

冒険者でもない人たちが逃げ出すことができたことから、ジパングのすぐ近くに地下世界への入り口が存在することを予測していた。そして、入り口の位置については、ある程度予想をたてていた。

死者の国とこの世界とをつなぐ入り口。

黄泉比良坂。  
よせつひらなか

元の世界では島根県東部にありと伝えられている。

ちなみに、山陰の左側が島根県で、右側が鳥取県だ。

「最初の予測地点で見つかるのは幸先がいいな」

「予測地点とは？」

「なんでもない」

俺は慌てて否定する。

ちなみに、他の予測地点は天の岩戸のことだ。

これは、隠れた場所が闇の場所だったことに関連している。

言い伝えは日本各地にあるが、俺が知っているのは宮崎県にある神社ぐらいしか知らない。

違ったら、ジパングの村で聞き込みを行う予定だ。

「アーベル、見つかったのはいいけど、どうするの」

「いつものを試そうと思う」

「あれですか？」

「今回は、威力を抑えたものを使うけどね」

俺は袋から野球ボール程度の大きさのものを取り出す。

名付けて、魔法の玉（小）だ。

「これまでのものを使うと、爆破で洞窟を壊しかねない」

俺の言葉に、セレンとテルルは頷いていた。

「アーベルさん。何が始まるのです？」

「そうですね、少し岩から離れて見てください」

俺は、魔法の玉（小）を裂け目に固定すると、みんなと一緒に避難して、メラを唱えた。

岩の一部が崩れ落ち、俺達のがれきを取り除くと何とか人が通ることが出来る空間が出来た。

「威力は十分と。この程度なら、規制して販売するのは問題ないか」俺は、爆発の威力等を報告書に記載していた。

報告書を作成し、量産化に向けた問題点を整理することで、キセノン商会から先行量産型の魔法の玉（小）をいくつか譲ってもらったのだ。

洞窟を進むと、目の前には井戸のようなものがあった。

のぞき込んでも、真っ暗で、先が見えない。

俺のイオラ（観賞用）で調べてみたが、先にある闇は一向にわからない。

先ほどの岩の破片を落としても、当たった音が聞こえない。

「とりあえず、確認出来たので今日は帰るか」

「そうですね」

「わかりました」

「まあ、いいけど」

俺達は、新たに発見した洞窟（？）を後にして、次の目的地へと向かった。

「痛かったです」

「ごめんね、セレン」

「俺も痛かったぞ、テルル」

「はい、アーベル。この薬草でも食べておきなさい」

「はいはい」

俺は、袋からアリアハンで買い占めていた薬草を取り出すと、口に含めていた。

俺達は、ジパングの洞窟の入り口で経験値を稼いでいた。

ここには、メタルスライムが数多く出現する。

装甲は堅く、すぐに逃げる特性から倒すのは至難の業だが、倒すことで得られる経験値は破格だった。

というわけで、タンタル（年齢が10歳以上上と知ってからは「さん付け」で呼んでいる）の「くちぶえ」でいつものように戦っていた。

ところが、思わぬ問題が発生した。

敵が強かったわけではない。

きちんとHPの管理をしていたので、モンスターの攻撃で瀕死になることはない。

問題なのは、敵が使う呪文にあった。

「メダパニはやっかいだな」  
俺達は、きめんどろしと呼ばれる全身が顔といえるモンスターが放つ、混乱呪文「メダパニ」の対応に苦慮していた。

今回は、セレンが混乱したので助かったが、俺やタンタルが混乱したら死者も出ただろう。

混乱を防ぐために、仲間を攻撃する手段はあるが、こちらの手数が減るのでさらなるメダパニ攻撃を受ける可能性がある。

「しかたない、別の場所で戦うか」

ここ以外にも、メタルスライムが出現する場所がある。

ただ、俺が酔いに弱いため敬遠していた場所であった。

パーティ内で死者を出すことに比べたら、酔いの一つくらいは我慢しなければならぬ。

「どうした、セレン大丈夫か？」

セレンの様子をみると、どこか不満そうな様子だった。

「私は、大丈夫です。アーベルは、大丈夫ですか」

「ああ、大丈夫だよ」

俺は、心配されないように笑って答えたが、セレンの不満そうな顔は収まっていなかった。

「セレンさん。俺にホイミをかけてください」

「タンタルも、薬草で回復を・・・て、けがをしてないでしょうが」

「すみません」

タンタルとテルルのやりとりでようやく俺はセレンの考えがわかった気がする。

セレンの表情が少し良くなったからだ。

「セレン、俺の回復も頼む」

「アーベル、まだ薬草があるでしょう」

「テルル、今日はこれで、帰るつもりだ。それなら、ホイミのほづが助かる」

「・・・仕方ないわね、セレンお願いね」

テルルも、セレンの表情を読み取ったのか、否定はしなかった。

「ありがとう、セレンさん」

「だから、タンタルはけがをしてないでしょう！」

喜んでホイミを唱えるセレン。

タンタルを笑いながら叱るテルル。

頭をかきながら謝るタンタル。

やがて、俺達は笑いあっていた。

## 第74話 そして、情報収集へ・・・

「やっぱりアーベルは、ベリーダンスが好きなのね」

「やっぱりとは、何だ。やっぱりとは」

「昼間の練習の時から通い詰めるのは、好きな証拠でしょう」

「だから、情報収集の為だつて」

「まあ、信じてあげるわ」

俺は、アッサラームでテルルから尋問を受けていた。

どうやら、俺がベリーダンスを行う旅芸人の一団と話をすることに不満があるようだ。

ちなみに、先日バハラタへ通じる洞窟で、崖崩れがあったらしい。

親しくなった団員から聞いた話だ。

ちなみに親しくなった団員は、団内の経理などを行っている女性だ。俺が親しくしている相手が、踊り子では無いことを聞いたテルルは、尋問の手を緩めていた、

俺は、経理を担当しているエリカさんと昼食を取りながら話をしていた。

エリカさんは、昼間は比較的暇にしていた。

作業に手慣れていたことと、業務が忙しくなるのが、ステージが始まる夕方からのため、この時間帯は手持ちぶさたにしている。

エリカは、昼間に団に尋ねてくるのは、業者の人か踊り子を見学に来た人がほとんどで、自分を目当てに来る人はあなただくらいしか、いませんからと笑っていた。

「目当てですか？」

「違うのですか。食事を誘ってくれたのは、アーベルさんが初めてですが」

頬を膨らませて、エリカさんが答える。

なかなかかわいらしい表情だ。

「本当ですか、俺はエリカさんの方が魅力的だと思えますが」

「お世辞を言っても、なにも出ませんよ」

「俺はお世辞など言いませんよ」

「そう、ありがとう」

何とか、会話を続けることが出来た。

さて、これからが本題だ。

「そういえば、レナさんが失踪したと聞きましたが、大丈夫ですか？」

「・・・」

エリカさんは急に押し黙ってしまった。

「変なことを聞きましたか？」

「・・・。あなたも、レナが目当てなのね！」

エリカさんは、俺に向かって憎悪の目を向ける。

「あんな女、いなくなればいいのよ。私のリックを奪った上に、こんどは」

いけない、落ち着かせなければ。

手に持った食事前のナイフで襲われるかもしれない。

「落ち着いて、エリカさん」

「・・・」

「俺は、レナさんの事などどうでもいいのです」

「嘘よー！」

「俺は、レナさんが失踪したことで経営に問題が発生したかどうかを心配したのです」

「ほ、本当？」

ようやくエリカさんは俺の話を聞いてくれた。

「ええ、本当です。エリカさんが仕事で困っているのではないか、心配したのです」

「ごめんなさい、アーベルさん」

「こちらこそ、ごめんなさい。誤解を招く言い方をして」

俺は、今日はこれ以上話を続けるのはあきらめることにした。

「冷めないうちに食べましょう」

俺達は、町中を散歩していた。

一緒に散歩していたエリカは、自分のことを話していた。

踊り子にあこがれて、旅芸人の一団に入ったこと。

成長していくにつれて、身長が伸びすぎて、踊ることが出来なくなつたこと。

団長の薦めで經理を行ったところ素質があつたらしく、今の仕事をしていること。

エリカは俺がキチンと話を聞くことに安心したのか、レナさんの事も話し始めた。

アッサラームで公演を開始した頃、レナさんにしつこくつきまとつていた男がいたこと。

アッサラームを離れて、バハラタに向かうことを喜んでいたこと。

一団が洞窟に向かったときには、既に洞窟がふさがって、先に進むことが出来なくなつていたこと。

しかし、レナさんは落ち込んだ様子を見せなかったこと。

その後、すぐにレナさんが消息を絶つたことを教えてくれた。

「貴様、エリカから離れる！」

「？」

「リック」

俺はリックと呼ばれた男を眺める。



なかなかの好青年だ。  
冒険者のようで、職業は戦士だろう。

「今更、何のつもり。レナを探して旅に出たのでしょうか!」

「違うのだ、エリカ!」

「何が違うのリック」

「・・・、ここでは話せない」

エリカさんの声とリックの声で、周囲の人の視線が集まっている。

俺は仕方なく提案する。

「とりあえず、あそこで話をしましょう」

俺は、軽食を提供する店を指さした。

俺は、店にはいると店主に多めにチップを払い、お願い事をして奥の個室を確保する。

「どうぞ、リックさん。話をしてください」

「・・・」

「俺は、ここで聞いた話を誰にも話しません。前のロマリア王の名にかけて、お約束します」

俺は、ロマリア王国の紋章を目の前に見せた。

使う機会はあるまいと思っていたが、人生何があるかわからない。とはいえ、権威しかない。

どこかのご隠居さんとは違うのだ。

「アーベルさん」

「魔王を倒した、あの」

エリカさんとリックは驚いていた。

「話をしてもらっても、いいですか?」

「わかった」

リックさんの話によると、リックはレナさんの脱出を手助けしたそ

うだ。

しかし、行き先を知られるとまずいので、誰にも話が出来なかったらしい。

「なるほどね」

俺は頷いた。

この町から洞窟までは、近いとはいえモンスターが出現する可能性がある。

レナさんは、さすがに1人では逃げ出せないと考えて、知り合いであるリックに頼んだらしい。

彼ならば、付き合っている相手がいることから安心できると思ったのだろう。

「本当なの？」

エリカさんが確認する。

「これを読んでくれ」

リックはエリカさんに手紙を手渡す。

レナさんがエリカさんにあてた手紙だった。

エリカさんは手紙を読み進めていくうちに、困惑の表情をする。

読み終わったエリカさんは涙を浮かべながら、リックに話しかける。

「疑って、ごめんなさい」

「こちらこそ、ごめん。誤解を招くような事をして」

「うふふ」

「どうしたんだい、エリカ？」

「少し前に、同じような事を言われてね」

エリカさんは俺の方に視線を向ける。

「せっかくなので、俺もリックさんに質問したい」

「何だ？」

「下の世界への行き方は、洞窟の中にある井戸の中にあるのか」

「どうして知っている！」

男は思わず立ち上がった。

「ただの直感ですよ」

俺は、テーブルにおいてある水を飲むと話を続けた。

「安心してください。俺は、レナさんに興味があつて質問したのではありません。」

ちよつと、下の世界の大魔王に用事があるのです」

「大魔王？」

「どうして知っている！」

「それは、お教えできません。出来れば大魔王の話も秘密にしてもらえると助かります」

魔王がいるのに、さらに大魔王がいるという話がこの世界で広まれば、この世界がどうなるかわからない。」

エリカさんは悲しそうな顔で質問する。

「私に声をかけたのは、それを調べるためだったのね」

「確かに最初はそうでした。すいません」

俺は素直に謝る。

幸い、ここにはナイフは置いてない。

「ですが、エリカさんは、魅力的でしたので、話をするだけでも十分楽しみました」

エリカさんは恥ずかしそうに顔を赤らめた。

対照的に、リックは声を荒げる。

「貴様、エリカに！」

「安心してください。人の恋路を邪魔するほど、やばなつもりはありません」

俺は立ち上がると別れの言葉を言った。

「幸せになってくださいね」

「ありがとう、アーベルさん」

エリカさんとリックは抱き合っていた。

「さて、何とか解決したな」

俺は、店を出るとつぶやいた。

エリカさんと親密になれるチャンスだったが、前の相手とよりが戻ったようだ。

俺は、さすがに修羅場に参加するほどの覚悟はないので、あきらめる。

とりあえず、宿に帰って3人に報告せねばなるまい。

とはいえ、今日の出来事全てを報告するわけにもいかない。

どのように報告をするか思案していると、背後から突然腕を組まれた。

テルルとセレンだった。

「アーベル。一緒に食事をしていたあの背の高い、女のひとは誰なの？」

「説明してもらいます」

「は、離してくれ」

「駄目です」

「無理です」

俺は宿屋に向かって引きずられる。

俺は、最近加わった仲間に助けを求めた。

「タンタルさん。助けてください」

「今日の行動は全て見られていましたよ。あきらめてください」  
「.....」

俺は黙って2人に従った。

第74話 そして、情報収集へ・・・（後書き）

次回で、第5章が終わります。

## 第75話　そして、どっちへ・・・

俺達はゲーム神殿の2階にある、宿屋の前で話をしていた。

「・・・。以上が、俺達が体を張って得た情報です」

「ほとんど、アーベルの力でしよう。特にエリカさんとの話などはテルルは不満そうにぼやく。

「運が良かっただけですよ」

俺がゲームで得た知識が無ければ、地下にある世界のことなどわからないし、大魔王討伐など考えもしなかつたはずだ。

「ところでアーベルさん、次はどちらに向かいますか？」  
タンタルは、俺に方針を尋ねた。

今の段階で地下世界に行く方法は2種類あった。

一つめはジパングで、俺達が発見した洞窟を抜ける方法がある。行き先としては、マイラの村付近に到着できるはずだ。

二つめは、アツサラームとバハラタをつないでいた洞窟にある井戸から侵入する方法だ。

こちらは、ドムドーラの町に繋がっているはずだ。

さすがに、俺が地下世界の情報を知りすぎている事がばれると問題となる。

そのため、俺は、どちらに行くべきかまでは話が出来なかった。

「どっちといわれても、行き先の情報がわからないとね」  
テルルはぼやく。

他の2人は黙っていたが、気持ちとしてはテルルと同じようだった。

「では、俺の意見を言います」  
俺の意見はたぶん採用されるだろう。

俺達は、ダーマ神殿の北にあるガルナの塔に到着していた。  
経験値を稼ぎ、戦力を強化するための。  
下の世界で冒険するためには必要な行動だ。

ちなみに、下の世界はどちらを選ぶのかといわれたら、両方と答えるしかない。

大魔王ゾーマを倒すためには、下の世界にある、強力な武器防具の調達は欠かせないからだ。  
それぞれ、たどり着く町で売っているものが違っているのだ。

俺は、意識を目の前の塔に戻すと、ぼやいた。

「この塔は、あれがあるから嫌なのだけどね」

「アーベル、我慢しなさい」

「まあ、覚悟はしていますが」

「アーベルさん。あれってなんですか？」

タンタルの質問に俺は首をすくめて答える。

「もうすぐ、わかりますよ」

「アーベルさん。あれを渡るのですか？」

「そうですね」

「無理です」

「他のルートはないの、アーベル？」

「ありません」

目の前には、一本のロープがあった。

「皆さん、がんばって渡ってください」

「アーベルは、平気なの？」

「卑怯よアーベル。自分だけ呪文で空を飛ぶつもりね！」

テルルは俺の考えを見抜くと騒ぎ出す。

「セレン、アーベルにマホトーンを」

テルルはセレンに指示を出す。

マホトーンとは、相手の呪文を封じる呪文だ。

「待ってくれ、テルル。この呪文はみんなの為に使うのだ」

俺は慌てて、抗議の声を上げる。

「どういうこと？」

「俺は、みんなが落ちないように、サポートをするつもりだ」

俺は、テルルの手を取ると、ロープの方へ歩き出す。

「ちよっ、ちよっとまってよ、アーベル」

「大丈夫だよ、ほら」

俺は、飛翔呪文トベルーラを完璧に使いこなしている。

俺の体は上下ぶれることなく浮いている。

日頃の特訓の成果だ。

俺の手はテルルの支えになっていた。

「ありがとう、アーベル」

テルルは、俺の支えがあるとはいえ、ロープを渡るのに不安だったのか、顔が赤くなっていた。

最後のほうは、俺の腕に手を回したりしていたから、どうやら高所恐怖症だったかもしれない。

「一応、このパーティのリーダーですから」

俺は、苦笑しながら答える。



「アーベル、すごいです」

「アーベルさん。俺にも使えるのかな」

タンタルが俺の詠唱をまねようとしていた。

俺は、慌ててタンタルの行動を押しとどめる。

「タンタルさん。今は止めた方がいいですよ」

「どうゆうことですか？」

「この呪文は、慣れが必要です。今のタンタルさんのMPでしたら向こう岸に着く前にMPが無くなります」

「そうか、チャンスだったのに」

タンタルは非常に残念がっていた。

セレンがロープを渡るときは最初から、俺の腕をくんでいた。

彼女も高所恐怖症なのだろう。

緊張のため、顔が赤くなっている。

俺も、少し緊張していた。

セレンの胸が腕に当たるため、呪文の制御に影響が出ないようにすることに苦労していた。俺の精神集中を乱さないという意味で。

全員を向こう岸まで届けると、俺は思わずつぶやいた。

「俺にとつての本当の問題は、この先にあるのだよね」

目的地にたどり着くためには、この先にある旅の扉を使う必要があるのだ。

俺達は、旅の扉を通り、目的地に到着する。

タンタルは「くちぶえ」を吹いて、モンスターを呼び寄せる。

タンタルの話では、慣れてしまつて、一日中「くちぶえ」を吹いても問題ないそうだ。

この調子で練習をしたら、一芸として完成するかもしれない。

目の前には、銀色のスライムが現れた。

「よくやった、タンタルさん」

俺は、毒針を握りしめてメタルスライムに向かっていった。

このモンスターは防御力が非常に高く、攻撃呪文が通用せず、すぐに逃げるといった特性を持っている。

その代わり、倒せば大きな経験値を得ることができる。

そして、俺が持つ毒針は確実にメタルスライムにダメージを与えることができるのだ。

「決まったか」

素早い動きをしていたメタルスライムは、俺の攻撃を受けると、動きを止めて崩れ去る。

見た目では何処にあるのかわからないが、急所にあたったようだ。

毒針で攻撃した場合、急所に当たると一撃で倒すことができる。

あっという間に、俺達のレベルが上昇する。

単調な作業ではあるが、俺達は手を緩めることなく、戦いを続ける。ここで得られた経験が、いつか大魔王討伐につながることを信じて。

第75話 そして、どっちへ・・・(後書き)

第5章が終了しました。

一区切りつきましたので、評価してもらえたら幸いです。

## 第5章終了時点でのステータス

テルル

商人

ぬけめがない

せいべつ：おんな

LV：27

ちから：66

すばやさ：59

たいりよく：75

かしこさ：57

うんのよさ：45

最大HP：151

最大MP：113

攻撃力：133

防御力：97

EX：100740

ゾンビキラー、みかわしの服、魔法の盾、銀の髪飾り

セレン

僧侶

ふつう

せいべつ：おんな

LV：25

ちから：45

すばやさ：57

たいりよく：74

かしこさ：65

うんのよさ：77

最大HP：147  
最大MP：130  
攻撃力：112  
防御力：113  
EX：100740

ゾンビキラー、魔法の鎧、魔法の盾、銀の髪飾り

アーベル

きれもの

せいべつ：おとこ

LV：29

ちから：29

すばやさ：77

たいりよく：62

かしこさ：122

うんのよさ：88

最大HP：126

最大MP：250

攻撃力：39

防御力：88

EX：164595

毒針、みかわしの服、魔法の盾、皮の帽子

タンタル

ぶどうか

くろうにん

LV：22

ちから：133

すばやさ：93

たいりよく：123

かしこさ：41

うんのよさ：98

最大HP：246

最大MP：49

攻撃力：173

防御力：128

EX：71829

パワーナツクル、黒装束、風神の盾、黒頭巾

## 第5章までのあらすじ

男武闘家「タンタルです」

女僧侶「セレンです」

セレン・タンタル「ふたりあわせて、冒険者トリオです」

女商人「・・・」

セレン「なんででしょうか？」

タンタル「ところで、セレンさん。聞きたいことがあるのですが」

セレン「ジंकさんが女性だとは気付きませんでした」

タンタル「前のお仲間、ジंकさんのことです」

セレン「すてきな衣装でした。私も、ぜひあのようなドレスを着てみたいです」

タンタル「先日、ロマリア王に就任した男性と結婚したそうですが」

セレン「お礼ならアーベルに言ってください」

タンタル「それにしても、先日は助けてもらいまして、ありがとうございます」

セレン「そうですね」

タンタル「そんなことはありません。セレンさんの了解がなかったら、今頃飢え死にしていました」

セレン「この前の、会心の一撃がかっこよかったです」

タンタル「皆さんのお役にたてるようがんばりますので、よろしくお願いします」

セレン「アーベルのおかげですね」

タンタル「そういわれると、てれますね。メタルスライムを狩ったおかげでレベルも上がりました」

セレン「そうですね」

タンタル「それにしても、アーベルさんはすごいですね」

セレン「でも、鈍いところがありますよ」

タンタル「ポカパマズさんの謎を解明するし、下の世界を発見するし」

セレン「い、言えません」

タンタル「どんなところですか」

「しまった、セレンの台詞がひとつづつ、ずれた」

「アーベル、何を書いているの」

「メラ」

「・・・。わざわざ、燃やさなくても良いじゃない」

「テルルには関係ない話だよ」

「なら、いいけど」

「それよりも順番はきまったのか」

「まだよ」

「そうか」



## 第5章までのあらすじ（後書き）

もはや、あらすじとはいえないものに仕上がりました。  
何をしているのだろうか。

## 第76話　そして、温泉へ・・・

「誰が、二番目に入りますか？」

「セレンさん、どうぞ」

「タンタルさんこそ、どうぞ」

「テルルはどうなのだ」

「最後でいいです」

誰が2番目に入るかで、3人がもめていた。

ちなみに最初は俺で決定らしい。

みんなに理由をたずねると、

「アーベルさん、ですからね」

「さすがです」

「リーダー、がんばって」

まあ、日が暮れる前に決めて欲しいものだ。

結局、じゃんけんで順番が決まったようだ。

この世界にも、じゃんけんがあつたらしい。

自慢ではないが、俺はじゃんけんが強い方だ。

とはいえ、今回は見せ場がない。

最初が俺と決まっているからだ。

「何回言っても、変わりませんよ」

「まあ、わかつてはいたけどね」

俺はため息をつくど皆に話しかける。

「じゃあ、最初に俺、次にテルル、3番目にセレンで最後はタンタルだな」

俺は順番を確認してから、ジパングで発見した洞窟内にある、井戸

のようなところに向かった。

「行ってくる」

「気をつけてね」

皆の応援を受けて、俺は中に飛び込んだ。

下の世界に繋がっているかどうかを確認するため、最初に俺が潜り込んだ。

万一、落下の衝撃が強いようなら、浮遊呪文トベルーラで体を浮かせる事が出来るし、いざとなれば帰還呪文リミットで入り口まで戻ることが出来る。

やっぱり、呪文は便利だね。

と、いいながら、しばらく自由落下に任せていると、トベルーラを使わなくても落下速度が上昇しなかった。

「物理法則がおかしいのか、それとも特殊な魔法効果がかかっているのか」

理由はよくわからないが、今のところトベルーラは必要ないようだ。念のため、いつでもトベルーラを唱えることができるように準備はしているが。

ちなみに、俺の技量では複数同時に別の呪文は唱えられないので、暗闇を照らすためにまどうしの杖を利用していた。

「ガスが発生していたら大惨事だな」

小さいながらも火の玉が発生するので、非常に危険である。

杖を改造する技術があれば、杖に込められている呪文をメラからイオ（観賞用）に変更したのだが。

「平和になったら、研究するか」

独り言をつぶやきながら、降りてゆく。

やがて、下から広い世界が広がった。

「すげえ！」

俺は思わず叫んでいた。

上の世界でもトベルーラで上空を飛んだことはあったが、ここまでの高度で上空を飛んだのは初めてだった。

下の世界、アレフガルドと呼ばれている世界が一望できる。

光の位置で、あちこちにある町の位置を確認する。

そして、眼下にも一つの村を発見した。

「予想通り、マイラの村かな」

俺はゆつたりとした落下速度に身を任せながら、マイラの北にそびえる山に着地した。

「無事に着きましたね」

「ああ、そうだね」

「無事じゃない！」

「テルル、大丈夫」

全員無事に着地したはずなのだが、テルルは不満顔だった。

「何か、問題でも？」

「見たでしょう、アーベル！」

「見ましたが、何か問題でも」

「堂々といいますか」

テルルは怒っていた。

「嘘を言っても仕方ありませんから」

俺は首をすくめた。

「それにしても、すばらしかったですね」

俺は正直に感想を述べる。

「へ、変なこといわないでよ」

テルルは顔を赤くして文句を言う。

「ひよっとして、最初から知っていて、黙っていたのでしょう」

俺はテルルに反論する。

「ある程度は、予測していましたが、それでもここまで夜景が美しいとおもいませんでした。欲を言えば星の輝きが見たかったのですが」

「・・・」

急にテルルは押し黙る。

「どうした、テルル？」

「なんでもない」

テルルは顔を背けると、光の方向へ歩き出す。

「さあ、さっさと行くわよ！」

「はい」

「了解です」

「はいはい」

俺達は、テルルの後についていった。

さすがの俺も、テルルが俺に下着を見られたことを気にしていることぐらい、わかっていた。

俺もテルルと同じみかわしの服を着ているから、同じ経験をした。

俺の場合、ズボンを穿いており問題はなかったが。

下着を見たからといって、口に出すほどやばではない。

俺はそう思っていた。

村に到着するまでは。

俺達は武器と防具の店で買い物を買わせると温泉に向かっていた。ちなみにここで購入したのは、セレン用の「みかがみの盾」と俺用の「水のはごろも」だった。

「……。似合わん」

「我慢しなさい」

「似合っていると思うよ」

「そうかい」

俺は、防御力の高さから服を選んだのだが、どうもしっくりこない。早急に装備品を見直す必要があるな。

「露天風呂しかないのか？」

「はい」

案内係の村娘は笑顔で答える。露天風呂は、町の中央にある。入浴すると、目立つな。

「アーベル、我慢しなさい」

「テルルも入るのか」

「入りません！」

まあ、そうだよな。

「セレンは入るのか」

冗談で聞いてみた。

「水着で良ければ、入ります」  
水着で温泉か。

マナーとしてはどうだろうか。

この世界の事はよくわからないが。

「大丈夫です、セレンさん。案内係の人から許可をもらいました」  
タンタルは上機嫌に答える。  
対応がはやすぎるぞ、タンタル。  
せっかくなので、俺は露天風呂に入った。  
もちろん、1人で。  
セレンはどうしたのか？ですか。  
この世界で水着を持ち歩く冒険者など、俺は聞いたことがない。

俺だけが、温泉につかり、残りは宿屋で体を拭いたあと、全員で夕食をとっていた。

「この服は、スースーするな」

俺は、水のはごろももの裾をひらひらさせながらため息をつく。

「じきに慣れますよ」

セレンが慰めるが、俺は不満を漏らす。

「なれるかなあ。この服にズボンをはけないから、テルルみたいに・

・

温泉につかって、リラックスしたためか、余計な一言を言ってしまった。

「アーベル、朝になるまで説教よ」

「・・・」

テルルさん。大魔王を倒すまで朝は来ません。  
俺はなんとか、口に出すことを我慢した。

第76話 そして、温泉へ……（後書き）

第6章が始まりました。

ようやく勇者が、旅に出ます。

調子に乗って外伝を作ってみました。

明日から3話連続掲載の予定です。（別小説として掲載）

本編は予定どおり、土曜日の正午に掲載予定です。



## 第77話　そして、試着へ・・・

「今回は、完璧よ!」

「結局、普段着か」

「アーベル、何か言いましたか?」

「なんでもない」

「それなら、行きましょう」

「はい」

「・・・」

「・・・」

今日のテルルはテンションが高い。

俺だけがテルルの相手をして、セレンとタンタルは最初から黙っている。

マイラの村での一件の後、俺は買い物に付き合わされていた。

「アーベル、ちゃんと責任は取りなさいよ!」

とのことで、落下しても下着が見えない服を買ったために世界各国を回っていた。

「テルルが最初に行けばいい」

という提案は

「下に誰がいるかわからないから駄目」

と一蹴されている。

・・・結局、気にいった服が見つからないため、普段着にする」となった。

まあ、怒りが収まってくれたのなら何でもいいが。

「アーベル、何か言いましたか?」

「いや」

準備が出来た俺達は、ホビットのノルドがいる洞窟に向かった。

「井戸に入らせてもらおうよ」

「下の世界に行くのか」

知っていたのか、ノルド。

「当たり前だ。井戸に潜った人数と、出てきた人数が違えば、すぐにわかる」

「確かに、そうですね」

この世界では、怪談は通用しないのだろうか。

どうでもいいことを考えながら、井戸に入った。

「これだな」

アッサラームにいるリックから教えてもらったところを調べると、土の下から鉄の板が出てきた。

リックが他の人に見つからないよう、フタをしていたのだ。

俺達も後からふさぐように、リックにお願いをしていた。

下の世界から、上の世界へルーラなどで戻るときは、別のところを通るので、穴をふさいでも問題ない。

今回の降りる順番は前回と一緒にだった。

じゃんけんに参加できないのは残念だが、他に優先することはある。

今回は、ドムドーラと呼ばれる町の北にある山に到着した。

途中で、モンスターに遭遇することなく、町にたどり着く。

町に着き、宿を確保したあとで、俺は全員に自由行動を提案した。

みんなを見送ると、俺は1人宿屋でくつろいでいた。

今後の方針を考えるためだ。

とりあえず、この世界で武装を整えるのが優先か・・・  
「アーベルさん。武器屋にいかないのですか？」  
しばらくしてから、タンタルが宿屋に戻ってきて提案してきた。

俺は、この町での買い物は考えていなかった。

ドムドーラの武器屋にこのパーティの戦力強化が可能な装備品はなかったからだ。

「そうですね。まあ、せっかくだから見に行きますか」  
とはいえ、事前に情報を知っていると思われるのは困るので、ついでいくことにした。

2人だけで行くと思っていたが、途中で買い物をしていたセレンとテルルに遭遇し、結局4人で行くことになった。

「セレンさん。きっと似合うと思いますよ。いかがですか」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

俺達は、ドムドーラの武器と防具の店にいた。

店の店員以上に、購入を勧めるタンタル。

困惑した表情のセレン。

あからさまに嫌そうな顔をする、テルル。

そして、どこから突っ込めばいいのか悩む俺がいた。

「セレンさん。とりあえず試着してはどうですか」

タンタルは、店員を呼び寄せて「あぶないみずぎ」の試着が出来ないか交渉する。

「でも、こんなの着て戦えなんて言わないわよね？」

テルルが最初に冷静さを取り戻し、タンタルに攻撃した。

「ええセレンさん。温泉につかる時だけで、かまいませんよ」  
タンタルは、素早くみをかわした。  
さすがタンタル。パーティで最速の男だ。  
しかも、タンタルが呼び寄せた店員は男だ。  
店員は、セレンの姿を眺めると、タンタルの提案を喜んで受け入れた。

「ただの、布地です。防御力は皆無です」  
俺は、別の角度から攻撃する。

「アーベルさん、心配いりません。男性にとっては十分過ぎる攻撃力を持ちます。一撃ですから防御は不要です」

「・・・」

「それに、男なら、「きわどいですね」が定番の台詞でしょう？」

「それは、男の商人の話だ」

だめだ、俺の攻撃も通用しない。

「さあ、セレンさん。ぜひ」

「・・・」

セレンは黙っていた。

いや、違う。何か呪文を唱えようとしていた。

「セレンさん。店の中で、攻撃呪文はいけませんよ」

タンタルは、セレンに近づこうとしている。

「大丈夫です」

セレンは落ち着いて、呪文を唱えた。

「ま、まさか」

「ピオリム」

セレンは自分に対して、素早さをあげる呪文を唱えると、俺の後ろに逃げ出した。

「アーベルさん。あなたも攻撃呪文は使いませんか？」

タンタルは、俺に近づいた。

「ああ、わかつている」

俺は、袋から道具を取り出す。

「それは、聖水」

「人には、効果がないものだ。逃げるなよ」

聖水を人にかけても効果はない。

ただし、モンスターであれば、わずかながらダメージを受ける。

「・・・」

タンタルは、聖水をかけられる前に、ひとことつぶやくと消失した。

「・・・」

「・・・」

「タンタルさんとは、別人です」

セレンは、床に落ちた「あぶないみずぎ」を眺めていた。

俺は、タンタルの態度が急変したことから、モンスターがタンタルに化けたのかと推測した。

聖水をかけられる前ににげだしたことから、推測は間違っではないないだろう。

正体を見破る事が出来るアイテム「ラーの鏡」があれば確実だが、残念ながら持っていない。

「みなさん。どうしたのですか？」

俺達が宿屋に戻ると、タンタルは1人で待っていた。

「何処にいた、タンタル」

「・・・、それが覚えていないのですよ。いつのまにか、ここにいました」

「そうか」

「武器屋には行きませんでしたか？」

セレンが質問する。

「無駄遣いはしたくないので、商店街のほうには行かないつもりで

したが・・・」

タンタルは、しばらく考えてから付け加えた。

「どうも、はつきりしませんね」

「そうか」

不審に思いながらも、今日はゆっくり休むことにした。

念のため、タンタルの了解のもと、聖水をかけてもらったが問題はなかった。

第77話　そして、試着へ・・・（後書き）

調子に乗って外伝を作ってみました。

第1弾は「口を動かすだけの簡単なお仕事です編」（全3話）  
です。

別小説として掲載しております。

## 第78話 そして、ラダトームへ・・・

「準備はいいか」

「はい」

俺達は、出発前に必ず装備の確認をする。

「皆さん、まんげつそうはありますか？」

「大丈夫です」

まんげつそうは、マヒ攻撃を回復してくれる。

「キメラの翼もありますか？」

キメラの翼は移動魔法ルーラと同様の働きをする。

今回は初めて地下世界アレフガルドを本格的に冒険する。

普通であれば、魔王バラモスを倒してから訪れることになっている世界。

ゲームでも、これだけ低いレベルで冒険したことがないため、少し心配はしている。

キメラの翼があれば、戦闘中でもパーティ全体が脱出できる。

全滅の危機から脱出するための最終手段だ。

絶対に忘れてはいけない。

俺達は、ドムドーラを出発すると、北にあるラダトームを目指す。

結構距離があるが、俺は最初から全力でモンスターの殲滅を考えていた。

なぜ俺はここまで、ラダトーム行きを目指すのか。

この町にある装備品を入手するためだ。

「いくぞ、みんな」

「はい」



「了解です」

「今日は、張り切っているわね」

しばらく進むと空を飛ぶモンスターが俺達に襲いかかる。

「これが、キメラか」

「初めて見ました」

「そうね」

無理もない。

上の世界にはいない、モンスターだ。

だが、知名度は高い。

なぜか。

キメラの翼の存在だ。

俺達は、倒したキメラから入手したアイテムを眺める。

そして、自分が所持しているキメラの翼と同じようだ。

「ところで、キメラの翼はどうやって店頭にならんでいるか知っているかい？」

「さあ」

「知らないです」

「このキメラから、作られるのではないの」

タンタルとセレンは首をかしげ、セレンは商人として学んだ知識を披露する。

ちなみに、キメラは俺が覚えた火炎呪文「ベギラゴン」で丸焦げになっている。

肉の焦げたにおいが漂っている。

「俺もその話は知っている。でも疑問におもわないかい？」

「なにが？」

「俺達は、初めてキメラを見たよね」

上の世界で一度も見たことがなかった。

「たしかに」

「偶然見なかつただけよ」

「でも、この本には載ってないよ？」

セレンは父親の本を取り出した。

セレンの父親の著書「モンスターを食す」がベストセラーである理由の一つに、世界各国のモンスターの生息分布を乗せていることがある。

簡単なイラストの他に、モンスターの特殊攻撃なども示されており、冒険者必須の書であるからだ。

セレンの父親は既に引退しているが、人気が高いため、数年に一度モンスター分布図等を再確認した、改訂版も出ている。

これらの仕事は、世界中の冒険者ギルドが協力して行っている。

つまり、この本に記されていないモンスターは、まず存在しないだろう。

仮に存在していたとしても、生息地が知られていないのであれば、キメラの翼がここまで安価に購入できるはずもない。

「では、どうやってキメラの翼が道具屋に入荷されるのか考えてみよう」

毎日1人ずつ、自説を披露し、最終的にキセノン商会のキセノンに答えを確認してもらう。

発表の順番はじゃんけんで決めることにした。

「公正なるじゃんけんの結果、1日目はタンタル、2日目はセレン、3日目はテルル、4日目は俺に決まりました」

ようやく、俺のじゃんけんの強さをここで示すことが出来た。

あれこれ話しているうちに、ラダトームの町が視界に入ってきた。キメラ以上のモンスターには遭遇しなかったのは幸いだっただ。

「これこれ、これがいいのだよ」

俺は、自分の頭をこつこつ叩く。

身につけた兜により、衝撃は伝わらない。

「さすがミスリル製。なんともない」

俺は、魔法使い最強の兜ミスリルヘルムの性能に満足していた。

一人旅なら、はんにゃの面が最強なのだが、あれは例外だ。

僧侶や商人も装備可能なため、セレンとテルルにも購入を前提に試着させているのだが。

「・・・」

「・・・」

あまり、気に入らないようだ。

「どうした、ふたりとも。サイズが合わないのか？」

「やっぱり、これを売らないといけないの」

セレンとテルルは、それぞれ銀の髪飾りを俺に見せていた。

新しい装備品を買えば、これまでの装備品は売り払う。

ゲームでの原則であり、このパーティでの原則でもある。

「気に入っているのか」

「うん」

「はい」

「だったら、いいじゃないか」

みかわしの服の例外もある。

あれは、イシス周辺の砂漠地帯を歩いたりするときには重宝した。銀の髪飾りも同様だ。

ミスリルヘルムは、冒険の時だけ身につければいい。  
町の中ならば、銀の髪飾りのほうがいいだろう。

「俺も、ミスリルヘルムで顔を隠すより、髪飾りの方が似合っていると思うし」

「アーベル、ありがとう」

「お世辞を言っても何も出ないわよ」

セレンは素直に礼を言い、テルルもまんざらでもないような顔をしていた。

タンタルは、俺が出した宿題に頭を悩ましていた。

タンタルはそれほど乗り気では無かったが、俺が

「正解すれば、セレンから「さすが、タンタルさん。すてきです」と言われるかも」

と小声で吹き込んだおかげで、真剣に頭を働かせていた。

第78話　そして、ラダトームへ・・・（後書き）

次回掲載は、9日正午の予定です。

## 第79話　そして、チケットの入手へ・・・

俺達はイシスの宿屋で休息していた。

目的は、北にあるピラミッドである。

以前に探索の許可を取り付けていたが、念のため再度申し入れをした。

今回は王女に面会することなく許可をもらえている。

正直、助かっている。

一年間王様をやったことはあるが、謁見は正直疲れるからだ。

今回のピラミッド探索は、「すごろくけん」の入手が目的だ。

すごろく場の存在は、実際の世界（？）には存在しないと思っていた。

だが、俺の予想を裏切った形で存在していた。

まあ、あるのなら、利用すればいい。

俺は、あるアイテムを入手するため、すごろく場に参加するためのアイテム、「すごろくけん」をモンスターから、入手するつもりでいた。

どうでもいい話だが、子どもの頃、ゲームで遊んでいたとき「すごろくけん」を「すごろく剣」という武器と勘違いしていたのは内緒だ。

「と、いうわけで

「・・・なにが、」と、いうわけで「なの？」

テルルが指摘する。

「早めに、宿に泊まれたので」

「じゃあ、話を続けて」

「キメラの翼についての考察発表会をします」

俺達は、部屋の中央にある氷を前にして集まっていた。

部屋は暑いので、宿屋の親父からたらいを借りると、水を張り、俺の余ったMPを使い、氷結呪文ヒヤドで氷に変化させていた。

攻撃呪文の使用は原則禁止のため、事前に宿屋の了解をもらったが。

「宿代をタダにするので、他の部屋の分もお願ひします」と頼まれた。

面倒なので、タンタルにも手伝ってもらった。

「では、一番手のタンタルさん。どうぞ」

「ええとですね」

タンタルは少し緊張しているようだ。

たまに、セレンを見ながら話し始める。

「俺の考えは、アイテムを一から作ったと思います」

「理由は？」

「適当です」

「・・・」

「そうですね」

「いいの、そんな理由で？」

セレンは、黙ってタンタルを見つめ、テルルは俺に問題ないのか問いつめる。

「まあ、良いのではないですか？当たっていれば」

「正解なの」

「それは、キセノンに聞くまで待ちましょう」

「あら、そう」

「では、明日はセレンお願いします」

「はい」

とりあえず、今日の説明会は終了した。

タンタルにもう少し説明が欲しかったが、初日だし、こんなものだろう。

あまりプレッシャーを与えすぎると、翌日のセレンが困るだろう。

セレンの様子を見る限り、あまり良い考えが浮かんでいないようだ。

一方、テルルにはなんらかの考えがあるようだ。

ひよとしたら、正解を知っているかもしれない。

もし知っているのなら、回答編を早める必要がある。

あとで、こっそり確認しよう。

そう考えてから、就眠する。

宿を出ようとすると、ロマリア王国からの使者を名乗る男が、俺に話しかけてきた。

「前王様」

「名前で呼んで欲しいな」

周囲の視線が俺達に向けられたからだ。

「失礼しました、アーベル様」

「何があった？」

「王妃から、お手紙を預かっております」

「そうか」

俺は、使者から手紙を受け取ると内容を読んだ。

「しばらくしたら、顔を出すと伝えてくれ」

「かしこまりました。アーベル様」



使者はキメラの翼を取り出すと、どこかへ飛んでいった。

「大丈夫なの、アーベル？」

「テルル、大丈夫だ。急ぐ話ではない」

俺は、笑って答える。

手紙の内容であれば、すぐには問題ない。だが、心のどこかで違和感を覚えていた。

「よし、これで8枚目」

「疲れましたね」

「そうだな。少し休むか」

俺達はピラミッドの入り口付近で、モンスターを倒していた。今回の標的は、ミイラおとこにあった。

彼らが落とす、「すごろくけん」をある程度、あつめる必要があった。

目的はすごろく場のクリアではないため、何十枚も必要ないが、失敗して往復するのも面倒なので、とりあえず10枚を目標にした。

「まあ、後は俺の運の良さにかけてみるか」

俺達は、休憩を終えたとリミット、ルーラを使って次の目的地に移動していた。

「モンスターは、なぜすごろくけんを持っているのか」  
俺は新しい問題を考えていた。

第79話　そして、チケットの入手へ・・・（後書き）

次回掲載は、10日正午の予定です。

第80話 そして、すぐろく場へ・・・

「逃げることもできないのか」

俺は熊型のモンスターであるグリスリーの群れに囲まれていた。

パーティを組んでいれば、倒せない敵ではない。

だが、俺のそばには、誰もいない。

自分1人で全滅させなければならぬ。

「今は、俺しかいないのだ」

俺1人で倒さなければ、この先に進むことができない。

戦わなければならぬ。

グリスリーが俺にめがけて一斉に襲いかかる。

俺は、今俺が使える最強呪文「ベギラゴン」を唱える。

目の前の敵は崩れ落ちるが、左右の二匹はそのまま俺に爪で攻撃する。

466

通常ならまだ戦うことができたはずだが、先ほどの戦闘の傷も癒えていなかった。

どうやら、致命傷のようだ。

俺は、自分の体を支えることができず、前のめりに倒れ込む。

「・・・、済まない。セレン、テルル・・・」

俺の意識が遠のいていく。

「・・・、かあさん・・・」

「あーら・・・」

気がつくのと、先ほどすごろく場の説明を聞いた男と再会した。

「やられちゃったみたいですね」

「……」

俺の傷は治っていた。

なぜか、MPも全快である。

「たとえすごろくといえども、油断は禁物です」

俺は黙って頷いた。

「このつぎはがんばってくださいね」

俺は仲間のもとに戻っていった。

「アーベル！」

「大丈夫？」

「ああ、なんとかね」

全快したはずなのに、体に違和感がある。

痛みも残っていないはずなのに、微妙な感覚が残っている。

これが、死ぬということ、いや、生き返るということか。

「タンタルさん。この微妙な違和感が、死ぬということですか」

「……。俺も、そんな感じだった」

タンタルは同情するように話しかける。

「アーベルさん。しばらく、休んだ方がいいですよ」

「ありがとう、タンタルさん」

俺は、経験者の意見に従うことにする。

「とりあえず、温泉で休むか」

俺はゆっくり立ち上がると、すごろく場を後にした。

俺達は、マイラにあるすごろく場に来ていた。

俺が目指していたのは、すごろく場にある商店の商品を手に入れる

ためである。

ここで手に入る武器や防具は、最高級のものだ。  
であれば、挑戦したほうがいい。

とはいえ、これまで4回失敗した。

2回は落とし穴に落ち、1回は商店を通り過ぎてしまった。

そして、今回はモンスターに襲われ死んでしまったのだ。

すぐろく場での死亡は、全滅扱いにはならないため、持ち金は減る

ことはないのだが、それでも死ぬことは嫌だった。

「ふう、くらくくらく。生き返るねえ」

俺は、温泉でひとりつぶやいていた。

「それでは、第2回キメラの翼会議です」

今日は、セレンの番だ。

「やはり、キメラの翼はあのモンスターが材料だと思います」

「どうして、そう思うの？」

俺は尋ねた。

「この二つのキメラの翼を見てください」

セレンは両手にそれぞれ1枚つつキメラの翼を手にしていた。

「これらの羽に見分けがつかますか」

俺達は、セレンの両手を眺める。

「うーむ」

「わからんな」

「本当に違うの？」

俺達には左右の違いがわからない。

「左が、キメラと呼ばれるモンスターが落としたもので、右が道具

屋で購入したものです」  
セレンは解説する。

「なぜ、私たちが暮らしていた世界で売られているのかわかりませんが」

セレンは水を飲むと話をまとめた。

「あの、モンスターが原料だと思います」

「すごいです、セレンさん」

「じゃあ、明日は私ね」

タンタルはセレンの説明に感心し、タンタルは闘志を燃やしていた。

「さあ、今度こそ店に止まるぞ」

翌日も俺は、すぐろく場に挑戦していた。

8回目の挑戦で久しぶりのチャンスがまわってきた。

今朝は2回連続で最初のT字路の落とし穴に落ち、前回は俺の苦手な旅の扉で飛ばされてしまった。

転移酔いからようやく立ち直った俺は、4マス先にある店を見つめていた。

「いけ」

俺は軽くサイコロを振った。

サイコロは4の目を出した。

「やった」

俺は後ろを振り向いて、セレン達に喜びを表す。

離れているので表情まではわからないが、セレンやテルルが手を振ったりしているので喜んでいいるだろう。

俺は、店にはいると魔法使い（男）の最強装備であるドラゴンローブを2着購入した。

「それにしても」

買い物が終わり、すぐろくをリタイヤした俺は、すぐろく場の経営がどうやって成り立っているのか考えていた。

「そもそも、この券は上のモンスターしか落とさないとはずなのだが」俺に理解できないことは、この世界にまだまだあるようだ。

戦いが終わって暇になったら、すぐろく場の収益について調べるのも良いかもしれない。

文章にまとめて「すぐろく場はなぜつぶれないのか」のタイトルで本を売るのもおもしろいかもれない。

「いや、誰も読まないか」

俺はひとりで結論をだした。

第80話　そして、すぐろく場へ・・・（後書き）

外伝に「演説編」1話、「連れ込まれた部屋の中で編」3話を掲載  
します。

11日から4日間連続で掲載の予定です。



第81話 そして、説得へ・・・(1)

俺とテルルは食堂のテーブルで2人きりで話をしていた。

「いいのか、テルル？」

「ありがとう。アーベル」

テルルは俺の手を握りしめる。

テルルの言葉には迷いがなかった。

「後は、お父さんに説明しないとイケないね」

「・・・。ああ、そうだね」

俺は少し、冷や汗をかいた。

「アーベルから、説明してくれるよね」

テルルはお願い口調で俺に迫ってきた。

「・・・。ああ、やってみる」

「ありがとう。アーベル」

本当は、黙ったままでいたかったが、キセノンが娘の事を調べないはずがない。

それならば、こちらから説明をしたほうがいい。

俺は、ため息をつくると今日の事をふりかえっていた。

「終焉の砲撃が知られたと」

「そのようです」

「こんなにも早く知られるとは」

俺はジンクの前でため息をつく。

俺はロマリア王宮に行き、ジンクと2人で話をしていた。

イシスでジンクから受け取った手紙には「魔法を知られた」と記載

されていた。

内部機密が漏れたため、手紙の記載内容も最小限に抑えられており、俺の返事も時期を明言しないことで、さらなる機密が漏れるのを防ぐようとしていた。

「とりあえず、犯人の目星はついているのか」

「モンスターではないと思います」

「まあ、そうだな」

俺は頷く。

俺が王位にいる時に、警備体制を強化していた。

透明になる魔法や草が存在する以上、対策を強化する必要があった。そして、モンスター侵入対策として、感染症防止用消毒剤「せいすい」を必ず手洗いに使用することになっている。

これで、モンスターならすぐに判明する。

「となると、高レベルの魔法使い呪文を身につけた盗賊になるか」

「あるいは、盗賊の技を極めた、高レベルの魔法使い呪文を身につけたものか」

調査の結果、近衛兵のひとりが殺されており、そのものの装備一式が奪われていたことから、外部からの侵入者と考えられている。

犯人が進入した状況を確認するには、殺された近衛兵を蘇生させるのが一番である。

残念ながら、殺された近衛兵は教会の蘇生術や蘇生呪文「ザオリク」でも復活することはできなかったそうだ。

完全な手練れの仕業だ。

「まあ、呪文自体が偽物なので問題ないはずだが」

魔法の玉の使用を秘匿するために用意した偽呪文が「終焉の砲撃」だ。

実際には、俺が作成した記憶忘却呪文「わすれる」であるが。

「終焉の砲撃」もとい「わすれる」は、MPさえあれば、どの職業でも唱えられるように作成した呪文のはずだ。

はずだというのは、人体実験が怖くて、試験をしていないからだ。対象は詠唱者であるため、自業自得となるはずだが、完全に安心はできない。

魔法研究に長けたものなら、呪文の構成要素を見ただけで判断出来るからだ。

それだけ、呪文の偽装は難しい。

だから、ジnkの師匠はすごいのだ。

「まさか、お前の師匠の仕業か？」

「それはありえませんが」

「なぜだ」

「師匠は結婚相手に夢中で、わざわざロマリア王宮に侵入することはありません」

俺は、先日見たメイド服姿の女性を思い浮かべると納得した。

「それ以外の冒険者となると、多くはいないはずだが」

「冒険者ギルドに調査をお願いした方が、よろしいかと思えます」

「そうだな。ところで、ジnk」

俺は頷くと、別の質問をする。

「子どもは出来そうかい？」

「……。お互いがんばってはいるのですが」

ジnkは少し恥ずかしそうに俯いて答える。

一緒に冒険したときには見せない表情だ。

王妃役も板に付いたか。

「急げとはいわないが、産まれてくれないと、俺がまた王位争いに巻き込まれる」

「そうですね」

ジंकは悪戯っぽい顔で答える。

「たのむから、勘弁してくれ」

「帰りますか」

「久しぶりなので、いろいろ挨拶をせねばなるまい」

俺の前の王や四大貴族などお世話になった人たちに顔を出さねばならない。

退位してから月日が経過したので、相手も落ち着いているだろう。

俺は、部屋を出ると警備兵に声をかけられた。

「よう、アーベル」

近衛兵総統デキウスだった。

「……。近衛兵の総統が、なぜ警備をしていますか？」

「俺が命令した。文句はあるまい」

「……。警備をがんばってください」

「おい、ラルフ」

デキウスは近くを歩いた近衛兵に声をかける。

「総統閣下。ご用でしょうか」

「あとをまかせた」

「はっ！」

デキウスの警備はおわったようだ。

「アーベル。せっかくだから、訓練につきあえ！」

俺はデキウスに、肩をつかまれた。

「もう、ロマリア国民ではありませんから」

「ごちゃごちゃ、うるさい！」

デキウスは俺を脇にかかえると、そのまま訓練場に投げ込まれた。

「……」

「……」

「……」

「……と、いうわけで、帰るのが朝になったのだよ」

俺は、3人に朝帰りの理由を説明した。

「わかったわ、アーベル」

「うたがって、ごめんなさい。アーベル」

「デキウス総統とそこまで親しいとは、さすがアーベルさんです」  
3人には何とか、納得してもらった。

「それでは、気をとりなおして、第3回キメラの翼検討会です」  
俺は、やけくそ気味に声を張り上げる。

「テルルさん。どうぞ」

「恥ずかしいからやめなさい」  
テルルに注意された。

「私は、両方あると思っています」

テルルが説明を開始した。

「両方？」

「どういうこと？」

「キメラからキメラの翼が出来る一方で、それとは別にキメラから作ったものと同じ効果を持つアイテムを別で作っていると思います」  
「なるほど」

「すごいです。テルルさん」

タンタルとセレンは感心する。

「どうして、キメラが持っているキメラの翼と、作られたキメラの翼が同じ形をしているかわかるかな？」

俺はテルルに質問してみた。

「覚えてもらうためじゃないかしら？」

「それにしても、同じ物をつくるのは手間がかかると思っけど」

俺がアイテムを作る立場なら、カメラの翼は使い捨ての消耗品であることから、性能さえ問題なければ安く仕上がるよう形を変えるはずである。

逆に25Gで本物と同様の形状性能を保つことができることが不思議だ。

「じゃあ、アーベル説明しなさいよ」

テルルは俺に文句を言い出した。

テルルも自説に穴があることを自覚していたのだろう。

テルルの口調は怒るといふよりも、すねているといった感じだ。

「俺からの説明といたいたいところだが、・・・」

「明日まで待てということですか？」

タンタルが補足する。

「確かに明日まで待つのだが、俺ではなくキセノンに説明をお願いしますよと思う」

「アーベルはどうするの？」

セレンの指摘で、みんなが俺に注目する。

「俺は答えを知っているのね」

「なんだと」

「ずるいです」

「アーベル。だましたのね」

みんなから文句を言われた。

「だますなんて心外だ。事実を知らないとは一言もいっていないし」

「みんなが誤った説明をするのを、1人だけニヤニヤしながら聞いていたのでしょう」

「アーベル。ひどいです」

「黒いな・・・」

「いまさら、俺のことをどう思われても構わないが」

俺は自嘲ぎみにみんなに説明する。

「俺は、考えることが大事だと思っている。」

本を読んだり、人の話を聞いたりすることは大切だし、役に立つ。

だが、書かれていることや人の話が世の中の全てではないし、正しいとは限らない」

皆が静かに俺の話聞く。

「何が正しいのか、それを判断し決断するのは、自分自身が行う必要があるのだ」

「そのために、自分で考える必要があると？」

テルルがつぶやく。

「そうだ。当然、みんなの相談には乗るし、俺もみんなに相談を持ちかけるかもしれない。ただ、いつまでも俺がリーダーであるとは限らない」

「アーベル」

セレンが俺を凝視する。

「世界が平和になったら、パーティは解散だ」

「そうだな」

タンタルは頷く。

「こんな小難しい話をせずに、楽しいおしゃべりがしたかったのだが」

俺はさみしそうに話をする。

「ごめんね、アーベル」

「気にするな、セレン。最初に説明しなかった俺も悪い」

「というわけで、明日は回答編だ。楽しみにな」

全員の表情が、普段どおりに戻ったことを確認してから、パーティを解散した。

「アーベル」

しばらく、椅子に座って考え事をしていた俺の前にテルルが戻ってきた。

「どうした、テルル？」

「話があるの、聞いてくれる」

「わかった」

俺達は再びテーブルに着いた。



**第81話　そして、説得へ・・・(1) (後書き)**

前回の予告どおり外伝を掲載しております。  
よろしければご覧下さい。

次回は16日正午に掲載の予定です。

## 第82話　そして、説得へ・・・（2）

「さつきは、上手くだましたわね、アーベル」

「何をだい、テルル？」

俺は隠し事がばれたかと、思わず緊張する。

「私たちに、考えさせることが大事だといって、追求をごまかしたでしょう？」

「ごまかしてはいないさ」

追求をかわすことが出来たら、幸運とは思っていたが。

「それよりも、なんだ相談とは」

「この前の話なのだけど」

「誤解を生まないように、具体的に切り出して欲しいのだが」

俺は落ち着いて、答える。

「転職の話よ」

「転職か、決めたのか」

「決めたのだけど、自信が無くて」

「自信が無いというのはどういうことだ？」

普通、決めたのなら自信が無いというのはおかしい。

しかも、転職を迷っているようでもないらしい。

俺は、テルルに話の続きを促す。

「実は、盗賊に転職しようかと思っているの」

「盗賊か、どうしてだい？」

俺は理由を質問する。

「盗賊になれば、アイテムの収集効率が上がるから」

テルルは、先日のピラミッドの搜索をしながら考えたようだ。

確かに、盗賊になれば、戦闘中にモンスターからお宝を奪うことが

出来る。

しかも、レベルが上がれば上がるほど確率も上昇する。

戦闘能力としても、盗賊の方が商人を上回る。

特に素早さの上昇が高いため、素早さが防御力に影響を及ぼすドラクエ3では、盗賊の有用性は非常に高いのだ。

実際、俺がゲームで遊び尽くしたときは、全ての呪文を覚えた盗賊と賢者を中心としたメンバーでステータスが上昇する各種の種をかき集めていた。

さすがに、この世界ではそこまで、やり込むつもりは無かったが、種集めは出来るだけ行うつもりだった。

なぜならば、俺が魔法使いであり、HPに自信が無いからだ。

先日レベルが30に上がったが、HPは130に届いていない。レベル23の武闘家であるタンタルの半分しかない。

先日のバラモス討伐のような戦い方が出来るのならHPなど関係ないが、あの戦いは屋外であり遠慮無く魔法の玉が使用できたこと、屋外でも空からの攻撃が無かったこと、氷のプレスが無かったこと、敵に魔法効果を消し去る「いてつくはどう」を使用されなかったこと等、数多くの好条件が重なった事による。

これから倒すべき相手大魔王ゾーマには、同じ戦術は使えない。

どうやら、俺の考えを見抜いたようで、テルルは俺を手伝うため、盗賊への転職を考えてくれたのだ。

俺は、テルルの転職の話には反対するつもりはない。

こちらからお願いしたいところである。

だが、逆に質問があった。

俺に何を相談するというのだ。

「決まっているじゃない」

テルルはお願いのまなざしを俺に向ける。

なんだろう、嫌な予感がする。いや、嫌な予感しかしない。

「お父さんへの説得よ」

テルルは目を輝かせている。

「・・・」

正直に言おう、途中から予想がついていた。

だが、確認しないといけない。

なぜなら、説得する相手は、キセノン商会代表のキセノンだ。

最近、アリアハン王家から借りている船を効率的に運用するようになり、すぐ近くのランシールとの取引で莫大な利益を上げていると聞いた。

俺が、国に船を貸与していることもあり、俺にも利益が回ってくるので文句は言わない。

将来、キセノン商会による、全世界の経済統合も近いかもしれない。まあ、庶民にとってはトップが商業ギルドの長老連中から、キセノンに変わっただけという認識しか持たないだろう。

すでに、キセノンは商業ギルドの最年少幹部としてある程度の実権をもっている。

だから、その娘が盗賊になると知られたら、キセノン商会にとってはイメージダウンになるかも知れない。

テルルが俺に依頼するのは、キセノンに「商人の娘が盗賊になっても問題ない」と説得させることだ。

キセノンだけではなく、キセノン商会を利用する人々にも理解をさせなくてはならない。

当然だ、商人が最も恐れるのは「信用を失うこと」だ。

キセノンが若くして成功した最大の要因は、「一度口にした約束を、決して破らない」ことだった。

キセノンが若いとき、通常では納期に間に合わないと感じた時に、定価の倍で、他の商店から買い付けてでも納期を守った伝説がある。キセノンに商品を売りつけた商人は、「馬鹿なことを」と笑っていたが、結局金で買った「信用」で大きな商いを任せられ、成長するきっかけになったのだ。

だからこそ、今回の交渉は最も手強いものになると、覚悟した。場合によっては、俺の冒険が終わる可能性もあった。

「わかった、テルル。なんとかする」

「ありがとう、アーベル」

俺の覚悟を感じたのか、テルルは俺の手を強く握った。

「……アーベル」

「……どうした、テルル？」

「どうしたと聞きたいのはこっちよ。いつまで手を離さないつもり」  
「どうやら、回想をしすぎたらしい。」

いつの間にか、俺の方がテルルの手を握っていたようだ。

「ああ、すまない」

「べ、べつにいいわよ」

テルルの顔が赤くなっている。

「すまん、考え事をしていて。痛かったか？」

「だ、大丈夫よ」

テルルは、さらに顔を赤くしたが、そのことを追求しない方がいいのだろう。

俺はなぜか、そう確信した。

第82話　そして、説得へ・・・(2) (後書き)

翌日17日に、ひさしびりに「まえがき」を掲載します。

一話完結ですので、最新話のみお読み頂くことも出来ます。  
気が向きましたら、ご覧下さい。

ちなみに、「そして、説得へ・・・」は(3)、(4)まで続きます。

第83話 そして、説得へ・・・(3)

「さあ、これが答えだ」

キセノンには、俺達を目的の施設に案内する。

「ここは」

「鳥の飼育場？」

「どうということ」

ここには、多くの鳥が飼われていた。

「ここでは、食肉用の鳥が飼育されている」

「食肉用？」

「これと、キメラの翼との関係は？」

「あれを見てごらん、テルル」

俺は、床に落ちている、目的のものを指さす。

「キメラの翼？」

「こんなところに、なぜ？」

「ここからは、管理人さんから説明してもらおう」

キセノンが声をかけると、1人の青年があらわれた。

「管理人のハリスです」

「アーベルです」

「テルルです」

「セレンです」

「ハリス。説明を頼む」

青年は、にこやかに微笑みながら説明を始める。

「この鳥は、ニワトリと呼ばれていますが、伝説の鳥形モンスターであるキメラの血を受け継いでいると言われています」

青年の視線は、テルルの方を向いていた。



やはり、自分の雇い主の娘と言うことで、興味でもあるのだろうか。  
「キメラの血？」

テルルは青年に質問する。

「そうです。その証拠が、このキメラの翼と言われています」  
青年は、落ちているキメラの翼を拾った。

「たまに、雄のニワトリが落とします」

「だから、お父さんの本に載っていないのね」

セレンは納得した様子でうなずいた。

セレンの父親の本は「モンスターを食す」だ。

ニワトリはモンスターではないので、記載されていないのだ。

「そうなのか」

「確かに、同じだわ」

テルルは、自分が持っているキメラの翼と比較していた。

「どうして、雄のニワトリだけついているのですか？」

タンタルが質問する。

「雌に対する求愛行動に用いられると考えられています」

「求愛行動ねえ」

「ふうん」

テルルが俺にキメラの翼を手渡す。

「……。俺に、どうしろと？」

「不思議なおどりでも踊ったら」

「わらいぶくろじゃないし、だいたい俺、マホトラがあるし」

不思議なおどりとは、モンスターの特殊攻撃で相手のMPを奪う。

俺にはMPを吸収する呪文「マホトラ」を習得しているので、必要ない。

「あら、そう」

「セレンさん、どうですか」

「すてきです、タンタルさん」  
タンタルは両手にキメラの翼を持って、セレンの近くを踊っていた。  
「テルル、あんな踊りを俺に踊れというのか？」  
タンタルの踊りは、武闘家の素早さを生かした、洗練した動きをみせていた。  
何となく攻撃の型を元にした動きにも見える。  
「さすがに、あそこまでは期待してないわ」  
俺とテルルはお互いにとって息をついていた。

俺とキセノンは、ニワトリの飼育場の一角にある、応接室で話をしていた。

「この部屋も大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ」

キセノンが答えた。

俺が質問したのは、防諜対策のことだ。

俺は気楽に話しかける。

「実は先日、ロマリア王宮に俺の技を探る動きがありました」

「そうか」

「今日は、キメラの翼を理由にここに来ましたが、本当の理由は、そちらに問題がないか確認するために来ました」

現在のところ、魔法の玉の効力を知っているのは、俺のパーティー（タンタルを除く）以外は、ロマリア王国ではジंकクだけであり、アリアハン王国では、キセノンと俺の母親ソフィア、そして発明者だけである。

誰もが情報の漏洩について、危機意識を持っているため、問題はなはずだが、確認が必要である。

普通であれば、俺とキセノンとの直接の会話は危険だが、もともと

俺がキセノン商会に入り浸っているから普通に話せば問題ないのだ。

「念のため、確認しますが、ハリスさんは大丈夫ですか」

俺は、先ほどの青年のことをたずねた。

「今のところ、問題ない」

「そうですか」

「キセノン商会を任せるだけの才能を持っていると考えている」

「すごいですね」

俺は驚嘆の声をあげる。

俺が知る限り、キセノンが絶賛した人間は、俺の母親ソフィアしか知らない。

「お前さんほどではないかもしれないがね」

キセノンは、意地悪そうな顔をする。

「買いかぶりすぎですよ」

「君が、セレンと結婚したことを想定して、育てているのだよ」

「まだ、結婚なんて考えていませんよ」

少なくとも、冒険が終わるまでは結婚はするつもりはない。

「だったら、うちの娘と婚約してくれないか」

「結婚と、違いがあるのですか？」

婚約するつもりはないが、念のため質問する。

「ハリスの扱いをどうするか、彼にも話す必要がある」

「彼もそれなりの年だ、エレンズという付き合い合っている相手もいる」  
エレンズはキセノン商会の経営部門に在籍しているという。

俺よりも年上で、養成所で何度か顔を合わせたことがあった。

才気があり、勝ち気な性格のため、年上に対して少し生意気なところがあったが、俺達後輩に対しては優しくかった。

「無理にあきらめさせるのですか」

「結婚さえしなければ、文句はいわない」

ハリスのつきあっている相手、エレンズを妾にするとということか。

テルルは納得するのだろうか。

「なんだ。まだ、聞いていないのか」

「なんのことですか？」

「テルルに旅に出る条件として、俺の認めた相手と結婚することを約束したのだ」

「……。初耳です」

第83話　そして、説得へ・・・(3) (後書き)

鳥の名前についてはいろいろ考えましたが、ドラクエ4に「おおにわとり」というモンスターが出現することからニワトリ(現実世界の鶏とは違う)にしました。

ちなみに、「おおにわとり」が落とすアイテムは「やくそう」です。

## 第84話　そして、説得へ……（4）

「テルルの旅の条件として、俺の認めた結婚相手と結婚することを約束したのだ」

「……。初耳です」

テルルと父親であるキセノンとの間に、そのような約束がかわされていることを初めて知った。

テルルは長い旅の間、話す機会は多かつたはずだ。

それなのに、一度も話題に出なかった。

いや、思い当たる節がある。

旅に出て二日目の事だ。

ナジミの塔での戦いであまり動きが良くなかった事を話した後で、テルルとキセノンとのやりとりの一部しか話さなかったことを思い出した。

あのときは、追求しなかったことをようやく思い出した。

確認のため、キセノンに追求する。

「テルルには俺に口止めをさせましたか？」

「していないよ」

「理由は？」

「話してもらったほうが、逆にいいと思ったからね」

「そうですか」

俺はキセノンの考えを理解した。

俺に責任感を持たせることで、俺と結婚させる既成事実をつくろうと画策したのだろう。

だが、俺がロマリア王に就任したことで話が変わった。

当時、ロマリアの政局が不安定な事を見抜いたキセノンは、俺とテ

ルルとを結婚させる計画を白紙にして、別の婿候補を選定したようだ。

それが、先ほどのハリス青年だ。

彼を後継者とすべく、仕事を覚えさせていたが、俺が国難を取り除くと、再び俺の事を婿にと考え直したようだ。

だが、ハリスも才能はある。

だったら、早めに決めた方がいいだろう。

「そんなところですか」

「そんなところだ」

俺の質問にキセノンは苦笑しながら答えた。

「まあ、俺があなたの立場なら同じ事を思いつくでしょう」

「じゃあ、どうするのかね。アーベル」

私の期待に応えてくれるのかと、目は訴えている。

「俺の旅は、まだ終わっていません」

俺は自分の考えを伝える。

「俺が無事に帰ったら、テルルに選ばせればいいのでは」

「いいのか、それで？」

キセノンは驚き、俺に確認を求める。

「俺を選ぶとは思いませんが、選んでもらえるなら光栄ですね」

前の世界でも、市のイベントでゆるキャラの着ぐるみを着たときを除いて、もてた試しがなかったし、事実30過ぎても独身だった。

だったら、年頃になり、日々美しくなるテルルと結婚しても、俺は困ることはない。

問題は、テルルの気持ちだが。

俺は、テルルに秘密を打ち明ける必要がある。

テルルの知らない俺という部分を見て本当にそれでも構わないのか。

俺がテルルの立場であれば、「ひどい」という言葉ではすまないだろう。

俺は思わずため息をついた。

「うーむ、テルルもまんざらではない感じだぞ」

「普段の会話では、全然そう思いませんが」

「どうやら、君は鈍いかもしれないね」

キセノンは苦笑する。

「テルルに話しておこうか」

「パーティの連携が悪くならない程度ならかまいません」

そんな事で死亡フラグを立てるわけにはいかない。

「わかつている。娘を未亡人にさせるつもりはない」

「気が早いです」

「そうだな」

「ところで、勇者の件で質問ですが」

俺は話題を変えた。

「どうした。気になることでもあるのか？」

「随行のメンバーは俺達で問題ないですね」

「魔王を倒したメンバーを外すわけがないだろう」

「反対派はいないと？」

「お前が船を入手したこと、ソフィアの活躍でナジミの塔が奪回できたことが大きい」

わずかにいたキセノン商会の反対派も、何もできなくなったという。

「それなら、いいのですが」

「心配のようだな」

「ええ、ですから念のため協力をお願いします」

俺は、キセノンに提案する。



具体的には、勇者の武具をそろえるために必要な資金の援助要請である。  
アリアハン国王が勇者に提供する装備品や資金はわずかなものである。

自分の強さにあった武具で戦う事で、冒険の経験を積むことを表向き理由にしているが、結局は経費節減が目的である。

「わかった。資金はこちらで用意しよう」

「ありがとうございます」

「お前さんなら、自前で調達できるだろう」

「ロマリアでの在位が長すぎました」

俺は、残念そうな顔で説明する。

勇者の出發前に活動出来た期間は、結局、当初予定の半分である一年しかなかったのだ。

「一度、しっかり確認したかったのだが」

キセノンは改まった顔をする。

「ロマリア王位より優先する、お前の冒険の目的はなんだ？」

まっとうな、質問であった。

ロマリア王国在位中、魔王を撃退し、都市を開放した。

そして改革が進みつつある、ロマリア王国の国王に居座れば、たいていのは手に入る。

それを捨てるほどに、俺の冒険は重要なのか。

「そうですね、いずれわかると思いますが、先ほどのお礼に説明しましょう」

俺は簡単に、下の世界の話をした。

「そうなのか」

「事実です。他言は無用ですが」  
「それにしても、いつ気がついた？」  
「確信したのは、下の世界に行く直前ですが」  
「さすがに前の世界とは言えないので、ごまかすことにする。」  
「これを調べたときに、ある程度予測をしていました」  
「俺は手にしていた、キメラの翼を左右に振った。」  
「どうということだ？」

「俺は、キメラの翼をどうやって入手するのか知っていました」  
「そうだな」  
「ですが、キメラというモンスターがなぜいないのか、疑問に思いました」  
「あれは、伝説のモンスターだろう？」  
「セレンの父親は優秀な冒険者だ。」  
「この世界のモンスターのほぼ全てを知っている。」  
「いないのであれば、伝説のモンスターになる。」

「俺達は見ました」  
「下の世界で・・・か」  
「空を飛ぶことができるかと考えると、昔は、空を飛んで移動したと推測したのです」  
「では、なぜ今はいない」  
「キセノンに追究する。」  
「魔王の存在です」  
「魔王の存在？」  
「今の魔王はバラモスです」  
「そうだな」  
「ですが、魔王は1人ではないとしたらどうします」  
「1人ではないだと？」

「人間も、職業によって使用できる呪文が違うように、率いることのできるモンスターが魔王ごとに異なるのではないかと考えました」  
「……」

「魔王の名前がバラモスだと知ったのは、神話に出るほどに大昔でもないはずだ」

「そうだったな」

「理由までは確認出来ませんでした。下の世界にいる魔王の命令で、この世界に魔王バラモスがいます」

「お前はまさか」

「下の世界の魔王を倒します」

「……出来るのか」

「そのための冒険です」

「バラモスはどうするのだ？」

「下の魔王のほうが強力です。バラモスは帰り道に倒します」

「そういうことか、さすが「きれもの」か」

「おだてても、何も出ませんよ」

「本当に勝てるのか？」

「実はそのために、少しご協力をお願いしたいのですが」

「……ここまで、説明されたら断れないぞ」

キセノンはため息をつきながら、俺の提案を受け入れた。

第84話 そして、説得へ・・・(4)(後書き)

キメラの翼の伏線は以上です。

おかげさまで、PV100万、総合評価2000ptを突破する  
ことが出来ました。

皆様に感謝申し上げます。

## 第85話　そして、転職へ・・・

俺達は、ダーマ神殿の中央にいた。

中央の祭壇にたつ老人は、これから転職をおこなうテルルに話しかけていた。

「ここは転職をつかさどるダーマの神殿。職業をかえたい者が来るところじゃ」

祭壇の位置は、神殿の入り口からだいぶ入ったところにあるので、説明内容が今更だと感じてしまう。

「転職をこきぼうか？」

ここにたどり着くまで、結構待たされた。

転職希望の整理券を持ってまで並んでいるのに、違う理由で並ぶ人なんているのだろうか。

「どなたの職業じゃな」

整理券には転職希望者の名前を記載することになっていた。わざわざ、他人の名前で申請するなんて怪しいだろう。

「テルルがなりたいのはどの職業じゃな」

老人は一覧表をテルルに渡して説明している。

メニュー表のようなものを使用するのは、わかりやすくもいいのだが、一番下にある「司教のおまかせ」とはいったいなんだろうか？

「テルルは盗賊になりたいと申すか」

悪いことをするわけではないので、後ろめたいことは何一つないが、周囲に聞かれるような大声で話しかけられても、気持ちのいいもの

ではない。

「そうか！さすがぬけめがない性格だけのことはあるのう。テルルを少し見なおしたぞ」

頼むから、セレンの前で性格の話を持ち出さないでくれ。

セレンの機嫌が直るのにどれだけ時間がかかるか、知っているのか。テルルも不満そうだ。

自分の天職を商人だと自覚していたテルルにとって、精神的なダメージを受ける内容である。

転職すると、全てのステータスが半減するのは、ひよっとしたら、こういった精神攻撃の影響かも知れない。

たぶん違うだろうが。

「いちどレベル1にもどり、修行をしなおすかくごもおありじゃな？」

簡潔な説明ありがとう。

受付でもらった注意書きには、細かい文字でびっしりと埋め尽くされていたので、解説はありがたい。

ただ、できたら、「転職に伴う事故等について、ダーマ神殿は一切責任は持ちません」という内容ぐらいは、口頭説明があってもいいと思う。

恐らく、いろいろ裁判闘争に発展する可能性が高いとおもっただが。

「ああ神よテルルが新たな職につくことをなにとぞお許し下さい！」  
この世界の職業は、神によって決められるのか。

就職出来るかどうかは別にして、職業選択の自由と言われる国の出身者からすれば、違和感を覚える。

まあ、あの国では職業としての魔法使いにはなれないので、別の意味では、この世界ほど自由でもないが。

やっぱり俺には理解できないところだな。

「よろしい。では今からテルルはとうぞくじゃ！」  
周囲から、ファンファーレが聞こえる。  
演奏者がいるとは思えないのだが、不思議だ。

「テルルの装備は新しい職業のものにかえておいたからな」  
この老人は、神殿の衆人環境下で、勝手に人の装備品を交換すると  
は恐ろしい。

あぶない水着を装備していた女の子が、転職していたらどうなるの  
だろうか。

周囲を見渡すと、ちらほら残念そうな顔をみせる男達がいた。  
この、むつつりスケベどもが。

「たぶん、この司教さんも同じだと思います」  
俺の後ろにいたセレンが小声で俺に同意した。  
性格のことを、気にするセレンが自分で言うなんて、よほどの人物  
だろう。

「軽い気持ちで、転職はできないな」  
俺はテルルを目の前にしながら、おもわずつぶやいた。

「ああ」  
タンタルも同意している。

思わず、地の口調に戻ったようだ。

「そうですね・・・」  
セレンはなんとも言えない表情をしていた。

「転職した、私の立場は・・・」  
戻ってきたテルルは、転職した喜びもどこかに行ったようで、うな  
だれていた。

俺達は再び合流し、訓練場所へ向けて旅立った。

「なかなか上手くないものね」

テルルが不満そうな表情でつぶやく。

「経験がものをいうらしいぞ」

俺がもつともらしく説明する。

「そうなのですか」

タンタルが質問すると、

「推測でしかないがね」

俺は断りを入れる。

俺達は、ピラミッド内部で戦闘訓練をしていた。

目的は、パーティの連携と、とうぞくに転職したテルルのスキル発動を確認するためだ。

ここに出没する、わらいぶくろからスタミナの種を奪うことが出来たら、最高ののだが。

「入手できました！」

「ほう」

テルルの報告に俺は喜んでいた。

何が入手できたのか、確認すると。

「すごろくけんだな」

「すごい！すごろくけんですね」

「……。そうですね」

「……」

目的のアイテムを購入出来た今となっては、あまり意味がないアイテムだ。

「せっかくだから、記念に残したら？」

「そ、そうね」

テルルは頷くと、袋の中にしまった。



「さて、効果も確認できたことだし、次に行きますか」  
「どこに、いくの？」  
「ここだ」

俺は地図を広げて、目的地を指し示す。

「あそこか」

「綱渡りは、苦手です」

「俺だって、旅の扉は苦手だよ」

みんなが、いい顔をしなかつたので、俺も思わず不満を口にしてしまふ。

「でも、テルルのレベルを上げないと、いけないだろ」

「そうですね」

「まあ、俺達もレベルは上がるけどね」

「追いつけないじゃない」

テルルは抗議の声をあげる。

とはいっても、本気ではない。

俺は大げさに、テルルの前に膝をつき、右手を握った。

「大丈夫です、テルル。俺達は先に頂上で待っています」

「・・・」

「ですから、必ず追いつきますよ」

レベルは99が上限だ。

そこまで、あげるかどうかは考えていないが、間違いではないだろう。

「なに、かつこついているのよ」

テルルは、すねた振りをしているが表情は良くなっていた。

「じゃあ、いくぞ」

俺達は、ピラミッドを後にした。

第85話　そして、転職へ・・・（後書き）

次回は、11月3日正午に掲載予定です。

追記）外伝に「ロマリア王立冒険者養成所卒業式での演説」（前編）

、（後編）を追加しました。

暇があれば、あわせてご覧下さい。

## 第86話　そして、種集めへ・・・

「皆さんは、すばやさの種がどうやって作られるのか、ご存じだろうか？」

「いいえ」

「改まって、どうしたのアーベル？」

思わず、考えが声に出たようだ。

酒場で晩飯を食べていた、タンタルとテルルから、質問を受けた。

ちなみに、セレンは、次の料理の注文に夢中で、俺の声は聞こえなかったようだ。

俺は、すばやさの種を手にながら話を続ける。

この種は、昔倒したメタルスライムから入手したものだ。

これからの種集めをする計画を話し終わって、アリアハンの酒場で雑談をしていた。

「ここにあるすばやさの種が、なぜ商人に安く買ったたかれるか、昔考えたことがあってね」

「また、謎解きゲームをするの？」

「この前の鳥さん。かわいかったですよね」

「そ、そうですね」

テルルは、めんどろな顔をして、セレンはこの前の鳥を思い出して感想をつぶやくし、タンタルはセレンの感想に違和感をおぼえていた。

俺も、セレンの感想には違和感をおぼえる。

「さすがに、同じ事を繰り返すつもりはないよ」  
俺は、解説をはじめた。

「どうやら、テルルは知っているようだ。」

店員を呼んで、なにやら注文をはじめた。

ステータスを上昇させる各種の種。

これらの種を栽培しようと考える人々は大勢いた。

しかし、誰も成功していない。

正確には、これらの種をまけば確かに成長して、木になって、実が熟せば種もできる。

ただし、こつやって育てた種を食べても、ステータスは上がらないのだ。

俺の母親であるソフィアも、アリアハンの宮廷魔術師として、種の研究に参加したことがあった。

ソフィアは、種がモンスターから力を吸収させることで、初めてステータスアップの恩恵を受けるのではないかと推論していた。

ということは、巨大な養殖施設を作らない限り、種を集めることができないということになる。

もつとも、ステータス上昇以外の役割がこれらの種にはある。たとえば、

「お待ちせしました」

店員が、おつまみを運んできた。

「これは？」

「そう、すばやさの種よ」

目の前の皿には、俺がもっているものと変わらない種が置いてあった。

「このほどよい辛さが、お酒にあうのよね」

テルルは、種をつまみながらビールを飲んだ。

「だから、売値が安いのですか」

「そうゆうこと」

「でも、ステータスアップ効果があるのに？」

「食べないとわからないから、確認が出来なのさ」

俺はタンタルの疑問に答える。

「そういうわけで、いただきます」

「待ちなさい、アーベル！」

「それは、酒のつまみじゃないです」

「ああ、しまった」

俺は、モンスターから入手したすばやさの種を、袋のなかに戻していた。

「さっそく、この杖の力を試すときがきた」

「アーベル。さっさとしなさい」

「はいはい」

俺達は、すばやさの種を集めるため、ムオルの村の周辺に出現する、鳥形のモンスターデッドペッカーを倒していた。

いつものように、直接攻撃でモンスターを倒すのだが、今回は回復方法がいつもとは違っていた。

「これまででは、やくそうで、ちまちまと回復をしていたのだけどね」

「説明は良いから、早く回復させなさい」

「はいはい」

俺は、下の世界にあるマイラの村で購入した杖を振り回していた。

けんじやの杖、とよばれるこの杖は、回復呪文ベホイミの力が備わっていて戦闘中ならば何回でも使えるという優れものだ。

「新感覚癒し系魔法使い、アーベル？いや、ちがうな」

「だから、早く回復しなさいー！」

けんじやの杖自体は、結構高い攻撃力を誇るが、元の力が低い俺が使うので、たいしたダメージを与えることができない。

そのため、俺は回復に専念していた。

「私の役割が、・・・」

セレンはゾンビキラーで敵を倒しながら、つぶやいていた。

「大丈夫です、セレンさん」

タンタルは、叫びながらモンスターに襲いかかる。

「あなたがいるかぎり、私は何度でもよみがえる！」

タンタルは会心の一撃で、モンスターを粉碎する。

「タンタルさん。すてきです」

「何かが違うような」

俺はため息をついて、回復に専念していた。

「みつけたよ」

テルルはモンスターからすばやさの種を奪い取っていた。

俺達は、宿屋内の一室に集まっていた。

俺達の目の前に、いろいろな種が置いてある。

「この種をどうするの？」

テルルが俺に質問する。

「最初に、謝らないといけないな」

俺は、タンタルに頭を下げる。

「これらの種は、勇者との冒険が始まってから使用するつもりだ」

「かまいませんよ、アーベルさん」

タンタルは慌てて、頭をさげる。

「こちらこそ、いろいろと、お世話になりました」

「代わりというわけではないのだが、貸していた装備は差し上げま

す

「すいません。気を遣ってもらって」

「あとは、これまでの給料だ」

俺は、パーティの持ち金の25パーセントを手渡す。

「いいのですか、こんなにもらって」

タンタルは驚いていた。

手渡した袋には数万ゴールド入っているからだ。

「構わない。今日まで一緒に働いてくれたのだから」

セレンもテルルも頷いている。

「ありがとう、タンタル」

「ありがとうございます。タンタルさん」

「う、うう……」

タンタルはすすり泣いていた。

「このご恩、一生忘れません」

「まあ、冒険していれば、いつか再会する機会もありますよ」

「そ、そうですね」

タンタルは涙を拭きながら、話し出す。

「そのときは、俺がごちそうしますから」

「はい」

「楽しみにしているわ」

セレンとテルルは頷いた。

「じゃあ、夕食を食べにいくか」

「はい」

俺達は、部屋を後にした。

第86話　そして、種集めへ……（後書き）

外伝に「ロマリア王立冒険者養成所卒業式での演説」（前編）、  
後編）を掲載しました。

お暇であれば、ご覧下さい。



## 第87話　そして、父との会話へ・・・

俺は、アリアハン城内にある訓練場にいた。

目の前の男、近衛兵隊長のロイズは、ひのきの棒で俺に攻撃する。

「！」

最初の上段からの攻撃は何かかわせたものの、振り下ろされた棒から繰り広げられる連続の突きを避けることはできず、右肩とみぞおちにダメージを受ける。

俺は、膝を突くと、手にしたけんじャの杖を使って傷をいやす。

「降参です」

俺は、のどもとに突き出されたひのきの棒を目にしながら、ロイズに答えた。

「まあ、全力なら負けるのは俺だけだな」

「仕方ないですよ、父さん」

俺は苦笑しながら答える。

俺のレベルは、種集めによる戦闘で37になっていた。

途中から、種集めが目的なのか経験値稼ぎが目的なのかわからなくなるほど、戦闘をこなしていた。

タンタルが、モンスターを呼ぶ特技「くちぶえ」を覚えていたため、効率的に戦闘をこなせたのも大きな理由ではある。

もう少し経験を積みれば、最強の攻撃呪文「イオナズン（本物）」を習得できる。

一方で、俺の父ロイズのレベルは、18しかなかった。

アリアハン出身で、アリアハン以外の国を冒険する機会がなかったことから、経験値を得る機会に恵まれなかったのだ。

俺が魔法を使ったら、確実にロイズを倒せる。

俺が覚えている最強呪文「メラゾーマ」1回だけでも、瀕死のダメージを与えることができる。

しかも、俺は空を飛べるので、一方的に攻撃できるのだ。

訓練の結果、俺は空を飛びながらも、別の呪文が唱えられるようになっていた。

とはいえ、飛行は不安定になるため、多用はできないが。

だが、俺は魔法を使わず、防具も外して、単純に技量だけで、父親と訓練をしていた。

魔法を封じられたときでも、ある程度自分の身を守る必要があると思っていたからだ。

普通のモンスター相手ならば、この上の世界であれば問題ない。

ただ、対人戦の時には、何があるかわからないのだ。

大魔王を倒し、モンスターが出現しなかった場合、次の相手は人間を相手に戦う必要があるかもしれない。

荒廃した国土を回復すれば、今の人口は十分養うことができると考えているが、どこの世界でも、人の財産を奪い取ろうと考える人間はいる。

そいつらから、自分の身を守るためには、キチンと技を身につける必要があるのだ。

レベル差は、戦闘で大きな力の差となるが、それが全てではない。

俺は、そう考えていた。

「そろそろ、帰るかアーベル」

「はい、父さん」

俺は久しぶりに実家に帰っていた。

明日は、勇者が16歳の誕生日を迎えて、冒険に旅立つ。

俺と、テルル、セレンはルイーダの酒場で勇者と合流し、旅に出るのだ。

タンタルは、アリアハンに滞在して、俺達を見送ると言っていた。律儀なひとだ。

セレンもテルルも俺と同様に、それぞれ実家に帰っている。

テルルはあまり父親のキセノンに逢いたく無いようだったが、俺がキセノンに渡す物があったので、しぶしぶ実家に帰っていた。

俺がキセノンに渡したものは、勇者用の装備品であった。

王様が、勇者に渡す装備は貧弱なので、キセノン商会が資金を提供し、俺が世界中から武器をそろえて、アリアハン国王に献上したのだ。

俺達の資金から勇者の装備品の費用を捻出することも出来たのだが、キセノン商会が自分の力を示す機会だといって、資金提供をしたのだ。

好意は素直に受け取ろう。

「アーベルは、うちの父さんにまた、何か吹き込んだのでしょうか」  
テルルは俺の話の聞いて、あきれたように言われたが、気にしないことにする。

セレンは、彼女の父親に転職の相談をしていた。

俺が、けんじやの杖を購入したことで、自分がこのままでいいのか悩んでしまったのが原因だ。

俺は何度も、「今のままでいいから」と言ったのだが、やはり転職

の決意は固いようだ。  
ただ、問題はどの職業に就くかという事だった。

セレンの呪文を生かすのであれば、盗賊が一番いいのだが、既にテルルが転職している。

武闘家や戦士の職業もいいが、最大MPが半減するため、長期戦の時に苦勞してしまう。回復に専念出来る職業がいた方がいいからだ。

セレンを呪文のスペシャリストとして専念させるために、遊び人を経験してから、賢者に転職する手もあるが、賢者に転職すると、成長が遅くなってしまう。

セレンの早期の成長を考えて、魔法使いに転職する手もあるが、今度は俺と職業がかぶってしまう。

それに、魔法使いはHPが少ないので、ボス戦では苦勞することになる。

セレンは、蘇生呪文「ザオリク」を覚えていないため、転職はまだ先の話だが、かつて冒険者であった父親とじっくり話してから決めますと言っていた。

俺は、家までの帰り道、父ロイズと子どもの話をしていた。

俺がアーベルに転生する前は、かなりわんぱくだったらしい。

俺が転生した日も、母親の目を抜け出し、一人で城に忍び込もうと  
していたようだ。

俺が、転生してからずいぶんおとなしくなったので、逆に心配していたが、セレンやテルルと遊ぶようになって、一安心したという。

ただ、キセノン商会に入り浸っていたとき、俺が商人をめざすのか  
と思っていたらしい。

俺は、この世界の知識を得るために行動しただけだったが。

俺が、魔法使いを目指すと思ったとき、母親に似たのかなと思った  
そうだ。

顔もどちらかといえば、母親に似ており、セレンは最初に出会った  
とき、俺のことを女の子だと思ったようだ。

顔は似なかったが、声は父親に少し似ていた。

それを知ったのは、声変わりがするようになってからだ。

たまにロイズの声まねをすると、母ソフィアが勘違いして俺に声を  
かけるからだ。

ただ、悪戯の代償は大きかった。

「こうして、一緒に歩くのも久しぶりだな」

「そうですね」

俺は、子どもの時は勉強に明け暮れ、冒険者になってからも旅に明  
け暮れていた。

「ところで、アーベル？」

「なんですか」

「結婚はまだしないのか？」

「冒険が終わらないと」

「そうか」

「早く、孫の顔を見せろよ」

「気が早いです」

「そうだな。俺もまだ若い。孫の顔を見る前に死ぬことはないだろ  
う」

ロイズはからから笑って答える。

「……大丈夫です。絶対に大丈夫です」

「なんだ、アーベル。既に子どもでもいるのか？」

ロイズにからかわれた俺は、先に走って家路に急いだ。

絶対に、絶対に、大魔王を倒すと決意しながら。

第87話　そして、父との会話へ・・・（後書き）

次回、勇者が旅に出ます。

ただし、第6章は90話まで続きます。

## 第88話　そして、勇者の旅立ちへ・・・

「まだかな」

「まだですねぇ」

「まだだな」

セレンとテルルと俺は、ルイーダの酒場で話をしていた。

朝から、酒場に集まって勇者が来るのを待っていたのだが、昼前になっても、姿を現さなかった。

最初は、冒険の進め方について、ああでもない、こうでもないと話をしていたが、3ループ目に入るとさすがに疲れて、誰もしゃべらなくなった。

酒が入れば、少しは場が持つかもしれない。

だが、俺は酒を飲まないし、セレンやテルルも朝から酒を飲む事はしなかった。

いくらアリアハンにいるモンスターが弱いからといっても、足をふらつかせながら冒険に出るのは、遊び人だけで十分だ。

だいいち今の俺達には、周囲からの注目が集まっていたので、下手なことはできない。

1人は、前のロマリア王で魔王を倒した魔法使い。

1人は、アリアハンの経済を牛耳る、キセノン商会の一人娘。

1人は、有名な冒険者の娘でかわいらしい僧侶。

この3人はもうすぐ、勇者と一緒に旅立つのだ。  
注目を浴びないはずがない。

事前に俺達は、勇者から一緒に冒険することの了解をもらっていた。いくら、国王からの要請とはいえ、一緒に戦う仲間を選ぶのは勇者



である。

きちんと勇者がルイーダの酒場等の、冒険者ギルドでパーティの登録をしない限り、一緒に冒険ができないのだ。

勇者は、初めて会ったとき以降、何故か俺になついていた。

俺は、最初のころは勇者の事を恐れていたが、俺にだけ特別に尊敬のまなざしを示すのを感じてから、恐れるのをやめた。

今では、勇者を弟のようにかわいがっていた。

ただ、セレンとテルルは俺が勇者をかわいがるのをあまり喜んではいなかった。

特に俺が、ロマリア王の時に行った演説の話をも勇者の前でしたときは、勇者が顔を真っ赤にしてうつつむいたので、

「どうした、大丈夫か？」

と、質問すると

セレンとテルルが2人でひそひそ話をして、10日ほど不機嫌な顔をしていた。

どうやら、

「勇者を邪魔する奴は絶対に許さない」

という演説内容が気に入らなかつたらしい。  
なぜだろうか？

「とりあえず、昼食でもとりながら、計画を確認するか」

「そうですね」

「わかつたわ」

俺は、適当に頼んだが、鳥の手羽先を食べようとして、先日行った、鳥の飼育場のことを思いだし、手羽先を戻した。

テルルも、同じ事を考えたのか、食べようとはしない。

「テルル、これおいしいよ」

「今は、いいわ」

「じゃあ、いただきます」

セレンは、テルルの分まで食べ始めた。

「テルル。セレンはあの鳥をかわいいと言ってなかったか？」

「そうよね」

「どうしたの、二人して。内緒話？」

「なんでも、ないよ、セレン」

「そ、そうよ。おいしそうに食べているわ、と感心していたのよ、ね」

「あ、ああ」

「じゃあ、アーベルも一緒に食べようよ」

「・・・。わかった」

俺は、顔色を変えないよう注意を払って、手羽先を食べ始めた。

「アーベル。キメラの翼の話を知っていたのでしょうか？」

テルルは、俺に小声で質問する。

「鳥の特徴までは、知らなかったよ」

俺は、適当に食べながら返事をする。

「とりあえず、確認をしよう」

俺は、午前中の話をまとめて、確認した。

俺達や勇者の武器や防具は、最強クラスなので、戦闘だけはできる。ただし、勇者のHPが低いので、いきなり強力な呪文を使う相手と戦うことはできない。

また、パーティの中に遊び人の経験者がいないため、敵を呼び出す呪文「くちぶえ」が使用出来ないの、訓練はできない。

このため、俺達の最初の旅をなぞる形で、ダーマまで旅をすることを確認した。

その後は勇者の強さをみながら、オーブを集めることを提案するつもりだ。

オーブに関する噂は、テルルも知っているが、あまり信じていないようだ。

ならば、無理に今の時点で説明するつもりもない。

オーブを集めて、不死鳥ラーミアをよみがえらせた後に、竜の女王の城まで出向いて光の玉を入手する。

この光の玉がないと、大魔王ゾーマを倒すのは困難を極めるからだ。

光の玉を入手後は、下の世界アレフガルドで原作通りに冒険を進めて、大魔王ゾーマを倒すのだ。

幸い、勇者を納得させるための材料がある。

勇者の父親であるオルテガの存在だ。

オルテガは、勇者がゾーマの城に侵入した時点で、モンスターに殺されてしまう。

だが、魔王バラモスを倒す前ならば、オルテガが殺される前に勇者とあえるかもしれない。

そう話をすれば、勇者はバラモスより先にゾーマ討伐を優先するだろう。

ひよっとすれば、夢の勇者親子パーティが出来るかもしれない。

「なに、にやにや笑っているのよ」

テルルが厳しい視線を俺に向ける。

セレンも同じように厳しい視線を向ける。

俺は、別に変な妄想をしたわけではないのだが。

一応弁明しておくか。

「勇者と一緒に冒険が楽しみなだけだ」

「・・・」

「・・・」

なぜか、さきほどよりも視線が厳しくなっていた。

「……。とりあえず、ダーマまでは歩くということですね、いいですね」

俺は、なんとか返事を返す。

「はい」

「わかったわ」

俺達の昼食は終わろうとしていた。

いまだに、勇者は酒場に姿を見せなかった。

「遅いですね」

「王宮で何かあれば、父さんから連絡があるはずだし」

俺は、違和感を覚えていたが、それがなにかわからなかった。

ひよっとしたら、勇者は迷子になったのかとも考えた。

ルイーダの酒場は、成人になるまで入ることが出来ない。

とはいえ、冒険者であればルイーダの酒場の場所は誰でも知っている。

人に尋ねれば問題ないはずだ。

いや、勇者はしゃべれなかったな。

俺は、セレンとテルルに探しに行こうかと提案しようとしたとき、

「アーベルさん！」

「タンタルさん」

タンタルは、酒場内をかけたして大声で俺に話しかける。

「どうしたのですか」

俺達は、慌てるタンタルの様子を疑問に思いながらも、タンタルに話しかけた。

「まつ、まつなんとかさんが・・・」

「まつまつなんとかさん？」

長い名前だ。

聞いたことがない。

「と、とにかく、勇者がさらわれたのだ！」

「なに！」

「なんですって！」

俺達は、思わず立ち上がった。

「アーベル」

セレンが俺の服をひっぱる。

「・・・、わかった」

俺達が騒いだため、みんなから注目されている。

ただでさえ、勇者の随行と知られているので、余計に目立つのだ。

俺は、合図をして自宅に呼び寄せることにした。

第88話　そして、勇者の旅立ちへ……（後書き）

勇者が旅に出ました。

勇者の名前は「まつまっなんとか」「さんでも、「まつまっなんとかさん」でもありません。念のため。

追記)

17日に、外伝に「勇者まつまっなんとかさんの冒険？」を掲載します。

## 第89話 そして、告白へ・・・

「ここが、アーベルの部屋」

「散らかっているわね」

「そんなことより、話が先だ」

俺の部屋の感想を述べるセレンとテルルを無視して、タンタルに話しかける。

俺の部屋は、新しい魔法研究の為に資料が散乱していた。

パソコンがあれば、資料整理は楽なのだが、あいにくそのようなものはこの世界にはない。

そんなことより、タンタルの話を聞くのが先だ。

「何があつたのか教えてくれ」

「俺は、城門で皆さんの見送りを考えていました」

しかし、一向に姿を現さないで、城から少し離れた木陰で休んでいたら、遠くの方で急に現れた四人組の姿を見つけたという。

そのうちの1人は、俺達がい付けた装備品を身につけていたという。

「城から出た後、勇者が襲われたのか。そして、きえさりそうか呪文で姿を隠したと?」

「俺は、そう思いました」

俺の仮説に、タンタルは頷いた。

「見間違いは無いの?」

「それはないです。それよりも、残りの3人の方が問題だ」  
タンタルの口調が変わった。

「どういうこと?」

「まさか、タンタルさんが話をした・・・」

「ああ。あの3姉妹だった」  
タンタルは、ちいさくつぶやいた。

タンタルから、以前に聞いたパーティの話を思い出す。

俺達と冒険をする前のパーティは、最悪だったということだった。

そして、そのパーティが今回目つけたのが、こともあるうに勇者だったのだ。

「どうして、助けなかったの？」

「すぐに姿を隠した。それに」

タンタルはテルルの指摘に、悔しそうに反論する。

「あいつらは、化け物だ。今の俺達でも倒せない」

「そんなに強いのか？」

「ああ、3人ともレベルは99のはずだ」

「なんだと」

俺達は啞然とした。

確か武闘家のレベル99の経験値は800万以上必要なはずだ、盗賊にしても600万以上かかるはず。

一体、どんなあくどい事したら、これだけの経験を積めるのか。

「どうするのよ？」

「まずは、王宮にいつて、事実を報告する。

そして、3姉妹の情報を冒険者ギルドから入手する。

明日もう一度、ここに集まって欲しい」

「わかったわ」

「俺は？」

「タンタルさんは、残ってください」

「はあ」



「あなたは、3人組に顔を知られています」  
「そうですね」

タンタルは落ち着いたのか元の口調に戻っていた。

「可能性は低いですが、宿屋で襲われる可能性があります」  
「・・・」

「今日は、私の家で泊まってください」  
「わかりました」

セレンとテルルが部屋を出た後で、タンタルにたずねる。

「タンタルさん」

「なんですか？」

「協力をお願いしたい事があります」

「俺でできることなら」

「その前に、確認したいことがあります」

「なんででしょうか？」

「ドムドローで、記憶を失ったことを覚えていますか？」

「はい」

「間違いなく、記憶を失ったのですね？」

「そうです」

「ならば、ロマリアで奪われた呪文を使用された可能性がある」

「奪われた呪文ですか」

俺は、タンタルに「わすれる」という呪文を説明した。

「でも、今の説明では、使用者だけにしか使えない呪文では？」

タンタルは、疑問点を指摘した。

「そうですね。ですが、ある程度呪文を知るものならば、相手にかけることができるよう改変することができます」

「・・・」

「彼女たちならば、ロマリアで呪文を奪うことができます」

「・・・」

「勇者の誘拐であれば、計画的に行われています」

「・・・」

「誘拐するためには、勇者の情報を入手する必要があります。」

そして、あなたから情報の提供を強要した可能性も高いです」

俺は、内心で後悔していた。

策を練ったつもりだったが、相手の方が上手であったようだ。

策に溺れたようだ。

「タンタルさんに、これから「おもいだす」呪文を唱えてもらって、その俺の推測が正しいのかどうか、そして、正しい場合には記憶を思い出してもらっていいですか？」

「いいですよ、俺も気になっていたところですから」

タンタルは了解した。

俺は、勇者の特殊呪文「おもいだす」を改良した、呪文を作成していた。

俺が、ロマリアで残した「わすれる」という呪文の効果を打ち消す呪文を考案していた。

それが、「おもいだす」という呪文だ。

この呪文も誰でも使用することができる。

「う、うああ！」

「大丈夫ですか、タンタルさん」

頭を抱えてうめき出し、椅子から倒れそうなタンタルを見て、俺は、タンタルに体を寄せて支えた。

呪文が失敗したのか。

自分に呪文をかけた場合は問題なかったのだが。

「大丈夫です。アーベルさん」

声はちつとも大丈夫ではなかった。

「思い出しました。全てを・・・」

「そうか」

「記憶を思い出して、叫んでしまいました」

叫んだのは呪文による副作用では無いことを確認する。

「ということとは？」

「・・・。ええ、拷問を受けたようです」

「休まなくてもいいのか？」

「後で休ませていただきます。ですが、説明が優先します」

タンタルは、俺に失われた記憶を話し始めた。

第89話　そして、告白へ・・・（後書き）

次回で第6章が終了します。

次回掲載は23日正午の予定です。

「外伝」に「勇者まつなんとかさんの冒険？」を17日に掲載しました。

「まえがき」第1章「冷やしビーフストロガノフ始めました！」編が完結しました。

暇なときにお楽しみ下さい。

第90話　そして、別行動へ・・・（前書き）

前話で掲載予定時刻を記載し忘れておりました。  
すいません。

第90話 そして、別行動へ・・・

「再会したのは、ドムドローでした」

「下の世界にも行ったことがあるとは」

「どうやら、俺達の後をついてきたようです」

「そうか」

俺は、タンタルの説明を聞いていた。

「あいつらは、ドムドローで俺が1人になった隙をねらい、俺をさらっていきました」

気がついたら、繁みのなかに連れ去られたらしい。

「盗賊である長女が、俺に変身して武器屋に侵入したようでした」

「長女の目的は？」

「よくわかりません」

タンタルは首を横に振る。

俺の考えでは、セレンが着替えている間に、俺と偽タンタルが外に出ることで、俺を連れ去ることを考えていたのかもしれない。

「どんなことを、聞かれました？」

「アーベルさん。あなたのことです」

「そうか」

彼女たちは俺の行動に興味を持ったようだ。

ひよっとしたら、タンタルを仲間にした時点から、彼女たちに見張られていたかもしれない。

「俺のどんなことを話したのか、詳しく教えてくれ」

「はい」

タンタルは、詳しく話を続けた。

タンタルが話したことは、俺と一緒に冒険をした以外のことは、知

らなかった。

はっきり言えば、タンタルが話した情報は、これから一緒に勇者と冒険することを含めて、アリアハンやロマリアの冒険者のほうが詳しいくらいだ。

「それと、アーベルさんが、オーブを所持しているかも質問されました」

一つだけ、はっきりしたことがある。

3 姉妹は不死鳥ラーミアの復活を考えているのだ。

「ありがとう、タンタルさん」

「すいません。俺をパーティに加えたばかりに」

「気にしないで下さい。それよりもこれから一緒に冒険をお願いしたいのですが」

俺はタンタルにふうじんの盾を手渡しながらお願いをした。

ふうじんの盾は、武闘家が装備できる最強の防御力を誇る盾で、ロマリア王国の家宝だった。

俺が、ロマリア王を退任した時に餞別でもらったのだが、魔法使いの俺は装備できないし、セレンやテルルはみかがみの盾の方が防御力が高い。

そのため、タンタルにふうじんの盾を譲ることにしたのだが、俺と離れてから、王家の家宝を持ち歩くと疑われてしまうというて、結局昨日返されてしまった。

ちなみに、このふうじんの盾はすべてを吹き飛ばす風神の力が宿っていると言われているが、俺が道具として使っても効果がなかった。他のドラゴンクエストシリーズなら、効果があっただけに残念だ。ただ、商人時代のテルルに見てもらった時には、不思議な力を感じると言われた。

SFC版の発言と異なった気がするがどうだろうか。

「いいのですか？」

盾を受け取りながらタンタルは質問する。

「セレンとテルルに話をしないといけません、了解はもらえると  
思います」

「ありがとうございます」

タンタルは嬉しそうにうなづく。

「それでは、少し休んでください」

「いえ、一緒に・・・」

「無理はしないでください。あなたは重要な戦力なのですから」

俺は起きあがるうとするタンタルを押しとどめた。

「ありがとうございます」

俺は、タンタルが休んだことを確認すると、手紙を4通用意した。

アリアハン、ロマリア、ポルトガ、イシスの各国の王に対して、勇者が訪ねてきたら歓待して引き留めること、その間に俺を呼び寄せることの2点の要請であった。

3姉妹が何を考えているかわからないが、勇者を連れているのなら、勇者を利用して国王に何らかの行動をさせる可能性がある。

各国の国王に、それを警告すること、3姉妹に隙ができれば勇者を奪還するためだ。

3姉妹が国王に会うという行動する可能性は高くないが、用心はすべきだろう。

部屋を出ると、母親がいた。

「アーベル。ど、どうしてここにいるの？」

俺が旅立った日のことを思い出したのだろう。

あのときはかなり気まずい思いをした。



そんな話は脇において、母親にも説明が必要なことを思い出す。  
「かあさん。まずいことになりました」

俺はかいつまんで説明をして、アリアハン国王への親書を手渡した。  
「ロマリアとポルトガは俺が行きます」

「大丈夫なの？」

「相手が1人なら、なんとかなります。2人以上なら、これで逃げますよ」

俺はキメラの翼を見せつける。

「無理はしないでね」

「大丈夫。あの日から、無理はしたことないから」

俺はお茶目に笑うと、セレンとテルルに逢いにいった。

翌日再会するという予定を、急遽夕方に変更して、俺は再びテルルとセレンを、俺の部屋に集めた。  
さすがに、部屋は片づけた。

「勇者はどうするの？」

「俺達だけでは無理です」

どんなに相手が強くても、相手が1人なら勝機がある。

俺が覚えた変身呪文「モシヤス」があれば、同等の戦いが出来るからだ。

いざとなれば、魔法の玉も投入できる。

だが、相手は3人だ。

そして、勇者を人質に取っている。

普通なら、人質など蘇生呪文でなんとかできるが、先日の事件のよ  
うに復活が出来ないくらい死体を破壊する可能性がある。  
現状ではあきらめるしかない。

「じゃあ、どうするの」

「さきに大魔王を倒す」

「なんだって！」

「どうして？」

俺は理由を述べる。

「大魔王のほうが弱いからだ」

「そんな」

「ばかな」

テルル達は驚く。

「通常であれば、大魔王を倒すのは至難だ」  
全員が頷く。

「だが、倒すためのアイテムを入手すれば問題ない」

「そのアイテムは・・・」

「ここでは、話せない」

俺は、テルルの話をさえぎった。

「どうしてですか」

セレンは質問する。

俺の部屋の防諜設備は、王の会議室並に完璧である。

さらに、ルーラで逃走できないように、バハラタの東にある洞窟に行つてリミットが使用できない原理を元に、解析した成果も導入している。

「タンタルの例もある」

俺は、ベッドで休んでいるタンタルに視線を移しながら、理由を説明する。

「そうね」

テルルは頷く。

例の3姉妹に誘拐されて、話を聞かれる可能性があるからだ。

念のため、俺とテルルとセレンは「おもいだす」の呪文を唱えて、  
3姉妹から消された記憶が無いことを確認している。

「とりあえず、3人でロマリアとポルトガ、イシスに行ってくる」  
俺は、ベッドで休んでいるタンタルに話しかけた。

「すまない、アーベルさん」

「元気になったら、ちゃんと仕事してもらおうから」

「任せてくれ」

俺達は、新しい旅に出た。

第90話　そして、別行動へ・・・（後書き）

第6章が終了しました。

一区切りしましたので、評価をしてもらえたら幸いです。

## 第6章終了時点でのステータス

テルル

盗賊

ぬけめがない

せいべつ：おんな

LV：34

ちから：106

すばやさ：229

たいりよく：151

かしこさ：95

うんのよさ：117

最大HP：302

最大MP：190

攻撃力：148

防御力：215

EX：300999

はがねの鞭、みかわしの服、みかがみの盾、ミスリルヘルム

セレン

僧侶

ふつう

せいべつ：おんな

LV：36

ちから：53

すばやさ：77

たいりよく：107

かしこさ：95

うんのよさ：110

最大HP：215  
最大MP：188  
攻撃力：120  
防御力：196

EX：410444

ゾンビキラー、ドラゴンローブ、みかがみの盾、ミスリルヘルム

アーベル

きれもの

せいべつ：おとこ

LV：37

ちから：35

すばやさ：125

たいりよく：82

かしこさ：161

うんのよさ：113

最大HP：160

最大MP：315

攻撃力：85

防御力：205

EX：476337

賢者の杖、ドラゴンローブ、魔法の盾、ミスリルヘルム

タンタル

ぶどうか

くろうにん

LV：34

ちから：200

すばやさ：145

たいりよく：178

かしこさ：52

うんのよさ：133

最大HP：350

最大MP：49

攻撃力：240

防御力：154

EX：381533

パワーナツクル、黒装束、風神の盾、黒頭巾

## 第6章までのあらすじ

向かい合わせのテーブルに人々がすわり、俺の行動について男達が議論していた。

「これまで、うまくやっていたつもりだったのか」

「予定が大きく変わったな。考えはあるのか？」

「なぜ城内で迎えなかったのか！」

片方のテーブルに座る人々から、俺を弾劾する声が飛び交う。

「そんなことより、解決策を考える方が先だ！」

「反省は後でもできる。まずは原因究明だ！」

「相手は手強いのだ。我々は今こそ協調しなければならぬ」

反対側に座る人々は、今後の対策を取る為の議論をはじめようと相手に説得を始めていた。

「まずは、これまでの経過を整理しようではないか」

「そうだな。一度全員が現状を再認識しなければ議論が進まない」

両方の席から、これまでの経過の確認を求める発言がなされた。

「では、私のほうから説明しよう」

眼鏡をしている男が立ち上がり、説明を始める。

「下の世界アレフガルドに降り立ったアーベル達一行は、下の世界で装備を整えるべく各地を回っていた」

両側で聞いていた男達は頷く。

「そして、アーベル達の後を、盗賊と武闘家2人で構成する3姉妹のパーティが追跡していた」

1人が、何故見抜けなかったのかと声を上げたが、周囲の男達が黙らせる。

「そしてドムドローラにおいて、3姉妹はかつてパーティを組んでい



たタンタルを誘拐すると、盗賊がタンタルに変装して時間を稼ぐ一方で、残りの武闘家がタンタルを通じてアーベルの情報を収集していた」

「モンスターと誤認したのは失敗だったな」

「反省は後だ、話を続けてくれ」

眼鏡をかけた男は説明を続ける。

「アーベル達は、そのまま旅を続け、勇者の装備品の購入と、自分たちの戦力強化のために世界各国を回っていた」

周囲の喧噪はやみ、全員が眼鏡をしている男の話に集中していた。

「早くから、勇者と一緒に冒険することが決まっていたアーベル達は、勇者が冒険者を迎え入れるルイーダの酒場で待機していた」

「！」

発言しようとした男を、別の男がさえぎった。

「あなたが、最初に発言したように城内で待機していれば、今回の事件は起こらなかつたかも知れませんが、今は現実を認識する方が先です」

「アーベルのパーティーから外れたタンタルは、アリアハン市街の外で、アーベル達と勇者の一行が出発するのを待っていました」

「ところが、アーベルの代わりに現れたのは、3姉妹と勇者の姿でした」

「一瞬だけ姿を現して、すぐに消えたタンタルは証言しているが？」

静かに聞いていた男が、眼鏡の男に確認を求めた。

「3姉妹の行動の意図を安易に判断するのは危険ですが、私たちは意図的にタンタルに知らせたと推測しています」

ほとんどの男達がうなずいていた。

「そうなれば、アーベルにも情報がつたわると考えた上での行動だ

「と思います」

「今の戦力で、勇者の奪還は可能か？」

「その議論は、前回の緊急会議で結論は出ています。勇者が人質にされている以上、無理だと」

「あちこちで、ため息が聞こえる。」

「無理もありません。相手は全てレベル99です。一番高いアーベルでも37です」

「イオナズンの取得レベルは？」

「38です」

「どのみち、変身呪文モシヤスで対抗するしかないでしょう」

「それでも戦闘になれば、せいぜい、1対1が限界だな。1対3では無謀だ」

「だから、これからの対策を話すのではないか！」

「騒ぐな。みんな同じ考えだ」

「そつだな」

約1時間程で会議が終わった。

「会議は終わりだ。明日から行動を開始する」

「了解！」

男達は全員頷いた。

「……。脳内会議は終わったか」

俺はため息をつくど、眠りに就こうとしていた。

## 第91話 そして、警告へ・・・

「騒がしいわね」

「どうしたのでしょうか？」

「誰かに聞くしかないでしょう」

俺達は、喧噪の中にいた。

俺は、いつものように着ぐるみをきて、ロマリア城へ向かっていた。俺は、退位してから半年が経過しているの、着ぐるみを着なくても問題ないだろうといていたが、セレンとテルルが反対した。

「可愛いから、是非着てくださいい！」

いや、そういう目的で来るわけではないですから、セレンさん。

それと、タンタル。

着ぐるみは1着しかないからといって、疲れた身体を無理に動かしてキャットフライを狩りに行こうとするな。

この冒険が終わったら、いくらでも狩りに行くのを手伝ってやるから。

あ、やばい。死亡フラグだ。

「アーベル、安心はできないわ。

今でもアーベルに反感を持つ貴族達はいるのだから」

テルルさん、行っていることは論理的ですが、ニヤニヤした表情では説得力がありませんよ。

それに、着ぐるみイコールアーベルという認識がロマリア王宮内に浸透しつつある。

逆に正体がばれるだろう。

反論をしたかったが、時間がないため我慢して身につけて王宮までやってきた。

しかし、王宮に来るまでに気がついたことだが、ロマリア兵達の様子がおかしいのだ。

ロマリアに駐在するほとんどの兵が、城と町の入り口とを何度も行き交っている。

俺が、王に就任していた間、これほどの騒ぎは起きたことがない。俺がロマリア王を退任した時の騒ぎでも、ルーラを使って国外に退去したことを知られていたので、ほとんど兵は動かなかった。

「いったいなにがあったのです？」

「ぬいぐるみを着ている奴に教えることは、・・・アーベル様」  
城門で監視をしていた兵は俺を確認すると、慌てて謝った。

「静かに。俺が来たことがわかると、さらに騒ぎが大きくなります」  
兵士はうなずく。

「王妃はいるかい？」

「謁見の間で、指揮をとっています。アーベル様が来られたら、すぐに顔を出すようにと王妃からご命令を受けております」

「ありがとうございます。顔をだすよ」

「はっ」

兵士は俺に最敬礼をする。

周囲の兵士達は、着ぐるみを身につけている者が誰かということがわかったようで、道を譲ってくれた。

「アーベルさん！」

「久しぶりだな、ジंक」

「あなたの仕業ですか？」

ジंकは、開口一番、隣の玉座にすわる夫の頭を指さした。

「王冠だと・・・」

「盗賊団が持っていたのでは？」

テルルが思わず口にした。

俺が、ロマリア王を退位した原因はこの冠が盗賊団に奪われたことが原因だ。

俺はそう言って退位した。

いまだに盗賊団が持つてるはずだ。

俺が丁寧をお願いしたからだ。

俺達の反応をみて、ジंकはため息をつく。

「どうやら、私の勘違いですね」

「説明してくれ」

「ええ」

ジंकは俺達を会議室に案内してくれた。

王は冠の位置をしきりに気にしていた。

「つまり、今朝、金のかんむりが急に城の入り口に落ちていたと」

「そうです」

ジंकは頷いた。

「ひょっとして、俺の仕業である可能性を考えていたと」

「勘違いでしたが」

「仕方ないさ」

ジंकは説明が終わると、俺が書いた手紙を読んでいた。

「思った以上に足が速いな」

「どういうこと、アーベル？」

「恐らく、3姉妹は盗賊団を退治したのだ」

「たった一日で？」

「ルーラかキメラの翼を使えば、すぐにノアニールやロマリアに着くはずだ。いや、勇者を連れ去る前に、盗賊団を倒したのかもしれない」

ない。いずれにしても、計画的な犯行なのは間違いない」  
「どういふこと」

「なぜ、3姉妹は黙って王冠を返したのか」

「わからないわ」

テルルは首を横に振る。

奪われた王の冠を取り戻す。

それだけで、報酬が得られるだろう。

なのに、それをしなかった。

普通ならあり得ない。

「ジンク、警備を」

俺はジンクに声をかける。

「わかりました。すぐに搜索をやめて、警備に集中するよう手配してください」

「かしこまりました」

衛兵の1人が、会議室から飛び出して素早く指示をだす。

「どうしたの」

「陽動だ」

「陽動？」

セレンは俺にたずねた。

「王冠が突然現れたら、誰でも混乱する。王様は違うようだが」

「そうですね」

俺の手紙を読み終えた、ジンクは苦笑する。

だが、顔が少し赤くなっている。

照れているのだろう。

「話がそれたな。3姉妹は警備を混乱させて、別の何かをねらっているはずだ」

「なるほど」

「だから、捜査を止めさせたのね」

「もう遅いかもしれないけどね」

ジंकは疲れたような声をだす。

「奪われそうなものに、心当たりは？」

「王室ですから、ありすぎて困るぐらいですよ」

「王の誘拐とかは？」

テルルが質問する。

「ないでしょう」

「ないな」

ジंकと俺は頷いた。

「王妃様」

先ほど指示を出していた衛兵が戻ってきた。  
慌ててもどったのか、息づかいが荒い。

「どうしました」

「船が、船が奪われました」

「遅かったようですな」

「そうだな」

俺達はため息をついた。

「こうしてはいられない」

俺は、セレンとテルルの肩に手を回す。

「な、何をするのよ」

「・・・」

「ジंक、また後で。あと、艦隊出動の要請書を用意してくれ」  
ジंकは頷いた。

「海上封鎖ですね、わかりました。気を付けてください」

「まだ、死にたくないからね」  
俺は、ルーラの呪文を唱えて、ロマリア城内から次の目的地に移動した。



第92話 そして、艦隊の出撃へ・・・

「3日目ですね」

「そうだな」

俺達はポルトガの南西にある海峡にいた。

「灯台からの報告も異常ありません」

「そうか」

ポルトガ海軍から俺に情報が伝えられる。

「長期戦になるかもしれないな」

俺はつぶやいていた。

俺達は、ポルトガヘルーラで移動すると、王に面会を申し込んだ。  
「ひさしぶりじゃの、アーベルよ。また黒こしょうが食べたいのだから」

「それならば、艦隊をお借りしたい」

「バカなことを言うな！」

そばにいた大臣が文句を言う。

「好きにするがいい」

「それでは、買い付けに行きますので」

俺は、許可証を受け取ると、海軍基地へ走り出した。

「まっってください」

「どこに、いくのよアーベル！」

「話は後だ！」

後には、嬉しそうな表情をする国王と頭を抱える大臣がいた。

「説明してくれても、いいじゃない」

「そうです」

テルルとセレンは俺を追及した。

「すまない。時間は無かったのだ」

「・・・」

俺の言い訳になんとか、理解はしてくれたようだ。

俺は、ポルトガの艦隊を率いて、海峡を封鎖していた。

目的は、ロマリアを出発した3姉妹の船を沈没させるためである。

俺の行動は、何とか間に合ったらしい。

海峡の南にある灯台の報告では、俺が艦隊を動かしてすぐにロマリアの船を発見したという。

姿を消す呪文や薬があっても、船までは隠すことはできなかった。

出現した船は、俺が率いた艦隊を見つけると、ロマリア方面に戻ったという。

俺は、5隻の艦隊を交替で休ませながら、海峡を封鎖していた。

そうするうちに、ロマリア王国からの艦隊の出動要請がポルトガに届き、現在ではロマリア海軍主導で艦隊行動が続いている。

俺は、1日休暇をもらって、黒こしょうを買いにいった。

方便とはいえ、約束は果たさねばならないからだ。

「うむ、うまい。さすがは、アーベルじゃ」

ポルトガ王は黒こしょうをまぶしたポテトフライをかじりながら、俺をねぎらってくれた。

「引き続き、監視のため乗船させていただきます」

「好きにするがよい」

俺は、頭を下げると港へむかっていた。

「長期戦になりそうですね」

「作戦を変える必要があるかも知れませんね」

「だが、相手は手強いと聞く」

「そうですね。しかも、俺達の裏をかく可能性があります」

「そうですね」

俺は、バルトロという名のポルトガの海軍司令官と話をしていた。

バルトロは40過ぎの物腰の丁寧な男で、渋めの声が大きく整った体格によく似合っていた。

バルトロは最初、俺の強引な艦隊出動に苦言を呈したが、ポルトガがロマリアからの艦隊派遣要請を受けた際に、俺が指揮権を速やかに返上したことで、信頼してくれたようだ。

俺は臨時ロマリア海軍司令官として、派遣されたことになっている。

ちなみに、ロマリア海軍は現在俺1人だ。

ポルトガから送られた船は、近衛兵総統直属の海洋研究所が管理していた。

友好国であるポルトガが、海賊等に対する海洋の安全を保証していた故、都市の再建や陸軍の増強を優先的にして海軍再建は後回しにすることができた。

だが、船の強奪によって裏目に出てしまった。

俺とバルトロは現在の状況を打破するため、作戦を練っていた。

俺が、考えているのは、5隻のうち1隻に俺が乗り3姉妹の追跡を行う。

残りの4隻が海峡での警備を続けて、俺が相手の船を発見した後に包囲する。

戦闘については、俺が空中に浮かんで、魔法の玉を投下して船を沈

没させる。

3姉妹がルーラやキメラの翼で脱出する可能性があるが、船を失うことにより彼女たちの行動は大きく制限されるはずだ。

攻撃の際に勇者だけが逃げ遅れる可能性がある。

勇者は助けられたら、救助するが、出来なければあきらめて、次の勇者候補に大魔王討伐をまかせることにする。

非情かもしれないが、タンタルがかつて3姉妹から受けたことを考えると、今の勇者が無事とはとても考えることができない。

それならば、いつそ……。

勇者の両親にも申し訳ないが、今の俺達には他に手段が思いつかない。

セレンやテルルは俺の決断にいろいろ言いたいことがあるようだったが、最終的には黙って頷いてくれた。

しかし、やりきれない思いは残っている。

「なんとか、無事でいてくれ」

俺は、そう願いながら、作戦の準備を整えていた。

「アーベルさん」

「タンタルさん。大丈夫ですか？」

俺はタンタルのステータスシートを確認してから、返事をする。

「少し船酔いをしています、大丈夫です」

俺が心配そうに話しかけたのを、タンタルはさえぎって明るく話しかける。

普段の様子を取り戻したようだ。

今後の戦力になるのは、ありがたいことだ。

「ソフィアさんから至急にと預かってきました」

タンタルは、一通の手紙を手渡した。

「ありがとう、タンタルさん」

俺は、封を開けて内容を読み始めた。

「……。失敗したか」

「大丈夫ですか」

セレンが心配そうに声をかける。

「揺れが激しい甲板で手紙を読んだので、船酔いをしました」

「そっちの話」

俺が、苦笑すると、みんなも苦笑した。

「続きは、船室で話しましょう。バルトロ司令官もお願いします」

「わかった」

バルトロはいつもの渋い声で返事をする、司令官室へ案内してくれた。

「申し訳ありません。作戦は失敗しました」

「どういふことです、アーベル司令官」

俺が、開口一番でみんなに謝罪すると、バルトロは理由を問いたがした。

「彼女たちは、ロマリアと同じ事をしました。アリアハンで」

「もう一隻船を奪ったと」

「そうです」

俺は、悔しさで拳を握りしめる。

「当然、盗難を予想して警備を厳重にしていました。しかし、俺に変装して堂々と船を乗っ取ったとの報告がありました」

俺は、手紙を皆に回した。

「ひどい！」

「悪辣だな」

「・・・」  
それぞれ、批難の言葉を口にする。

「済んだことは、取り返しがつきません。バルトロ司令官、お世話になりました」

俺はバルトロに頭を下げる。

「アーベル司令官。これから、どうするのかね」

「とりあえず、ロマリアから強奪した船を搜索します。残ってればですが」

「搜索なら、我が艦隊も手伝おう」

「よろしいのですか」

「ロマリアからの要請は、犯人の討伐又は捕獲に加えて、船の回収もある」

「ありがとうございます」

「なに、ポルトガ海軍の働きをロマリアにも見せつけないとね」

バルトロは、にこやかに微笑んだ。

俺は、バルトロに感謝の言葉を再度伝えながら、これからの事を考えていた。

3姉妹が外洋に出た以上、搜索はあきらめるしかない。

タンタルからの証言により、彼女たちは、不死鳥ラーミアの復活の為にオーブの入手の計画を企てていると推測している。

オーブは6つあり、入手の順番は自由なので、上手くいけば、どれかを入手して、復活を阻止することができるかもしれない。

だが、逆にすれ違いの可能性が高くなる。

そして、俺達がオーブを入手したとしても、相手が何をしてくるかわからない。

勇者を誘拐するくらいだ。

俺達の家族を脅すことなど、何ともおもわないだろう。

結局のところ、別の手段をとるしかない。

それにしても、と思う。

3姉妹は、純粹な戦闘力だけでなく、思考においても俺を凌駕している可能性が高い。

ここまで俺達の行動が読まれた以上は、格上の相手として戦うしかないと覚悟した。

初めての強敵に対してどう戦うか、俺が目的を果たすためには、常に頭を働かせる必要があることを痛感した。

### 第93話 そして、竜の女王の城へ・・・(1)

アリアハンで保有していた船を奪われた俺達は、ポルトガ艦隊の協力の下、3姉妹がロマリアで強奪した船を捜索したところ、ロマリア周辺海上でさまよう船を発見し、確保した。

船には特に損傷は無いことを確認したが、念のためポルトガ艦隊が曳航し、一度ポルトガで点検を行っているあいだに、俺達は一度アリアハンに戻り今後の事を考えることにした。

「船の点検が終わり次第、俺はこれからあるアイテムを入手しに行きます」

「どこに行くの?」

「ここです」

俺は、地図で位置を指し示す。

「山だな」

「山ですね」

「登山ですか?」

3人が指摘をする。

俺が指し示したのは、カザーブからだいぶ東に行ったところにある山である。

「登山が目的ではありませんが、似たようなものですね」

俺は、苦笑しながら話を続ける。

「高い崖があり、通常の人は登ることができません」

「トベルーラですか?」

タンタルは質問する。

「そうです」



俺は答える。

このパーティで飛行呪文トベルーラを使用できるのは俺だけだ。タンタルも俺から、トベルーラを教わったのだが、いまだに使いこなせない。

厳密に言うと、俺が使用するのは「トベルーラ改」である。

通常のトベルーラはMPの消費が激しいことから、燃費効率の向上を求めて改良したのだ。

通常のトベルーラは、術者の全身を魔力で纏い、魔力消費しながら随時移動を行う。

一方、移動呪文ルーラは「指定した場所へ飛ぶ」という呪文のため、MP消費は一度で済むのだ。

当初俺は、空間認識により、意識した先に飛ぶを繰り返すことで、MPの消費を抑えることを考えたが、失敗した。

空間認識に非常に時間がかかるため、最初に移動してから、次に移動するまでに時間がかかりそれまでに墜落してしまうからだ。

失敗をもとに、俺が考えたのは術者の全身を魔力で纏うやり方を見なおし、手足の先と背中だけに魔力を纏わせることと、移動時の方向制御を手足の操作を中心に行わせる事で、姿勢変更の時だけ、MP消費量が増えるように呪文を改良したのだ。

この改良は成功し、魔王バラモスを倒した時もほとんどMPを消費することはなかった。

だが、この呪文を使いこなすには、膨大な練習量が必要となる。

俺の場合は、王位についていた間、MPを消費する機会はほとんどないため、毎晩MPが空になるまで練習を行うことができた。

だが、毎日生活を行う為に冒険で体力やMPを消費する魔法使いは、俺と同じだけの訓練を積むことはできないし、効果が術者限定のた

め、使用機会が限られるのだ。

全員が俺だけがそこに行けることに納得したのだが、  
「そこに、何かあるの?」  
テルルはいぶかしげに、質問する。  
もつともな質問である。

登山をしたいだけであるのなら、アリアハンでも出来る。

「文献によると、そこは天界に一番近い場所と言われている」  
「てんかい?」

セレンが首をかしげる。

俺は、人差し指を上に向けて答える。

「天にある世界。竜の神様がいるとか、いないとか」

「どつちななの?」

「会ってみないことには、なんともいえません」

テルルの質問に適当に返事する。

ゲームの世界では、何度も会ったが、現段階では確信が持てない。

「まあ、そう言った場所ならば、ほこらとか神殿とかが、あるのではないかと思う。」

出来ればそこで、神様かそれに近い存在の力を借りたい」

「へえ、すごいですね」

「信じられない」

素直に感心するセレンと、疑う表情で俺を見つめるテルル。

「何が信じられないのかな?」

「アーベルが神様を信じていることよ」

「失礼な。ちゃんと信じていますよ」

少なくとも俺をこの世界に転生した存在がいるなら、間違いなく俺にとつては神様だ。

だからといって、お布施とか毎日の礼拝とかをするつもりは今のところ無い。

「アーベルの話はわかったわ」

テルルはため息をついて頷く。

「テルル、わかってくれたか」

「理路整然と話したり、突然突拍子もない話を持ってきたりするアーベルの考えが、絶対に理解できないということが、理解できたわみんなが苦笑する。」

俺も思わず苦笑する。

これまで、俺はパーティのリーダーとしてみんなの行動を決めていた。

いろいろ紆余曲折はあったにしても、みんなから支持されていた。

「母さん、どうでしょうか？」

「まだまだ、制御が甘いわね」

「もう少し、修行しますか」

俺は、眠い目をこすりながら、母親であるソフィアの感想を聞いていた。

夜中、アリアハンの外でソフィアと訓練をしていた。

俺が考案中の魔法を実験するためである。

呪文が呪文だけに、町中でするわけにもいかず、何も無い草原で行っていた。

「まあ、呪文自体は問題ないから、後は、練習ね」

「ありがとうございます、母さん」

俺はお礼をいった。

ソフィアは宮廷魔術師として、いろいろな研究を行っている。この実験もそのひとつではあるが、王から要請を受けた研究や、俺が依頼している研究についても日夜とりかかってくれている。

俺は一度大丈夫かと心配になって聞いたのだが、他の魔法使いがあなたに負けるものかと必死で研究をおこなっているから心配はいらないわと笑っていた。

俺達のパーティが大魔王や魔王を倒せば、俺がソフィアの後を継いで宮廷魔術師の座に就くことを恐れているのだろう。

他の魔法使いは俺が凱旋するまでに成果を上げようと、必死になって、王からの要請に応えているという。

魔法使い達には、無理して体を壊さないようにしてほしい。

「アーベル、遠慮はいらないわ」

「夜遅くまで付き合ってもらってすみません」

「真面目ね、アーベルは」

母ソフィアは、俺の頭をなでまわす。

「もう、そんな子どもじゃありません」

ソフィアは不機嫌な顔をする。

「アーベルはいくつになっても、私の息子です」

ソフィアは、俺の頭をくしゃくしゃにした。

「確かに、ここから北の方向に何かあるわね」

テルルは、船上から盗賊の特技である「鷹の目」を使って、目的の位置を確認した。

近くに何かがあれば、位置を知らせる特技であり、俺の推理が正しいことの裏付けにもなった。

俺は、満足してうなずく。

「ほんと、アーベルの推理力は異常だわ」

テルルはため息をつき、セレンやタンタルもうなずいてテルルの意見に賛同している。

「・・・」

誉め言葉と、受け取っていいのかな？」

「もう遅いかもしれないけど、他の人にはひけらかさないほうがいいでしょうね」

俺の言葉にテルルはあきらめ口調でぼやいた。

「・・・」

俺は、そんなつもりはないと答えようとしたが、ロマリアでの一件を考えれば素直にうなずくしかなかった。

「では、みなさん。ここでお別れです」

「気をつけてね」

「そちらこそ、気をつけて下さい」

俺は船を降りると、全員に手を振った。

ポルトガから出港して、数日。

世界をほぼ一周するような海路を経てようやく上陸地点に到着した。俺を下ろした船は、一足先にアリアハンへ戻ることになる。

「さて、女王様に会いにいきますか」

俺は、目の前にそびえる山を見ながらつぶやいた。

俺は、聖水を体に振りかけてから、トベルーラで山越えを行う。

周辺に飛行モンスターはいないとの情報だったが、念のため用心は欠かせない。

トベルーラ使用中は、別の呪文を使用できないことから、モンスターに襲撃されたら全速力で逃げるしかない。

いざとなれば、キメラの翼で帰還すればいいのだが、もう一度目的地を目指すためには、再びアリアハンから出発する必要がある。俺の帰りを待たずに船を帰した理由は、俺が帰る時はルーラ（もしくはキメラの翼）を使用するので、俺の方が先に帰還できるからだ。

一時間近く飛び続け、ようやく山の盆地に到着する。

一息つきながら、目の前にある城を眺めていた。

「これが、竜の女王の城か」

第93話　そして、竜の女王の城へ・・・(1) (後書き)

続きは、翌日11日正午に掲載します。

## 第94話 そして、竜の女王の城へ・・・(2)

非常に大きな城であった。

竜の女王がどれだけの大きさかわからないが、彼女が生活するためには通路や部屋は大きくする必要がある。

どうやってこの城を造ったのか少し興味を持ったが、目的を果たすべく、城の中に入る。

門をくぐり抜けると声をかけられた。

「ここは天界に一番近い竜の女王様のお城です」

「・・・ああ」

俺は、しばらく呆然としたが、何とか返事をする。

相手は、気にすることなく、入り口に佇む。

すっかり、忘れていた。

入り口で待ちかまえているのはしゃべる馬だったということ。

城内はほとんど人がいないため、落ち着いた様子であり、天井が非常に高いことや通路が広いことを反映して、荘厳な印象を与えられる。

いきなり、竜の女王と謁見するのとはばかられるため、俺は部屋で休んでいるホビットの了解をとりつけた。

突然侵入してきた俺に対して、「どうぞ、どうぞ」と平然と答えるホビットに対してここの警備は大丈夫か？と心配になったのだが。

「大丈夫です。悪意を持つ人は、このお城に入ることができませんから」

と教えてくれた。



そんな特殊な結界が作れるのであれば、後で教えて欲しいと思っただが、神様ぐらいしか作れないかもしれないと考えて、後回しにした。今回の目的を優先しなければならない。

女王の間に到着すると、中央の一段高い位置に、大きな竜が鎮座していた。

その竜は、背中にある羽を閉じ、目を閉じて、休んでいた。その竜から受ける感じは、威厳と優しさを兼ね備えたものだった。不思議と威圧感はなかった。

俺は竜が目覚ますのを待とうかとおもったが、竜の目がかすかに開いたことから、近づくと、竜に挨拶をする。

「私は、冒険者アーベルです」

竜は頭に直接届く言葉を発した。

これが念話とか呼ばれるものだろうか。

「私は竜の女王。神の使いです」

俺は膝をついて、大魔王ゾーマを倒すことを説明し、助力を願った。竜の女王を相手に言葉の駆け引きなど役に立たない。役に立つとするならば、真摯な心しかないだろう。

俺の話聞いた竜の女王は、わずかに首を上下に動かす。

「もしそなたに、魔王と戦う勇氣があるなら、ひかりの玉をさずけましょう」

竜の女王は、明るい光る玉をからだから取り出し、浮遊させながら俺の足下へ届けた。

「このひかりのたまで、ひとときもはやく平和がおとずれることを祈ります」

王女は急に体を震えさせた。

「もうすぐ生まれ出る私の赤ちゃんのためにも・・・」

「大丈夫ですか」

「・・・」

俺の叫びにも反応することはなかった。

女王の間は、静寂に包まれていた。

女王は死んだのだろうか。

俺は冷や汗を流す。

竜の女王はまだ、卵を産んでいない。

大きく歴史を変えてしまったこと、そして、竜の女王を殺したと疑われることを考えると、体が震えてしまう。

落ち着いて報告しよう。

わかってくれるはずだ。

そう思ったとき、背後から扉が開かれた。

入ってきた女性は、俺と同じくらいの背丈でかなり細い体つきをしていた。

普通の人間と思ったのだが、どことなく違和感を覚えた。

先ほどの竜の女王ではないが、わずかに神々しさを感じることができ。

女性は、竜の女王と俺を交互に見やると、俺に声をかけた。

「お客様。女王は眠りについております。また、女王はご病気の身です。おひきとり願います」

俺は、女性の抑制の無い声に驚いたが、女王が死んでいないことに安心して返事をする。

「かしこまりました」

俺は少々おおげさな身振りをすると、退室した。

女王の間を退室した俺は、目的の光の玉を眺めていた。

玉からは優しい光を発していた。

だが、熱はない。

一瞬LED電球の事が頭をよぎったが、光の玉の役割を思い浮かべて頭を横にふる。

光の玉に失礼な発想だ。

倒すべき相手、大魔王ゾーマは闇の衣を纏っている。

闇の衣を纏ったゾーマの力はすさまじく、魔法に対する耐性や自動回復の能力を備えている。

ゲームで遊んでいたときですら、闇の衣をまとったゾーマを倒したことがないほどだ。

その闇の衣を引きはがすアイテムがこの光の玉である。

闇の衣をはぎ取った大魔王ゾーマはそれでも強力であるが、俺達がキチンと経験を積み、戦術を間違わなければ、倒せない相手ではない。

勇者を誘拐したパーティが、魔王バラモスを倒す直前までに、俺達は訓練を積むことを考えて、城を出ようとした。

「みんながアリアハンに戻るまで時間はあるか」

一足先に船はアリアハンへ向けて出発したが、到着まで二日はかかるだろう。

3人での船旅だが心配はしていない。

聖水を大量に購入していることから、大型のイカのモンスター以外は恐れて近づくことはないからだ。

テナクルスと呼ばれるイカのモンスターは、確かに強力ではあるが、出現率が低いことと、俺達の防御力が高いことと、テルルが使う即死呪文「ザラキ」にめっばう弱いので十分対応が可能である。

もう少し、城内を歩き回ることにした。

「綺麗ですね」

俺は、近くの女性に声をかける。

声をかけられた女性は、俺の方をしばらく無言で眺めると、

「きゅ、急に何をいうのですか」

と、顔を赤くして騒ぎ出した。

俺は、何か変なことを言ったのか訝しみながら、声をかけた女性を眺める。

少し前に、竜の女王の間で声をかけられた女性と同じように、人間とは少し異なる雰囲気を感じていた。

俺はまだ出会ったことはないが、天女と人間との間の存在のようなイメージを持った。

それよりも、この女性に弁明をしなければならぬ事を思い出し、話を続ける。

「綺麗なものを綺麗だと言うことをためらう必要がどこにあるのかな」

俺は相手を刺激しないように、努めて優しく話しかける。

怒っている相手に、こちらも感情を高めたらまとまる話もまとまらない。

俺がかつて、市役所窓口で対応したときに教わったことだ。

だが、この世界では逆効果だったようだ。

「よ、よくもまあ大胆と」

女性はこれ以上に無いほど顔を赤くして反応する。

「そうですか、失礼しました」

俺は頭を下げると話を続ける。

「あなたは毎日眺めているから、そう思うかも知れませんか。でも、美しいことには間違いありません」

「……。ありがとう」

女性は赤くなつた顔を少しうつむけたが、視線は俺を離さない。

俺は女性が少し落ち着いた事を確認し、話を続ける。

「こちらこそ、このようなすばらしい光景を毎日眺めることができ  
るあなたがうらやましいです」

俺は、目の前にあるステンドグラスを指し示す。

「ステンドグラスの美しさもですが、日差しを受けて、廊下に移し  
た光も幻想的です。言い伝えではここから天界への道が開けるとの  
ことですが、私も素直に信じるのが……」

話しながら、女性の表情に急激な変化を感じて思わず止めてしまっ  
た。

「そうですね、ステンドグラスのことですか……」

女性は、肩を震わせながら、絞り出すように声を出した。

「だ、大丈夫ですか」

俺は女性の様子が急変したことから、心配そうに声をかけた。

「大丈夫です！というかあなたのせいです！」

前後矛盾する女性の言葉を受けて、俺はなんと返事をしたらこ困惑  
し、

「す、すいません」

と、とりあえず謝る。

女性は少し落ち着きを取り戻したようなので、話をつづけた。

「あまり、あなたのようなすてきな女性と話をしたことがないので、  
もし失礼なことを言ったのなら謝ります」

「な、ならいいのよ」

女性の顔はまだ赤いようだったが、口調は小さくなったので、怒り  
は収まったと感じて、俺は帰ろうとする。

「失礼します」

「あの、また来てくれますか」

女性は帰ろうとする俺に声をかける。

「そうですね。大魔王を倒したら、もう一度ここに来たいと考えています」

「あなたの話のとおり、もしまことの勇者の称号を得た者がいたなら、その光のなかで天界に導かれるそうです」

「あなたなら、大魔王を倒し、称号を得ることができるとも思いません。お待ちしております。気をつけて」

さきほどまで怒っていた女性は、最初のときのように落ち着いた様子で見送ってくれた。

そう、俺はもう一度ここに訪れる必要があった。

大魔王ゾーマを倒したら、ここから、天界への道が開かれる。

その最奥に神竜と呼ばれる存在がいる。

神竜ならば、俺がなぜこの世界にいるのか知っているはずだ。

俺がこれからどう生きればいいのか、考えるまえにぜひとも確認したい。

俺は城を出るとすぐに、ルーラを使用した。

第95話 そして、報告へ・・・(1)

俺が、アリアハンに戻ってから数日は、ジंकへの要請や母ソフィアとの研究の手伝い、キセノン商会への対応、そして夜の魔法訓練など忙しい毎日を過ごしてテルル達の帰りを待っていた。

「夜の魔法ってなんですか！」

テルルは俺の首をつかんできた。

「説明してください」

セレンはやさしく俺に説明を求めた。

セレンの目を見たら、笑ってはいなかった。

タンタルを眺めると、あきらめてくれという表情で首を振る。

「・・・く、苦しい。離してくれ」

「話して欲しいのはこちらです」

「い、息が・・・」

俺の顔が青くなったことに気付いたテルルは、手を離れた。

「ま、魔法訓練を夜に行っただけだ」

息も絶え絶えに説明する俺。

だが、テルルとセレンはさらに詳しい説明を俺に求めた。

「ここではまずいので、俺の部屋に来てくれ」

俺達は、アリアハンにあるリーダーの酒場の2階で飲んでいた。

いつも、俺の部屋でこそ密談するのも怪しまれるので、普通の話はこちらでおこなっている。

了解してもらえんと思って、席を立とうとする俺だが、セレンとテルルが俺の肩を交互に押さえて座らせる。

「部屋で実演するつもりですか！」

テルルがにらみつける。

「はい？」

俺は理解できず、思わず変な声をだす。

「今から、夜の魔法を私たちに試すつもりなの」

セレンは冷たい口調で聞いたです。

「いや、自分にかかる呪文なのだし、いや、後でみんなに実験の手伝いはしてもらうけど」

「お断りします。3人で試すなんて」

「嫌です」

俺の説明に一向に理解をしてくれないセレンとテルル。

しかも、詳しく説明をしていないのに拒否されてしまった。

「それに、屋外で使用する呪文なのだが」

どうも、2人は何か誤解しているようだ。

屋外で使用する呪文と言えば理解してもらえるだろうか。

「室内では飽きたらず、屋外ですか」

「はずかしい」

テルルとセレンが顔を赤くして俺を睨む。

俺は説得をあきらめた。

「わかったよ、ドラゴラムの応用使用については、別の人に手伝ってもらいます」

実験は、母ソフィアから口の堅い助手を3人選んでもらう必要があるなど、計画の変更を考える。

そうになると、俺が依頼した研究に遅れが出るかも知れない。などと考えていると、

「ドラゴラム？」

「竜に変身する呪文ですか」

テルルとセレンは俺に聞いたです。

「ああそうだよ」



俺はいつでも言い様子で返事する。

「どうして夜の呪文なの？」

「……。その言葉の使い方への突っ込みはおいとくが、昼間にドラゴンが町の周辺に出現したら、住民はどう思う？」

「……。パニックになるわね」

テルルは答える。

セレンもタンタルもうなずく。

俺は、小さな声で説明する。

「俺はこの呪文を応用して、ゾーマの城に乗り込むつもりだ」

「そうなの」

「なんだ」

セレンとテルルは安心していた。

誤解が解けたので、ようやく本題にはいる。

「これからしばらく、訓練を行います」

「訓練ですか」

「もう少しレベルを上げて、確実にゾーマを倒したいですから」

「わかりました」

タンタルはうなずいた。

「ところで、訓練の期間はいつまでなの」

テルルは質問した。

「それは、ジंकとキセノン商会に偵察を要請している。偵察の報告によって判断するつもりだ」

「偵察？」

タンタルは聞き返す。

「そうだ。ジंकを通じて、ロマリアにノアニールの村の北で北方

への警戒を頼んでいる」

「どういうこと?」

テルルは俺の意図を聞いた。だす。

「みなさんは、バラモス城が山に囲まれて侵入できないことはご存じですよね」

俺は、急に説明口調で解説を始める。

「ええ」

セレンがうなづく。

「それを乗り越える手段はいくつかありますが、ポルトガの南にある灯台守から聞いた話では、つぎの方法が考えられます」

俺は、ポルトガの南で行った海上封鎖作戦中に入手した情報を披露する。

「この世界に存在する6つのオーブを集めると、船がいらなくなる」と

「しかし、その人は自分の存在を否定するような発言をしていますが?」

テルルは苦笑しながら話しかける。

「その判断は難しいところだね」

俺も思わず苦笑した。

灯台守は長い間その勤めを果たしていた。

いいかげん、疲れたのかも知れない。

それとも、別の考えがあるのかもしれない。

だが、灯台守の顔からは何も読み取ることはできなかつた。

「噂では、不死鳥と呼ばれる大きな鳥が復活して、その鳥に乗ることとでバラモス城に乗り込むことができると考えています」

「ということは、見張っているさきには」

テルルが、俺の話を受け取った。

「そのとおり」

ノアニールの村の北には、レイラムランドが存在しそこには、不死鳥ラーミアが復活の静かに待っている。

「船と同様にその鳥も姿を隠すことができないのであれば、ノアニールの北から確認出来ると」

タンタルが俺の説明を補足してくれた。

「俺はすくなくとも、そう考えている」

「キセノン商会は？」

テルルは、自分の父親が経営する会社の役割を質問する。

「キセノン商会だけではない。テルルの力も必要だ」

「わ、私の力？」

テルルは思わず大きな目をして驚いた。

「そうとも」

「それは？」

「おおごえだ」

「そんなに私の声大きいの？」

テルルは大声でさげんでから、思わず口を自分の手でふさぐ。

俺は笑いそうになったが、テルルがそしてセレンも睨むので、コホントわざとらしいせきをして、詳細な説明をする。

「テルルが商人の時に覚えた特技さ」

「ああ」

「あれですか」

商人の特技である「おおごえ」を使うと、キセノン商会に所属するあらかじめ指名した商人を呼び寄せる技である。

「そう、キセノン商会を通じて報告してもらおう」

「わかったわ」

セレンとテルルは納得した。

第95話　そして、報告へ・・・(1) (後書き)

今回は18日(日)正午に掲載予定です。

本編とは関係有りませんが、短編「転生トラック　鉄と魔術の大地オフライン」を作ってみました。  
お暇でしたらお読み下さい。

「真夜の奇妙な転生」ですか？

ブラックファントムゼロ先生の名作「零夜の奇妙な転生」をお読み頂いて、その内容に賛同頂ける真の勇者のみ、ご覧下さい。

## 第96話 そして、報告へ・・・(2)

「今日の状況を教えて欲しい」

「かしこまりました」

キセノン商会からの使いが、毎日状況を報告する。

ここは、イシスの南にあるテドンの村である。

イシスの南と言っても、直接歩いていけるわけではない。

イシスの南にある山脈の南にバラモス城が存在し、さらに山を越えたところにこの村が存在するのだ。

通常であれば、ポルトガから船で南下するか、アリアハンやランシールから西に進むことになる。

ここの周辺のモンスターで俺達は経験値を稼いでいた。

その理由は、MPを消費することなく、経験値を稼ぐことができることと、モンスターが力の種を落とすことが理由である。

最も、アイテムを落としたりテルルルが盗んだりできる可能性は非常に少なく。

今日も2つしか入手出来なかった。

レベルの方は順調に上昇しているので、問題はなかったが。

テドンの村は、既に魔王の襲撃を受けたとおもわれる爪痕があちこちに残っている。

モンスターの襲撃を防ぐ結界は残っているので、魔王クラスのモンスターが一時的に結界を破って村を崩壊させたのだと推測している。

しかし、この村の住民たちは、モンスターの襲撃をものともせず(？)、夜だけならば村人としての生活を復活している。

話は知っていた俺も、最初の頃はこわごわしていた。

俺も死んだらこうなるのだろうか。

いや、逆に闇の力で生かされているのだろうか。  
もし、大魔王ゾーマを倒したら彼らも失われてしまうのか。

いろいろ考えているうちに眠くなり、他の3人の騒ぎで目をさましたのだが、数日するとみんな慣れてしまった。  
慣れは恐ろしい。

ちなみに、この村の牢屋で囚われている囚人もオーブを持っているが、既に3姉妹（勇者）に手渡された後だった。

「ハリスからの報告はとうですか」

「問題はないと報告を受けています」

俺は、かつて鳥の飼育舎の管理人であるハリスにも協力をしてもらっている。

ポルトガの西にある大陸の開拓村の監視業務だ。

ハリスも商人としてのレベルが高いことから、特技の「おおごえ」でキセノン商会の商人を呼び寄せることができる。  
毎日昼に商人を呼び寄せて、経過を報告し、その内容を俺の報告を任せられている商人に報告して、夜に俺達に報告する。

「そうか、開拓村の状況はどうですか」

「順調です。問題ありません」

「そうか。・・・なんだと」

「ええ、順調に町に発展しています」

俺は驚愕した。

どうして、村が発展している。

俺とキセノンは、ハリスに開発村の様子を見るように依頼していた

が、同時に村を発展させ町に成長させるようなことには関わらないよう釘をさしていた。

ハリスの性格は穏和なところがあるが、町の指導者としては未知数だ。

原作どおり、革命がおきれば、3姉妹がオーブを入手する可能性がある。

「ハリスは関与しているのか」

「いえ、彼は宿屋にとまるだけです」

「そうか」

となれば、3姉妹が町の発展に関与したことになる。

あとは、革命の時期を見極めて、3姉妹がオーブを入手する時点でアレフガルドに向かうべきだろう。

念のため、気になったことを問いただす。

「その町の名前は？」

発展した町の名前は発展に寄与した商人の名前が付けられる。

3姉妹が連れてきたのであれば、転職者であふれるダーマか、商人の多いアッサラムから身柄を確保したことになるのだろう。

かわいそうな被害者の名前を確認することにした。

「エレンズバークです」

「エレンズバークということは、エレンズか」

どこかで聞いたことのある名前だ。

たしか、・・・

「エレンズ先輩？」

かつて、養成所で一緒に訓練した商人の女性のことを思い出す。

俺達より2歳年上で、一年間冒険に出た後、キセノン商会の経営部門で働いていたはずだ。

「経営部門にいたエレンズさんは、この話に関与していますか？」  
俺は商人に確認する。

「いいえ」

商人は否定した。

しかし、安心した俺の予想を超える新たな答えが返ってきた。

「彼女は先日、キセノン商会を退職しました」

「なんだと、・・・」

俺は確認のため、キセノン宛の手紙をしたため、たたき起こしてでもすぐに手紙を読ませてくれるように依頼した。

おそらくは予想どおりなのだろう。

訓練は今日で終了し、一度アリアハンに帰ることをみんなに告げるため席を立った。

俺の手紙を受け取った商人はキメラの翼でアリアハンへ向かっていった。

「おつかれさん」

俺は、キセノン商会の応接室に座ると、キセノンから話しかけられる。

「こちらこそ、ありがとうございました」

「アーベルも忙しいことだから、話を進めよう」

俺は喜んでうなずいた。

俺は、船をテルル達に任せると、一足早くルーラでロマリアに移動してジंकクに対して警備のお礼と、経過報告をしていた。

その足で、ジパングにも移動して情報入手していた。

疲れた状態でアリアハンに戻り、そのまま、キセノン商会で話をしているが、終わった後すぐに、アリアハンとポルトガの王にも経過



の報告をする必要がある。  
奪われた船の奪還は、当分不可能であることを説明しなければなら  
ない。

そして、テルル達が戻り次第、アレフガルドに向かう必要がある。

「まさか、エレンズが辞めた原因に君が関係していたとはね」

「申し訳ない」

俺は素直に謝った。

「まあ、こちらの情報管理が甘かったのが原因ではあるのだがね」  
キセノンは苦笑した。

概要については、既にキセノン商会の使いからもらった手紙で知っ  
ている。

だが、詳細については、直接話をするしかない。

「結論から言えば、エレンズにはハリス以上に才気と野心があった  
と」

「そうゆうことだ」

キセノンが調べた情報をまとめると次のようになる。

エレンズは、キセノン商会で働き出すと、みるみる頭角を示し、冒  
険者として世界を回っていた経験も買われ、経営部門の海外新規開  
拓担当を任せられた。

彼女はポルトガでの営業所で情報を集めているなかで、西の大陸に  
ある開拓村の状況を知った。

自分の才能と、当時付き合っていた同じキセノン商会で働くハリス  
の力を合わせれば、この村を拡張することができるかと確信していた。  
エレンズはそのことをハリスに話したのだが、ハリスはもうしばら  
くキセノン商会で働くと断った。

エレンズはハリスが断った理由の一つに、テルルと結婚してキセノン商会を自分が引き継ぐことを理解し、開拓村での計画は中止にした。

エレンズはハリスがテルルと結婚し、ハリスがキセノン商会の経営を担った場合のことを考えていた。

エレンズはテルルよりも自分の方が先輩であり、キセノン商会には自分の存在が必要であると自信を持っていた。

ハリスからの助言をテルルは無視できないと。

それならば、成功まで何年もかかり、しかも他の業務を行うことが出来ないような、開拓村への事業の参画は見合わせるほうがいいだろうと。

一方で、エレンズは商人でもない俺のことを危険視していた。

俺が、テルルと結婚し、キセノン商会を受け継ぐことがあれば、自分がキセノン商会に与える影響力は限られると考えていた。

俺は、キセノン商会に入り浸っていたとはいえ、商人の仕事をしたことがない。

もしも、俺が商会の代表にでもなれば、テルルやハリス、エレンズのような優秀な商人に多くを任せられると考えていた。

しかし、エレンズは、俺のことを買いかぶりすぎていたようで、子どものころに商人に必要な知識を得たので、冒険者としてより実践的な魔法使いに就いたと勘違いしていた。

そして、彼女の勘違いは、俺がロマリア王としての治世を終わらせたことで、確信に変わっていた。

俺が順調に統治していた王位を捨ててまで望むもの、それは平和になつてから、さらなる勢力の拡大が見込まれるキセノン商会を手中に収めることだと、勘違いしたのだ。

キセノンと俺との話をハリスから聞いたエレンズは、キセノン商会での自分の将来は望めないとおきらめた。

エレンズはキセノン商会を辞めて、1人で開発村に行き、村の指導者として開発を進めていった。

エレンズは、ポルトガで培ったコネを生かして、順調に開発を進める。

そして、船による輸送の提供を申し出たのが3姉妹だった。船があれば、移民の受け入れや、通商などが出来る。

エレンズにとっては、すばらしい提案であった。

当然、エレンズも勇者の誘拐が3姉妹によるものとの情報を受けていたが、俺やテルルの邪魔ができると思っただけだ。

エレンズは、そのことについては一言も口にしていないが。

「そして、3姉妹が提供した船に対する対価がオーブだと」

「そうですね」

エレンズは今、エレンズバークの牢屋に囚われている。

エレンズの商人時代は、強引なところは少しもなかった。

強気ではあったが、キチンと周囲の話を聞いたり説得したりして、物事を進めていた。

しかし、開発村での情報をハリスから聞くと性格が変わったかのように強引に物事を押し進めた。

エレンズは俺やキセノン親子、ハリスに対する対抗心を持ったのだらう。

成長を急ぐあまり、道を踏み外してしまったのだ。

ハリスからの情報では既にオーブは3姉妹の手に落ちたと報告を受けている。

そして、俺はジパングで、オーブを持っていた、ヒミコに化けてい

たモンスターが倒されたという情報を入手している。  
おそらく全てのオーブが集まったのだろう。

もう、俺にはわずかな時間しか残されていない。

第96話　そして、報告へ・・・(2) (後書き)

次回掲載は23日(金)正午の予定です。

久しぶりに外伝を20日0時に新規掲載します。

## 第97話 そして、最終確認へ・・・

「種の分配は済んだ。

光の玉はテルルに、魔法の玉はタンタルに、まどうしの杖はセレンに、

テルルの盾をドラゴンシールドに変更と」

明日の襲撃に備えて、ラダドームの宿屋で最終確認をしていた。

ステータスを成長させる種については、次のとおり分配している。

力の種は全て武闘家のタンタルに渡して、タンタルの力はほぼ上限に近い状態である。

物理攻撃を与えるのはタンタルが中心となる。

素早さの種は、俺とセレンが使用した。

テルルの素早さは上限に達しており、最大HPの低い俺とセレンの防御力を高める事を目的にしている。

種の力のおかげで、俺の素早さも上限に達している。

スタミナの種は、俺が既に食べている。

スタミナの種で上昇する体力は、最大HPの上昇に関係するのだが、レベルアップして初めてHP上昇の恩恵を受けることができるため、訓練の途中で全て食べた。

そして、最大HPを上昇させる命の木の実は先ほど俺が食べ終わっていた。

「それでも、セレンよりも低いんだけど」

ステータスシートを眺めながら俺はぼやいてしまった。

「文句言わないの」  
テルルは不満そうにいった。

まあ、テルルの不満ももつともである。

今回の種の分配で、テルルは一つも食べて無いのだ。

「ラックの種ならあるけど」

「いりません」

テルルはすねてしまった。

次に装備品の確認だ。

ゾーマが身に纏う闇の衣を引きはがすのに必要な光の玉は、最大HPと素早さの高い、テルルは持つ事になった。

そして、量産した魔法の玉はタンタルが持つことになった。

ゾーマ戦には、直接使用しないが、事前の準備に必要と考えている。そして、まどうしの杖をセレンに渡した。

今回、魔法の玉を爆発させる役目をセレンにしてもらった。

セレンはまどうしの杖は装備できないが、アイテムとして使用すること、メラを使うことが出来るようになった。

そして、装備の変更である。

テルルが使用可能な盾でもっとも防御力が高いのは、みかがみの盾である。

しかし、大魔王ゾーマの攻撃で最も恐ろしいのは吹雪攻撃であり、その威力を軽減するためみかがみの盾より少し防御力は落ちるが、吹雪攻撃に耐性のあるドラゴンシールドを用意した。

「タンタルも装備できたらいいのだが」

武闘家のタンタルは、対吹雪性能を持つ防具を身につけることが出来ない。

俺とセレンは、ドラゴンローブを身に纏っており、高い防御力だけでなく、吹雪攻撃の耐性も兼ね備えている。

「根性で耐えますよ」

タンタルは笑って答えた。

タンタルのHPは400に近いので、集中しなければ問題ないはずだ。

とはいえ、ゾーマとの戦闘時には、僧侶セレンに冷熱防御呪文「フバーハ」を唱えてもらうつもりだ。

「そして今回のとっておきは、これ」

俺は、青い正8面体の石を取り出した。

青い石は神秘的な光をはなっている。

「これは、なんですか？」

「俺とソフィアが共同開発した、賢者の石の・・・」

「賢者の石！」

話の途中で、テルルが思わず声を上げる。

賢者の石とは、戦闘中に使用すると、全体回復魔法「ベホマラー」の効果を持つ石のことである。

製法については現在残されておらず、とてつもない貴重な品であった。

「話は終わっていない。これは「賢者の石のようなもの」だ」

「賢者の石のようなもの？」

セレンが首をかしげる。

「残念ながら、この「賢者の石のようなもの」は、完成品ではない」  
俺は、残念そうに話す。



賢者の石の効果を再現するために、道具として使うと回復呪文「ベホイミ」の効果がある賢者の杖を解析し、改良を重ねた。

「その結果、この石を作ることができ、ベホマラーも使用出来るようになったのだが、」

「なったのだが？」

タンタルが言葉を重ねる。

「使用回数に制限がある」

「どのくらいですか？」

セレンがたずねる。

「おそらく、約30回分。ゾーマ戦でなんとか使い切る計算だ」

俺は、自信を持って答えた。

そして俺は、ゾーマ戦での戦闘戦術について説明し、翌朝の作戦決行となった。

いよいよ、明日大魔王ゾーマを打ち倒す。

俺はベッドの上で考えていた。

「何か、忘れていないか？」

心の中になにか引つかかるものがある。

だが、それが何かわからない。

「勇者オルテガは問題ない」

自分の不安を打ち消すためつぶやいた。

勇者オルテガは現在、ケガの回復のためリハビリを続けている。

だから、ゾーマの居城で何をやっても問題ない。

やがて俺は眠りについた。

翌朝、ラダドームの南ある浜辺に、俺達はいた。目の前にある海の先に、目指すべき城があった。ゾーマの居城である。

ゾーマの城は小島の上に存在している。

ゲームでの勇者は、イベントをこなして橋を造った。

俺達は、別の方法で島へ渡るつもりだ。

当然勇者オルテガのように、泳いで渡るといふ選択肢はとらない。水着もないし。

ラダドームの住民は、毎日あの城を眺めては、不安と恐怖の日々を過ごす。

そして、その心がもたらす闇の力でゾーマは自らの力の糧としているのだ。

だが、それも今日で終わらせる。

俺達の力で。

俺は、後ろを振り返り、仲間をひとりひとり眺める。

全身を鍛え抜いた筋肉で固めた男。

しかし、その筋肉は飾りではなく、軽やかな動きで敵の急所をねらい打ちすることができるために存在する。

そして、力だけでなく精神の強さは、優しい顔の奥に秘める二つの黒い瞳が物語っている。

その隣には、闇夜に溶けるための黒衣を身に纏った少女。

俺の願いに答える形で、商人から盗賊へ職業を変え、素早い動きを  
阻害するからと、美しい長髪をためらうことなく犠牲にした。  
力、素早さ、体力ともに、高いレベルで維持しているのは、日頃の  
努力のたまものだ。

獲物をねらう眼光は大魔王相手でも、臆することなく輝いている。

最後に、竜の魂が込められた衣をまといし、青い髪の乙女。  
苦難の旅を、愚痴一つこぼさず、ついてきてくれた。

やさしい言葉で、どれだけ仲間達の傷を癒してくれただろうか。

回復のスペシャリストとして、これまで、死者を出さなかったのは、  
彼女の冷静な判断力だった。

決して、俺ひとりではここまで来ることではできなかった。

そして、全てが終わったら3人に、本当のことを話そう。

たとえ、何を言われても構わない。

それが、みんなをここまでつれてきた俺の責任であるから。

だが、まだ終わってはいない。

そう、魔王ゾーマを倒してからが、終わりの始まりなのだ。

「何か、忘れてないか」

頭の中から声が聞こえる。

大丈夫だ。

俺達なら大魔王ゾーマを倒すことが出来る。

「問題ない、始めよう」

俺は頷いて、大魔王ゾーマ討伐作戦を開始した。



第97話 そして、最終確認へ・・・（後書き）

次回は24日（土）正午に更新の予定です。

24日に斑鳩茂市先生のオリジナル長編「箱庭で異彩を放つ花  
ーズ・レクチャー伝」の掲載を開始します。

午前3時までには冒頭3話を掲載しますが、本当にその日に予定がな  
く、暇な人だけお読みいただけたらと思います。

## 第98話 そして、襲撃へ・・・

高レベルの魔法使いが覚える呪文「ドラゴラム」

この呪文はドラゴンに変身し、口から放出する炎でモンスターを焼き払う事ができる。

この炎の威力は絶大であり、ほとんどの攻撃を無力化するモンスター「はぐれメタル」ですら、一瞬で消し去る事が出来る。

ゲームで遊んでいたときは、莫大な経験値を持つはぐれメタル狩りの時には非常に役に立った。

だが、今回俺が使用した「ドラゴラム」は、竜に変身して、人や物を空輸する事を目的に編み出した呪文である。

俺はドラゴラムで変身すると、深紅のドラゴンに姿を変える。

テルル達は、変身した俺を確認すると、素早く背中に乗り込んでゆく。

3人がキチンと乗れるよう、大きさにもこだわっている。

確認すると、素早く上空へと羽ばたいた。

一応朝なのだが、アレフガルドは闇に覆われたままだ。

大魔王を倒し、この世界の光を取り戻す。

「まもなく、到着か」

俺は、ゾーマの居城の目前に迫っていた。

途中、ゾーマの城から、キメラの集団がこちらに向かって出撃して

きたが、タンタルが魔法の玉を投げ落として、セレンがまどうしの杖で爆発させると、キメラを一蹴していた。

俺の体はドラゴンだが、現在、口から炎をはき出すことができない。輸送しながら、炎をはき出すことができるドラゴンに変身する呪文もあるのだが、MPの消費効率が悪いため、今回は使用を見送っている。

俺達のパーティでは、俺以外、空中戦の戦闘技能は持っていない。というよりも、この世界の人間で空中での戦闘技能を持っているのは俺ぐらいだろう。

だが、今回は竜に変身しているため、今の状態では空中から襲いかかるモンスターに対応できない。

代わりとして、今回は魔法の玉も大量に調達しているので、この力で戦力を補うことに決めていた。

というか、対ゾーマ戦では魔法の玉を使用するつもりが無いので、この襲撃で使い切ってもかまわない。

「さあ、襲撃の始まりだ」

俺にとつての終わりの始まり。

大魔王ゾーマ討伐作戦が、次の段階に移行した。

憎悪と畏怖の象徴であるゾーマ城。

アレフガルドの王都ラダドームの目と鼻の先にあるにもかかわらず、海に囲まれていることと、凶悪なモンスターに守られており、これまで誰も寄せ付けることはなかった。

この世界の住民の絶望を食い尽くしている存在であるこの城は、今誰も想像していなかった状況にあった。

巨大な城は、あちこちで火災に包まれ、塔は崩れ去り、あるいは、折れ曲がっていた。

中央にある玉座も上空から直接視認することができ、玉座も燃え上がっていた。

「バリアは魔法の玉の攻撃を阻害するようね」

テルルが感想を述べた。

「そうか、今後の研究に取り入れる必要があるな」

俺は、人間の姿に戻り、燃え広がる城の入り口で、魔法の玉の効果を確認しながら、大魔王の登場を待ちかまえていた。

魔法の玉は、まだいくつか残っている。

大魔王ゾーマは吹雪で魔法の玉の爆発を抑える可能性があるため、切り札には使用できないが、目くらましや戦闘補助には使用出来るだろう。

今回の計画のきっかけは、素朴な疑問が出発点であった。

「大魔王ゾーマは、あれだけ強大な力を持ちながら、なぜ人間を滅ぼすことができなかったのか？」

ゲームで遊んでいたときは、制作者の都合で済ませばよかったのだが、実際にこの世界で生活する上で、解明しなければならぬ切実な問題でもあった。

だがこの疑問を解決するには、大魔王ゾーマに直接尋ねるしかないのだが、できるはずもない。

ゲームで遊んでいたときの記憶を思い起こすと、疑問の解決への鍵になると考えた。



ゲームで最初に大魔王ゾーマが登場するのは、魔王バラモスを倒して、アリアハンに戻って戦勝祝いを行う時であった。そのときに、勇者を倒さず、周辺の兵士のみを殺している。勇者を倒さなかった理由がわからない。世界を滅ぼすのであれば、魔王バラモスを倒すほどの存在を無視していいはずはない。

そして、去り際に残した、「やがてこの世界を闇で埋め尽くす」も、実行に移していない。本気で実行に移すのであれば、直接上の世界に出現するか、失敗したバラモスの代わりに別のモンスターを魔王に付けて襲撃を始める必要がある。なのに、そんなことをしていない。なぜか。

大魔王ゾーマは俺達人間の苦しみが、自分にとっての喜びだと、ゲームの中では話していた。この言葉は、大魔王ゾーマの嗜虐性を表すものだが、俺は疑問におもっていた。

「世界を滅ぼすことが優先ではないのかね？」と。

そこで俺は一つの仮説を思いついた。大魔王ゾーマの力の源は闇の力。闇の力は、人間の絶望を糧にするのではないのかと。

人間の絶望を闇の力とするのであれば、人間を全て滅ぼす訳にはいかない。

逆に力を集めるには、ある程度人間を増やした方が良いのだと。そう考えると、ゾーマの城がラダドームのすぐ近くに存在する理由も頷ける。

大勢の人間から、すぐに力を吸い取ることができから。

俺は、仮説を元に今回の作戦を組み立てた。

絶望の象徴であるゾーマ城が崩壊した姿を見たらラダドームの住民はどう思うだろうか。

住民達は希望を持ち、闇の力が減少するはずである。

大魔王ゾーマがそれを喜ばないとすれば、どうするか。

ゾーマの城を破壊できる希望の象徴である俺達を、そのままにするはずはない。

俺は、崩れ落ちる城内に向かって大声で叫ぶ。

「俺がアーベルだ。出てこい、大魔王ゾーマよ。相手になってやる」俺は既に魔王を倒した実績がある。

大魔王を相手にする資格は十分あると考えている。

後は相手が、その気になるかどうかだ。

しばらくして、黒い衣に覆われた巨大なモンスターが、俺達の前に登場する。

「おまえが、アーベルか？」

**第98話　そして、襲撃へ・・・（後書き）**

次回の更新は29日の予定です。

## 第99話 そして、討伐へ・・・

俺の目の前に大魔王ゾーマがあらわれた。

父親であるロイズがアリアハンの近衛兵に就任した日から、ゾーマの討伐を決意していた。

途中、一年間ロマリア王として仕事に励んだり、一緒に冒険する予定の勇者が連れ去られたり、いくつか予定と違う点が存在するが、目の前のゾーマを倒す準備は整えている。

俺は、周囲の仲間視線で確認を行う。

セレン、テルル、タンタルは同時に頷いた。

予定どおりの戦闘を行えば、負ける事はない。

大魔王ゾーマは俺に対して、哀れむかのように話しかけた。

「アーベルよなぜもがき苦しむ」

しかし、ゾーマの目は残忍さを隠そうともしない。

「ほろびこそわが喜び」

ゾーマの顔は哄笑に変化した。

「死に行く物こそ美しい」

そして、残忍な表情を見せると、両手を広げると俺達に襲いかかってきた。

「さあわが腕の中で息絶えるがよい!!」

「今だ!!」

俺の声に答えるように、テルルは手にしていた玉を使用する。

大魔王ゾーマと対峙したときに、最初にすると決めていたことだ。

テルル以外のメンバーは、テルルを守るように防御している。

テルルは光の玉を天にかざした。  
あたりにまばゆいばかりの光がひろがる。  
やがて、光が静まると、大魔王ゾーマが身に纏っていた黒いマント  
が消え去っていた。

「ほほう……」

ゾーマは驚嘆の声をあげる。

「わがバリアをはずすべをしっていたとはな  
しかし残忍な表情は変わらない。」

「しかし、無駄なこと……」

ゾーマは再び俺達に近づいた。

「さあ、我が腕の中でもがき苦しむがよい」

「さあ、作戦どおりにかこう」

俺は、打ち合わせた作戦を指示した。

「フバーハ」

セレンは呪文を唱えると、俺達全員が絹のような光の衣を身にまと  
う。

これで、ゾーマの強力な吹雪攻撃を和らげることができる。

「とりゃー!!」

タンタルは素早くゾーマの横に飛ぶと、拳に付けた鋼鉄製のパワー  
ナックルを勢いよく振り抜いた。

会心の一撃だったようで、ゾーマの動きは少し鈍った。

「メラゾーマ」

俺は、タンタルがゾーマから離れる瞬間をねらって、大きな火球を

ゾーマに打ち込む。

俺が身につけている、単体用で最大火力の攻撃呪文だ。命中すれば、一撃でほとんどのモンスターは消滅する。

ゾーマは俺達の攻撃を受け止めると、反撃に移った。

口からはき出す冷氣、それは吹雪となつて、俺達に襲いかかる。

「くっ」

「いたっ」

「テルル！」

「わかつているわよ！」

俺の指示よりも早くテルルは行動していた。

光の玉の代わりに取り出した青い正八面体の石。

俺と、母ソフィアが作成した「賢者の石のようなもの」。

テルルが念じると、淡い不思議な光が俺達を優しく包み込む。

全体回復魔法「ベホマラー」と同等の効果をもたらすが、オリジナルの「賢者の石」と異なり、使用回数が約30回しかない。

だが、それだけの回数があれば、ゾーマを倒すことができる。

もし、誰かが集中的に攻撃を受けたり、吹雪の連続攻撃で回復が追いつかなかつたりした場合は、セレンが全快回復魔法「ベホマ」で回復を行う予定だ。

癒えた体を実感した俺達は、攻撃を再開した。

どれくらい、戦闘が続いたのだろうか。

俺のMP消費量から判断すると、メラゾーマ17回目だな。

大魔王ゾーマの動きが突然止まる。

やがて、ゾーマの体が崩れ落ちる。

「やったのか」

「・・・。そうだな」

俺はしばらくゾーマを睨んでいたが、ゾーマの体からモンスターの気配が消え失せたのを確認した。

俺達は、一度セレンが瀕死の重傷を負ったが、自分でベホマを唱えて危機を脱出している。

結局、死者を出すことなく勝利した。

セレンとテルルは、お互いの体を抱き合って、健闘をねぎらっていた。

経験値を稼ぐため、連続して戦闘を続けたことはあったが、一体を相手にこれだけ戦ったことはない。

大魔王を相手にしたというプレッシャーをはねのけた事で、一気に疲労が襲いかかったようだ。

ようやく俺の長い旅が終わる。

これまでの旅の経過を思い出していた。

ようやくこれからのことを考える必要がある。

まずは、勇者を助けることだな。

「アーベル」

俺を現実に戻したのは、テルルの声だった。

大魔王ゾーマが、倒れた姿のまま俺に話しかけた。

「アーベルよ、よくぞ我を倒した」



**第99話　そして、討伐へ・・・（後書き）**

次回で第7章が終了です。

翌日掲載の予定です。

長らくご支援ありがとうございました。

第100話　そして、終わりの始まりへ・・・

大魔王ゾーマが、倒れた姿のまま俺に話しかけた。

「アーベルよ、よくぞ我を倒した」

ゾーマに攻撃の気配は無く、ゲームであればこのままエンディングへ一直線だ。

当然俺達も、その道に突き進むつもりだ。

しかし、ゾーマの顔つきは変わっていない。

この状況で、ゾーマに何が出来るのだろうか？

「だが、残念だったな」

ゾーマは、残忍な笑みを浮かべると周囲の状況が一変する。

ゾーマめがけて、黒い霧のような物が集まりはじめた。

やがて球状の固まりとなり、ゾーマを包み込んでいる。

俺達は、黒い球に引きずり込まれるのを耐えながら、先ほどまでゾーマがいたところを注視する。

やがて、黒い球が消えると、無傷のゾーマが姿を現す。

再び闇の衣を身に纏っている。

「やれやれ、せっかく作った絶望の象徴が」

ゾーマは、後ろにそびえていた、かつての居城を眺めると、聞いたことのない呪文を唱えだした。

居城があつた場所も黒い霧に覆われると、一瞬のうちに再生した。

「嘘だろ」

「・・・どっつして」

タンタルがつばを飲み込みながら答えると、テルルは呆然としながらも感想を口にする。

「闇の力があるかぎり、何度でもよみがえる」

ゾーマの哄笑は、俺達に恐怖を植え付ける。

何故、ゾーマは復活したのだ。

理由がわからない。

だが、考えなければ、俺達は全滅してしまう。

ふと、周囲を見渡すと、この世界の明るさが変化した事に気がついた。

戦闘が終わったときは、月夜の明るさ程度だったのだが、今は夕暮れ時の明るさである。

「そういうことか」

俺の頭で、一つの可能性を思いつく。

「どうということ?」

テルルが質問する。

だが、今答える訳にはいかない。

答えることで、パーティの士気がくずれれる可能性があるからだ。

今回の作戦は失敗した。

俺は今回の作戦に必要なのは、

ゾーマの城へ移動する手段

ゾーマをおびき出すための作戦

ゾーマが纏う闇の衣を引きはがすための光の玉

ゾーマを倒すだけの戦力

これで完璧だと思っていた。

ゾーマが再生に用いた力、間違いなく闇の力だ。

ゲームでは闇の力で再生したことはない。

となれば、闇の力を使わせない必要があったのだ。

それが可能な存在は・・・

「ルビスか」

この世界アレフガルドを作ったとされる精霊の名前をつぶやく。

精霊ルビスは、ゾーマにより塔に封印されている。

ゲームでは、ゾーマの城に向かう過程でルビスを助けることになる。だが、俺はルビスを助けなかった。

ゾーマを倒せば、世界も平和になるし、そのときにルビスの封印も解けるだろうと勝手に解釈していた。

どうやら、俺の考えが誤りだったようだ。

ならばどうする。

俺は、3人に合図を送ると、手にしたキメラの翼を使用する。修正ができないのならば、逃げるしかない。

それに、テルルが持つ光の玉は、絶対にゾーマに奪われてはいけな  
い。

脱出しようとする俺達を、ゾーマは冷酷な表情で眺めていた。

「うお？」

「きゃあー！」

俺達は、魔法の壁のようなものに跳ね返され、先ほどまで戦っていた城門の前に戻されていた。

目の前のゾーマは、ニヤリとする。

「知らなかったのか。大魔王からは逃れられない」

ああ、知っていたさ。

それでも、すこしは可能性を信じてみても良いじゃないか。

こうなれば、もう一度ゾーマを倒し、復活する前に退却するしかない。

そう、覚悟を決めたとき、背後からモンスターの気配を感じた。

「いつまでも、一人で相手するとは思ったか」

周囲にはドラゴンやキメラなどの群れが待ちかまえていた。

ゾーマだけでなく、モンスターと同時に戦うだけの力は残されていない。

回復の鍵である、「賢者の石のようなもの」も使用回数に限りがある。

もう、策は尽きていた。

俺に絶望がのしかかる。

最初から、ゾーマは俺の考えを読み取っていたのか。

済まない、テルル。

無理して盗賊に転職してもらったのに。

済まない、セレン。

効率を求めるあまり、癒し系僧侶への配慮を欠けていた。

済まない、タンタル。

勇者がいたら、巻き込まれる事はなかったのに。

そして、済まない勇者よ。

光の玉を奪われてしまう。

勇者の旅は、さらに過酷なものになるだろう。  
なんとか世界をすくってくれ。

と、よく見るとタンタルは笑っていた。

俺と視線があうと、ウインクで返す。

策があるのかタンタル。

タンタルは頷くと、俺に呪文を唱えた。

タンタルは魔法使いと僧侶の経験があり、それぞれレベル20までの呪文を覚えていた。

この絶望的な状況を打破する呪文があるのか？

「バシルーラ」

「ウオー」

俺は叫び声を上げながら、上空へと飛ばされていく。

気がつくのと、とある城門の前にいた。

懐かしい場所だ。

俺の故郷アリアハンドだった。

「バシルーラは追放呪文だから、効果があつたのか？」

ゲームの中で、魔王バラモスがバシルーラを使用していたことを思い出す。

「まさか、こんな脱出方法があるとは」

俺は、タンタルの機転に感心して他の仲間の帰還を待つ。

テルルはすぐに俺に追いついていた。

「遅いわね」

セレンとタンタルがまだ戻らない。

ラダトームまでルーラで移動して2人を迎えに行くかと考えていると、セレンがこちらに飛んできた。

「テルル、アーベル」

「どうした、セレン？」

セレンは到着するとすぐ、俺とテルルに抱きつくと、膝をくずした。  
「タンタルさんが、タンタルさんが・・・」

第100話 そして、終わりの始まりへ・・・(後書き)

第7章が終了しました。

一区切りしましたので、評価をしてもらえたら幸いです。

次回は31日正午に掲載予定です。



## 第7章終了時点でのステータス

テルル

盗賊

ぬけめがない

せいべつ：おんな

LV：39

ちから：123

すばやさ：255

たいりよく：166

かしこさ：107

うんのよさ：138

最大HP：337

最大MP：211

攻撃力：163

防御力：226

EX：605544

パワーナックル、黒装束、ドラゴンシールド、ミスリルヘルム

セレン

僧侶

ふつう

せいべつ：おんな

LV：41

ちから：56

すばやさ：142

たいりよく：121

かしこさ：105

うんのよさ：130

最大HP：242  
最大MP：210  
攻撃力：123  
防御力：229  
EX：714989

ゾンビキラー、ドラゴンローブ、みかがみの盾、ミスリルヘルム

アーベル

きれもの

せいべつ：おとこ

LV：42

ちから：39

すばやさ：255

たいりよく：119

かしこさ：179

うんのよさ：132

最大HP：237

最大MP：360

攻撃力：89

防御力：270

EX：780882

賢者の杖、ドラゴンローブ、魔法の盾、ミスリルヘルム

タンタル

ぶどうか

くろうにん

LV：39

ちから：252

すばやさ：166

たいりよく：203

かしこさ：56

うんのよさ：147

最大HP：399

最大MP：49

攻撃力：292

防御力：165

EX：686078

パワーナツクル、黒装束、風神の盾、黒頭巾

## 第7章までのあらすじ

どうして、こうなってしまったのだろう。

アリアハンの城壁前で、俺とテルルはセレンとタンタルの帰還を待っていた。

大魔王ゾーマから逃げ帰った俺達は、全員がそろってから今後どうするか、話をしなければならぬ。

だが、その前に何が問題だったのか検証する必要がある。

先に問題点を洗い出し、つぶしていけないと、同じ過ちを繰り返すことになる。

この前の脳内会議で、勇者がさらわれた事までは、しっかり整理している。

それから先の行動について、振り返ってみる。

ちなみに、今回は脳内会議を開かない。

脳内会議の開催には精神力（MPにあらず）が消費されるからだ。

さらわれたあと、追跡をあきらめたのは、正しいと考えている。

勇者を連れ去った3姉妹は、レベル99の盗賊と武闘家ふたりであり、全ての呪文を身につけているという。

当時の俺達の戦力では、1人だけなら倒せるが、相手は決して隙をみせないだろう。

大魔王ゾーマを一度は倒した今の状況でも、勝てるとは考えられない。

さらに、「きえさりそう」で姿を隠すため、追跡自体も難しい。

それに、相手は、勇者を人質にする可能性もあった。人質を無視する方針もあったが、直接相対すると決意が鈍る可能性があつて、結局追跡はあきらめた。

そうになると、今度は、勇者を無視して大魔王ゾーマを倒す方針に切り替えた。

俺の目的は「魔王バラモスが倒される前に、大魔王ゾーマを倒す」である。

勇者を連れ去つた3姉妹が、俺達の代わりに、先に大魔王を倒すとは思わない。

3姉妹の行動原理は理解できないが、タンタルの証言からオーブの回収が目的とあつた。

上の世界での動きが活発であるため、先に魔王バラモスを倒す可能性が高かつた。

竜の女王の城に赴き、光の玉を入手した。

俺達の戦力で、大魔王ゾーマを倒すには必須のアイテムであり、無事入手できたのは問題なかつた。

そして、大魔王ゾーマを襲撃する作戦について考察した。

経験を積み、ステータスを上昇させるアイテムを食べたこと。

ゾーマの城に侵入するために竜に変身する呪文「ドラゴラム」を改良したこと。

魔法の玉を、ゾーマの城にぶつけて、破壊することで、ゾーマをおびき寄せたこと。

ゾーマとの長期戦に耐えるために全体回復魔法「ベホマラー」と同じ効果を得るアイテム「賢者の石のようなもの」を開発したこと。

これら全ては、大魔王ゾーマを一度は倒したことから、間違っ  
てはいなかった。

ただし、1点見落としがあったのだ。

「精霊ルビスを助けなかった」

大魔王ゾーマは闇の力を用いて再生した。

ゾーマの再生は原作にない行動なので、精霊ルビスを助けていたら、  
復活することはなかったはずだ。

そのことを、ふまえて、これからの行動を組み立てる必要がある。

上空から、こちらに向かう人影を発見した。

「セレンか」

俺は隣に座るテルルに視線を送ると、立ち上がって到着地点に向か  
い始めた。

第101話　そして、現地へ・・・

セレンは、俺とテルルの姿を確認すると、抱きついてきた。セレンは、涙を流し、あえぐように話し出した。

「タンタルさんが、タンタルさんが・・・」

「落ち着いて、セレン」

「何があった？」

テルルが膝をついたセレンの肩を抱きかかえ、俺がセレンに状況説明を求めた。

「タンタルさんは、私を飛ばしてすぐに、魔法の玉で爆発しました」  
それだけ話すと、セレンは嗚咽を続けた。

俺達は、状況を確認するため、明日再びラドームからゾーマ城を目指すことにした。

ゾーマ出現の可能性は低いとはいえ、出現したら、全滅が確定する。そのため、事前に準備を行うことにした。

ソフィアから、新しい「賢者の石のようなもの」を入手した。

俺とテルルは、塔の中にいた。

マイラの村で妖精の笛を入手してから、北西にあるルビスの塔に侵入を果たした。

ようせいの笛を入手する際に、事件に巻き込まれたが、無事解決した。

あの事件は、あまりにも後味が悪かった。

同時に、俺達の冒険とは関係ない話なので、詳細は割愛する。ただこれだけは断言する。

「嫌な、事件だった」

ルビスの塔に行くために本来は船が必要なのだが、時間がかかるため俺の「ドラゴラム」飛行形態で塔に侵入することにした。ちょうど、塔の北側の2階の壁が無い部分があったので、そこから侵入した。

ちなみに、俺とテルルの2人で侵入しているため、竜も小型化にして、消費MPも節約している。

ちなみにセレンは、アリアハンの自宅で休んでいる。

俺達を手伝うとっていたが、精神的に心配して強制的に1日休ませた。

無理に1人でゾーマ城に行く危険性があるが、俺が竜に変身しないかぎり、ゾーマ城にいけないので、問題ない。

どこかの勇者のように、泳いで行くことも無いだろう。

水着も持っていないし。

2人での侵入は危険が伴うことと、俺の残りのMPがこころもとないため、「聖水」の使用と「しのびあし」との併用で、モンスターを回避しながら、ルビスの封印された場所まで到達する。精霊ルビスは、石像のようになっていた。

「さあ、吹くわよ」

テルルが、妖精の笛を吹いた。

事件解決の影響で、俺ではなくテルルが吹くことになった。

そのことは、不満はない。

だが、あの事件は後味の悪い事件だった。

テルルが笛を吹き終わると、封印されたルビスに光が集まりだし、



やがて内部からルビスを封印してた表層部分が砕け散り、ルビスの体に生気がみなぎっている。

「まるで、夢のよう」

精霊ルビスは喜びの声をあげる。

「よくぞふういんをといてくれました」

途中に嫌な事件がありました。

「私は精霊ルビス、このアレフガルドの大地を作ったものです」  
ルビスの自己紹介に頷く。

したり顔をするわけにはいけない。

「お礼に聖なるまもりをさしあげましょう」

最初、受け取りを拒否しようかとかんがえたが、時間がないので受け取った。

あとで、勇者にあげることにする。

「そして、もし大魔王をたおしてくれたなら、きっといつかその恩返しをいたしますわ」

どうしよう、一度は倒した事を話すべきか。

お礼はいらぬが、大魔王ゾーマが復活できないようお願いする必要がある。

もし、精霊ルビスの力ではないとすれば、大魔王ゾーマが復活できないようにするための方法を尋ねる必要がある。

「そうでしたか」

精霊ルビスは、俺の説明を聞いた後、答えてくれた。

「私の力があれば、大魔王の復活を阻止することができます」

「俺は、大魔王が倒れば、あなたの封印も解けるものとおもっていました」

俺は頭をかいた。

「残念ながら、この封印は大魔王が倒れても解けません。もし、封印さえなければ」

精霊ルビスは、すまなそうな顔をする。

済んだことを責めてもしかたない。

俺が、あらかじめ助けていたら、問題なかったという点では俺の責任だ。

これからの事を考えなければならない。

「では、大魔王が倒れたときの事はよろしくお願いします」

俺は、帰還呪文「リレミト」を唱えた。

「私は精霊ルビス、この国が平和になることを祈っています」

翌日、俺達三人はゾーマ城の入り口付近にいた。

城は綺麗に修復されており、俺達が魔法の玉で攻撃した傷跡は、全く残っていない。

城の左手には、大きな穴が開いている。

「ここか」

俺は正直、ここに来たくはなかった。

俺はここでの戦いで、仲間を死なせてしまった。

そして、死体が残らなかつたことから、復活は無理だ。

ここに来れば、自分の愚かさを嫌でもつきつけられるからだ。

それでも、確認しなければならない。

それが、タンタルによって生き延びた俺達の責任でもある。

穴の一番深いところは、地表から約5メートルあった。

無論、そこには何も無い。

タンタルが生きていたことを示す物は、ここには存在しなかった。

「アーベル」

セレンは、俺に優しく声をかけた。

「タンタルさんからのことづてです」

「俺はこれまで、何回も死んできた。

死んだままである事が、許されなかったからだ。

俺は、3姉妹から解放され、最初に思ったことは、もう無駄な死を強いられることはなくなつたのだと喜んだ。

そして、アーベル達と一緒に冒険をするようになり、俺は何のために生きているのだろうか。

そのことばかり、考えてきた。

だが、今日まで、答えは見つからなかった。

ようやくわかったよ。

俺はここで、みんなを脱出させるために生まれてきたことを。

ありがとう、アーベル。

俺に生きる意味を教えてくれて」

「タンタル」

「タンタルさん」

「・・・」

俺達は涙がかけられるまで、立ちつくしていた。

「一度、帰ろうか」

「うん」

俺の提案にセレンが頷く。

この場所には、タンタルの遺品は存在しない。

俺達の記憶だけが、タンタルが生きていた証になる。  
ならば、タンタルの死を無駄にしないためにも、きっちりとゾーマを倒す必要がある。

問題は、戦力の補充である。

俺は最終手段として、母親であるソフィアに依頼するつもりだ。  
ソフィアの力があれば、問題ないはずだ。

俺達は、ルーラでアリアハンに帰還した。

「どういうことだ？」

俺はアリアハンに到着してすぐに、違和感を覚えた。

「モンスターの気配がしないね」

「！」

セレンの感想に驚いた俺は、慌てて町の入り口に向かう。  
勇者がバラモスを倒したのか！

第101話　そして、現地へ・・・（後書き）

次回は、1月1日正午に更新の予定です。  
連載開始から、約一年たちます。  
今年一年お世話になりました。

嫌な事件については、13時に外伝に掲載します。  
本当に嫌な事件なので、年末の締めを飾るのにふさわしくない内容  
になっています。

「それでもかまわない」という酔狂な方のみご覧下さい。

第102話　そして、勇者の凱旋へ・・・

「待つて」

「待ちなさい、アーベル」

俺はセレンやテルルの制止の声を振り切り、アリアハンに入る。

王城へと続く街路は、紙吹雪が地面に落ちていた。

「凱旋のパレードか」

俺は、バラモスが倒されたことを確信すると、王宮へと急いだ。

と、俺以上の早さで背後から迫ってきた。

「ピオリム」

セレンが俺に加速呪文を唱えてくれた。

「ありがとうセレン」

俺は、礼をいうと再び全力で走り出す。

まにあわなかったのか。

俺は、それでも、王宮を目指した。

それでも、自分にはなにかできることがある。

そう信じて。

王宮に入ったとたんに頭上から雷鳴がとどろく。

「間に合わなかったか」

俺は、足を止めずにそのまま王の間に突入する。

衛兵の制止を振り切った俺は、勇者の姿を見た。

久しぶりの再会だった。

俺とキセノン商会が用意した装備をキチンと身につけており、魔王を倒した風格さえ漂うように感じた。

だが、それ以上に威圧感を与えるのは、勇者の後ろにいた、三人の女性である。

先頭の女性は、髪を短くしていた。

服装はみかわしの服を改良しており、動きやすくまとめている。

左手には独特の形状のナイフを握りしめている。

ひよつとしたら、アサシンダガーかも知れない。

急所に当たれば一撃と言われている。

装備から推測すると盗賊だと思われる。

その後ろには、同じ姿の女性が左右に並んでいる。

彼女たちは、長い髪をツインテールでまとめている。

武闘着を身に纏い、右手には黄金の爪を装着していた。

姿から推測すると、武闘家なのだろう。

となれば、以前に勇者を誘拐した3姉妹ということになる。

確かに3人とも姿形はよく似ている。

彼女たちの装備品は簡素であるが、油断は出来ない。

タンタルの話では3人ともレベル99であり、またすべての呪文を使用できると言われている。

今の俺なら、1人だけなら相手が出来るとおもう。

だが、3対1ならば俺の敗北は確実だ

今、この時点で無ければ、誘拐犯として指摘することができただろう。

だがこの場では不可能だ。

なぜならば、魔王バラモスを倒した勇者一行として、3姉妹は存在しているからだ。

彼女たちも、英雄である。

不当に誹謗するものとして、逆に指摘したものが処罰されるだろう。それに、魔王バラモスを倒した勇者が、実は誘拐されたままなどという話は、笑い話にもならない。

その事実が判明した段階で、勇者とアリアハンの権威は地に落ちる。

そのことを知っているからこそ、3姉妹は堂々と王宮に登場しているのだ。

俺の姿を見ると、余裕の笑みを向けてくる。

俺の考えを知った上での表情だろう。

俺の姿を確認したアリアハン王は、視線をそらす。何があった。

いや、ここになにがあったかは、わかっている。

だが、確認しなければならぬ。

俺は王の隣に控えている大臣に尋ねた。

「今し方、落雷の音がしましたが、何がありましたか」

勇者は、俺の方に視線を向けたが、3姉妹が勇者に視線を向けると、勇者は王に一礼し王宮を去っていった。

「待ってくれ」

俺は、勇者をよびとめる。

勇者は俺を無視するかのようになり、そのまま階段をおりようとしていた。

俺は、素早く階段に回り込むと、袋からふたつの品を勇者に押しつ



ける。

「・・・」

勇者は黙っていた。

いや、勇者はしゃべれないのだ。

昔、母親から聞いた話では、父親が死んだと聞かされた日からしゃべれないということだった。

俺は、勇者の顔を眺めるが勇者の表情から何も読み取ることが出来なかった。

3 姉妹は勇者の後ろで様子を見ているが、今のところ手を出す様子はないようだ。

「光の玉と、聖なるまもりだ。

これからの旅に必要なになるだろう」

「・・・」

勇者は頷くと、手渡されたアイテムを受け取り、階段を下りていった。

「・・・」

3 姉妹は俺の行動を好奇心いっぱいの瞳で観察していたが、お互いの顔を見合わしてから、勇者に続いて階段を下りていく。

「繰り返し、聞きます。

ここでもうありましたか？」

俺は大臣のところまで戻ると、先ほどの質問を繰り返す。

「その・・・」

大臣は言い淀んでいる。

「大魔王ゾーマですか？」

俺は、大臣に聞いたです。

「なぜ、それを知っている！」

大臣は驚愕の表情で、俺に問いたです。

「下の世界で情報をあつめていました。危険性を報告するために」  
「・・・」

「全ては遅かったようです」

俺が周囲を見渡すと、床のあちこちに黒こげの跡がある。天井を見上げると、6箇所ほど穴があいている。城を突き抜けた雷撃が近衛兵達を襲ったのだろう。しかし、床には焦げ跡しか残っていない。

「死体すら、消し去ったのですね？」  
大臣は頷く。

「俺の父である、ロイズも巻き込まれましたね」  
「・・・」

王と大臣の表情で確認した。

俺は、王の間から立ち去った。

途中、セレンとテルルにあったが、俺は構わず自宅に戻った。

俺は自室の壁を叩いていた。

「俺は、これまで何をしてきた！」  
壁には、血が付いていた。

「全ては、無駄だった！」  
右手の痛覚が感じられなくなっていた。

「タンタルまで犠牲にしたのに、助けることが出来なかった！出来なかった！」

俺は、大馬鹿野郎だ！」

「アーベル！やめなさい！」

母ソフィアが、俺を見て叫んだ。

俺は構わず、壁を叩き続ける。

母親は背中から俺を抱きしめる。

「離してくれ……」

俺は、急に眠りに襲われる。

「ラリホーか……」

まぶたが閉じる前に、俺の右手を治療するソフィアの姿を確認した。

第102話 そして、勇者の凱旋へ……（後書き）

次回は2日に掲載の予定です。

第103話　そして、葬儀へ・・・

人が死んだら、どうなるか。

俺は、前の世界で子どもの頃、そんなことばかり考えていた。

誰にも相談せず、1人で悩み抜いていた。

恐怖で頭がいっぱいになり、枕を涙で濡らしたこともある。

大人になると、いつのまにか恐怖がなくなっていた。

当然、死んだらどうなるのか理解したわけではない。

その答えを得るためには、自分で経験するか、人に聞くしかない。

前の世界では、死んだ人に確認するすべがないので、自分で経験するしかなかった。

まあ、人はいつか死ぬのだ。

そのときに答えを知ることになるだろう。

それまで、あれこれ考えてもしかたがない。

自分の考えが当たっても、死後の待遇が変わるわけでもないのだから。

たぶん。

この世界（確定ではないが、前の世界の俺にとっては死後の世界か）では、死んでも復活する。

また、死んだ人間の魂がこの世界に残ることもある。

バラモス城の近くにあったテドンの村の住人などがその例に該当する。

だが、俺の父親であるロイドは両方の例に該当しなかった。

まずは、死体が残らなければ、復活できない。

子どもの頃、神父さんに確認したところ、魂を入れる体が無ければ蘇生できないということだった。

次に、魂が無ければ復活が出来ない。

父ロイズの魂は、今までのところ確認していない。

夜中に、俺や母親の枕元にでもと考えたが、現れることはなかった。ひよつとして、アリアハン王宮内に出現するかもと考え、知り合いの近衛兵に聞いたとしても、ロイズはおるか、他の犠牲者もみつからなかった。

ちなみにセレンには、この話しは秘密だ。

教会の教えに従って、昇天呪文「ニフラム」を唱えるからだ。

俺の母ソフィアも俺の考えと一致している。

俺達遺族は、国が管理している共同墓地にいた。

大魔王ゾーマに倒された被害者の共同慰霊祭だ。

とはいえ、大魔王の存在を明らかにするわけにはいかない。

下手に明らかにすると、住民が恐怖に襲われて、大魔王の思惑どおりになるからだ。

現在のところは、「魔王バラモスが再度復活し、アリアハン城を襲撃した。王宮の兵士達の奮闘により、城は守られたが、近衛兵6人が帰らぬ人となった。勇者は復活を阻止するため、再度冒険の旅に出た」というのが公式発表だ。

ロマリアやポルトガにも同様の情報を流している。

というわけで、父ロイズ達犠牲となった近衛兵は、英雄として国葬されたが、遺族達の悲しみが癒されるわけでもなかった。

俺と母ソフィアが家に戻ると、俺は話を切り出した。

「母さん。話さなければならぬことがある」

俺は、覚悟を決め、転生したこと、父ロイズが死ぬことを知っていたこと、力及ばずロイズを救うことが出来なかったことを話した。

母ソフィアは、驚くことなく最後まで黙って話を聞いていた。

「……ごめん、母さん」

最後は泣きながら謝っていた。

俺は、母との別れを覚悟していた。

愛する夫だけでなく、息子も失っていたという事実。

正直、この場で殺されてもかまわないと思ってもいた。

ソフィアは泣き出していた。

「ごめんなさい、アーベル」

ソフィアは、俺の手を握りながら謝っていた。

「か、母さん」

俺は困惑していた。

何故、俺に謝る必要がある。

「全て、私のせいなの」

ソフィアは俺に驚くべき事実を打ち明けた。

ソフィアは、若い頃、師匠のところまで、魔法を学んでいた。

ソフィアは、師匠の教えにより賢者としてありとあらゆる魔法を習得していた。

だから、僧侶が覚える睡眠呪文「ラリホー」を使用できたのだ。

師匠は、ソフィアのたぐいまれな才能に惚れ込み、自分が身につけた全ての呪文だけでなく、自分がここにいる理由となった呪文をも教えたのだ。

「それが、召喚呪文だと」

「ええ」

ソフィアはうなずく。

師匠の話では、難破した船から漂流してきた少年を救おうとした魔法使いがいたが、蘇生呪文「ザオリク」や回復呪文「ベホマ」を唱えても少年の意識が回復しなかった。

魔法使いは最後の手段として、研究していた古代の呪文を唱えたところ、少年の意識が回復したという。

魔法使いが、意識を取り戻した少年に状況を確認したところ、少年とは別の存在が召喚されたことがあきらかになった。

幸い、魔法使いの家は、辺境にあったことから、事実には伏せられたまま、現在にいたったという。

ソフィアは、師匠の話半信半疑で聞いていたが、念のためその呪文も習得した。

ソフィアはやがて、ロイズと結婚し、アーベルを産んで育てた。

「そして、事件が起こったわ」

アーベル少年が、父ロイズを迎えに行く途中で、城の堀に落ちた。

当然、ソフィアは「ベホマ」や「ザオリク」を唱えたが、アーベル



の意識が回復することは無かった。

ソフィアは、最後の手段として、師匠から教わった召喚呪文を使用したところ、アーベルが息を吹き返したという。

ソフィアは、アーベルが回復したことをよろこんだが、やがて重い現実を知ることになる。

アーベルの仕草がおかしいのだ。

アーベルの記憶を「覚えてない」発言の真偽はわからないが、日常の仕草は、体が覚えているため、忘れることはない。

ソフィアは、その事実を理解すると絶望した。

それでも、俺をこの世界に召喚した責任から、俺を見捨てることなく今まで育ててきたという。

「結局、お互いに事実を知っていたと」

「そういうことね」

バカな話だ。

本当に、バカな話だ。

「俺達は、似ているな」

まるで親子だ。

「アーベル」

「母さん」

俺達は抱き合っていた。

第103話 そして、葬儀へ・・・(後書き)

次回は1月3日に更新の予定です。

第104話　そして、勇者の帰還へ・・・(1)

俺とソフィアは、これからのことを考えていた。

大魔王ゾーマの事、そして勇者のことだった。

大魔王については、勇者にまかせた。

本来、大魔王を倒すのは勇者の仕事だ。

タンタルの仇を討ちたいところだが、正直戦力が不足している。

それに、光の玉を勇者に手渡した時点で、俺達がゾーマを倒すことは不可能に近い。

次善の策として、勇者のパーティを助けることを考えていた。

だが、3人では戦力不足なので、仲間を加える必要がある。

母ソフィアの参加を考えていたが、国王に断られた。

大魔王の再襲撃に備えて、魔法防御の結界を強化する必要があるからだ。

「これ以上被害が増えないように」

と言われたら、俺は文句を言うすべがない。

そのため俺も、ソフィアを手伝っていた。

その一方で、俺達は3姉妹への対抗策を考えていた。

3姉妹と戦う場面が有ると思えないが、俺の行動に疑念を持てば俺を襲う可能性も否定できない。

俺とソフィアが、モシヤスで3姉妹に変身すれば何とか3姉妹に対抗できる。

単純な個々の戦闘力では、俺達の力では相手にならない。

何しろレベル99だ。

だが、追いつくための方法はある。

変身呪文「モシャス」だ。

モシャスで、3姉妹に変身することで同等の能力まで引き上げる。

さらに、ソフィアには秘策がある。

「隼の剣」である。

隼の剣は、攻撃力こそ低いが、物理攻撃回数が倍増するという特殊効果を持っている。

ソフィアは冒険に参加できないため、3姉妹がアリアハンで俺たちに襲いかかるという前提が必要になる。

裏技に近いが、隼の剣を装備してモシャスを唱えると相手の攻撃力をそのまま受け継いで、物理攻撃回数が倍増する恩恵をあわせて受け取ることができる。

ひょっとして、竜に変身する呪文「ドラゴラム」でも可能かと思っただが、さすがに無理だった。

ここらへんは、SFC版を準拠しているようだ。

あとは、セレンの回復と勇者の裏切りがあれば3姉妹を倒すことが出来るはずだ。

俺は、密かに特訓を続けた。

たぶん俺は、何かに集中することで忘れることができると思っただのだから。

俺は、セレンとテルルに何を話せばいいのかわからなかった。

ただ、2人は、俺が何のために冒険したのかは理解したようだった。そして、その冒険が失敗に終わったことも。

セレンとテルルは、俺が特訓めいたことをしていることを聞き、俺に手伝いたいと言ってきた。

「俺は、3姉妹を倒したい」  
俺は答える。

魔王を倒し、そして大魔王を倒すであろう勇者一行を倒す。そんなことをすればどうなるか、あきらかだ。だから、俺たちからは攻撃することはできない。

俺は、そのような危険に2人を巻き込みたくなかった。それに、3姉妹を倒しても何の解決にもならない。だが、2人がいなければ俺は何も出来ないのも事実だ。

「襲われたら、助けるわよ」

「今度こそ、回復役をまかせてください」  
テルルとセレンは、答えてくれた。

とはいえ、3姉妹がいつアリアハンに出現するのか、わからない。セレンは教会の手伝いを、テルルはキセノン商会の手伝いをしていた。

結局、特訓は無駄に終わった。  
父親が殺されてから一月後に、勇者が、アリアハンに戻ったからだ。  
1人で。

勇者が発見されたのは、アリアハンの入り口だった。  
倒れていたところを衛兵が発見し、確保した。

勇者のこれまでの旅を聞き取るため、母ソフィアと何故か俺も呼ばれていた。

「母さんは宮廷魔術師なのでわかるけど」

「アーベル、あなたは海軍司令官なのよ」

「でも、それはロマリアの」

「この前、王様にその話をしたらアリアハンでも任命する話になったわ」

ソフィアは俺に辞令書を手渡す。

何を勝手に決めたのだと思ったが、追及するのはやめた。

現在俺が使用している船は、ロマリア王国所有の船だ。

俺が船を勝手に使用しても問題ないように、ジंकが用意してくれた役職がロマリア海軍司令官だった。

肩書きとしては、おおげさではあるが、ロマリア保有の船が1隻なので問題ない。

それに、元国王であったこと、ポルトガ海軍との協力で船を取り戻した事から、ロマリア国民からも文句はでなかった。  
もともと、ポルトガから船を入手したのも俺だった。

一方アリアハン海軍も、ロマリアと事情は一緒である。

国が所有する船が1隻しかなく、その船も勇者を誘拐した3姉妹が強奪した。

この時点で、俺が海軍司令官に任命された理由はただ一つ。  
奪われた船の奪還である。

実は、奪われた船の場所だが、既に見当はついている。

3姉妹が船を強奪した目的は、船よりも遙かに便利な不死鳥ラーミ

アを入手することだった。

ラーミアを手に入れた3姉妹は、船をどうしたか？

そのままにしたに違いない。

船が破壊された可能性も皆無とはいえないが、ロマリア沖に一度船を乗り捨てた実績もある。

あとは、目の前の勇者に最終確認するだけだ。

奪還した後の船をどうするか。

そのことが、俺を海軍司令官に任命した理由になっている。

俺が船を取り戻したときに、これまでのロマリア海軍司令官の役職だけだと、船をアリアハンに返還する前にロマリアの意向を反映する必要がある。

発見と、返還の礼として、なにか要求される可能性もある。

そこで、俺にアリアハン海軍司令官の役職を与えて、船の奪還作業はアリアハンが行ったことにするとというのが、理由だ。それでも、苦しい言い訳だが有って困るものでもない。というのが、アリアハンの判断だ。

というわけで、ソフィアは俺が海軍司令官の役職を得るように働きかけて、認められた。

「とうか、任命されたのはいつの話した？」

俺は、ソフィアに確認する。

「船が奪われた翌日よ」

「知らなかった」

「そんなことを気にする余裕は、なかったからね」  
ソフィアの言葉に俺は頷く。

「そうだね・・・」

「……すいません。私が非力なばかりに、皆さんにご迷惑をおかけして」

「気にするな……」

「いいのよ、気にしなくても……」

「……。え？」

「え？」

俺とソフィアは、お互いに顔を見合わせている。

目の前にいる勇者がしゃべっている。

俺が知っている勇者はしゃべれなかった。

正確に言えば、俺が昔に開発した呪文「しゃべりだす」（仮称）を作成したときに、しゃべることができるようになった。

だが、しゃべることが出来る内容はあらかじめ、勇者が心に深く刻んだ言葉だけであり、しゃべる声も、俺の声しか、覚えさせていない。

そして、勇者がしゃべった言葉は、俺の声ではなかった。というよりも、

「女だったのか？」

勇者は、少しすねた感じでうなずいた。

「……。母には、ゆうかなおとこのこのように育てられましたから」

「アーベル、知らなかったの？」

ソフィアから追及の視線を受ける。

ソフィアも知らなかったようだ。

だからソフィアは、俺に誤った情報を与えたのではなくて、誤った情報を信じて俺に提供したようだ。



アリアハンの機密情報の管理は、非常に徹底している。

「勇者は実は女である」と言う情報を隠すことに、意味があるかどうかは不明だが。

「初めて知りました」

「あら、そうなの」

ソフィアはニヤニヤ笑っていた。

たぶん、ジンクの話テルル達から聞いたことを思い出したのだろう。

だが、ジンクの話であればソフィアも俺と同罪だ。

同じ師匠から学んだもの同士、お互いのことを知っていたからだ。

重ねて言うが、俺が、勇者が女だと知らなかったのは本当の話だ。

さすがに、知っていて知らない振りをしたら、セレンとテルルに殺されるだろう。

理由はわからないが。

「セレンとテルルは知っているのか？」

俺は勇者に聞いたです。

「ご存じでした」

勇者が答えてくれた。

「なぜ、2人は俺に教えなかったのだ？」

「すいません。秘密にしてもらおうように2人をお願いしました」

「なら、仕方ないな」

俺はほっとしてため息がでた。

これで、2人から追及はないだろう。

「ちなみに、2人はいつ頃気がついたのだ？」

「3人で遊んだときです」

勇者は顔を赤くしてうつむいた。

なにか、恥ずかしい思い出でもあったのか。  
詳細は話してくれなかった。

「……。ということは」

俺は顔を真っ赤にした。

俺とセレンとテルルがアリアハンを旅だった日のことを思い出した。  
なんてことを勇者に言ってしまったのか。

俺と勇者がお互いにつつむいて黙っていると、ソフィアが俺達に話しかけた。

「今日は、お見合いで来たわけでは無いのよ」

「……。そうだった」

俺達は、勇者から冒険の話の話を聞くために来たのだ。

第104話 そして、勇者の帰還へ……(1) (後書き)

勇者の性別については、「叙述トリック」ではなく、「アーベルが、誤った情報を入力した結果による誤認」です。

自己弁護では有りませんが、誤った知識を「正しいと信じて」、「自分の考えを伝えることがあります。」  
気をつけたいものです。

今回は1月7日の掲載予定です。

本編とは関係有りませんが、「箱庭で異彩を放つ花 ローズ・レクチャー伝」第1章が完結しました。  
オリジナルものですが、暇つぶしで読んでもらえたら幸いです。

第105話 そして、勇者の帰還へ……(2)

勇者にいろいろ確認したいことがあるが、最初の質問はこれだ。

「どうしてしゃべれるように、なったのだ？」

「すみません。大魔王を倒したので、ようやくしゃべれるようになりました」

大魔王のせい？

だが、原作にそんな設定があるとは聞いたことがないし、そもそも、俺に謝る必要などない。

と、俺の疑問を母親が代わりに質問してくれた。

「……。あなたは、あなたのお父さんが亡くなったと聞いた日から、しゃべれなくなったと聞いたけど」

「ごめんなさい。勇者の役割を果たし終わるまで、しゃべれなかったのです」

「どうして？」

俺は勇者に質問する。

勇者オルテガは、普通にしゃべっていたはずだ。

「実は私は、勇者ではありませんでした」

「……。え？」

「なんですって」

俺とソフィアは驚愕した。

俺はともかく、この国の宮廷魔術師であるソフィアも知らなかったとは。

「父が亡くなったと知らされた後、私は母親の言葉をつけ、勇者の素質があるか確認しました」

少女は少しだけ顔をうつむかせる。

「しかし、私に勇者の素質が無いことが判明したのです」

目の前の少女はたんと話す。

髪型のせいか、どちらかという和美少年に見える。

「そのことを知った王と大臣と母親は、国民の希望を絶やさぬ為に、私を勇者にしたてました」

当時、アリアハンには勇者候補生は誰もいなかったはずだ。

そのことが、少女を勇者として、したてあげる要因になったのだろう。

その後、新たな勇者候補生があらわれたが、ようやく10歳になったところだ。

結果的に、国王達の判断は正しかったのだろう。

俺の個人的な思いとは別にして。

「それで、しゃべれなくなっただと？」

「私が嘘をつけないことを知っていた母親は、私が勇者の役割を終わらせるまで、しゃべらないことを私に約束させました」

「しろうじきものだったのね？」

少女は頷いた。

「私は代わりに、アーベルさんと一緒に冒険することをお願いしました」

俺は頷いた。

いろいろしでかした俺達が、勇者と一緒に旅を行うことが認められた理由の一つだったのだろう。

「本来なら、そこで私の秘密が明らかになる予定でした」

「まあ、一度魔王を倒した実績のある俺達と一緒にいたら、問題ないと判断したのか？」

少女は頷いた。

「しかしながら、彼女たちと一緒に冒険することになった私は、魔

王を倒すまでしゃべることができなくなりました」  
少女は、悲しそうに俯く。

「……。大丈夫だったのか」

俺は覚悟を決めてたずねた。

タンタルのこともある。

思い出したくないかもしれないが、何があったのかは聞かなければならない。

3姉妹の次の行動を予測するために。

「私はさらわれたわけではなく、3姉妹のお願いに応えようとしただけです。

一度も何もされませんでした」

「ほんとうか？」

少女はうなずいた。

「彼女たちは、「妹たちに再会するために旅をしている。

そのために、勇者の力が必要だ。

だから、自分たちについてこい」といったただけでした」

「そうか」

俺は少女の目を見たが、嘘は言ってないようだ。

とりあえず、俺とソフィアは魔王バラモスを倒すところまで話を聞いていた。

3姉妹の行動は、俺が推測したとおりの展開だった。

すばやく、ロマリアに移動し、あらかじめ強奪していたロマリア王家の冠を城内に置いておく。

王冠が発見された騒ぎを利用して、ロマリアの船を強奪。

強奪した船で、ロマリア海域に出没する幽霊船に潜入して、重要アイテム「あいのおもいで」を入手。

ロマリア海域が封鎖された事を知ると、今度は俺に変身してアリアハンから船を強奪した。

その後、世界各国を訪れ、オーブを6つ集めると、不死鳥ラーミアを復活させる。

そのまま、魔王バラモスを襲撃したのだ。

俺は彼女達の行動のすばやさに感心する。

タイムアタック並に洗練されている。

だが、ここで疑問も生じた。

「なんのために、あなたがさらわれ、いえ、一緒に冒険を要請されたのですか？」

ソフィアもうなずいていた。

彼女たちのレベルは99だ。

どう考えても、レベル1の勇者をつれて歩く理由がない。

戦力としては、邪魔にしかないのだ。

俺の疑問に答えてくれたのは少女だった。

「私の事を、「フラグ」と呼んでいました。意味はわかりませんが、関係があると思います」

「……。なんとなく理解した」

「どういうこと？」

ソフィアが俺に質問した。

「彼女たちは、勇者がいることで話が進むことを考えていました。

その存在をフラグと呼ぶことがあります」

俺と3姉妹が同じ事を考えていたことを理解した。そして、俺と同様にこの世界に召喚されたことも。何らかの理由で、話を進める理由があったのだろう。

「母さんも知っているとおもうけど、勇者だけが開けることのできる宝箱があると」  
ソフィアがうなずいた。

「それを知った彼女たちが、誘拐したと？」

「そう思います。ただ・・・」

俺の質問内容を理解した少女は話し始めた。

「私が訓練場で最も練習を積んだのは、解錠術です。おかげで、勇者しか開けることができない宝箱も、根性で開きます」  
精神論で鍵が開くのか。

今度、試してみよう。

「アーベルさん、やめたほうがいいですよ。

開けると確実に死にますから」

少女は俺に微笑んだ。

「・・・」

俺は黙ってうなずいた。

その後、魔王を倒したことをアリアハン王に報告し、大魔王ゾーマが出現したという。

大魔王ゾーマを倒すため、再び旅に出る3姉妹と俺がばったりと出くわしたのだ。

「あのとき、アーベルさんが光の玉を渡してくれなかったら、アーベルさんは殺されていました」

俺は冷や汗を流しながら頷く。

俺達の行動を調べていた3姉妹だ。



光の玉がないことを知れば、俺が入手したことを考えたはずだ。  
俺から奪おうとするだろう。

「殺してでもうばいとる」  
頭の中に、この言葉が浮かんできた。

アリアハンを後にした3姉妹は、大魔王ゾーマを倒すため、下の世界アレフガルドを歩き回った。

ゲームの攻略内容に忠実に、ゾーマ城に行くための橋をかけて渡ったそうだ。

まあ、俺のやり方は異端だろう。  
MPも消費するし。

順調に城内に侵入し、勇者オルテガと再会し、そして、

「すまない」  
俺は少女に謝った。

俺がゾーマを倒していたら、オルテガは死ぬことはなかっただろう。  
「気にしないで下さい。大魔王は勇者が倒すことになっているのですから」

少女は、俺の手を握ると優しく微笑んでいた。  
だが、俺は少女の瞳の奥にある悲しさを感じ取っていた。

俺は大きさにうなずいた。

「ということ、ゾーマは倒したのだな」

「はい。とはいえ、正確には彼女たちが倒しましたが」  
少女は正直に答えた。

「その、3姉妹の行方なのだが、・・・」  
俺はためらいがちに質問する。

目の前にいる少女の答え次第で、俺の将来が決まるのだ。

「彼女たちは消えました」  
少女の答えは、俺の想像を超えた内容だった。

第105話　そして、勇者の帰還へ・・・(2) (後書き)

掲載開始から、1年が経過しました。

皆様のご支援のおかげで、ここまでくることができました。

本当にありがとうございます。

(今年の)2月中に、完結の予定です。

引き続きご愛顧いただけましたら幸いです。

次回は8日正午に掲載予定です。

第106話 そして、勇者の帰還へ……(3)

「その、3姉妹の行方なのだが、……」  
俺はためらいがちに質問する。

目の前にいる少女の答え次第で、俺の対応が決まるからだ。

「彼女たちは消えました」

少女の答えは俺の想像を超えた内容だった。

「いったい、なにがあつたのだ！」

俺は思わず立ち上がってしまった。

「アーベル。座りなさい」

ソフィアが俺をなだめる。

「お見合いの席で、がつついてはだめよ」

「母さん。先ほど言ったことと逆ですが」

「冗談よ、冗談」

ソフィアは残念そうな声で言っているが、無視する。

目の前の少女はからかわれたのを怒っているのか、顔を赤くしている。

後で、謝らせなければとおもいながら、俺はたずねる。

「大魔王が倒れたあとの事を、教えてくれ」

少女は頷いて話してくれた。

「私がよみがえると、既に大魔王が倒された後でした」

この少女は、モンスターに倒されると、戦闘が終わるたびに復活させられたとのことだった。

タンタルのときよりも、扱いがいいのか悪いのか判断がつかないが、絶対評価では悪いことにはちがいない。

「大魔王の断末魔とともに、城は崩れ去りました」

少女はたんとんと話していく。

「その後、崩壊した床に、私達は飲み込まれました」

ここまでは、ゲーム内容と変わらない。

「気がつくど、洞窟の中にいました。ただし、私だけでした」  
なるほど、とソフィアはうなずく。

だが、これだけで3姉妹が消えたという判断は出来ない。

「消えたと判断した理由は、他にありますか？」

俺の質問に微笑みながら応える。

「これをご覧下さい」

少女は、袋の中から光る玉を取り出した。

「光の玉」

「長女が持っていました。それ以外にも」

今度は、青い正八面体の石を取り出す。

「賢者の石です。三女が持っていました」

最後にと、少女は袋から布地を取り出す。水着か？

「魔法のビキニです。次女が身につけていました」

確かこのビキニは、下の世界の海洋モンスターが落とすアイテムだったはずだ。

冒険の途中で入手したのだろうか。

それにしても、なぜ、モンスターがこんなアイテムを持っているのだろうか。

俺が興味深そうに水着を眺めると、

「アーベル、女の子の前でじろじろ水着を見るのはどうかと思うわ」  
ソフィアが指摘する。

ふと、視線を移すと目の前の少女は顔を赤くして、俺を非難めいた目で見つめている。

誤解を受けている気がするが、確認する方が先だ。

「これらの品は、何処で入手したのかな」

「気がついたら、私の袋に入っていました。すべてが」

「……すべてか」

俺は念のため確認する。

「はい、そうです」

ならば、消えたという表現は妥当だろう。

あとは、何処に消えたか、何故消えたかということになるが、目の前の少女は知らないだろう。

「それに、確認しました」

「確認？」

「かつて、ルビス様に仕えていた妖精から話を聞きました」

たしか、勇者が旅立つ前日に見た夢のなかに出現したり、ゾーマ城へ行くための橋を造るために必要なアイテムの材料を持っていたりしたはずだ。

俺は勇者でもなければ、ゾーマ城に渡るために呪文を使ったりしたので、その妖精さんにはお目にかかったことはない。

少女は、目の前にある水を口に含ませてから、話を続ける。

「妖精から聞いた話では、彼女たちは大魔王を倒した恩返しとして、元の世界に帰りたいたいという願いが、かなえられたそうです」

「そうか」

俺は3姉妹の事を考えた。

彼女たちは、元の世界に帰りたかった。

そのためには、自分たちの手で大魔王を倒す必要があった。

しかし、勇者と一緒に行動する俺達が邪魔になった。そのため、勇者を誘拐したのだと。

3姉妹には、俺に相談する選択肢は無かっただろう。

元の世界に変える方法を知れば、俺が帰ることを選ぶため、3姉妹と共同戦線を取ることはないと考えたのだろう。

俺は納得できないが、3姉妹の目的がわかった。

「ところで、何を願ったのかな？」

俺は目の前の少女に質問した。

戦闘中死んでいたとはいえ、彼女も大魔王を倒したメンバーの1人だ。

精霊ルビスから恩返しをしてもらったはずである。

「・・・」

勇者は俯いたまましゃべらない。

「すまない。答えたくなければ言わなくていいよ」

3姉妹の話が済んだので、聞かなくても困らない。

少女は首を振ると、決心したようすで話し始めた。

「・・・。アリアハンに戻りたいと願いました」

「そうか」

俺はうなずいた。

父オルテガは死んだが、母親が生きている。

母親に父の最後を報告する必要があったのだろう。

ソフィアの顔を見ると、俺と少女の顔を見比べながらにやにやしている。

嬉しいことでもあったのか。

俺は、少女に最後の質問をする。

「これから、どうする」

「！」

少女は俺の質問に驚いた。

俺は別に変な質問でもないのだが、と思ったのだが彼女にとっては重要な話のようだった。

「……。あ、アーベルさん」

少女は、真剣なまなざしで俺に話しかける

「私と、私と一緒にしてください！」

少女は顔を真っ赤にして大声で叫んだ。

「構わないけど、大丈夫なのか」

俺は、心配そうに少女を見つめる。

少女は、勇者の代役として旅に出たはずだ。

だが、彼女は勇者ではない。

俺達と一緒に冒険しても成長しなければ、旅はつらいものになる。両方にとって。

「何か職業につかないと、俺達と一緒に冒険するのはつらいと思うよ」

俺は、しばらくは冒険を続けるつもりだった。

家にこもって、魔法研究に明け暮れることも考えたが、1人でいるとロイズを死なせた後悔が、すぐに浮かんでしまうのだ。

俺は死ぬまで忘れるつもりはないが、日常生活に支障がでないまで精神が安定するのはもうしばらく先の事だろう。

少女は、俺の言葉の意図が理解できなかったようだが、一緒に冒険することの不安を理解したのか。

「大丈夫です。今の私は勇者ですから」

少女は、口を膨らませて宣言すると、ステータスシートを俺に手渡



す。

俺はステータスシートを受け取りながら、

「そうか」

とつぶやく。

俺は、「勇者が大魔王を倒す」と考えていたが、「大魔王を倒したから勇者になった」のかと認識を改める。前者でも間違いは無いと思うが。

少女は、ステータスシートを手渡すと、どうだとはかりに胸を張った。

セレンとどっちがかわいいだろうなどと、どうでもいいことを考えながらステータスシートをながめると、俺は驚愕した。

「なにこれ？」

ゆうしゃ口ト

せいべつ：おんな

へこたれない

LV：1

ちから：11

すばやさ：8

たいりよく：9

かしこさ：7

うんのよさ：3

最大HP：18

最大MP：13

攻撃力：90

防御力：147

EX:0

ドラゴンキラー、やいばのよろい、力の盾、ミスリルヘルム

「……。レベル1なのですが」

俺は勇者に質問する。

「一度もモンスターを倒したことはありませんから」

「そうですか……」

聞いてみたら、3姉妹との冒険中はモンスターから逃げ回ってばかりで、死んだら戦闘終了後に、生き返らせてくれたと言ったことだ。

「……」

彼女は勇者だ。

ほんとうの勇者だ。

力が強い？

強力な魔法が使える？

そんなことは、勇者にとって本当に必要なことではない。

真の勇者とは、最後まであきらめないことだ。

俺はそう確信した。

俺は黙ったままステータスシートを眺めていると、勇者は頭を下げる。

「ふつつかものですが、よろしくお願いします」

別の言い方があるだろうと、ソフィアに同意を求めようとしたら、ソフィアはこれまでに無いほどニヤニヤしていた。

どうやらこの場には、俺を助けてくれる存在はないようだった。

第106話 そして、勇者の帰還へ……(3) (後書き)

次回掲載は9日正午の予定です。

第107話　そして、師匠の話へ・・・

「順調ですね」

「そうだな」

俺とジंकは天幕の中で話をしている。

ジंकは王妃の衣装ではなく、かつて俺達と冒険していた頃の服装をしていた。

俺は、ロマリア王国が計画している、第2次開放計画「ネアポリ開放作戦」に参加していた。

ちなみにネアポリはロマリアの南方にあった港町で、開放することで南方の拠点都市となることが期待されている。

俺はジंकに呼ばれて作戦本部にいるが、今回は今のところ何もしていない。

計画作戦は、ロマリア王国近衛兵作戦本部が全て作成している。

俺達は、アリアハン王国軍事顧問の一員として、天幕内につめているだけだ。

言うまでも無いことだが、ぬいぐるみは身につけていない。

今回の開放計画は、1年前に行われたウェイイ開放作戦と基本的には一緒だ。

魔王バラモス、大魔王ゾーマが存在しないことから、ジंकや俺は都市の開放時にモンスターの大量襲撃はまず無いと考えていた。

しかし、新たな魔王が登場しないと限らない。

そのため、今回も魔王バラモスと同程度のモンスター襲撃を考慮に

いれて、俺が呼ばれていた。

いわゆる、秘密兵器扱いだ。

だが、驚異となるモンスターの出現どころか、モンスターの大量出現も今のところ報告はされていない。

どうやら、今回は最後まで秘密兵器のまま終わることになりそうだ。最後まで秘密兵器扱いは、前の世界で中学校時代の部活動で経験して以来、2度目になるだろう。

俺は、勇者との再会後冒険にすることなく、のんびりとした毎日を送っていた。

勇者はすぐに、俺達と一緒に冒険をするつもりだったようだが、「しばらく家に帰って、母親を安心させる」とがらでも無いことを言つて、半ば強引に実家に帰らせた。

一緒にいた母ソフィアが、「お前が言うか」というような視線を俺に送ったが、無視した。

勇者と3姉妹（あとで、勇者から聞いた話では3姉妹は妹たちの世話をするために、元の世界に帰つたらしい。彼女たちは7姉妹のうち3人だということだ）の話については、勇者達が大魔王を倒したが、3姉妹はその戦いで命を落としたと国王達に報告した。

ちなみに、ジंकウがかつて一緒に冒険していた相手もこの3姉妹だったらしい。

ジंकウは彼女たちに気に入られたため、タンタルのようなむごい扱いは一切なかったようだ。

話をもどすが、3姉妹の話や、大魔王の存在を公表しないことで、アリアハン王国の見解は一致した。

結局、アリアハン王国の公式発表は、魔王が最後の力でアリアハン王宮を襲撃し俺の父ロイズを含めた近衛兵を道連れにしたが、そこで力尽きた。

勇者がひとりバラモス城に潜入したが、魔王バラモスは消え去ったと発表した。

だが、魔王の怨念でモンスターはしばらく出現するので気をつけることとあわせて、発表されている。

ゆっくりと休んではいたが、しばらくしたら冒険に出ることを考えていた。

テルルへの責任を果たすためだ。

テルルは俺の願いに応えて、商人から盗賊に転職していた。

だが、テルルの転職については、テルルの父キセノンとの約束「魔王を倒す」は果たすことができなかった。

俺はキセノンに、国王と同様の報告と謝罪をした。

キセノンは俺の話の聞くと、自分の後継者を娘のテルルにすることを決め、俺に対してテルルを商人に転職させて、一定のレベルまで育てて欲しいと依頼された。

俺には、断る理由はなかった。

だが、すぐに商人に転職するのもMPがもつたいないので、魔法使いか僧侶の経験も積むことを考えている。

セレンも転職を考えているようだった。

勇者が持っていた本物の賢者の石を眺めながら、

「私みたいな普通の僧侶は、やっぱりいらない子なのね」

と言って泣き出したのを何とかなだめ、転職し一緒に冒険をする」とで説得することができた。

俺が、これからの事をジンクに話したら、

「いいですねえ、ハーレムパーティですか」

「お前と一緒に冒険したときと、変わらんぞ」

ジンクとのボケに冷静なつつこみをいれる。

「勇者さんにも優しいようですが」

ジンクの視線は、天幕の隅で俺達の会話を聞いていた勇者に移った。

俺は当初、勇者をロマリアに連れて行くつもりはなかった。

だが、ロマリアに行くことを知った勇者が、

「ジンクお師匠様に、どうしても会いたい」

と言い出した。

俺は、かつて勇者にジンクの事を話したことがある。

ジンクが使用する変わった呪文の事を話すと、妙なことに勇者はジンクの事を「お師匠様」と呼ぶようになった。

「遊びに行く訳じゃない」

と説得したが、

「1日だけだから」「一つ呪文だけを教わったら帰るから」と言うて、無理についてきた。

俺は勇者の頼みを、断る理由ことは出来なかった。

それにしても、勇者は、どんな呪文が覚えたいのだろう。

俺は、考えをジンクの質問に戻して、

「レベル1だから仕方ない」

と、もつともらしく話をしたが、

「私がパーティに参加したときも、レベル1ですが」

屈辱的なことだが、正確な事実をジンクに指摘される。

「イオナズンを使うレベル1と、一緒にするな」

「アーベルは、信じていなかったくせに」

ジंकは、悲しい表情で俺に詰め寄る。

作戦が順調とはいえ、自重してくれ。

俺は、周囲を見回してジंकを諫めてくれる相手を探したが、俺以外いないようだ。

勇者などは、目を輝かせて俺達のやりとりを聞いている。

早く作戦が終わって欲しい。

俺の願いが通じたのか、作戦成功の知らせは、すぐにもたらされた。

「お久しぶりです」

「ソフィアの息子だったな」

「はい、アーベルです」

俺は、ロマリア王宮内を歩いていると、小太りした中年の男と挨拶を交わしていた。

母ソフィアとジंकの師匠である。

「今日も、ひとりなのか」

「はい、そうですが」

「・・・。そうか、残念だ」

男は肩を落とした。

幸運にもセレン達は、先に宿に戻らせている。

勇者もアリアハンに帰している。

今の勇者なら・・・、いやなんでもない。

「お師匠様、久しぶりです」



「ふん。お前などに用はない」

男は、ロマリア王妃の挨拶にもすげない返事だ。

「それなら、これはどうですか」

ジンクは、悪戯っぽく微笑むと、呪文を唱えた。

「ジンクは王妃だろ。自重しろよ」

俺は、呪文の内容に気がつくのと、ため息をつきながら注意する。

ジンクの胸は豊胸呪文「特盛り」で大きくなっている。

ジンクの服装は、薄い赤のドレスだった。

構造は不明だが、胸の大きさが変わっても、問題ないように作られているようだ。

ジンクは、男に胸を見せつけている。

男は、ジンクの胸を観察すると、

「偽物には、興味がない」

と、言いながら、視線をジンクの豊かな胸から外すことなく、歩いていった。

「さすが、師匠です」

ジンクは、にこやかに手を振っていた。

俺は、師匠と呼ばれた男を強引に部屋に押し込んだ。

「あなたも、転生者とは思いませんでした。

いや、前はうまくだまされました」

「すまんな、アーベルよ」

男は、自分が転生者であることを隠すため、助手の女性を变身呪文「モシヤス」で自分の姿に変えて俺と話をさせたらしい。

どおりで、「電話」という言葉にも全く反応を示さなかったわけだ。「ソフィアから話は聞いている。ならば、正直に自分の話をしても問題ないと思ってるな」  
そういつて、男は自分の過去を教えてくださいました。

トシキと名乗った男は、あかつき号という船に誤って入船してしまい、物置で隠れていたところ、海難事故に巻き込まれ、溺れてしまつたらしい。

あかつき号の事件といえば、偶然付近にいた警官が、嵐の中にもかかわらず単身で乗り込み全員救助したと、俺の記憶にある。だが、乗員リストに無かつたため、トシキの存在がわからなかつたかも知れない。

ただ、俺の前世の記憶では、事件が発生したのは俺が転生する10年前の夏の話であるのに対して、トシキの話では俺の転生する3年前の話であつた。

ひよつとすると、俺とトシキが転生する前の世界が異なる可能性が出てきた。

一度、時間を作ってゆっくりと検証作業を行う必要が有るだろう。

トシキは島で隠居生活を送っていた老人に助けられた。

老人の話では、樽の中に入っていた少年を発見し、救助したが、意識が戻らなかつたらしい。

老人は最後の手段として、少年に対して、失われた魔法を唱えた。そのことで、転生したらしい。

「転生呪文だつたのですか」

「たぶんとしか言えないが」

トシキは悔しそうにつぶやく。

この男は、魔法を生涯にわたって研究していた。それでも、解明できないのだ。

老人は、助けた少年に魔法を教えて育てることにした。少年は魔法の才能があったことから、やがて老人を越える力をもった。

老人が老衰で亡くなると、男は1人で孤島に住み続けた。ちなみに、漂流した少年の氏名を表す物がなから、前世の名前をそのまま使用しているとのことだ。

俺は、トシキの話聞いた後、問いかける。

「俺に何の話をするつもりですか？」

「エロ神様のことだ」

「はい？」

第107話 そして、師匠の話へ……（後書き）

今回は、14日正午に掲載予定です。

エロ神様に関する質問につきましては、現在お答えすることが出来ません。

今日から5日連続で外伝に「アリアハンの事件編」を掲載します  
（全6話予定）。

## 第108話　そして、再出発へ・・・

ロマリアでの用事を済ませた俺達は、ダーマの神殿にいた。俺と、テルルとセレンが転職するためだ。

ちなみに、俺は商人に、テルルは僧侶に、セレンは魔法使いに転職した。

「全員レベル1ですね」

「再出発だからな。お前にあわせてよ」

「アーベルさん。ありがとうございます」

勇者は俺にむかって、ひょこんと頭をさげる。

かわいい妹ができたみたいで、おもわず頭をなでなでしようとおもったら、周囲から殺気がするので、あわててとりやめた。

ロマリアで、ジンクに勇者を紹介したときに、思わず「かわいい妹のようなものだ」と口を滑らしてしまった。

すぐに、勇者が「おにいちゃん」といって、すりよってくるし、セレンやテルルも「私もおにいちゃんと呼んだほうがいいのですか」と変な視線でたずねるし、ジンクなどは「おにいたん」、「おにいさま」、「にいにい」、「あにじゃ〜！」など、師匠から教わったであろう、ありとあらゆる表現を駆使して、俺をからかっていた。トシキは、本当にジンクに何を教えていたのだ。

俺は、みんなに「俺の事を兄と呼ぶことを禁止」させたのだが、勇者を除いた全員から、「勇者を妹扱いするのは禁止」と約束させられた。

その中にはなぜか「勇者の頭をなでなですること」も禁止事項に含まれている。

だから、俺は勇者の頭をなでることができない。

「でも、全員一度に転職なんて大丈夫ですか？」  
不安そうに勇者がたずねる。

さすが、レベル1で世界中を旅させられた経験の持ち主だ。

「だいじょうぶだよ、俺が守ってやるから」

今回は、時間に余裕がある。

だから、レベルにあわせて、アリアンからきちんと順番通りに旅をするつもりだ。

まあ、ポストロールとか、やまたのおろちとかの中ボスモンスターは、すでにたおされているはずだが。

「ありがとうございます、アーベルさん」

勇者が俺の手をとって、尊敬のまなざしで見つめていると、

「あの商人、にやけちゃって」

「かわいい彼女と一緒に。うらやましいかぎりだ」

「手を握ったりして、神殿を何だとおもっているのか。けしからん耳に入ってくるひそひそ話を聞く限り、いろいろと周囲に誤解を与えてしまったようだ。

ちなみに、俺が勇者が女であることがわかった日から、勇者は女の子らしい服装をしている。

この前などは、マントの下に7姉妹の次女が身につけていた魔法のビキニを身につけて「どうですか、アーベルさん」と話しかけられたが、俺が答える前に、

「アーベル、何をしているのー！」

と、テルルは何故か俺に注意をして、反論しようとする俺に対してさらに延々と説教を食らわされた。

えん罪の怖さを、身をもって思い知らされた。

転職をすませて、そそくさとアリアハンに戻った俺達は、自宅で休んで翌日から冒険を始めることにした。

旅立ちの日の朝。

勇者の母親だけが見送りに来ていた。

勇者の母親は、当初、娘が冒険に出ることに反対していた。母親は、娘を男の子のように厳しく育てたのは、無事に冒険から帰ってくる事を願っていたからであり、心配しなかったわけではない。

勇者に対しては、

「あなたの旅はまだ終わらないの？」

「魔王はもう、たおしたのでしょう？」

と、何回も引き留めていた。

勇者の懸命な説得工作で、

「・・・そう、まだなのね」

「わかったわ。母さんずっとまっっているから・・・」  
と納得し、見送りに来ているのだ。

そのかわり、勇者の母親の俺に対する視線は、非常に厳しい。

まるで、「うちの娘をかどわかして、冒険という危険なことに巻き込む存在」と考えているようだ。

それをしたのは、俺達ではなく、3人組の誘拐犯なのだが。

そのことを、テルルに話すと、

「アーベル、本気でいつているの？」

と、逆に心配されてしまった。

ちなみに、俺の母ソフィアに冒険の話をする、

「結婚相手を決めるまで、家に帰らないで」と言われた。

「俺はまだ、20歳にもなってないのに、気がはやいと、言い返すと

「10年後も同じ事を言うから、だめ」と切り捨てられた。

前世の事を思い出すと、否定できないので、うなずくしかなかった。

俺達が最初に目指したのは、アリアハンの西にあるナジミの塔だった。目的は、盗賊の鍵の入手である。

塔の最上階に住む魔法使いが持っている。

俺達が冒険した時に、しばらく借りていた鍵だ。

俺が鍵開け呪文「アバカム」を持っているので、はっきり言えば無用のアイテムだ。

と、身もフタもないことを言うと、アリアハンでのイベントが無くなるので、勇者を先頭にして歩いている。

「モンスターいないね」

「・・・。そうだね」

孤島にそびえるナジミの塔に行くためには、地下の通路を通る必要がある。

かつては、モンスターがいたが、今は全く存在しない。

俺が、ウェイイ開放計画を実施していた頃、アリアハンでは、ナジミの塔奪回作戦が展開されていた。

母ソフィアが詳細を教えてくれなかったので、知り合いの兵士に確認したところ、「ほとんどソフィアが1人で、塔を制圧した。魔法



も使わずに」と、遠い目をして教えてくれた。  
世の中には、知らない方が良かったことがあるようだ。

今回俺達を使用した、塔への移動ルートは、アリアハンの東南にある岬の洞窟から進入している。

実は、アリアハン城内から侵入するルートもあるのだがやめている。せっかく勇者の母親が見送っているのに、城にもどるのはきまりが悪い。

俺たちは、苦勞することなく、ナジミの塔の最上階に到着した。

とうぞくの鍵を持つ魔法使いの老人は、昔と変わらず、居眠りをしていた。

いや、寝たふりをしていた。

「起きてください」

勇者が魔法使いを起こそうと体を動かすが、動かない。

「今回はどうするの？アーベル」

さすが、テルル。

魔法使いの寝たふりを見破ったようだ。

テルル相手に、同じ技は通用しない。

俺は、勇者に声をかける。

「帰るぞ」

「いいのですか」

「無理に起こすのはまずいだろう」

「ですが、とうぞくの鍵が」

「俺が、代わりに開けてやるよ」

寝たふりをしている老人に、容赦ない宣告を聞かせる。

「だから、帰ろうか」

俺は、勇者の肩に手を回して一緒に帰ろうとする。

「……。はい、アーベルさん」

勇者は何故か、俯いた表情をしている。

「まちなさい」

魔法使いの老人が、俺達を制止すべく、寝たふりをやめ声をかける。

「次は、何処に行きましょうか？」

俺は老人の声を無視して、勇者の質問に答える。

「それは、リーダーである勇者が決めることだ」

「でも、元リーダーのアーベルさんの意見が聞きたいです」

「そうだな。俺なら無難に、レーベの村で一泊するだろうな」

「そうしましょう」

勇者は俺の提案を嬉しそうに受け入れる。

「待ってくれ」

老人は、俺達を制止するため入り口に立ちふさがった。

「頼むから、わしの話を聞いてくれ」

「はい」

勇者は喜んで頷いた。

「……。というわけで、勇者にはとうぞくの鍵を渡そう」

魔法使いの老人は、勇者にとうぞくの鍵を手渡そうとする。

「どうする？」

決定権は勇者に渡している。

当然問題が有れば、俺が意見をいうことにしているが。

「私には、アーベルさんがいるから大丈夫です」

「そうなるよなあ」

「そうですねえ」

「アーベルは、あなたのものではありません」

テルルだけ異議があるようだが、とうぞくの鍵がいらないうつ結論だけは、全会一致だ。

「たのむ、ひとりでさみしく何年も暮らしている老人の、最後の頼みを聞いてくれ」

老人も、必死だ。

「どうします、アーベルさん？」

勇者は、俺に意見をもとめた。

勇者としては、人の頼みを断るのがつらいのだろう。

俺としても、勇者の名声を下げる行為はしたくない。

「受け取ったら？」

「わかりました」

勇者は老人から、鍵を受け取るとお礼をいった。

「ありがとうございます」

「いいのじゃよ、夢のとおりのお出来事だから」

本当か？

前に俺達と会ったとき、俺達が夢に出ていたことなど一言も話していないが。

俺達は帰ろうとすると、老人が引き留める。

「待ってくれ」

「なんですか」

「実は、夢には続きがあつてな」

老人の話では、勇者がお礼に、老人と一緒に休むという話だ。

「……。アーベルさん」

勇者は、俺に判断を求める。

「セレン。このご老人は夢と現実の区別がつかないらしい」

「わかりました」

セレンは微笑んだ。

「セレン。ザキはだめよ」

「テルル。わかっています」

セレンは、逃げ出そうとする老人に睡眠呪文「ラリホー」を唱えた。  
老人は、深い眠りについた。

第108話　そして、再出発へ・・・（後書き）

再出発です。

第19話と第67話との違いをお楽しみください。

「箱庭で異彩を放つ花　ローズ・レクチャー伝」の第2章が始まります。お暇でしたらこちらもご覧下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0215q/>

---

ドラゴンクエスト? 勇者ではないアーベルの冒険

2012年1月14日12時44分発行